

昭和 58 年度

京都市埋蔵文化財調査概要

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



カラー図版一解説

堀河院

藤原基経の邸宅に始まり、兼通・師実へと受け継がれ、その間天皇の里内裏として使われた堀河院。検出された園池とその石組みは、当時最高の庭園の一部であったと思われ、栄華の一端を偲ぶことができる。それは石組みに使用された石材中に日本海側から運ばれてきたピロウプレッチャが含まれることから窺えるだろう。

上：調査地全景（西から）

下：園池（南東から）

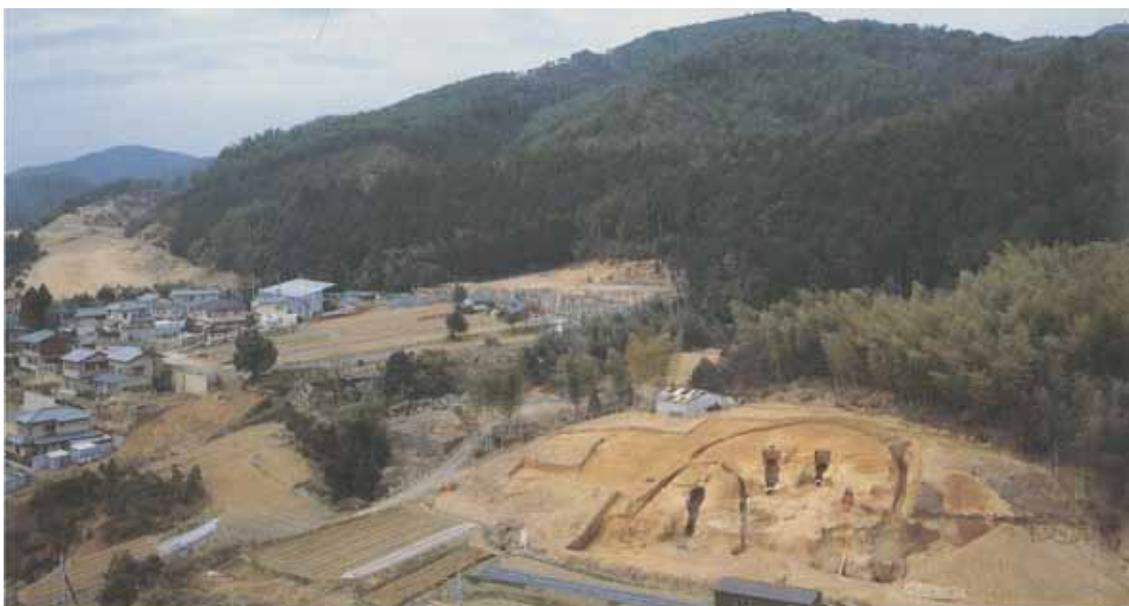
カラー図版二解説

蟹ヶ坂瓦窯

蟹ヶ坂瓦窯は西賀茂窯跡群北部の賀茂川右岸段丘上部に構築されている。同窯跡群中の瓦窯としては最も古く位置づけられるものである。ここから賀茂川に沿って約4 km 下流にはこの瓦窯で焼かれた軒丸瓦の出土した出雲寺跡があり、更にその南方に平安京跡が広がっている。

上：調査地遠景（東から）

下：調査地遠景（北から）



序

京都市域の埋蔵文化財を調査するには、かつて平安京であった地域とその周郊とは方法が変わってくる。最も同じ平安京でも千本通より東（平安京の左京）と西（平安京の右京）とは、右京の方が、周郊に近い状況にあるので、大体において、今の地表面から浅いところで遺構が表れる。遺構は大方が平安時代である。それは、平安京が設営された時に、左京も右京も同様な施設が造られ、同様に邸宅屋敷が造られたけれど、左京に住み付いたのが藤原氏一門であったと同時に土地の状況、特に生活水が左京は豊富であったから、人口は左京に集まったので、平安京造営時より今に至るまで、幾十世代が引き継いで生活し、生活に伴う廃棄物が積み重なって、残存しているのと、また後世代のものが、前世代の残した跡を壊しているから、調査の方法が変わるのである。

いわば、左京は生活の痕跡が複雑に入り組んでいて、調査は慎重に取り運ぶ様に心掛けなければならない。右京や周郊はこれに対して遺構が単一である。しかし、それはそれなりに左京でみられないものが伺い得られる。それ故に、ここでも左京と変わらない程の慎重さが要求される。

この様な遺構条件と加えて、都市の中の調査で今までの家を取壊し、新たな施設を造る建築工法に応じての地業が採用され、見つけた遺構も壊されることになり、特別なこと以外、過去のもが現代のものに入れ替わることになる。したがって、綿密な調査と成果を記録して残さなければならないし、それは迅速に処理しなければならない。慎重と迅速とが同時に要求される作業である。

したがって、土地ということから、すでにわかっているデータ類は、全京都市内に設けてある（昭和52・53年度に造った）遺構調査基準点により、どの地点も地球の経緯度によって表示できる方法を取った。このことは、既刊の昭和55年頃以降の報告書に取り上げている表示法である。更には、その記録類を瞬時に図化し、新たに発掘を行うところが、周辺の既調査とどの様な関係にあるかをみて、発掘の大体を予想できる方法を開発しなければならないと考えている。もし、その映像をみることのできるなら、そこに行われる発掘調査がどの様なものであるか、調査依頼する人も納得してもらえるだろう。ところで、この研究所にその様な施設を導入するためには、恒常的な予算を持たねばならない。依頼者から提供される調査費ではまかないきれないものがあると予想する。ここに昭和58年度年報を出すあたり、以上のことを完備させる将来の展望を予想して、その年度中に多大な援助をいただいた方々への御礼のことばに代えたい。

昭和60年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 杉 山 信 三

凡 例

1. 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が昭和 58 年度に実施した、発掘調査（第 1 章）、試掘・立会調査（第 2 章）、保存科学（第 3 章）、資料整理（第 4 章）、事務報告（第 5 章）の年次報告である。
2. 試掘・立会調査のうち、山科本願寺跡・中臣遺跡群・中臣十三塚・宮道古墳（いずれも公共下水道工事に伴う立会調査）と上久世遺跡（同じく公共下水道工事に伴う立会調査）は本年度契約の調査ではあるが、調査継続中のため次年度に報告する。
3. 方位及び座標は、「平面直角座標系Ⅵ」によった。ただし本文では単位（m）を省略している。標高は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
4. 使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の 2 千 5 百分の 1、1 万分の 1、3 万分の 1 の都市計画基本図を調整したものである。
5. 長岡京跡の条坊呼称は、向日市教育委員会並びに長岡京市教育委員会の成果によった。
6. 遺構表示記号は奈良国立文化財研究所の用例に従った。例）S A（柵）・S B（建物）・S D（溝）・S E（井戸）・S F（道路）・S G（池）・S K（土壌）・S X（その他の遺構）
7. 発掘調査一覧表で※記号を付したものと文化庁国庫補助による試掘・立会調査は、京都市文化観光局より昭和 58 年度文化庁国庫補助事業に伴う発掘、試掘・立会調査概報が発行されている。（ただし昭和 59 年 1 月 1 日から 3 月 31 日までの調査分は次年度に報告されるため含まれていない）『平安京跡発掘調査概報』『音戸山古墳群発掘調査概報』『中臣遺跡発掘調査概報』『鳥羽離宮跡発掘調査概報』『京都市内遺跡試掘立会調査概報』
8. 本書作成にあたって、研究所全員の協力と参加があったが、特に出土遺物の復元を多田清二・村上 勉・出水みゆき・田中利律子・中村享子が担当した。写真は遺物写真及び発掘調査の全景写真を牛嶋 茂が、試掘・立会調査の写真とその他の写真を各調査担当者が撮影した。
9. 個々の報告は文末に記した各調査担当者が執筆した（連名の場合は初出の者が主として報告した）。編集と調整は平田 泰・堀内明博・家崎孝治・菅田 薫が協力してこれを行った。

目 次

第1章発掘調査	1	IV 鳥羽離宮跡	55
		21 第86次調査	56
I 昭和58年度の発掘調査概要	1	22 第87次調査	58
		23 第88次調査	59
II 平安宮・京跡	7	24 第89次調査	62
1 率文蔵	8	25 第90次調査	64
2 大極殿院	9	26 第91次調査	68
3 民部省	11	27 第92次調査	70
4 左京一条三坊	14	28 第93 I次調査	73
5 左京三条一坊(1)	15	29 第93 II次調査	74
6 左京三条一坊(2)	16	30 第94次調査	77
7 左京三条二坊	17	31 第95次調査	78
8 左京四条一坊	20	32 第96次調査	80
9 左京六条二・三坊	21		
10 左京七条二坊	22	V 中臣遺跡	82
11 左京九条三坊(1)	25	33 第55次調査	83
12 左京九条三坊(2)	32	34 第56次調査	84
13 右京二条二坊	36	35 第57次調査	87
14 右京二条三坊	38	36 第58次調査	88
15 右京七条一坊	41		
16 右京七条二坊	42	VI 長岡京跡	89
17 右京八条二坊	43	37 左京三条三・四坊	90
		38 左京五条三坊	93
III 白河街区	47		
18 成勝寺跡	48	VII その他の遺跡	96
19 尊勝寺跡	50	39 蟹ヶ坂瓦窯跡	96
20 白河南殿跡	52	40 一乗寺松田町遺跡隣接地	102

41 音戸山古墳群（1）……………	104	45 中久世遺跡……………	117
42 音戸山古墳群（2）……………	106	46 大藪遺跡……………	120
43 大枝山古墳群……………	109	47 法住寺殿跡……………	125
44 松室遺跡……………	111	48 法住寺跡……………	129
		49 醍醐古墳群……………	131
 第2章 試掘・立会調査			
I 昭和58年度の試掘・		19 右京三条二坊……………	174
立会調査概要……………	132		
II 平安京・京跡……………	159	III 京域外の遺跡……………	175
3 左馬寮・右京二条二坊……………	159	26 岩倉忠在地遺跡……………	175
4 左京一条三・四坊・二条三・四坊……………	163	28 白河街区・岡崎遺跡……………	176
5 左京二条二坊……………	165	33 勸修寺境内……………	177
8 左京六条一・二坊・七条一・二坊……………	167	40 南春日町遺跡……………	179
11 左京九条一坊・東寺……………	169	41 中久世・鶏冠井・石田・	
17 右京北辺四坊・一条四坊・		戊亥遺跡・長岡京跡……………	181
妙心寺境内……………	170	44 伏見城跡（1）……………	183
		46 伏見城跡（2）……………	185
 第3章 保存科学……………			
186			
 第4章 資料整理……………			
191			
 第5章 事務報告……………			
193			
1. 人事異動……………	193	4. 昭和58年度遺跡保存方法	
2. 普及啓発及び		検討調査研究への派遣（火山灰	
技術者養成事業……………	193	地における遺跡調査研究会）	196
3. 滋賀県草津市志那町		5. 中国兵馬俑修復	
湖底遺跡水中調査への派遣		にかかる派遣……………	196
（滋賀県教育委員会）……………	196	6. 京都市考古資料館状況報告…	197
		7. 組織及び役職員	
		（昭和59年3月31日現在）……………	198

図版目次

- 図版 1 調査地位置図 1 (1 : 60,000)
- 図版 2 調査地位置図 2 (1 : 60,000)
- 図版 3 調査地位置図 3 (1 : 60,000)
- 図版 4 調査地位置図 4 (1 : 60,000)
- 図版 5 遺跡 (平安宮跡) 大極殿院跡回廊基壇 (北東から)
- 図版 6 遺跡 (平安宮跡) 1 民部省調査地全景 (東から)
2 築地南西隅部 (北西から)
- 図版 7 遺跡 (平安宮跡) 1 民部省南北築地 (南から)
2 東西築地と敷地内側溝 (西から)
3 瓦堆積状況 (東から)
- 図版 8 遺跡 (平安京跡) 1 左京三条二坊 3 区全景 (北から)
2 4 区全景 (東から)
- 図版 9 遺跡 (平安京跡) 1 左京三条二坊 S G 1900(西から)
2 S G 4899(北西から)
- 図版 10 遺跡 (平安京跡) 1 左京七条二坊調査区全景 (東から)
2 池 S G 472(南東から)
- 図版 11 遺跡 (平安京跡) 1 左京七条二坊井戸 S E 54(東から)
2 井戸 S E 64(東から)
- 図版 12 遺跡 (平安京跡) 1 左京九条三坊 (2)No.81, 82 烏丸小路全景 (北から)
2 No.83 烏丸小路全景 (北から)
- 図版 13 遺跡 (平安京跡) 1 右京二条三坊調査区南半全景 (北から)
2 調査区北半全景 (東から)
- 図版 14 遺跡 (平安京跡) 1 右京八条二坊 S B 1 ・ S X 9 (東から)
2 S X 9 (東から)
- 図版 15 遺跡 (鳥羽離宮跡) 1 第 88 次調査第 1 区全景 (南から)
2 S K 2 遺物出土状態 (北から)
3 S D 1 遺物出土状態 (東から)

- 図版 16 遺跡（鳥羽離宮跡） 1 第 90 次調査地全景（西から）
2 竪穴住居 S B 1（北西から）
- 図版 17 遺跡（鳥羽離宮跡） 1 第 90 次調査土壙墓群南東部（北から）
2 土壙墓群北部（北から）
- 図版 18 遺跡（鳥羽離宮跡） 1 第 90 次調査 S K 44（北西から）
2 S K 40（東から）
3 S K 94（南から）
- 図版 19 遺跡（鳥羽離宮跡） 1 第 95 次調査地全景（西から）
2 庭園地業（南西から）
- 図版 20 遺跡（鳥羽離宮跡） 1 第 96 次調査地白河天皇陵外堀（北西から）
2 白河天皇陵外堀（北から）
- 図版 21 遺跡（中臣遺跡） 第 56 次調査地全景（東から）
- 図版 22 遺跡（長岡京跡） 1 左京五条三坊第 1 面水田遺構全景（北から）
2 第 2 面水田遺構全景（北から）
- 図版 23 遺跡（その他の遺跡） 1 蟹ヶ坂瓦窯跡全景（東から）
2 1 号窯（東から）
3 1 号窯最終床面（東から）
- 図版 24 遺跡（その他の遺跡） 1 蟹ヶ坂瓦窯跡 2 号窯焚口（東から）
2 2 号窯内部状況（東から）
- 図版 25 遺跡（その他の遺跡） 1 蟹ヶ坂瓦窯跡 3 号窯焚口（東から）
2 3 号窯（東から）
- 図版 26 遺跡（その他の遺跡） 1 蟹ヶ坂瓦窯跡 4 号窯全景（東から）
2 4 号窯（東から）
3 4 号窯燃焼室床面の瓦敷（東から）
- 図版 27 遺跡（その他の遺跡） 1 音戸山古墳 (1) 3 号墳全景（南から）
2 4 号墳全景（南から）
- 図版 28 遺跡（その他の遺跡） 1 音戸山古墳 (1) 5 号墳全景（南から）
2 5 号墳石棺出土状態（北西から）
3 5 号墳灰釉薬壺出土状態（南西から）
- 図版 29 遺跡（その他の遺跡） 1 大枝山 4 号墳全景（南東から）

- 2 14号墳全景（南東から）
- 図版 30 遺跡（その他の遺跡） 1 大枝山 22号墳遠景（西から）
2 22号墳石室内部（南から）
3 22号墳石室前面の須恵器出土状況（西から）
- 図版 31 遺跡（その他の遺跡） 松室遺跡全景（東から）
- 図版 32 遺跡（その他の遺跡） 1 松室遺跡中央ブロック南半部全景 1～6 G（北から）
2 低湿地東肩部溝群 S D 1・2・7・8・10・11
（北西から）
- 図版 33 遺跡（その他の遺跡） 1 中久世遺跡調査地全景（北から）
2 S D 6 遺物出土状態（西から）
- 図版 34 遺跡（その他の遺跡） 大藪遺跡杭列検出状況（南東から）
- 図版 35 遺跡（その他の遺跡） 1 大藪遺跡全景（西から）
2 盤出土状況（南から）
3 杭列組合せ状況（北東から）
- 図版 36 遺跡（その他の遺跡） 法住寺殿跡 1 区全景（東から）
- 図版 37 遺跡（その他の遺跡） 1 法住寺殿跡 1 区全景（北から）
2 S B 1 向拝部（東から）
3 S B 3 張り出し部（西から）
- 図版 38 遺跡（その他の遺跡） 1 法住寺殿跡 S B 2 全景（南東から）
2 S B 1 雨落溝（北から）
3 S B 2 雨落溝（北から）
- 図版 39 遺跡（その他の遺跡） 1 法住寺殿跡 S B 3 東雨落溝（北から）
2 S B 3 南雨落溝（北から）
3 S B 1 北礎石据付穴（北から）
4 S B 1 南礎石据付穴（北から）
- 図版 40 遺跡（その他の遺跡） 1 法住寺跡溝 S D 1 と地業（南東から）
2 井戸 S E 04（北から）
- 図版 41 遺跡（その他の遺跡） 1 醍醐古墳群 14号墳全景（南から）
2 石室内遺物出土状態（北西から）
- 図版 42 遺物（平安京跡） 左京七条二坊 S E 64 出土土器

図版 43	遺物 (平安京跡)	右京八条二坊 S X 9 出土土馬・墨書土器・木簡
図版 44	遺物 (平安京跡)	右京八条二坊出土土器
図版 45	遺物 (烏羽離宮跡)	第 88 次調査出土土器 S K 2 (1 ~ 14) 土師器 (1 ~ 8) 白磁 (13, 14), 瓦器 (11), S D 1 (21 ~ 27) 土師器 (21 ~ 24), 瓦器 (25, 27)
図版 46	遺物 (烏羽離宮跡)	第 90 次調査 (1) 1 S K 81 出土土器 2 S K 94 出土土器 3 S K 69 出土土器
図版 47	遺物 (烏羽離宮跡)	第 90 次調査 (2) 1 S K 45 出土土器 2 竪穴住居出土土器 3 S K 44 出土土器
図版 48	遺物 (中臣遺跡)	第 56 次調査出土土器 (1 ~ 4), 第 57 次調査出土土器 (5)
図版 49	遺物 (その他の遺跡)	蟹ヶ坂瓦窯跡出土瓦
図版 50	遺物 (その他の遺跡)	中久世遺跡出土土器 (1)
図版 51	遺物 (その他の遺跡)	中久世遺跡出土土器 (2)
図版 52	遺物 (その他の遺跡)	大藪遺跡出土土器 (1)
図版 53	遺物 (その他の遺跡)	大藪遺跡出土土器 (2)
図版 54	遺物 (その他の遺跡)	大藪遺跡出土木器 (1)
図版 55	遺物 (その他の遺跡)	大藪遺跡出土木器 (2)
図版 56	遺物 (その他の遺跡)	法住寺殿跡出土瓦
図版 57	遺物 (その他の遺跡)	法住寺跡出土瓦類
図版 58	遺物 (その他の遺跡)	醍醐 14 号墳出土土器 (1 ~ 4), 鉄器
図版 59	遺跡 (平安京跡)	1 左京一条三・四坊, 二条三・四坊調査風景 (西から) 2 左京一条三・四坊, 二条三・四坊石垣遺構 (南から)
図版 60	遺跡 (平安京跡)	1 左京二条二坊調査風景 (西から) 2 左京二条二坊弥生土器出土状況 (北から)
図版 61	遺跡 (平安京跡)	1 左京六条二・三坊, 七条二坊調査風景 (南から) 2 左京六条二・三坊, 七条二坊土壙検出状況 (西から)
図版 62	遺跡 (平安京跡)	1 右京北辺四坊・一条四坊・妙心寺境内調査風景 (南から) 2 右京北辺四坊・一条四坊・妙心寺境内調査風景 (東から)

- 図版 63 遺跡（平安京跡） 1 右京北辺四坊・一条四坊・妙心寺境内井戸 S E 98
（西から）
2 右京北辺四坊・一条四坊・妙心寺境内溝 S D 155
（東から）
- 図版 64 遺跡（勸修寺境内） 1 勸修寺境内調査風景（東から）
2 勸修寺境内近世築地（東から）
- 図版 65 遺跡（南春日町遺跡・伏見城跡） 1 南春日町遺跡全景（南から）
2 伏見城跡石組み溝（北から）
- 図版 66 遺物（北白川廢寺跡） 北白川廢寺 K S 12 出土縄文土器
- 図版 67 遺物（平安京跡・白河街区）左京八条四坊 H L 164(3～8), 右京二条三坊
H R 24(9), 右京八条二坊 H R 133(1・2), 白河街区 K S 48(10) 出土土器
- 図版 68 遺物（長岡京跡） 長岡京跡 N G 16 出土土器（1～6）・刻印木製品
（7・8）
- 図版 69 遺物（南春日町遺跡） 南春日町遺跡出土土器
- 図版 70 遺物（平安京跡・妙心寺境内）右京北辺四坊・一条四坊・妙心寺境内出土土器

第1章発掘調査

I 昭和58年度の発掘調査概要

平安宮・京跡 今年度当研究所が行った平安宮・平安京跡の発掘調査は、宮内3件、左京9件、右京5件の合計17件である。

平安宮の調査の内、大極殿院（2）と民部省（3）において貴重な遺構を検出した。まず大極殿院では、北回廊と考えられる基壇の一部と凝灰岩を使用したその外装施設を確認した。後者では、民部省主税寮に伴う西限、南限の築地、側溝、路面と西南隅部を検出した。いずれの遺構群も数時期に及び、宮内の変遷過程と宮内域の復元に係わる重要な知見を得ることができた。

左京域の調査では、各時期に及ぶ遺構の重複が著しく、遺構相互の関連を把握することが困難である。しかしながら、その様な状況下でも三条二坊（7）、七条二坊（10）などで顕著な遺構を確認できたのは幸であった。特に三条二坊の調査では、堀川院に関連する2時期に及ぶ園池と滝組施設を検出し、平安時代庭園を探る上で貴重な発見であった。

一方、右京域では、二条三坊（14）、七条一坊（15）などにおいて平安時代前期から中期に至る建物群などを検出し、平安時代の宅地の変遷過程を知る手掛かりを得た。二条二坊（13）では主要な遺構が中世に属することから、この付近一帯に中世の遺構群が存在することを明らかにした。また、八条二坊（17）の調査では、西市の南側に池状遺構を発見し、その堆積層からは多数の木簡類が出土した。

条坊に関連する遺構の検出例は左京では三条一坊（5）の坊城小路路面と東側溝、四条一坊（8）の四条大路路面と北側溝、築地内側溝、九条三坊（12）の烏丸小路路面と東側溝、右京では七条一坊（15）の皇嘉門大路東側溝、築地内側溝などが挙げられる。このうち、左京三条一坊は坊城小路と姉小路の交差点にあたり、坊城小路東側溝が交差点部で北東に屈曲した部分に護岸施設が認められ、交差点の状況を知る好例となった。

平安京域における平安時代以前の遺跡の検出例として、左京三条一坊（5）の弥生時代後期の土器、太型蛤刃石斧、左京六条二坊・三坊（9）の古墳時代溝、左京九条三坊（12）の流路、弥生時代中期太型蛤刃石斧出土、右京八条二坊（17）の弥生時代から古墳時代に至る遺物包含層があり、いずれも断片的な発見ではあるが、今後平安京以前の歴史を把握する上で貴重な資料である。

（堀内明博）

白河街区 今年度当研究所が行った白河街区の発掘調査は、成勝寺跡、尊勝寺跡、白河南殿跡の3件である。このうち主要な成果が得られたものに、白河南殿跡(20)がある。この調査で白河南殿を構成した主要建物の基壇北端の一部とその礎石列、それに付属する南北九間、東西一間以上の北門廊と礎石据付痕跡を確認したことは、白河南殿の伽藍配置を考える上で重要な発見であった。この他尊勝寺跡(19)の調査では、この時期の東西溝、火葬墓、井戸などを確認した。白河街区の遺跡と重複するこれ以前の遺跡として岡崎遺跡が知られるが、今年度も尊勝寺跡(19)から弥生時代中期の方形周溝墓3墓を確認し、この時代の墓域を知る手掛かりを得ることができた。

(堀内明博)

鳥羽離宮跡 今年度当研究所が行った鳥羽離宮跡の発掘調査は、東殿・泉殿地区5件、田中殿地区6件、北殿地区1件の合計12件である。

東殿・泉殿地区の調査では、86次(21)で園池の汀線とその地業、88次(23)では東殿内の区画に関連する東西溝と中世に至る数多くの遺構群、91次(26)と96次(32)の白河天皇陵外堀を確認し、田中殿の復元に係わる貴重な知見が得られた。

田中殿の調査では、89次(24)と90次(25)による金剛心院北限東西溝の確認、92次(27)で金剛心院主要建物基壇の一部と園池などを確認し、金剛心院の実体がかかなり明確になりつつある。この他、北殿の調査では、95次(31)により園池の一部が確認された。

一方、鳥羽離宮以前の遺跡の検出例は、86次(21)の弥生時代から古墳時代の流路、87次(22)の奈良時代一括遺物、88次(23)の古墳時代溝、89次(24)、90次(25)、93Ⅱ次(29)での弥生時代から古墳時代の流路、古墳時代の方形周溝墓、木棺墓、土器棺墓などがある。特に89・90・93Ⅱ次などの田中殿地区での古墳時代墳墓群の確認により、墓域が確定できたばかりか、旧地形からもこの付近が微高地にあたり、古くから開発が行われていたことが判明した。

(堀内明博)

中臣遺跡 当遺跡を対象にして実施した発掘調査は、55・56・57・58次調査の4カ所である。各調査場所は、栗栖野丘陵と旧安祥寺川の間形成された低位段丘部(55・56・57次)と栗栖野丘陵北部(58次)に位置する。4カ所の発掘調査から得た主要な成果は、遺構には弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居20戸(55・56次)、古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴住居3戸、掘立柱建物1棟、溝2条(55・56・57次)、平安時代末～鎌倉時代の柱穴群(58次)などがある。その他に縄文時代晩期の遺物包含層(57次)などを検出した。これらの遺構及び遺物包含層から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、石器、鉄

製品などが整理箱で77箱出土した。当遺跡ではこれまで遺跡北部の様相が把握しきれいなかったが、58次調査で平安時代末～鎌倉時代の柱穴群（建物などが十分に想定できる状態を認めた）を検出したことで、既往の調査（9次：鎌倉時代の掘立柱建物を検出）とも合わせ考えると、当該期の集落が展開していたことが想定可能であり、本年度の大きな調査成果と言えよう。（平方幸雄）

長岡京跡 今年度京域内で実施した調査は、左京三条三・四坊（37）、左京五条三坊（38）の2件で、前者は昭和55年度からの継続調査である。条坊に関連した遺構は、三条三坊・四坊での三条第一小路、東三坊大路の各々の両側溝が確認され、三条四坊二町では掘立柱建物も認められた。長岡京以前の遺構としては、五条三坊で古墳時代から平安時代までの水田遺構を検出し、また三条三・四坊の下層の流路から、流木と共に縄文時代後期の遺物が出土しこの時期の遺跡の存在を窺わせる資料として興味深い。（堀内明博）

その他の遺跡 上記以外の市内遺跡の調査は、集落関係4件、古墳4件、寺院跡2件、窯跡1件の合計11件である。集落関係の遺跡として一乗寺松田町遺跡（40）、松室遺跡（44）、大藪遺跡（46）などがある。松室遺跡は、学校建設に伴う試掘調査で初めて明らかになった遺跡で、弥生時代から古墳時代の堅穴住居・水路などが発見され、嵯峨野地域の集落研究の上で新たな資料を提供した。中久世遺跡と大藪遺跡とは隣接する遺跡であるが、前者は弥生時代溝、平安時代溝・井戸・掘立柱建物など数時期にわたる遺構が検出された。後者では弥生時代から平安時代までの巨大な流路が発見され、特に奈良時代と考えられる時期に千数百本にも及ぶ杭で護岸した施設を検出し、この時期における当遺跡の性格を知る上で大きな問題を提起した。

古墳の調査には音戸山古墳群（41・42）、大枝山古墳群（43）、醍醐古墳群（49）があり、6世紀末から7世紀前半までに築造されたものである。このうち音戸山5号墳から二上山産凝灰岩の家形石棺片が出土し、嵯峨野の古墳研究に新たな資料を提供した。

寺院跡の調査例は法住寺殿跡（47）、法住寺跡（48）があるが、特に法住寺殿跡では平安時代後期の雨落溝を伴う基壇建物3棟、南北道路とその西側溝が確認され、伽藍配置を知る手掛かりを得たばかりか、平安時代後期寺院研究上での好例となった。

窯跡の調査として蟹ヶ坂瓦窯跡（39）があり、新たに3基が発見され、従来から知られていた1基と合わせ4基の窯が一体となって存在したことが判明した。またその時期が白鳳期まで遡ると考えられ、西賀茂窯跡群中最も古い一群となる重要な発見であった。なお対象地が中学校建設予定地であり、建設が中断されているが教育的見地からもその保存に

関して行政の積極的な対応が望まれる。

(堀内明博)

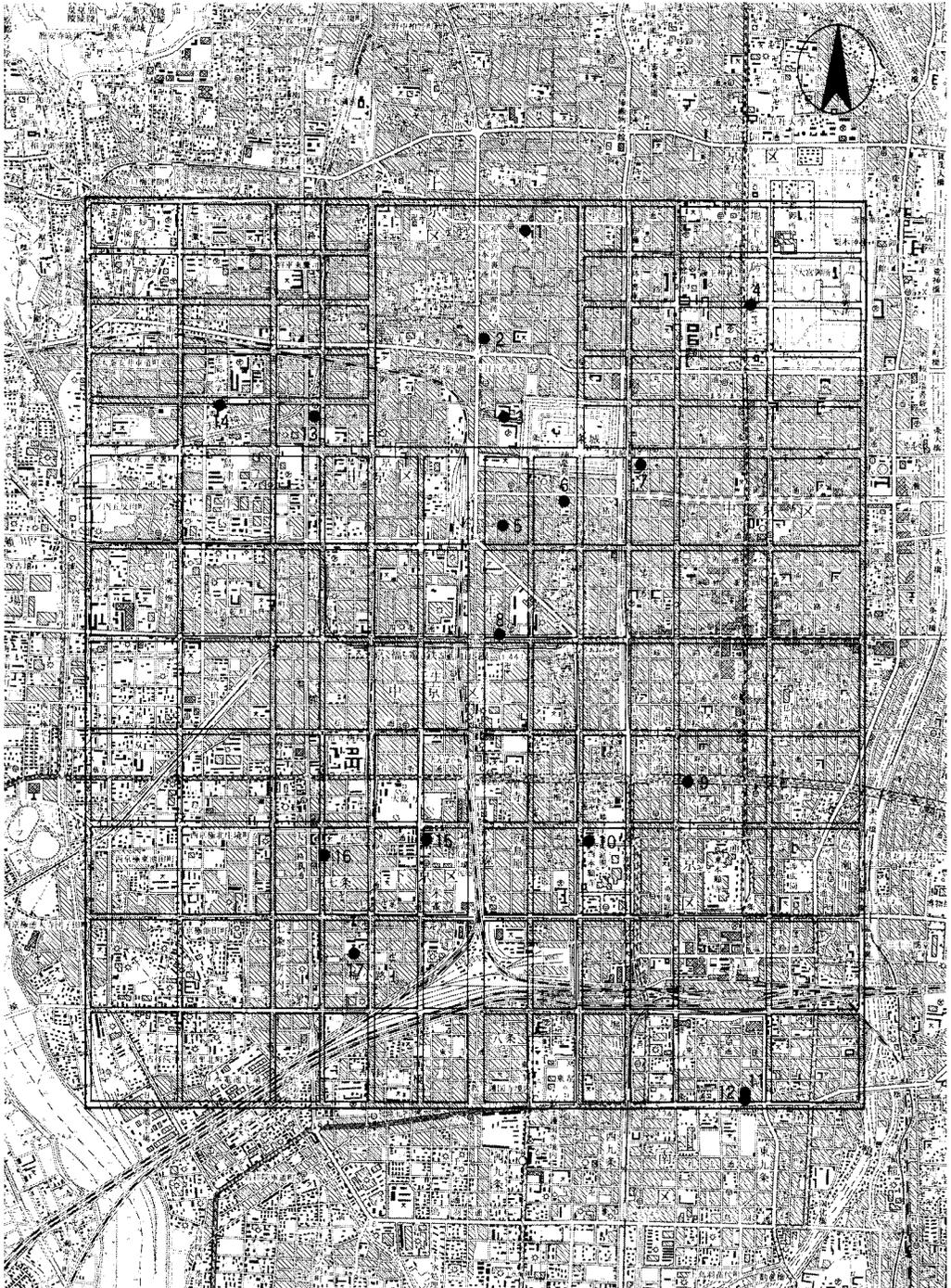
昭和 58 年度 発掘調査一覧表 ※は概報報告済

番号	遺跡名	所在地	調査期間	面積 (㎡)	調査地点表示	調査契機	担当者
1	率文蔵 (83HK-LH)	上京区浄福寺通中立売下る 菱丸町	'83. 4. 21 ～ 5. 14	130	ND64-1C51	市立正親小学校給 食室増改築工事	鈴木廣 堀内
2	大極殿院 (83HK-LJ)	上京区千本通丸太町下る小 山町 884	'84. 2. 8 ～ 2. 20	36	ND64-1J23	武守ビル新築工事	木下 ※
3	民部省 (83HK-LI)	上京区竹屋町通千本東入る 主税町	'83. 11. 28 ～ '84. 2. 2	620	ND64-3B24	市立二条中学校校 舎改築工事	木下 辻純
4	左京一条三坊 (83HK-NI)	上京区烏丸通下立売上る京 都御苑	'83. 11. 15 ～ 11. 22	45	ND64-2E54	京都御苑内耐震性 貯水槽設置工事	磯部
5	左京三条一坊 (1) (83HK-UD)	中京区西ノ京勸学院町 25-4	'83. 9. 14 ～ 10. 1	72	ND64-3F25	仮称シティーコーポ二 条新築工事	家崎 辻純 ※
6	左京三条一坊 (2) (83HK-AH19)	中京区大宮通御池下る三坊 大宮町 121-2	'84. 1. 11 ～ 1. 12	42	ND64-3G13	市立教業小学校内 耐震貯水槽設置工事	磯部
7	左京三条二坊 (83HK-MJ)	中京区油小路通二条下る二 条油小路町 280 堀川通二条下る土橋町 8-2	'83. 8. 15 ～ '84. 4. 14	4000	ND64-3D42	京都エンバイヤホテル 新築工事	菅田 本 吉川
8	左京四条一坊 (83HK-UC)	中京区壬生御所ノ内町 27-15 27-16	'83. 8. 19 ～ 8. 31	60	ND64-3J44	仮称富創壬生マンシヨ ン新築工事	家崎 ※
9	左京六条二坊・ 三坊 (83HK-GK5)	下京区金東横町、西鋸屋町 東鋸屋町	'83. 7. 4 ～ 9. 3	790	ND74-1H23	国道 1 号線都市共同溝 建設	上村 久世
10	左京七条二坊 (83HK-WB II)	下京区大宮通花屋町上る柿 本町 609-1	'83. 9. 14 ～ 11. 2	243	ND74-1K15	市立淳風小学校屋内 体育館増築工事	久世 平尾
11	左京九条三坊 (I) (83HK-KA II)	南区東九条烏丸町 56-2 ～ 7, 57-4・5	'83. 6. 1 ～ 8. 15	334	ND74-4E54	京都市高速鉄道烏 丸線建設	
12	左京九条三坊 (2) (83HK-KA III)	南区東九条烏丸町 57-2, 57-3	'83. 12. 8 ～ '84. 2. 22	196	ND74-4E54	京都市高速鉄道烏 丸線建設	
13	右京二条二坊 (83HK-IJ)	中京区西ノ京南上合町 74-1	'84. 2. 15 ～ 3. 31	280	ND63-4D14	仮称太子道マンシヨ ン新築工事	木下 辻純 ※
14	右京二条三坊 (83HK-II)	中京区西ノ京小堀池町 4-2, 5-1, 26	'84. 1. 17 ～ 3. 19	600	ND63-4C13	仮称奥田北マンシヨ ン新築工事	梅川 中村 ※
15	右京七条一坊 (83HK-XD)	下京区朱雀分木町 47	'83. 5. 10 ～ 5. 24	247	ND74-1I15	相互倉庫新築工事	菅田 本 ※
16	右京七条二坊 (83HK-OC)	下京区西七条西石ヶ坪町 40	'83. 4. 20 ～ 5. 14	240	ND73-2L24	仮称公社賃貸亀井 マンシヨ ン新築工事	平田 丸川 ※
17	右京八条二坊 (83HK-YC)	下京区西七条石井町 61	'83. 6. 10 ～ 8. 2	491	ND74-3A21	市立七条小学校校舎 改築工事	菅田 本
18	成勝寺跡 (83KS-RB II)	左京区岡崎円勝寺町 145	'83. 3. 14 ～ 4. 9	120	ND65-3A44	京都国立近代美術 館新館建設	菅田
19	尊勝寺跡 (83KS-BD II)	左京区聖護院円頓美町	'83. 10. 5 ～ 10. 31	426	ND65-1I43	京都国際武道セン ター建設	鈴木廣 辻裕
20	白河南殿跡 (83KS-WS III)	左京区聖護院蓮華蔵院町 35	'84. 4. 26 ～ 6. 28	500	ND64-2L53	第八期拡張事業遠隔監 視施設の内排水監視設 備夷川管理棟建築 (其 の 1) 工事	梅川 本
21	第 86 次調査 (83TB-TB86)	伏見区竹田浄菩提院町 50	'83. 5. 18 ～ 6. 27	190	ND84-3L22	長谷川マンシヨ ン新築工事	鈴木久 ※
22	第 87 次調査 (83TB-TB87)	伏見区竹田小屋ノ内町 71-1	'83. 6. 6 ～ 6. 23	170	ND84-3K14	大和ハウス工業株式会社 配送センター新築工事	前田 吉崎 ※

番号	遺跡名	所在地	調査期間	面積 (㎡)	調査地点表示	調査契機	担当者		
鳥羽 離宮跡	23	第88次調査 (83TB-TB88)	伏見区竹田内畑町	'83. 6. 14 ~ 12. 9	1435	ND84-3H52	京都市計画(京都国際文化観光都市建設計画)伏見西部第一地区土地区画整理事業	鈴木久吉崎	
	24	第89次調査 (83TB-TB89)	伏見区竹田中殿町 29	'83. 6. 29 ~ 8. 15	520	ND84-3G54	ホテル湖東新築工事	長宗前田	
	25	第90次調査 (83TB-TB90)	伏見区竹田小屋ノ内町 80	'83. 7. 12 ~ 11. 1	1136	ND84-3G54	旅館新築工事	長宗前田	
	26	第91次調査 (83TB-TB91)	伏見区竹田浄菩提院町 52-1	'83. 11. 15 ~ 12. 6	357	ND84-3L11	京都コピア販売株式会社社屋新築工事	堀内前田	※
	27	第92次調査 (83TB-TB92)	伏見区竹田小屋ノ内町 46、47、48、竹田浄菩提院町 42-1	'83. 11. 28 ~ '84. 1. 19	590	ND84-3K14	ホテル新築工事	鈴木久堀内	※
	28	第93 I次調査 (83TB-TB93 I)	伏見区竹田小屋ノ内町 79-1	'83. 12. 17 ~ 12. 26	88	ND84-3G54	旅館新築工事	中村	※
	29	第93 II次調査 (83TB-TB93 II)	伏見区竹田小屋ノ内町 79-1	'84. 3. 12 ~ 6. 2	590	ND84-3G54	旅館新築工事	堀内前田	
	30	第94次調査 (83TB-TB94)	伏見区竹田内畑町	'83. 12. 16 ~ 12. 21	47	ND84-3H42	京都市計画(京都国際文化観光都市建設計画)伏見西部第一地区土地区画整理事業	鈴木久吉崎	
	31	第95次調査 (83TB-TB95)	伏見区中島秋ノ山町	'84. 1. 17 ~ 3. 29	569	ND84-3J24	京都市計画(京都国際文化観光都市建設計画)伏見西部第一地区土地区画整理事業	鈴木久吉崎	
	32	第96次調査 (83TB-TB96)	伏見区竹田浄菩提院町 89、90	'84. 2. 6 ~ 2. 28	230	ND84-3L11	倉庫付事務所新築工事	堀内前田	※
中臣 遺跡	33	第55次調査 (83RT-NK55)	山科区勸修寺西金ヶ崎 75	'83. 4. 5 ~ 4. 30	600	ND85-2E35	露天駐車場建設	辻裕平方	※
	34	第56次調査 (83RT-NK56)	山科区勸修寺西金ヶ崎 11	'83. 5. 9 ~ 8. 8	915	ND85-2F53	露天駐車場建設	辻裕平方	※
	35	第57次調査 (83RT-NK57)	山科区勸修寺西金ヶ崎 42-3	'83. 8. 18 ~ 10. 3	230	ND85-2F42	露天駐車場建設	辻裕平方	※
	36	第58次調査 (83RT-NK58)	山科区西野山中臣町 3	'83. 11. 14 ~ 12. 2	145	ND85-2A33	福田金属箔粉工業株式会社 C F 電解工場新築工事	平方	
長岡 京跡	37	左京三条三坊・四坊 (83NG-SD IV)	伏見区久我西出町	'83. 11. 21 ~ 84. 2. 17	958	ND93-2 I 152J11・21・ 2223・24・34	西羽東師川改修工事	鈴木廣長宗	
	38	左京五条三坊 (83NG-D S)	伏見区羽東師古川町 332 ~ 336	'84. 2. 8 ~ 2. 29	317	ND93-4E45	大日本スクリーン工場建設	鈴木廣長宗	※
その 他の 遺跡	39	蟹ヶ坂瓦窯跡 (83RH-KB)	北区西賀茂円峰	'83. 11. 14 ~ 84. 4. 28	1600	ND44-1J51	市立加茂川中学校分校敷地造成工事	久世平尾	
	40	一乗寺松田町遺跡隣接地 (83KS-SN)	左京区一乗寺里ノ西町 35	'83. 6. 3 ~ 6. 28	129	ND55-1K31	市立修学院第二小学校給食室増改築工事	鈴木廣堀内	
	41	音戸山古墳(1) (83UZ-QD I)	右京区太秦三尾町	'83. 4. 1 ~ 4. 25	80	ND63-1B35	造成工事	北田	※
	42	音戸山古墳(2) (83UZ-QD II)	右京区鳴滝音戸山町 11-99	'83. 6. 10 ~ 9. 2	115	ND63-1B24	木造家屋新築工事	平田丸川	※

	番号	遺跡名	所在地	調査期間	面積 (㎡)	調査地点表示	調査契機	担当者
その他の遺跡	43	大枝山古墳 (83MK-O E II)	西京区御陵大枝町 2 番 13	'83. 9. 16 ～ '84. 1. 24	1512	ND72-3D44・45・ 54・553H14・15	洛西地区総合開発事業粗 造成工事	上村 丸川
	44	松室遺跡 (83MK-KB)	右京区松室中溝町 15	'83. 11. 16 ～ '84. 3. 31	3040	ND73-1E11	市立桂中学校北分校建設 予定地	
	45	中久世遺跡 (83MK-QK)	南区久世殿城町 88	'83. 9. 12 ～ 10. 15	200	ND83-4E14	旭光精工工場新築工事	加納 木下
	46	大藪遺跡 (83MK-OD IV)	南区久世殿城町 481-3	'83. 7. 11 ～ 10. 5	341	ND83-4F22	市立久世中学校校舎増築 工事	鈴木廣 堀内
	47	法住寺殿跡 (83RT-RO)	東山区大仏南建仁寺上る七 軒町 575, 576, 578	'83. 4. 21 ～ 6. 24	786	ND74-4C24	仮称三十三間堂マンショ ン新築工事	上村 久世 吉川
	48	法住寺跡 (83HK-ZA)	東山区本町通 10 丁目東入 下る池田町 527	'83. 6. 1 ～ 9. 3	700	ND74-4G14	市立一橋小学校屋内体育 館・給食室増築工事	梅川 平尾
	49	醍醐古墳群 (83FD-DM II)	伏見区醍醐御所ノ内町	'84. 2. 13 ～ 2. 28	150	ND86-1I33	京都市東部山間埋立処分 地建設事業進入路工事	丸川

Ⅱ 平安宮・京跡



調査地位置図 (1:40,000)

1 率文蔵

経過 昭和58年4月21日から5月14日にかけて、上京区浄福寺通中立売下ル菱丸町の正親小学校北西部で給食室新築に伴う発掘調査を実施した。調査面積は約130㎡である。

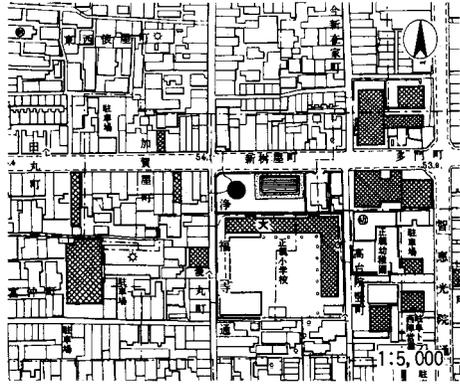
遺構・遺物 調査地の基本層序は、現地表(標高54m)から約1.5mまでが盛土及び江戸時代の堆積土である。これらを取り除くと、茶褐色混礫泥砂や黄褐色微砂からなる約35cmの層がみられる。次いで平安時代の遺構面と推定できる厚さ約10cmの茶褐色砂泥となる。これ以下は、深さ約2.5mから遺物を伴わない黄褐色砂礫がみられるのみである。

検出した遺構は、井戸を9基(江戸時代から小学校設立まで)、土壇は6基(江戸時代)ある。その中には、焼土・炭化物を多量に含む埋土から、完形に復元できる素焼きの有蓋甕がバラバラに破損した状態で出土した土壇や、いわゆる石室を伴う土壇がある。

茶褐色砂泥面で検出した遺構に掘立柱建物がある。確認した限りでは4間×2間(5.2m×2.6m)の南北棟で柱間はすべて1.3mである。この他には調査区の西寄りでは、間隔が不揃いではあるが南北に並ぶ柵列状の柱穴を4基検出した。しかしこれらの遺構から出土した遺物は少量かつ小片のため成立時期は明確にしがたい。

出土した遺物は、遺物整理箱にして5箱で、ほとんどが江戸時代の井戸・土壇から出土した。平安時代の遺物は茶褐色砂泥から出土した土師器片の他には、須恵器・瓦が数片ある。

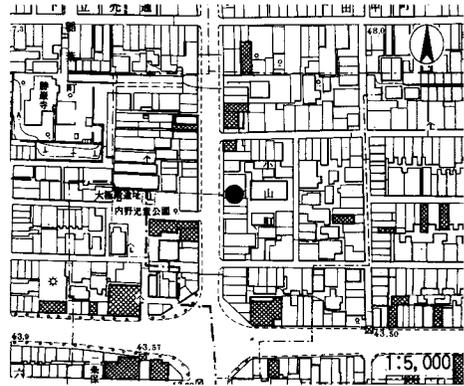
小結 調査地は、平安宮の率文蔵の他、聚楽第の一面に推定される地域であるが、調査の結果はこれらの遺構に比定し得る明確な遺構は認められなかった。しかし周辺でよくみられた土取り穴や、焼け瓦の捨て穴などによる破壊を受けておらず、遺構面の遺存状況は比較的良好であった。(鈴木廣司・堀内明博)



全 景 (西から)

2 大極殿院

経過 調査地点は、従来の平安宮の復元図によると大極殿と中和院の間の空白地であったが、工事に先立って遺構残存状況の確認のために試掘調査を行った結果、保存状態の良い凝灰岩列を検出した。早速京都市埋蔵文化財調査センターなどと協議して試掘から発掘に切り換え調査を続行することになった。



調査は2月8日に開始し、凝灰岩で化粧をした基壇の検出とその凝灰岩の取上げなどを行って2月20日に終了した。なお、最終調査面は36㎡であった。

遺構 検出した遺構は平安時代の基壇と古墳時代のものと思われる溝である。

地表下約20cm、現代層を排土してすぐ基壇が検出された。凝灰岩列は、途中攪乱によって切断されているが、調査区西端より約3.6m分検出した。凝灰岩列の上端は削平されているものの、延石・地覆石・羽目石・東石から構成され、その残存状況は極めて良好である。石材ではほぼ原形をとどめていると思われるのは2個の延石と地覆石・東石・羽目石が各1個である。延石で寸法がはっきりするものは、長さ1.29mのものと64cmの二種があり、長い方は前を攪乱によって削り取られているが短い方は幅38cmを測る。高さはどちらも14.5cmである。外部は擦り減って丸みをおび、底面後方にはカギ状の切り込みが入れている。地覆石は長さ97cm、幅23cm、高さ21cmを測り、上端内側、下端外側にカギ状の切り込みを入れて、それぞれ羽目石・延石とかみ合わせる様にしてある。また、東石と組み合わせる部分は上方の切り込みが約3cm外方へ突き出ている。羽目石は長さ68cm、幅15cm、高さは上部が削平されているため不明であるが現存長18cmである。下端外方にカギ状の切り込みを入れる。東石は長さ55cm、幅14cm、現存高は19cmである。下端には背面に沿って舌状の突起があり、地覆石にさし込む様になっている。

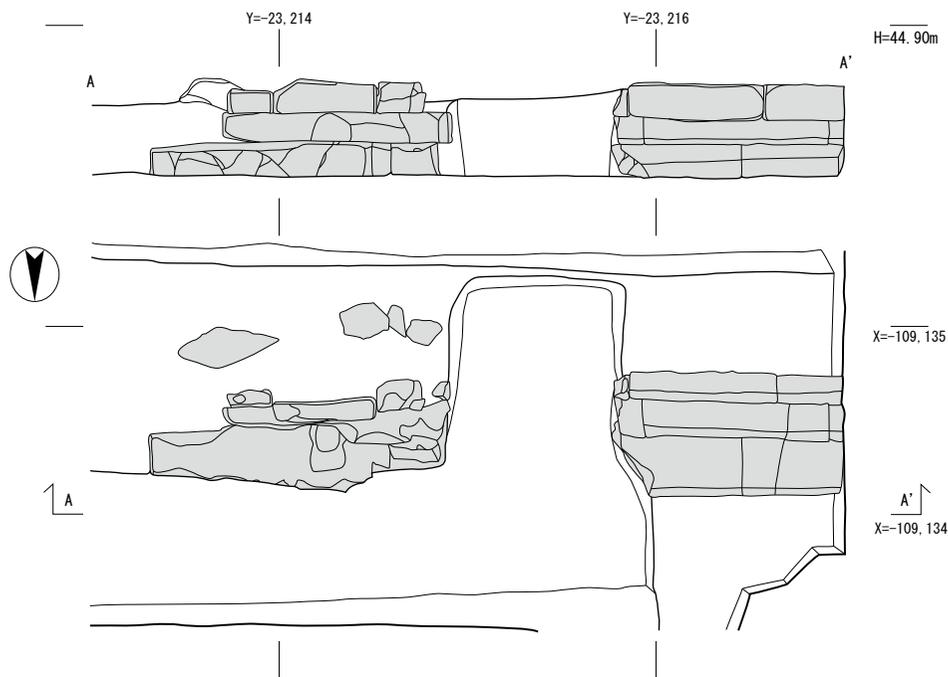
基壇は版築などの盛土による地業ではなく地山を削り出して形成している。地山の西半は所謂聚楽土と呼ばれる黄色の砂泥層、東半はバラス層である。基壇の構築法は地山に段を付けて削り出し、犬走りと同じ高さまで粘土を詰め延石を据付け裏込めする。その上に地覆石を据え、裏込めをして羽目石・東石を据え付けている。また、裏込めの土の中に凝灰岩の細片が多く含まれており、凝灰岩を組み合わせ構築する際に現地で加工をした跡で

はないかと思われる。その様な凝灰岩の細片を含む裏込めの痕跡は調査区全域で検出された。ただ、西半では凝灰岩が羽目石まで検出されているのに、東半では犬走りと最下段の裏込め痕を検出したに過ぎない。

遺物 出土した遺物には凝灰岩列、東端の犬走りを覆った土層（暗褐色粗砂→褐色粗砂→褐色泥砂）に包含された平安時代後期の土師器皿・軒丸瓦・軒平瓦などがある。また、凝灰岩据付けの裏込め土より平瓦片、古墳時代と思われる溝より土師器の細片が出土している

小結 今回の調査で検出した凝灰岩で化粧した基壇は従来の平安宮の復元では中和院と大極殿の間の空白地に位置しており、推定される建物はこの地点にはなかった。可能性として考えられるのは大極殿の北限の回廊、中和院南限の築地などであるが、現状では大極殿の北限の回廊と考えるのが比較的妥当な様である。従来の復元位置より北へ約30mずれることになるが、大極殿院を40丈四方と考えればちょうどよい位置になる。また、中務省内の区画溝（陰陽寮の北限の溝）からも北へ40丈の地点にあたっている。

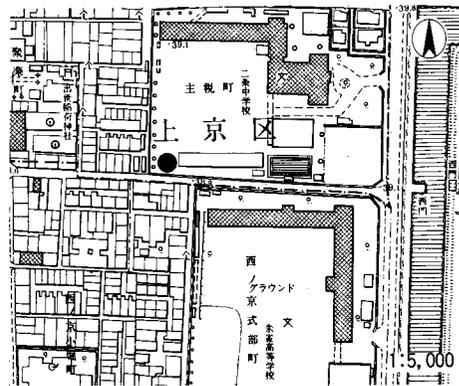
(木下保明)



基壇実測図 (1:40)

3 民部省

経過 京都市立二条中学校で校舎が改築されることになり発掘調査を実施した。調査地は平安宮民部省内の主税寮南西部で、また東方にあるプール建設時に実施された発掘調査によって築地が検出されている。今回の調査でもその築地の続きが検出されるものと思われたので、まず遺構の残存状況を把握するために試掘調査を実施した。その結果、遺構が比較的良好な状態で残っていることを確認したので、発掘調査を昭和58年11月28日より翌年2月2日まで行った。調査面積は620㎡である。



ため、試掘調査を実施した。その結果、遺構が比較的良好な状態で残っていることを確認したので、発掘調査を昭和58年11月28日より翌年2月2日まで行った。調査面積は620㎡である。

遺構 基本層序は現代層が30cm、その下に茶褐色泥砂層が20cm堆積し、遺構面（暗褐色混礫泥砂層）となる。地表面の標高は約39.1mである。茶褐色泥砂層は土師器の細片が含まれるが時期は不明、暗褐色混礫泥砂層には弥生時代中期の土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の須恵器が含まれている。遺構は西半部の残りがよくて東半は旧校舎の基礎により大きく攪乱を受けている。検出した遺構は民部省主税寮南西部のコーナーを挟んだ南・西限の築地、平安時代の柱列・土壇、江戸時代の土壇・溝などがある。

築地は東西40m、南北16mを確認した。築地の土壇は断面が台形を呈し、幅は東西築地では上端が2.4m、下端4.2m、南北築地は上端1.6m、下端4.2mを測る。築地に伴う側溝は敷地内では完備されているが、敷地外では南北の側溝のみが検出された。敷地内側溝のうち南北の溝（SD6）は幅1.4m、深さ0.4mを測り、南築地部は暗渠となって水を南へ流す様になっていた。暗渠の部分は肩が二段になり、一段目と二段目の間は浅く平坦でその上に石か木板などを置いて蓋をしたものと思われる。東西の敷地内側溝（SD11）は幅3.4m、深さ50cmである。南北と東西の側溝は連続したものではなく、東西側溝を南北側溝が切った状態で検出された。これは東西側溝が早く埋まってあまり改修されなかったのに比べ、南北側溝は遅くまでその機能を維持していたものと思われる。南北側溝が東西側溝に接触する部分には瓦などで肩を補強した跡がみられる。南北築地に伴う外側の側溝（SD8）は、コーナー部より北へ約2mの地点で終わっており、溝底は凹凸があって南端が一番深くなっている。幅は2～2.6m、深さ30～80cmを測る。東西築地に外側

の側溝が検出されなかったのは民部省と式部省の間の道路が地形的にみて南への傾斜を有しており、雨水などは式部省北築地の外側の側溝に集められたものと思われる。なお、東西築地の南側には築地に沿って瓦の堆積がみられ、中には屋根からずれ落ちたまま放置したと思われる個所もあった。築地のコーナーの外側で路面になると思われる、径1～2cm大の小礫を含む固く叩きしめた面も確認している。

民部省敷地内の遺構には柱列と土壇がある。柱列は南西をコーナーとして東西4間、南北2間分を検出したが東・北へ延びる部分は近世以降の掘込により攪乱されており、規模・性格を明らかにし得ない。ただ、東西・南北柱列のどちらも築地の土壇端より約5mの等距離にあることから、築地に沿う柵列の可能性が考えられる。

土壇には築地が造られる以前のもの（SK4・51・52）と築地を切ったものが（SK14・15・17）ある。前者の土壇からは平安時代前期の遺物が、後者からは平安時代前期～中期の遺物が出土している。築地を切った土壇とは東西築地とその敷地内側溝を切ったもので、いずれの土壇からも遺物整理箱にして約40箱前後の遺物が出土している。しかも、その80%以上が瓦で占められる。東西築地の外側では瓦の堆積がみられ屋根からずれ落ちた様な状態の所もあったが、内側では瓦の堆積はみられず、崩落した瓦はきれいに集められて土壇を掘って埋められたものと思われる。

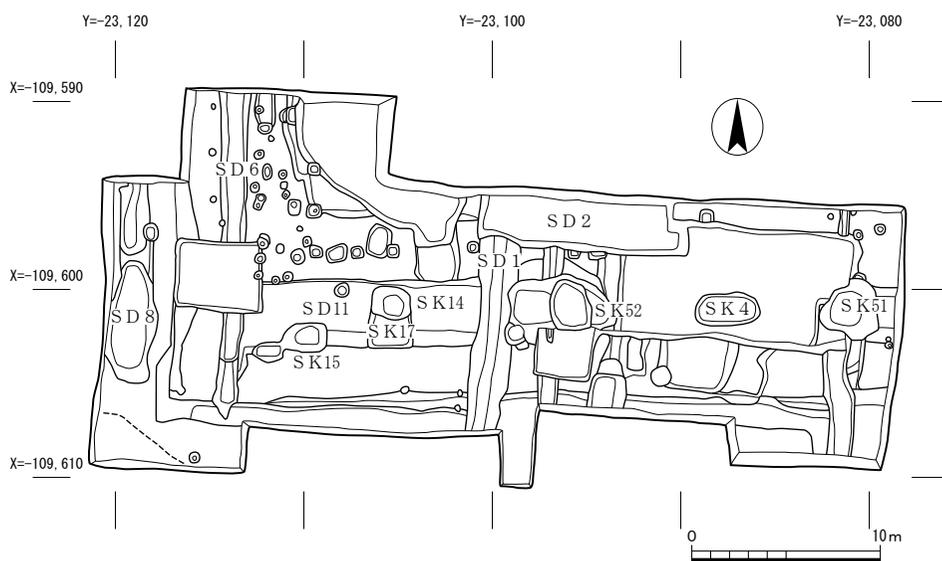
平安時代中期以降の遺構は平安時代後期に式部省との間の道路が修復されたと思われる痕跡をとどめる他は江戸時代まで遺構は検出されなかった。これは平安宮が平安時代末期にすたれて以後、蔬菜などは植えられることはあっても、建物などは建てられずにずっと荒地のままであったことを物語っている。江戸時代の遺構には現二条城と同様の傾きを持つ2本の南北溝（SD1・2）がある。

遺物 遺物の大半は東西築地の南の瓦堆積とその築地を切った土壇から出土した瓦類である。軒瓦はいろいろな種類のものがあり、築地の屋根は同一の型式の瓦で葺かれたものではなかった様である。しかも、平城宮・長岡宮式に属する軒瓦が多く、藤原宮式のものも出土している。土器類は築地を切った土壇、敷地内の側溝及びその溝の下層にある土壇から多量に出土している。土師器の甕・皿・杯・高杯、須恵器の甕・皿・杯・鉢・壺・瓶子、灰釉陶器の椀・皿・葉壺・蓋・風字硯、緑釉陶器の椀・皿・耳杯、黒色土器の椀・皿・甕などの器種・器形があるが、現段階では遺物の整理にほとんど手を付けていないので、土器類の詳細な説明はできない。ただ、特筆すべき遺物として土師器や灰釉椀に文字を線刻し墨書したものが多く、特に「主税□、五月一日」と墨書された灰釉椀は当遺跡の性格

を決定づける上で重要である。また、製塩土器が比較的多く出土することも注意を要する。

小結 今回の調査によって民部省内主税寮の南及び西の築地跡を東西 40 m、南北 16 m にわたって検出することができた。これによって民部省の南・西限のラインを正確におさえることが可能となり、従来諸説のあった民部省と式部省間の道路幅が小路幅（4 丈）であったことが明らかになった。また敷地内の側溝より「主税□、五月一日」と墨書された灰釉椀が出土したことは、当地が主税寮であったことの有力な裏付けとなった。

また、遺構の切り合い、遺物の出土状況などからみて、築地に葺かれた瓦は平安時代の中期に崩落したと思われる。そして敷地外の瓦は放置、内側の瓦は集められて土壙を掘っ



遺構実測図 (1:400)

てその中に投棄されたと考えられる。それ以後築地の上に瓦は葺かれなかった様である。

(木下保明・辻 純一)

4 左京一条三坊

経過 京都市消防局が上京区烏丸通下立売上ル京都御苑内に耐震性貯水槽を設置することになった。

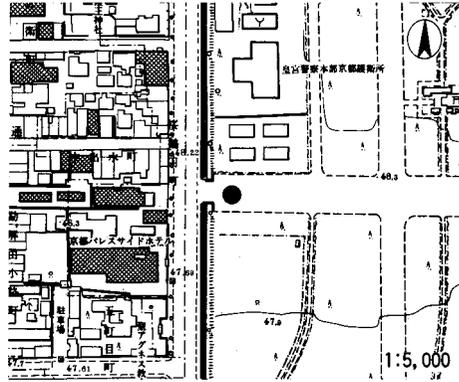
当該地は京都御苑内の西側に位置し、また平安京左京一条三坊にあたるため、事前に発掘調査を実施することになった。調査は水槽設置予定地内に7×7mのトレンチを設定し、現代整地層を重機によって除去した後、遺構検出・実測・写真撮影などの作業を行い終了した。

遺構・遺物 調査区の基本層序は上から現代整地層（約60cm）・暗茶褐色泥砂層（約1m）・暗黄灰色泥砂層（約80cm）・暗灰色混礫砂泥層（約40cm）・淡褐色砂礫層（50cm以上）が堆積している。暗茶褐色泥砂層～暗灰色混礫砂泥層に包含する遺物はほとんど近世のものである。淡褐色砂礫層からは遺物の出土は認められなかった。

今回の調査で検出した遺構は石列遺構とそれに付属する石組みの溝である。溝は幅50cm、深さ15cmを測る東西溝である。底面には一部石敷がみられ、全面に石が敷かれていたと考えられる痕跡が認められる。溝に接する南側の石列遺構は幅2.1mを測り埋土には拳大の河原石がつまっていた。これらの遺構からは近世の遺物が出土、江戸時代末～明治初頭の遺構と考えられる。

今回の調査で出土した遺物は整理箱に3箱ある。内容は土師器・陶器・染付磁器・瓦などがありすべて近世に属するものである。

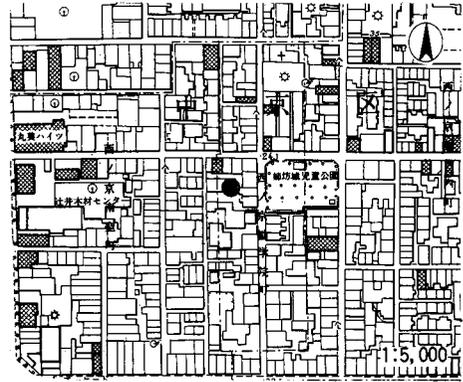
小結 今回の調査では近世の石列遺構、及びそれに付属する石組み溝を検出したにとどまり、平安時代及び中世の遺構・遺物を検出することはできなかった。また石列遺構下の遺物包含層（約2.2m）から出土する遺物はほとんど時期差がなく、調査面積が狭いため詳細は不明であるが、大規模な近世の堆積土の可能性はある。（磯部 勝）



石組溝（北から）

5 左京三条一坊（1）

経過 当該地は左京三条一坊四町に相当し、坊城小路と姉小路の交差点部に推定される。昭和58年9月9日に試掘調査を実施し、地表下1.25mで南北方向の溝状遺構を2条検出した。また遺構の保存状態の良好なことが判明したため、9月14日から10月1日までの期間、発掘調査を行うことになった。



遺構・遺物 基本層序は、遺構面直上まで盛土（60cm）でその下は黄灰色砂泥層の整地層（40cm）となる。以下西半では褐色砂礫層の無遺物層、東半の路面部では小石を固く敷き詰めた整地層が2層認められる。今回の調査で検出した遺構は、溝・土壇・柱穴・井戸などである。その中で主要なものとしては、平安時代前期の南北溝2条、平安時代後期から鎌倉時代の南北溝1条がある。その内平安時代前期の溝1条は幅1～1.2m、深さ30cmの規模を持つが、北半では北東方向に斜めに延び、西側立ち上がり部には幅13cm、厚さ5cm、長さ2.3mの護岸用の板が施設されており、溝内には、7～10cmの正方形の杭が定期的に2列に打ち込まれている。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦、銭貨、土馬などがある。いずれも平安時代前期に位置づけられる。その他には、調査区北西隅の一角において、灰色粗砂礫層より大型蛤刃石斧と弥生時代後期の甕・壺の破片が少量出土している。

小結 検出した南北方向の3条の溝は、いずれも坊城小路西側溝に関連する遺構と考えられる。その内護岸用施設などを有する溝は、道路を横切る暗渠の可能性が考えられる。姉小路との交差点部に推定されることも考え合わせ、条坊遺構における新たな資料を提供するものである。なお、『平安京跡発掘調査概報』昭和58年度に本調査の概要を報告してあるのでこれを参照されたい。

（家崎孝治）

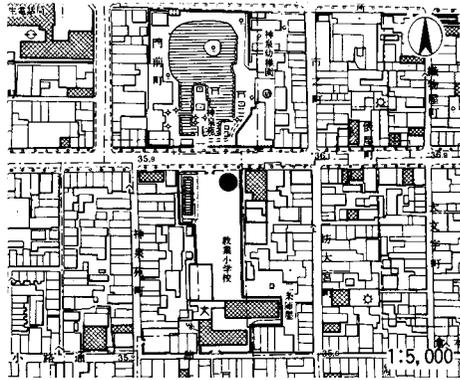


護岸施設をもつ溝

（北東から）

6 左京三条一坊（2）

経過 京都市消防局が中京区大宮通御池下ル三坊大宮町121-2、京都市立教業小学校内に耐震性貯水槽を設置することになった。当地は平安京左京三条一坊十四町にあたり、史跡神泉苑の南側に位置する。このため工事に先立ち発掘調査を実施することになった。調査は水槽設置予定地内に6.5×6.5mの調査



区を設け、現代盛土層、近世整地層を重機により除去し遺構検出を始めた。調査の結果、近世土壇4基と池状遺構を検出し、実測、写真撮影を行い調査を終了した。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、現代盛土層（約45cm）が堆積し、以下暗灰色泥砂層（45cm）、暗青灰色泥砂層（約20cm）、淡茶灰色泥土層（約35cm）、茶褐色砂礫層（50cm以上）が堆積している。暗灰色泥砂層は出土遺物から近世層である。暗青灰色泥砂層・淡茶灰色泥土層は池状遺構の埋土で平安時代～桃山時代の遺物を包含する。この暗青灰色泥砂層上面で土壇を検出した。茶褐色砂礫層からは遺物は出土しなかった。

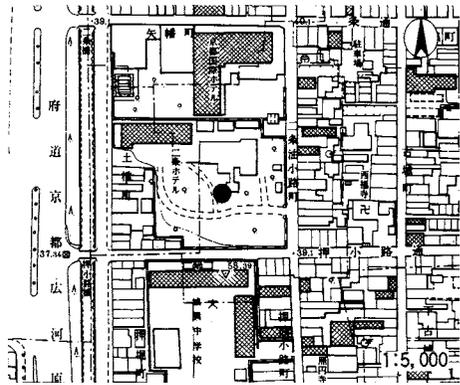
検出した遺構は土壇4基と池状遺構がある。土壇は4基とも不定形で遺存状態は悪く、深さは5cm前後であった。埋土からは土師器・瓦・染付磁器などが出土したが、いずれも近世のものである。池状遺構は調査区全域にその堆積が認められたが、調査面積が狭く規模、広がりなどは不明である。しかしながら池底は全体に南東方向へ傾斜し、一部拳大の河原石を敷いた施設が認められた。

出土した遺物は整理箱で1箱分ある。内容は平安時代～近世の土師器・瓦・陶器・染付磁器などであるが、いずれも小片で摩滅しているものが多い。淡茶灰色泥土層からは多くの植物遺体と共に漆器椀が出土した。

小結 調査地は史跡神泉苑の南側、条坊で言えば平安京左京三条一坊十四町に位置し、これらに関連する遺構の検出が予想される地域である。神泉苑は『拾芥抄』によれば、「二条南、大宮西八町」とあり東西は壬生大路から大宮大路、南北は二条大路から三条大路間に八町の広さを持っていた。調査地は苑池内のほぼ中央よりやや東側に位置し、調査区全域で検出した平安時代～桃山時代の遺物包含層は、堆積状況などから神泉苑内の苑池の埋土と考えられる。
(磯部 勝)

7 左京三条二坊

経過 今回の調査は、中京区堀川通二条下ル土橋町に（株）京都エンパイヤホテルが建設されることとなり、その工事前に実施したものである。調査地は、平安京左京三条二坊九町に該当し、南北二町をしめる堀川院の北辺に位置する。調査は、対象地を1区、2区、3区、4区に分けて設定し、昭和58年8月22日から1区より順に調査を開始し、翌年4月14日に終了した。調査面積は約4,000㎡である。

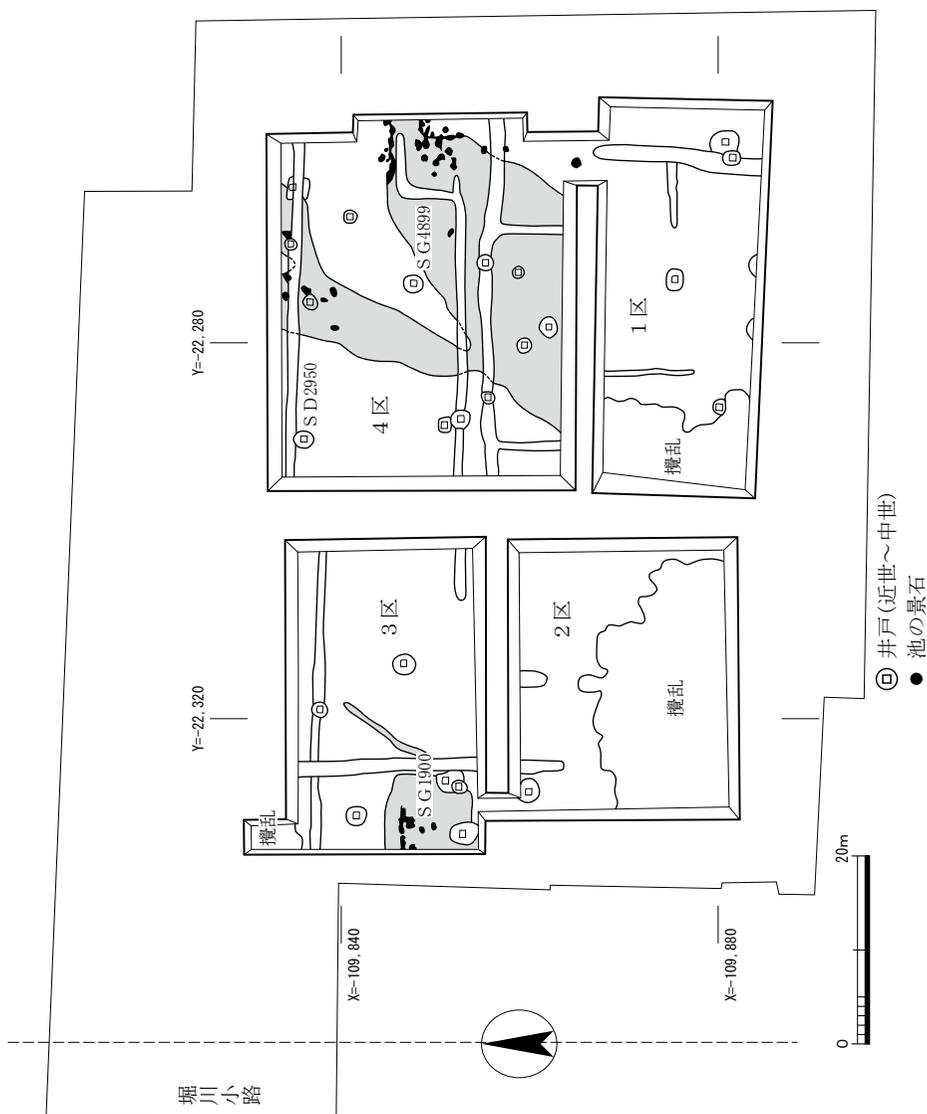


遺構 基本層序は、上から現代の積土層（1.1 m）、暗灰色砂泥層（桃山時代 40cm）、灰褐色砂泥層（室町時代 30cm）、黄褐色泥土層（鎌倉～平安時代 20cm）の順に堆積する。地山は砂礫層の所と灰黄色粘土層の所があり、粘土層の厚い1区西半部と2区南半部は江戸時代の土取りのために遺構はすべて破壊されている。桃山～江戸時代初期の遺構には土壇・溝・柱穴・井戸があり、全区に分布している。4区の北端には、二条城の大手門へ向かう東西方向の道路の南側溝（S D 2950）が検出されている。室町時代には、井戸・溝・庭がある。3区で検出された池（S G 1900）は、地面を方形に二段に掘り下げ（約1.8 m）、その中に景石を配置し、池底面に玉石を敷き詰めたものである。鎌倉～室町時代の柱穴は各区合わせて3,000個余り検出されているが、明確な建物の間取りは不明である。4区では平安時代末期の庭が検出された。池（S G 4899）は、北東部に景石を配して滝口とし、4区東半を占める大規模なものである。池に付随するものとして、調査区北辺では、曲線的に掘られた溝に沿う様に景石を配置した遺構も検出されている。なお、池は造り変えられており、新旧二時期が考えられる。

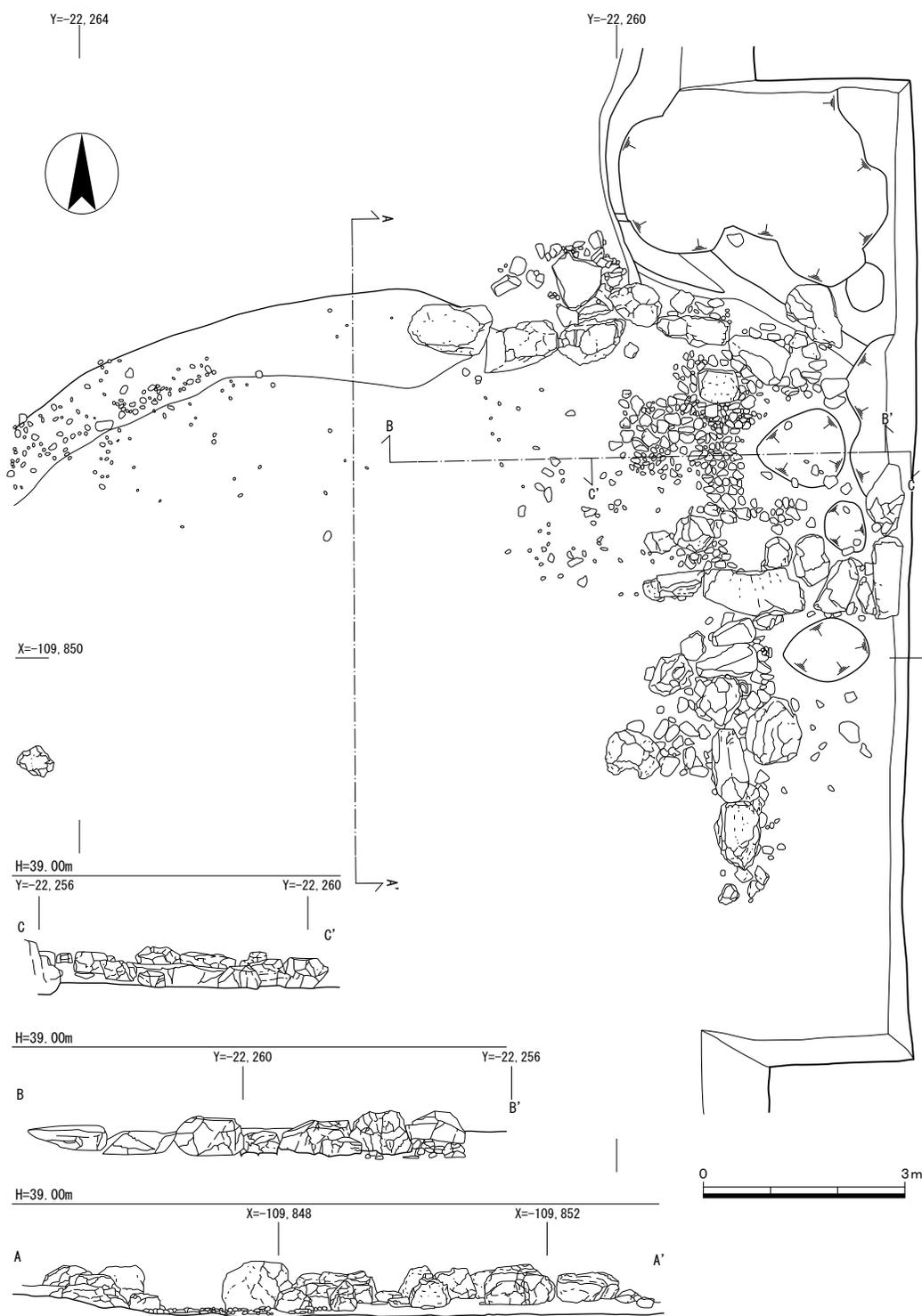
遺物 遺物は各時代の土師器・陶器・磁器が出土しており、他には平安～鎌倉時代の瓦器、平安時代の瓦・緑釉・灰釉陶器などがある。主流を占めるのは、鎌倉時代の土師器を中心とする土器群と室町時代後半を中心とする井戸出土の土師器、桃山時代の土壇・井戸から出土する遺物である。瓦類は大半が池から出土している。また、平安時代の遺構ベースから縄文時代中期初頭の新保式と言われる土器が数片出土したことから、この時期の遺構の存在が窺える。このように縄文時代の特記すべき遺物発見の反面、平安時代以降の遺物は大部分が日常雑器としての器種が占めており、特異なものは認められなかった。

小結 今回の調査では、江戸時代から平安時代にかけての遺構を検出した。これらの遺構は、井戸・土壇・溝・柱穴を中心にしたものである。各時期の柱穴群については、明確に建物として把握できなかったが、柱穴の規模は小さく、大きな建物にならないと思われる。3区の池（S G 1900）は、13世紀末～14世紀前半に埋没したと考えられ、その形態は他に類例をみない特殊なものである。4区の池（S G 4899）は堀川院のものと考えられ、平安時代後期の池庭の形態を解明する上で貴重な発見といえよう。

（菅田 薫・本 弥八郎・吉川 義彦）



遺構配置模式図 (1:800)



S G 4899実測図 (1:100)

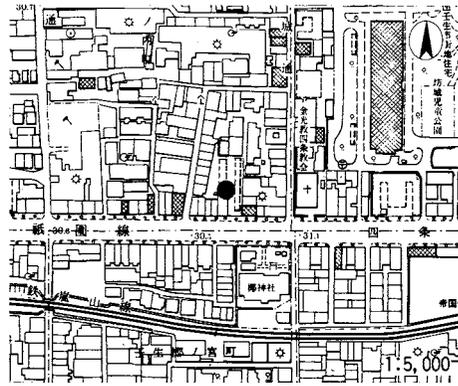
8 左京四条一坊

経過 中京区壬生御所ノ内町 27 - 15, 16 にマンションの建設が計画された。当該地は平安京左京四条一坊にあたり、四条大路に関連する遺構の検出が予想されたので、昭和 58 年 8 月 10 日に試掘調査を行った。その結果、平安時代後期の遺物を包含する東西溝を検出し、遺構の保存状態が良好なことが判明したため、改めて発掘調査を行うことになった。調査は 8 月 19 日から 8 月 31 日までの期間実施した。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、盛土が約 80cm、旧耕土層が 20cm、近世層が 20cm 程の厚さであり、その下層は固く締まった整地層となる。平安時代の遺構はこの整地層を掘り込んで成立する。主要な遺構としては、平安時代後期の東西溝 2 条、平安時代前期の井戸 1 基がある。東西溝は幅 1.8 m、深さ 55cm 規模のものと、その南側に幅 4.2 m、深さ 60cm 程の規模を持つものがあり、両溝の心々距離は約 6.5 m を測る。いずれの溝内からも平安時代後期の土器・瓦類が出土している。井戸は縦板組みのもので、内径は 70 × 70cm である。井戸底には曲物を大小二段に据え付ける。平安時代前期の土師器杯、須恵器蓋などが出土している。特に記すべきものとして、磁州窯系壺の破片が出土した土壌があり、平安時代後期の土師器皿などが共伴している。

小結 東西溝 2 条は、これまでの条坊遺構の調査成果などから判断して、南側の溝を四条大路北側溝、北側の溝を築地内側溝と比定できる。磁州窯系とみられる壺の破片は、平安京内では稀な出土品で、平安時代における輸入陶磁器の流通を考える上で新たな資料を提供することとなった。なお、『平安京跡発掘調査概報』昭和 58 年度に本調査の概要を報告してあるのでそれを参照されたい。

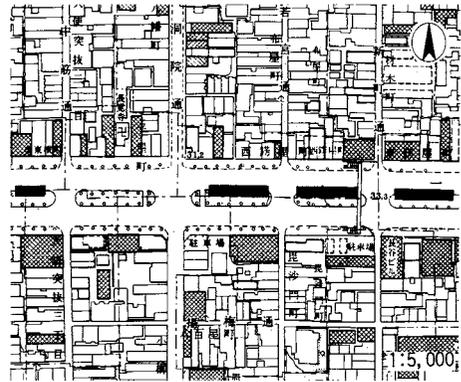
(家崎孝治)



磁州窯系壺片

9 左京六条二・三坊

経過 調査は国道1号線共同溝工事に伴う第5次発掘調査である。調査地は国道1号線五条通の中央分離帯の中で、東中筋通から新町通までの約280mである。調査地は4ヵ所に分かれ、幅は各々5mである。調査地は左京六条二坊十四町、三坊三・六町に推定できる。



遺構・遺物 地表下約80cmまで近・現代の整地層で、その下に江戸時代の遺構面がある。この遺構面より下約1.6mで緑灰色砂泥層の遺構面を検出した。両遺構面の間の土層は平安時代後期～江戸時代の遺構・整地層などが複雑に切り合って成立している。緑灰色砂泥層（厚さ30cm）は平安時代の遺物包含層で、その下は灰色砂礫層（地山）である。

古墳時代の溝は灰色砂礫層上面で検出し、北から南へ流れる。幅6m、深さ0.3mで埋土は灰色粗砂である。平安時代～鎌倉時代の遺構は緑灰色砂泥層上面で検出し、柱穴・土壙などがあるが、中・近世の遺構が深く掘り込まれているため残存状況は悪い。

室町時代の遺構には柱穴・土壙・井戸など多数あるが、遺構面が残らず、遺構相互の関係は不明である。

江戸時代の遺構には土壙・井戸・石室・瓦溜などが多量にあり、井戸・瓦溜は緑灰色砂泥層まで掘り込んでいるものが多い。

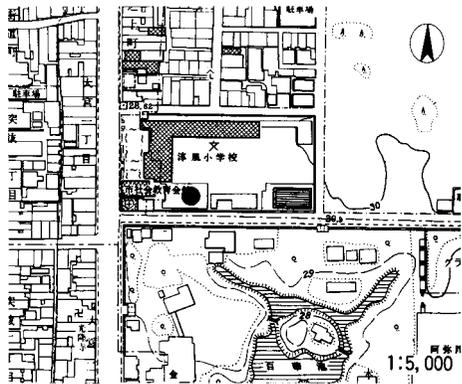
遺物は整理箱で67箱出土し、そのほとんどが土器類である。土器類には、古墳時代の土師器、平安時代の土師器・須恵器・陶器・白磁、鎌倉時代～室町時代の土師器・陶器・磁器・瓦器、江戸時代の土師器・陶器・磁器などがある。これらの土器の大半は室町時代後期以降のものが多く、特に室町時代後期の土壙からは土師器皿などがまとまって出土した。

小結 調査地内の遺構や包含層の状況は周辺の調査例と共通し、極めて複雑な左京独特の状況を呈している。更に調査範囲が狭いために遺構の性格は判然としない。しかし遺物には室町時代の一括遺物が多数あり、注目される。また古墳時代の遺構を検出したことは当地周辺の旧地形復元を考える上で好資料となる。

(上村和直・久世康博)

10 左京七条二坊

経過 本調査は京都市立淳風小学校体育館建設に伴うものである。同校ではこれまでに、敷地北東隅で給食棟建設の際に発掘調査^{注1}が行われており、平安時代の遺構や本圀寺に関連する時期の遺構が検出されている。また付近では北東約 150 m の地点で猪熊殿推定地^{注2}や同校南側の道路を隔てた西本願寺境内^{注3}でも発掘調査が行われ、成果を挙げている。



今回の調査は試掘の結果に基づき、体育館建設予定地に東西 32 m、南北 11 m の調査区を設けた。土層の堆積状況は前回の場合と類似しており、表土から 30 ~ 40cm で室町後期から桃山時代の遺構面を検出したが、これ以下には明瞭な遺構面は確認できず、表土下 60 ~ 70cm の地山面までに室町、鎌倉、平安の各時代の遺構を検出した。

遺構 遺構の密度はかなり高く、総数で 500 基以上を検出したが、その大半は小規模なピットである。他の遺構としては、溝・井戸・池・土壇などがある。数多く検出したピット群については相互の関連が不明で、建物を復元するまでには至らなかった。溝はいずれも近世に属するものである。トレンチ東南隅で検出した池 S G 472 は不整形な平面形を呈し、20 ~ 30cm 程の石が粗く組まれていた。出土遺物からみて室町時代後半のものと思われる。井戸 S E 54・63・64 は平安時代のもので、S E 54 は幅約 60cm の横板を一辺約 80cm の方形に組み合わせたもので最下段が残存しており、底部には曲物などの施設はなかった。井戸内からは 11 世紀後半代の土師器、瓦器などが出土している。S E 63 は底部に約 5 cm 角の材で組んだ横枠が最下段だけ残存していたが細部の構造は明らかでない。遺物はわずかではあるが、S E 54 に近い時期のものが出土している。S E 64 の井戸材はほとんど腐植していたが、壁面に残存していた木材の痕跡から一辺 90cm の方形縦板組の構造が観察できた。底部には S E 54 と同様曲物などが据えられていた形跡はなかった。この井戸からは平安時代前期の遺物が出土した。

遺物 平安時代から江戸時代にかけての遺物が、整理箱にして約 50 箱出土している。検出した遺構は小規模なものが多く、個々の遺構からまとまって出土している例は少ないが、S E 64 から比較的良好な資料とみられる土器群が出土しているため、ここではそれについて

て述べることにする。

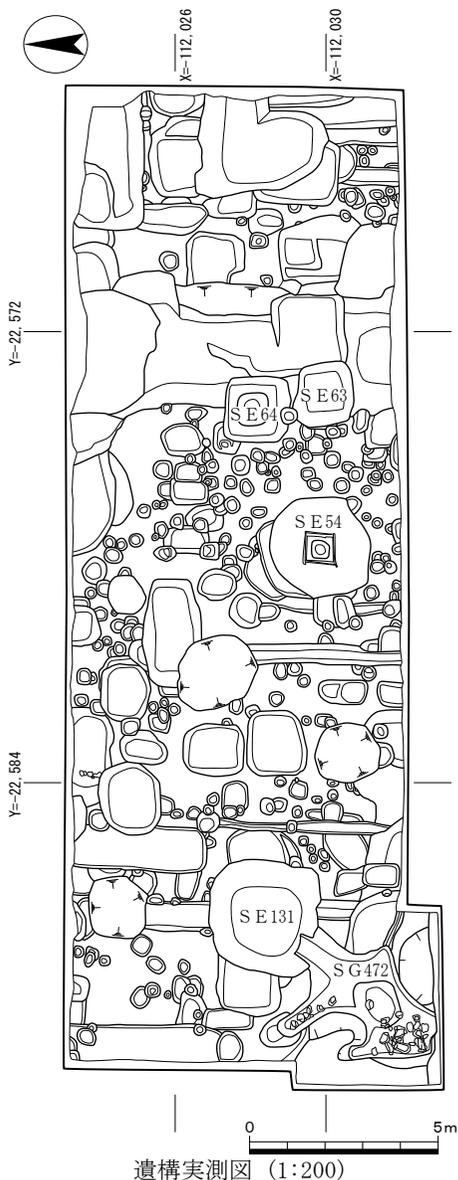
S E 64 出土の土器類には、土師器椀 (1 ~ 5)・杯 A (6 ~ 9)・杯 B (10)・皿 (11 ~ 14)・甕・高杯、黒色土器椀・甕 (15)、須恵器杯蓋 (16, 17)・杯 A (18 ~ 20)・杯 B (21)・壺 (22 ~ 24)・鉢 (25)・甕 (26, 27)、灰釉陶器皿 (28, 29)、緑釉陶器椀 (30, 31)・壺 (32)・香炉、無釉陶器椀などがある。この他土馬の脚部の破片が 1 点出土している。土師器の食器類については、高台の付く杯 B がヘラケズリを持つ他はすべて e 手法で調整されている。各器種の破片数による比較は、総破片数 986 片のうち土師器 63.0%、須恵器 22.8%、緑釉陶器 7.1%、黒色土器 5.9%、灰釉陶器 1.0%、無釉陶器 0.2% である。これを杯・椀・皿など小型の食器類に付いてみると、総数 611 片のうち、土師器 80.4%、緑釉陶器 9.2%、須恵器 5.1%、黒色土器 3.9%、灰釉陶器 1.1%、無釉陶器 0.3% となり、この器形での緑釉陶器の比率の高さが目立つ。

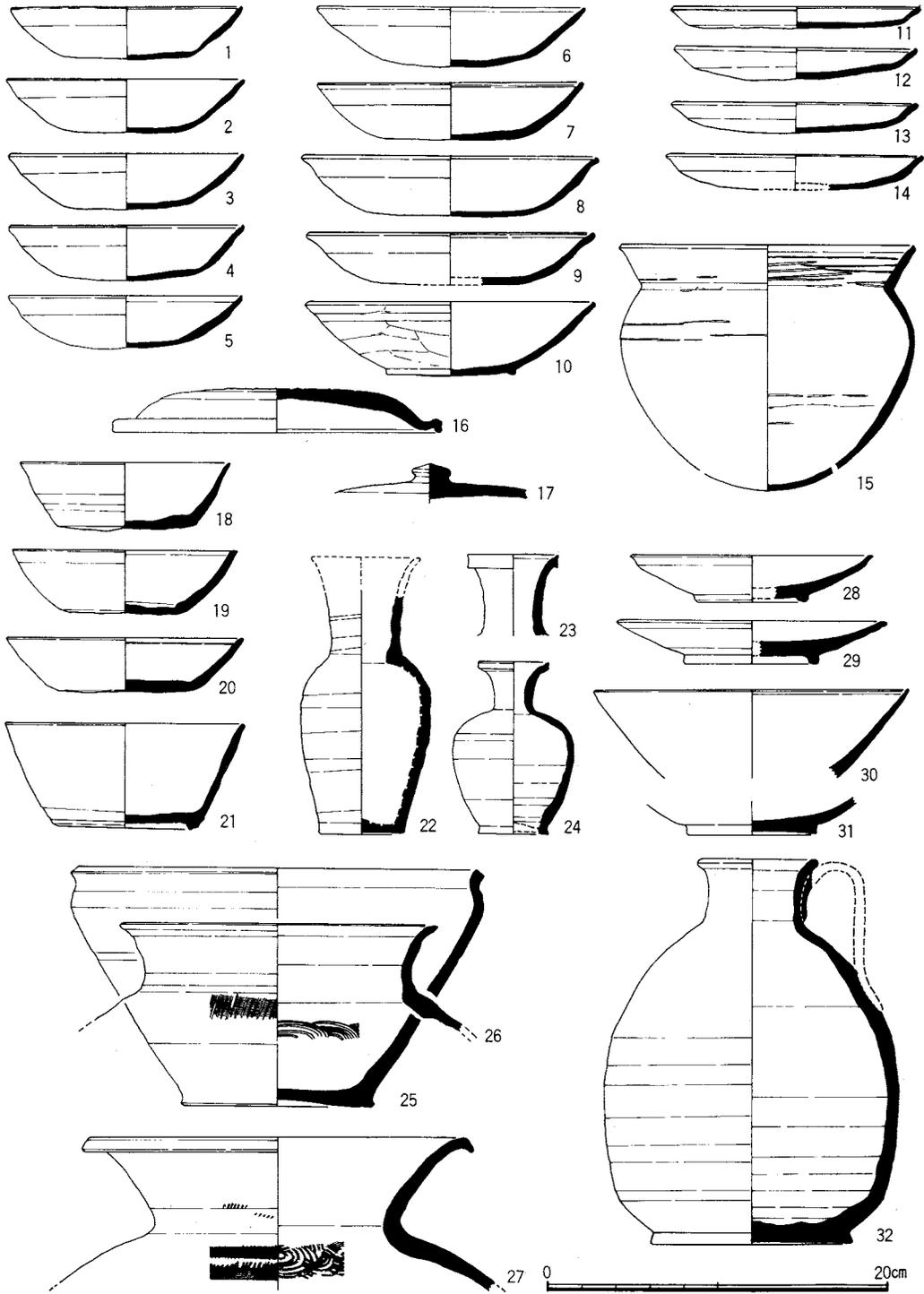
小結 今回の調査は前述した様に同校では二度目のもので、前回同様各時期の遺構、遺物がかなり高い密度で検出された。これは周辺の調査結果とよく一致しているが、これらの遺構と平安京あるいは本圀寺との具体的な関連については不明な点も多い。井戸 S E 64 からは、平安時代前期の良好な一括土器群を得たが、これに伴う他の遺構が検出されず、この井戸が属した宅地内での性格を明らかにすることはできなかった。また池 S G 472 は、検出位置や、出土遺物からみて本圀寺あるいはその塔頭の庭園施設の可能性もあるが、結論を下すまでには至らなかった。(平尾政幸・久世康博)

注 1 「左京七条二坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 57 年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所

注 2 昭和 54 年に当研究所が発掘調査。本圀寺の遺構等が検出されている。未報告。

注 3 『本願寺境内地発掘調査概要』本願寺境内学術調査会 昭和 58 年

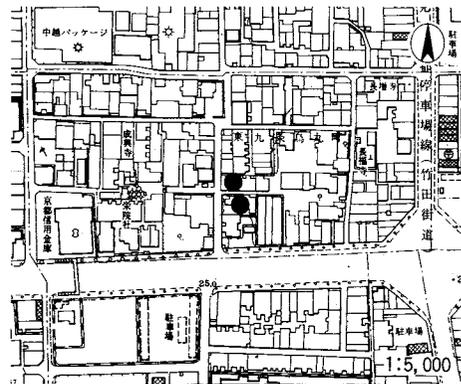




SE 64 出土土器実測図 (1:4)

11 左京九条三坊（1）

経過 今年度、京都駅から竹田駅間において京都市高速鉄道烏丸線の南進工事が再開されることとなった。平安京京域内については、南進工事に先立ち発掘調査を順次実施して行く計画である。今回の調査は、その最初の発掘調査である。



今回の調査対象地は、平安京左京九条三坊十三町西一行北五・六門の西端部及び烏丸小路の推定地にあたる。『京都の歴史』1巻付図（院政以前）によれば、左京九条三坊十三・十四町の南北二町は、九条太政大臣邸宅に推定されている。また、『同』2巻付図（青字）（院政以後～福原遷都）によれば、左京九条三坊十二・十三町は、藤原信長（太政大臣、寛治8年〈1094〉年没）邸宅に推定できる。この内十二町には、藤原信長によって1085年に九条堂が建立されている。そののち1103年に、この堂は法勝寺（白河天皇御願寺）に寄進され、以後城興寺となる。室町時代前期には、十三町も城興寺領となっていたことが確認できる。

今回の発掘調査においては、調査対象地に東西方向のトレンチを平行に2ヵ所設定し、北側トレンチをNo.81、南側トレンチをNo.82として調査を進めた。

層位 本調査地点における基本層位は、大きく4段階に概括することができる。すなわち平安京あるいは以前の時代の遺構ベースをなす自然堆積層（地山）、その上面の凹凸などの自然的条件を修正する様に厚く積まれた平安時代後期の整地土層、室町時代後期から桃山時代前半期の濠の成立期間内に積まれた濠の東側にみられる整地土層、及び濠1埋土、江戸時代以後の耕土層の4段階である。この4段階の土層は、両トレンチを通じて検出しており、すべてトレンチ外へ広がっている。以下、基本層位図に示した層位名を用いて記す。

自然堆積層（地山）は、基本的には砂礫層あるいは砂層によって構成されている。茶灰色砂礫層、黄褐色細砂層などである。地山上面には、南北方向に延びると考えられる窪地が存在しており、その窪地には主にシルト層あるいは砂層、砂礫層などが堆積している。淡青灰色シルト層、淡黄褐色砂層、淡黄灰色細砂層などである。

平安時代後期の整地層と判断している土層は、土質、色調が若干異なる各種の土層で構

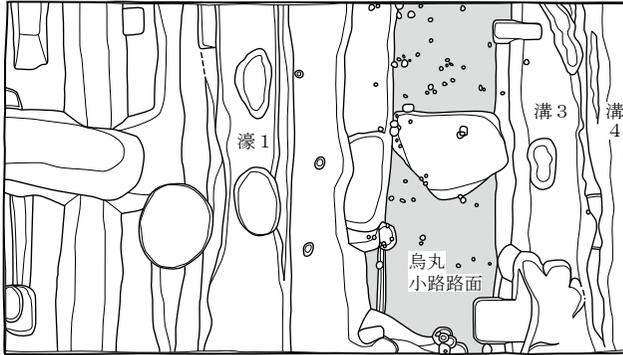
成されているが、平面上での明確な分層は困難であった。調査範囲内では、上下関係を分層できた部分が多い。全体を整地土層と判断した理由は、上下を分ける分層ラインなどとは関係なく、若干汚れた土が大きくブロック状に入っていたりする点、中位より上には平安時代後期を主とする遺物を含む点、また No.81 トレンチの地山上面の窪地に堆積しているシルト層最上層に平安時代前期の遺物などが含まれており、その上に堆積していること、分層ラインから成立している遺構が皆無であること、加えて上面に平坦面（宅地側）を意図的に作り出しているとみられる点など、人為的に一時期で積み上げられ整地されたと考えられる根拠を挙げることができる。整地土層と判断した土層は、淡黄褐色泥砂層、濃褐色泥砂層Ⅰ、同Ⅱ、同Ⅲなどである。

室町時代後期～桃山時代前半期の濠の成立期間内に積まれた濠の東側にみられる土層は黄灰色泥砂層とした土層である。この土層は、濠の東肩部を再構築するために入れられた土と類似しており、両者が連続する部分を確認できること、また再構築されて元の肩部より少し高くなった肩部上面にレベルがそろえられていることなどから、濠の東肩部再構築時に同時に東側全体に積まれた整地土層と理解した。濠の埋土は、その上面をほぼこの整地土層の上面にレベルを合わせて入れられている。

江戸時代以降の耕土と判断した土層は、全体に類似したやや砂質分が強い、比較的しまっていない土層である。若干の色調差やごく薄い灰分の多い土がラインを形成しており、それが分層の根拠とできる部分、ピット・杭穴などの遺構形成面（ライン）などを手掛かりに分層し得た場所もあるが、基本層位図に示した部分ほど多く分層し得なかった場所も多い。基本層位図では、黒灰色泥砂層、茶灰色泥砂層、暗灰色泥砂層Ⅰ、同Ⅱが耕土層と判断した土層である。これらの耕土層は、土質などからみて畑として利用されていたものと考えている。

遺構 地山（自然堆積層の茶灰色砂礫層など）上面の窪地として扱ったものは、人為的な遺構ではなく、自然地形と理解している。砂礫層で形成されている東肩は、No.81・82 トレンチを通して不定形ではあるが、ほぼ南北方向に延びている。東肩以外の肩部は、調査区内では確認していない。窪地は南・北・西方向へ広がりを持つが、底部の形状などからみて東肩沿いに南北方向へ延びる自然流路もしくは河川敷や氾濫原内の大きな窪地（溜まり）の一部の可能性も大きい。両トレンチの断ち割り部の観察によれば、窪地は段階かの溜まりもしくは流路に分層できる。No.81 トレンチでは、この窪地内堆積土最上層のシルト層（さらに細分可能）から主に平安時代前期の土器類・銭貨などの遺物が出土してい

No. 81 トレンチ

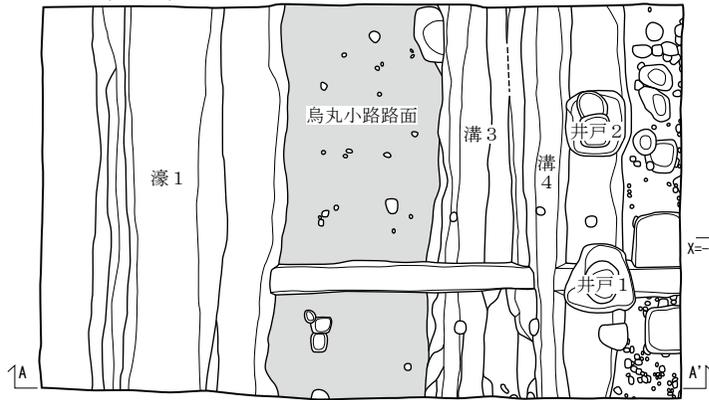


X=-113.468



X=-113.476

No. 82 トレンチ



X=-113.484

1A

A'

Y=-21.680

Y=-21.672

Y=-21.664



No.81・82 トレンチ遺構実測図

- | | | |
|-------------|---------------|-----------|
| 1 黒灰色泥砂層 | 5 黄灰色泥砂層 | } (自然堆積層) |
| 2 茶灰色泥砂層 | 6 濃褐色泥砂層(整地層) | |
| 3 暗灰色泥砂層 I | 7 淡青灰色シルト層 | |
| 4 暗灰色泥砂層 II | 8 茶灰色砂礫層 | |

No. 81・82 トレンチ遺構実測図 (1:200)

る。

平安時代前期から中期の遺構は、検出していない。平安時代後期以降から現代までの各時期の遺構は、時期により多少の差はあるが、ほぼ各時期の遺構を検出している。以下では、その内の主要なものについて記す。

今回の調査で検出した遺構で最も古く位置づけ得る烏丸小路は、平安時代後期の整地層と判断している土層（淡黄褐色泥砂層、濃褐色泥砂層など）上面に形成されたものである。路面東半部及び東側溝（溝3）を両トレンチで検出し調査を行った。同小路の西半部は、室町時代後期に掘削されたと考えられる濠1に削除されている。整地層上面で確認した路面部は、No.81 トレンチで幅3.3～3.5 m、No.82 トレンチで幅約4 mを測る。路面は、路肩に向かって少し下り、全体としては、若干中央部が高まった状態を呈していたものと思われる。路面は、整地層上面を直接利用して形成されているが、小さな浅い窪地には小礫が入れられ面が整えられている。

東側溝（溝3）は、No.81 トレンチで幅1.5 m強、No.82 トレンチで幅1.2 m前後を測り、深さは肩部から30cm 前後である。断面形状は、部分的に底部東側に段が付くが、全体的には、ほぼ浅い皿状を呈している。この東側溝は、鎌倉時代前半期には埋没し、その機能が失われている。今回確認した烏丸小路は、研究所の条坊復元モデルに比べて約3 m東側に位置している。

烏丸小路東側溝の1.5 m程度東側に側溝と並走する幅0.8～1.3 m、深さ20cm 程度の溝（溝4）を整地層上面で1条検出した。平安時代後期には埋没し、その機能が失われている。この溝が前述した側溝より一時期古い側溝であるのか、それとも邸宅内の溝かは速断し難い。しかし、路面部の残欠の有無、位置、上部の溝状遺構との関連から考えて邸宅内の西辺付近に位置する溝の可能性が高い。

No.82 トレンチで溝状遺構1としたものは、邸宅との境界付近で小路に沿って南北方向に延びる（No.81 トレンチへ連続している）幅5 m前後の浅い溝状の遺構である。上述した烏丸小路東側溝と溝は、この遺構下に位置している。

烏丸小路路面は、鎌倉時代に小礫を主体とする道路敷が1～3枚積まれ、その上面（路面）は室町時代まで存在したものとみている。

No.82 トレンチ井戸1・2は、No.82 トレンチ溝状遺構1の東肩付近に整地土層をベースとして掘り込まれた井戸である。両者とも底部は砂礫層に達しており、井戸1底部では木枠組みの残欠を確認している。出土遺物は、両者とも少なく時期判断は難しいが、両者と

も鎌倉時代には埋没していたものと理解している。

濠1 (No.81・82 トレンチ) は、烏丸小路西半分を掘削して形成された南北方向に延びる濠である。濠は、東西の両側壁ぞいに犬走り状の平坦な段が付き、中央部がその段から更に掘り込まれて底部を形成している。上部の幅は No.81 トレンチで約 5.8 m, No.82 トレンチで 6.5 m 以上を測り、深さは、深い部分で東肩部から約 1.4 m を測る。No.81 トレンチでは、濠西側にとり付く東西方向の溝 (溝1) 及び濠に沿う溝 (溝2) を検出している。埋没状況からみれば、この2条の溝は、濠1と並存していたものと考えられる。濠1 東肩は、その存続期間中に再構築されている。その時点で同時に濠の東側全体に入れ土され、整地が行われている。この段階で平安時代以来存続した烏丸小路路面部は、完全に埋没し新たな道路敷の形成は、調査区内では行われていない。

濠1 内堆積土は、機能中に堆積したシルト・砂を主とした堆積土と、濠を埋めた茶褐色の泥砂土などを主とする埋土とに大別できる。濠機能中の堆積土は、更に東肩の再構築時を境界に二分することができる。堆積土からの出土遺物は、東肩の再構築時以前の堆積土から、少量ではあるが室町時代末期に比定できる土器類が出土している。再構築時以後の堆積土からは、多種多様な木器類を始め、土器類などの桃山時代前半代の遺物が多数出土している。埋土からも、桃山時代前半代に位置づけ得る土器類を主とする遺物が出土している。

濠1 は、層位関係及び遺構内堆積土より出土した遺物などから、室町時代後期には形成されて桃山時代前半代には存続しており、桃山時代半ばまでには埋められ、その機能は失われていたものと考えている。

濠1 の埋没によって両トレンチ全体を通じてほぼ平坦な遺構面が形成されている。この面からは、両トレンチ合わせて 2500 余基のピット・杭穴及び No.82 トレンチで東西溝2条を検出した。ピット・杭穴は、トレンチ全面に展開している。

ピットは、心々間 1.8 m で建物の柱穴として並びを確認できたもの、また心々間 1.2～3 m で柵列の柱穴として並びを確認できるものなども含まれている。建物は、No.81 トレンチで2棟、No.82 トレンチで2棟、柵列は、No.82 トレンチの南部で2条確認している。しかしそれら以外のピットの大半は並びを確認し得なかった。杭穴は、この遺構面で形成されたものもみられるが、上層の耕土 (畑) 上面から成立しているものが多い。杭穴の多くは、耕作に関連したものと理解している。

No.82 トレンチで検出した溝1・2は、なんらかの区画と関連する可能性もあるが、速

断はできない。

井戸1～3 (No.81 トレンチ) と攪乱墳 (No.81・82 トレンチ) としたものは、ほとんどが、耕土最上面より上から切り込んで成立しているものである。井戸1～3 (No.81 トレンチ) と攪乱墳の多くは、調査前にとりこわされた民家に関連したものである。

遺物 弥生時代から古墳時代の遺物が、新しい時期の遺構への混入として出土している。太型蛤刃石斧は、弥生時代中期に比定し得る遺物である。古墳時代の遺物には、須恵器甕口緑片、杯蓋片などがみられる。古墳時代中期に比定し得るものも含まれている。

平安時代前期から中期の遺物は、少量しか出土していない。なかでも中期の遺物は、ほとんど出土していない。平安時代前期の土器類と共に出土した隆平永寶 (1枚) は、遺存状態が極めて良好なものである。

平安時代後期以降の遺物は、土器類を中心にほぼ各時期のものが出土しているが、出土量は左京の中心地域に比べると、はるかに少ないものである。なかでも鎌倉時代後半代から室町時代のものは、出土量が極めて少なく、遺構の遺存状況との関連を踏まえて検討を要する問題を多く含んでいる。江戸時代以降の遺物も同様の状態である。この様な状況の中で比較的まとまって出土している遺物は、平安時代後期、鎌倉時代前半代、桃山時代前期のものがある。平安時代後期、鎌倉時代前半代の遺物群中には、いわゆる平安時代後期の瓦類も多く含まれており、付近に同時期の瓦葺きの建物が存在していたことを示している。

出土遺物群の中で最も注目されるものは、濠1堆積土から一括出土した木製品類、土器類である。木製品には、墨書のある木札、塔婆を始め、箸、素地椀、曲物、ヘラ、箱、人形、鳥形、打球、羽子板、灯架、糸巻き、下駄、櫛、漆器の椀・皿、折敷、その他板類や加工木など多種多様なものがみられる。土器類では、土師器、国産施釉陶器、焼締陶器などが多数出土している。これら濠1出土遺物の様相は、木製品類、土器類とも旧二条城跡の濠などから出土した遺物群に類似している。

小結 平安時代後期に形成された烏丸小路、室町時代後期に構築された南北方向に延びる濠など、個別的にも注目に値する遺構を始め、平安時代から現代までの各時期の遺構を検出し調査できたことは、今回の発掘調査における大きな成果といえる。しかし、より重要な点は、これらの遺構を層位関係及び遺構面の変遷の中で位置付け、把握できたことである。

以下、遺跡の有様を理解する上で、あるいは周辺の遺跡調査を実施して行く上での問題

点を若干指摘し、まとめにかえる。

自然堆積層上面の窪地に堆積しているシルト層最上層からは、平安時代前期の遺物が出土していることは、前述したごとくである。この窪地は、南北方向に延びる可能性が大きく位置的には烏丸小路と重なる。この窪地自体は、自然地形の一部と判断でき、またシルトの堆積状況にも人為性はみられない。この様な事実認識の上にとって、シルト最上層出土遺物を見ると、シルトが自然堆積する過程で流れ込んだか、もしくは窪地に打ちすてられたものと考えられる。このように考えを進めると、自然堆積層に覆って入れられている平安時代後期の整地土層との関連からも、自然地形は平安時代前期あるいは中期まで残存していた可能性が大きくなる。この様な理解は、烏丸小路の形成と関連し、平安時代前期から中期の烏丸小路の形成と存在を否定する結果となる。しかし、この問題については、本調査の成果だけで結論付けられるものではなく、周辺の発掘調査の進展や京域内の他地域の調査成果との比較検討を経た上で結論を導き出す必要がある。

平安時代後期の整地層と判断している厚い土層は、室町時代後期に掘削された濠及び溝によって削除された部分を除いて、ほとんど全面に残存している。左京北域ではみられない良好な遺存状況といえる。この土層は、トレンチ周辺へ広がって広域に及ぶ可能性が大きい。上面に展開する遺構の遺存状態も良好であり、周辺の遺跡調査が期待される。この整地と関連する遺跡としては、藤原信長の邸宅が考えられるが、この土層の再検討も含めて結論は、邸宅推定地内の調査の進展を待ちたい。

平安時代後期に形成された烏丸小路は、研究所の条坊復元モデルからみて約3m東に位置しているが、マクロ的には、ほぼ推定位置にあたるといえよう。

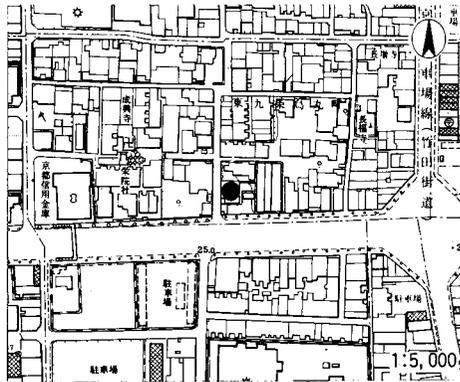
平安時代前期から中期の烏丸小路については、自然地形との関連でふれた様に、この地域における形成の有無を明らかにするための視点を持つ発掘調査が必要といえる。また、残存する同小路の成立状況及び中・近世での展開を各地区で明確に把握して行く必要があるだろう。

室町時代後期に構築されたものと理解している南北方向の濠については、濠の西側に存在する城興寺に関連する遺構の可能性が大きい。しかし、遺構の性格を踏まえた一定の結論を出すには、発掘資料の幅の内で、濠の範囲、内・外を決定し得る程度の資料蓄積は不可欠であり、烏丸線内の発掘調査でも濠の屈曲部などの検出が期待される。

(平安京調査会・小森)

12 左京九条三坊（2）

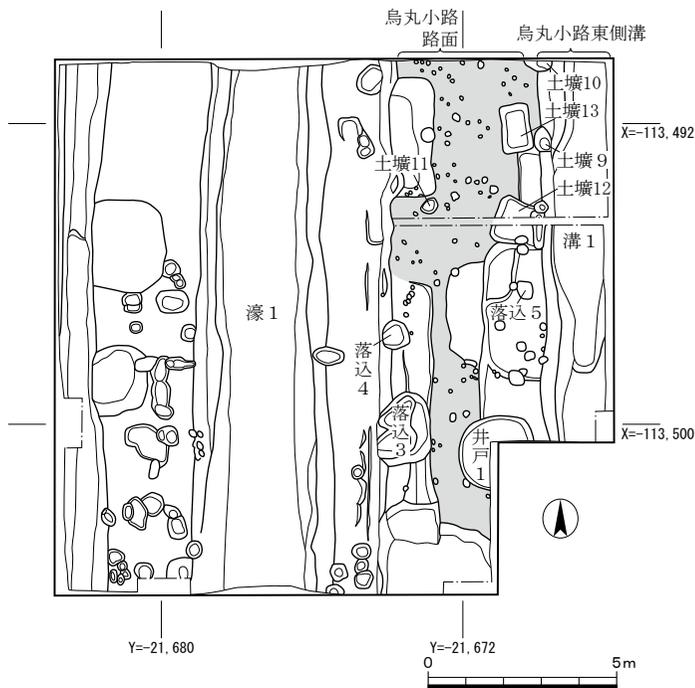
経過 本調査は、京都市高速鉄道烏丸線南進工事（京都駅～竹田駅間）に伴う発掘調査である。先に昭和58年6～8月に行ったNo.81・82トレンチ調査に続くものであり、調査地点は、No.81・82トレンチの調査地のすぐ南隣に位置する。トレンチはNo.83とした。今回の調査対象地は、平安京左京九条三坊十二町の東南端、同坊十三町西南端及び両町間に走る烏丸小路の推定地にあたる。



No.81・82トレンチの調査では、平安時代後期の整地層や、それをベースとした烏丸小路、室町時代後期に掘られたと考えられる南北方向に延びる濠、桃山時代以降に展開するピット・杭穴群などを検出しており、今回の調査は、それらの遺構の延び、広がりなどの追跡、確認と層位関係などの点検が主な調査目的となった。敷地との関連で、烏丸小路より東の宅地部分を含む調査トレンチは設定できなかったが、烏丸小路、濠、ピット、杭穴群の調査が可能なトレンチ設定となった。トレンチ南辺は、九条大路北側築地の推定ラインより約12m北に位置する。

層位 今回の調査では、先のNo.81・82トレンチの調査で認められた基本層位に修正を加えるべき事象は得られず、追認する結果となった。自然堆積層は、砂礫層によって構成され、No.82トレンチから続く窪地に砂層・シルト層が堆積する。その上に濃褐色泥砂層とした平安時代後期の遺物を含む整地層が堆積する。この整地層をベースとして烏丸小路路面と側溝が成立する。黄灰色泥砂層とした土層は、濠の修築に伴う整地層と考えられる室町時代後期から桃山時代のものである。江戸時代以降の耕土と判断している土層は、暗灰色泥砂層としたものでこの層まで機械力によって掘り下げた。基本層位図には、2層に分層し、ピットの多くはⅡ層上面で成立している状況を示しているが、No.81・82トレンチの報告にも記載している様に現場での観察は、識別困難な箇所も多く不明な点が多い。

遺構 No.81・82トレンチで検出し、地山上面の窪地として扱った自然地形の低みの堆積土は、今回の調査でも認められた。低みの東肩は、調査区外にある。平安時代前期から中期の遺構は今回の調査でも全く検出していない。平安時代後期に成立したと考えられる烏丸小路は、窪地の上に分厚い整地を施しその上面に形成されている。路面東半と東側溝



No. 83 トレンチ遺構実測図 (1:200)

層が一層認められる。溝状遺構 5 としたものは、烏丸小路同様 No.82 トレンチで検出している同様の遺構に連続するものである。井戸 1 としたものは、上部を土壌に削られており成立状況は不明であるが、出土遺物などから桃山時代のものであり、濠 1 と併存していた状態が考えられる。検出面から約 1 m 下に石組みが残存していたが、調査区の境目にかかっており危険なためそれ以上の掘り下げを断念した。

濠 1 は、No.81・82 トレンチで検出している濠 1 に繋がるもので烏丸小路西半を削り南北に延びる。形状は、No.82 トレンチと同様で、断面は東肩より約 70cm 下がって犬走り状のほぼ水平な幅 1.2～1.6 m の段が付き、更にこの段から 50cm 下って底部となる。底部の幅は 2.9～3.8 m を測る。西側は、東側の段とほぼ同じ高さでやはりほぼ水平な段が付き調査区西壁まで延びる。東肩はトレンチ南壁付近で東へ回り込み、濠の張り出し部分を形成する。東肩の高さに対応する西肩は、調査区外にあるものと考えざるを得ず濠幅は 8.8 m 以上ということになる。また西側の段上、調査区の西壁沿いに検出された南北方向に走る溝状の窪みは、堆積土の関係、出土遺物から濠 1 と併存していた状態が考えられる。

この濠 1 が、修築され東肩が造り直されている状況は、今回の調査でも明瞭に認めるこ

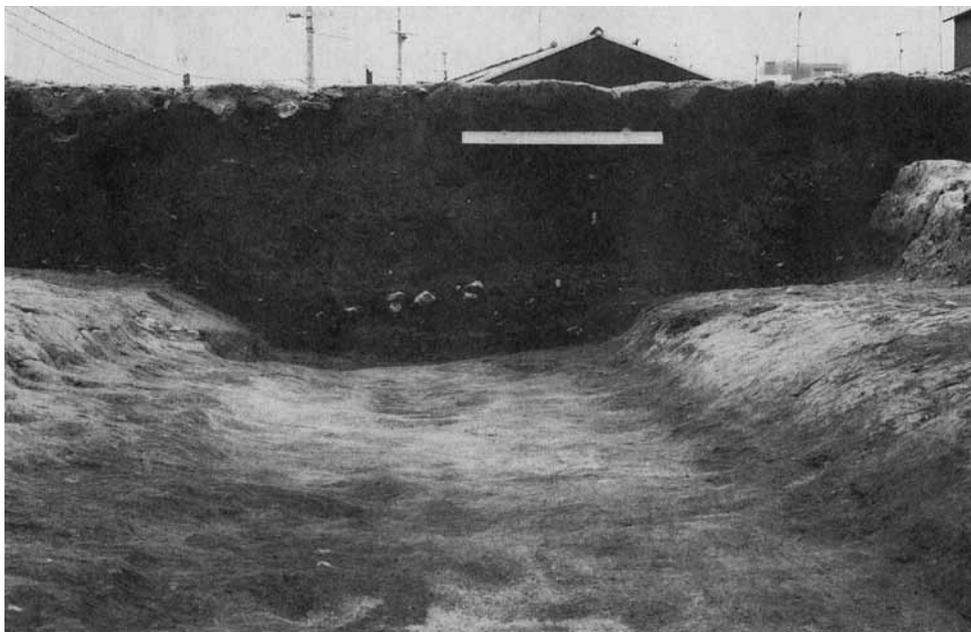
を検出している。路面西半は、後世の濠によって削られているため、西半部の状態については不明である。残存路面幅は約 4 m を測る。東側の側溝も東肩が調査区外となるため幅などは不明である。埋土の最下層からも鎌倉時代前半代の瓦器羽釜・椀などが出土し、同時期にはその機能を失っていたことが考えられる。道路敷は、小礫の入った

とができた。

濠1が、埋没してほぼ平坦な面が形成され、1200基余りのピット・杭穴がトレンチ全面に展開する。このピット・杭穴の中に数基から10数基がかたまって検出され群を形成するものがあり、更にこれらが東西約1.6m、南北約1.9～2m程度を持って並ぶ状況が認められた。

遺物 今回検出した遺物の量は、整理箱47箱である。その内訳は、濠1出土遺物が25箱（木製品を含む）と半数以上を占め、次いで各層より出土した遺物が9箱、溝1より出土したものが4箱、土壙2箱、溝状遺構、井戸、ピット、杭穴、落込、路面、攪乱壙がそれぞれ1箱ずつとなっている。

古墳時代・平安時代前期の遺物は、主に濠1の埋土に混じって検出されたものである。平安時代後期の遺物は、整地層の中に少量認められた。鎌倉時代前半代の遺物は、その大半が溝1から出土しており、土師器皿、瓦器椀、羽釜などの良好な資料が得られた。鎌倉時代後半から室町時代前期の遺物は、No.81・82トレンチの調査結果と同様に少量である。室町時代後期後半代の遺物は、濠1のシルト層から多量に出土した。No.81・82トレンチの濠1の調査時には、少量しか検出されなかったもので、濠1の成立年代を考える上で手掛かりとすることができる。桃山時代の遺物は、土器類・木製品類などが濠1埋土中から多量に検出された。また、江戸時代以降の遺物も、土壙・ピット・杭穴・攪乱壙より出土している。



濠1・断面

小結 今回の調査で確認した平安時代後期に造られた烏丸小路（路面東半と東側溝）、室町時代後期に造られた南北に延びる濠、及び近世のピット・杭穴群は、No.81・82 トレンチの調査でも検出されているものである。

平安時代後期の烏丸小路は、自然地形の窪地へ入れ土をし、その上面に路面と側溝が形成されている。こうした状況は、北側のNo.81・82 トレンチの調査でも認められている。

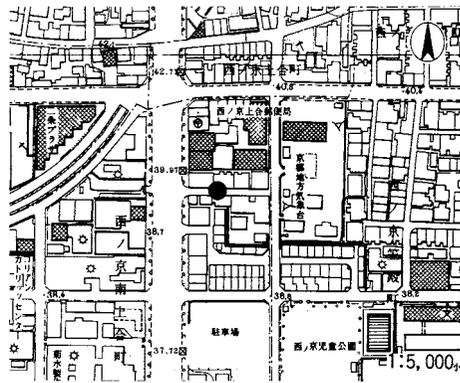
烏丸小路（路面）の西半分を掘削して形成された南北方向の濠は、中世末期に延暦寺不動院の管理下にあった城興寺の寺域との関連も推察され、No.82 トレンチ以南での濠の延びや西への曲がり注目されたが、今回の調査区内でもそのまま南へ延びることが確認され、その考えを裏付ける証拠は得られなかった。しかし、九条通と調査区の間には、まだ濠幅以上の空間が残されており、問題点は、今後の周辺調査に期待される。またNo.81 トレンチ南壁付近で濠の東肩が東へ回り込むが、同様な状況が今回の調査区の南壁付近でも認められ、No.82 トレンチの南壁付近でもその傾向が認められた。これらは、検出状況からみて、濠に直交し接続する細い溝状を呈する遺構と考えられる。この三者の間隔は一定であり、条坊復元図に基づく四行八門の区割ラインとほぼ重なっている。

No.81・82 トレンチの調査で2500余基検出したピット・杭穴群は、今回の調査でも1200基余りが確認された。このピット・杭穴群の中には、特に密集したものがあり、それらは単位として認識できる。更にこの単位がある一定間隔を持って並ぶ状態が認められた。こうした視点で見るとNo.81・82 トレンチの場合にも同様な関係が成立しているものがあるとわかった。これらのことは、このピット・杭穴群の遺構性格を考える上で注目される。

（平安京調査会・小森）

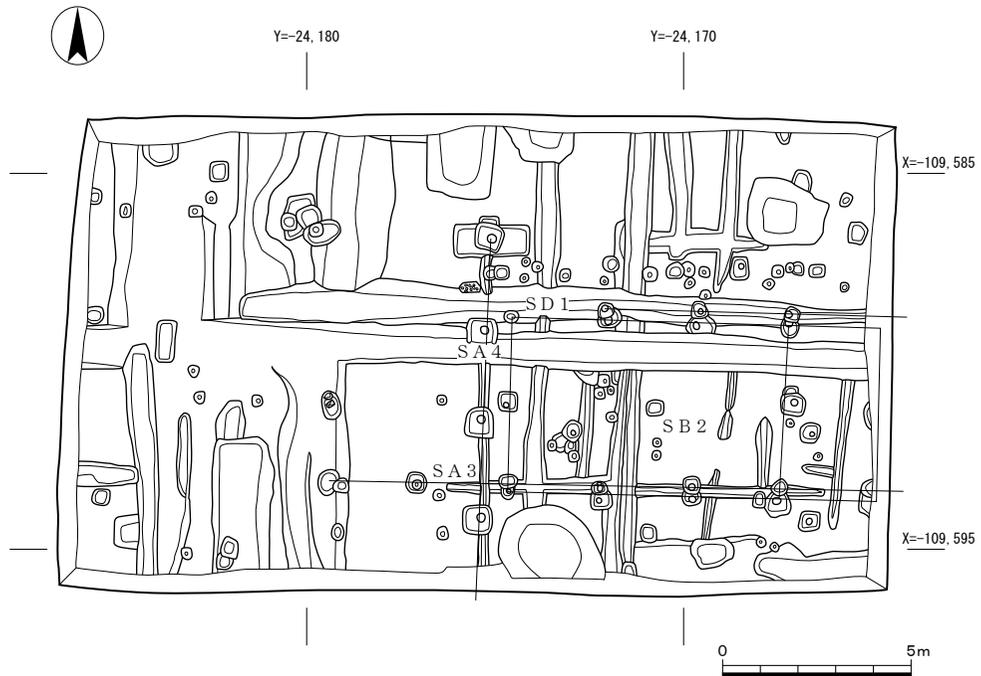
13 右京二条二坊

経過 当地にマンションを建設することになった。近年、この近辺では発掘調査^注が進み、多くの成果が挙げられていることを踏まえ、事前に試掘調査により遺構の有無を確認した結果、中世の遺物を多量に含む土器溜及び平安時代の柱穴を検出するに至り、昭和59年2月15日より発掘調査を実施する運びとなった。



調査は、試掘調査のトレンチを含む東西22m、南北15mの調査区を設定して行い、昭和59年3月31日を持ってすべて終了した。その結果、平安時代前期～室町時代に至るまでの遺構・遺物を検出した。遺構の主なもの、建物・柵列・溝・湿地状遺構などである。遺物としては、鎌倉時代～室町時代のものが多かった。

遺構・遺物 遺構としては、平安時代末期以後のもの、平安時代前期～中期にかけてのものがある。前者のものとしては、湿地状遺構とこれに伴う柵列・溝などがある。湿地状遺構は、新旧の二時期があり、新しい方は、Y-24,180m付近から西へ下がるものであり、古い方は、肩口がやや東へ広がり、X-119,586m付近から肩が東へ曲がり、南へ下がる。この時期には、柵列・溝(SD1)が伴う。柵列は、湿地状遺構の東肩に南北に並ぶ。溝は、調査区南北中央付近を東西に走り、湿地状遺構に流れ込むので、規模は、幅1m、深さは検出面より50cmを測る。新しい湿地状遺構の最終的な埋土には、土器片や小礫が多量に含まれており、その上を整地層が覆っている。後者のものとしては、地山面を切って成立する建物(SB2)・柵列(SA3・4)を検出した。建物は柱心間2.4mで南北2間、東西3間で東に1間分の庇が取り付く。柵列は、東西列(SA3)と南北列(SA4)がある。前者は建物の柱穴を切って成立している。柱心間2.4mで6間分を検出した。後者は、柱心間が2.4mで3間分を検出した。この柵列の柱穴の規模は、幅80cmの方形で、今回の調査において検出した柱穴で最も大きなものであった。遺物は、整理箱59箱出土した。出土した主な遺構は、湿地状遺構で、多量の土師器皿と共に、瓦質土器の鍋・釜や須恵質陶器の鉢や陶器・輸入陶磁器・漆器碗・滑石製鍋・金属製の動物(鹿)片などが出土した。これらは、湿地状遺構の新旧に伴い二時期に分かれる。新は、室町時代のもので、旧は、平安時代末期～鎌倉時代にかけてのものである。他に、平安時代中期の遺物



遺構面実測図 (1:200)

が、包含層である極暗赤褐色砂泥層 (2.5YR2/2) より、また、平安時代前期から中期のものは、建物、柵列などの柱穴から出土した、それらの内容は、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などである。

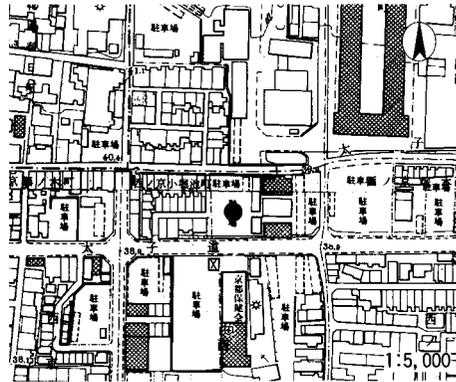
小結 今回の発掘調査地は、平安京右京二条二坊十一町内に位置する。調査では、平安時代の建物一棟・柵二列が遺構としてまとまりを持ったが、調査地点が平安宮のすぐ西隣りの坊にあたることを考慮すれば、他の多くの同時期の柱穴も、遺構としてまとまりを持つことが考えられ、この付近に相当数の建物などの存在が想像できる。また、平安時代末期～鎌倉時代にかけての湿地状遺構東肩の西下がりラインは、十一町内の町割りを考えれば、東西一町の中央にあたり、北肩の南下がりラインは、同様に南北一町の南八分の一町にあたる。このことは、平安時代の町割り区画が中世にまで影響を及ぼしていることを示す。最後に、当調査において出土した遺物は、大半が中世のものであり、湿地などの遺構があったことは平安京右京の変遷を知る上で重要である。当調査は、その一つの好資料となるものであり今後の継続した調査が望まれる。

注 『平安京跡発掘調査概報』 昭和 56 年度 京都市文化観光局

(木下保明・辻 純一)

14 右京二条三坊

経過 当地は、平安京右京二条三坊十一町にあたり、北が大炊御門大路に面する位置にある。調査は、マンション新築工事に伴って実施した。まず、試掘調査を行い、平安時代の南北溝と柱穴を確認した。また、所在地付近では平安時代の遺構・遺物の密度が高く分布するところであり、当地でもその様な状況



であることがわかった。本調査はこの試掘調査を受けて行い、特に南北溝が一町を東西に二分する溝であろうと推定されたことからこの確証を得ることを主眼とした。

調査区は、遺構の残存状況や残土置場を考慮して敷地南半に設定した。しかし、調査の進行に伴って平安時代の建物・溝が更に北へ延びることが明らかになった。残土の関係から南半の調査を終了後、排土を反転して北への拡張を行い、建物の規模及び配置を確認した。調査によって発見した遺構は、建物・柵・井戸・溝などがある。しかし調査区北端で検出が予想された大炊御門大路南側溝や建物群を画する宅地外郭線にあたる溝は検出できなかった。大炊御門大路南側溝にあたる付近で中世の東西溝があった。一町を東西に二分する南北溝は、試掘調査で確認したものでなく、それより西に平安京条坊復原の測量数値と一致する位置で確認した。

遺構 層位は、上から盛土・耕土・床土、そして平安時代の遺構検出面である段丘低位面となる。遺構面は、標高 38.0 m を測る。

主な遺構は、平安時代前期及び中期の掘立柱建物・柵・井戸・溝などである。建物は調査区北半に特に重複して認められる。これらの遺構は、重複関係や出土遺物から大きく 4 時期に分けて遺構群の変遷を捉えることができる。ただし、総合的な検討を完了していないため若干の変動もあり得る。

I : 8 世紀末～9 世紀初 SB 1 III : 9 世紀中頃～後半 SB 4～7 SD 9

II : 9 世紀前半 SB 2・3 IV : 9 世紀末～10 世紀中頃 SB 8 SD 10 SE

13

以上が帰属の時期が明らかな遺構である。なお、中世から近代に至る散発的な開墾に伴う細い溝も縦横に認められ、特に一町を東西に二分する位置のすぐ西に重複してあった。

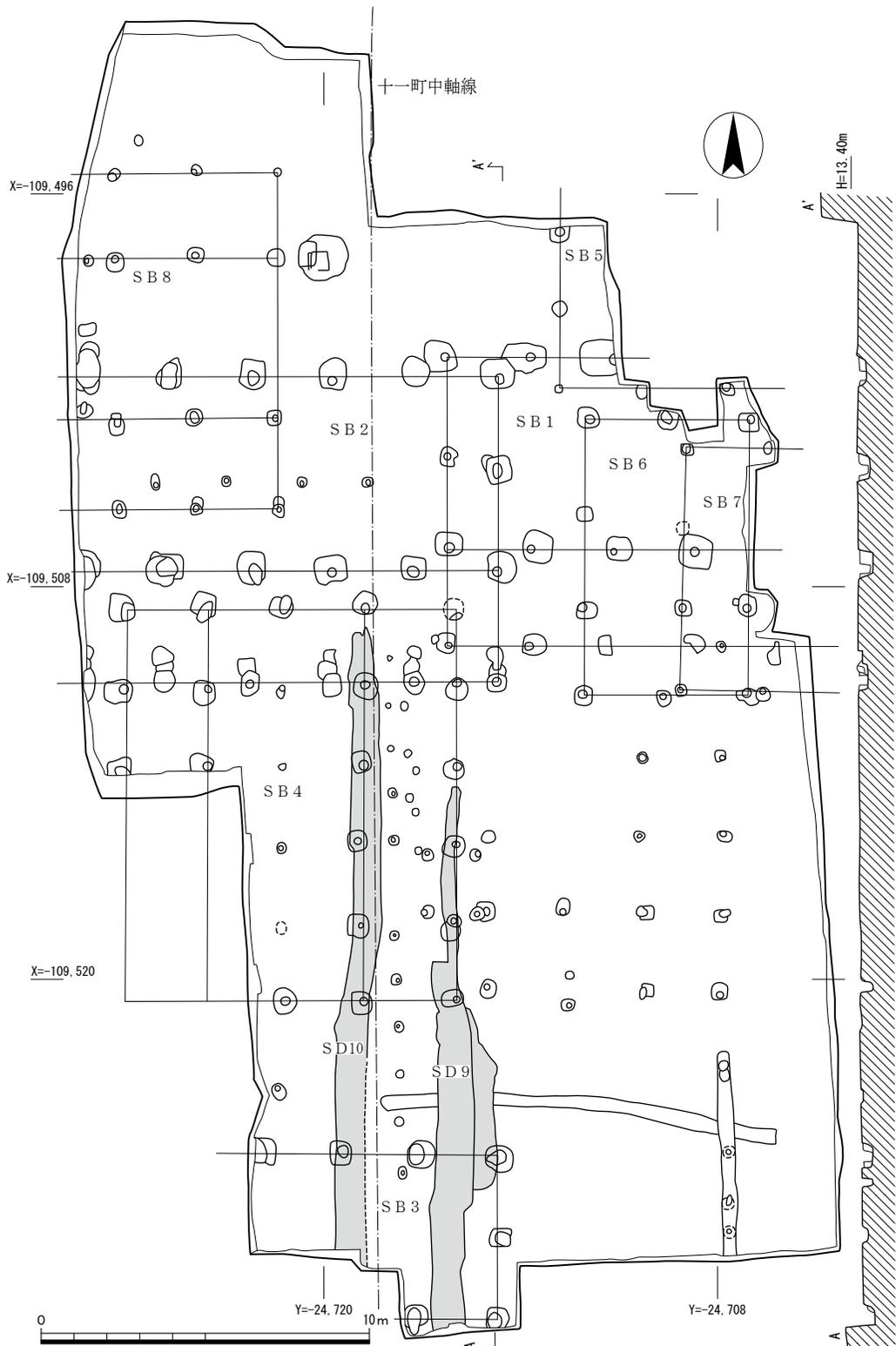
- S B 1 東西棟 南庇付 身舎3間以上×2間
- S B 2 東西棟 南庇付 身舎推定7間×2間 根石を使用する柱跡あり 庇は二度付替えあり
- S B 3 東西棟 庇不明 身舎3間以上×2間
- S B 4 南北棟 東・西庇付 身舎5間×2間 東柱あり 西庇付替えあり
- S B 5 不 明 庇不明 2間以上×2間以上
- S B 6 南北棟 3間×2間 東西棟の南庇付の可能性あり
- S B 7 南北棟 3間×1間以上
- S B 8 東西棟 南・北庇付 身舎2間以上×2間
- S D 9 南北溝 幅1.1m, 深さ20～30cm 細長い土壙状遺構の可能性あり
- S D 10 南北溝 3条の溝重複 幅30cm 深さ6～15cm 一町を二分する軸線上にあり
- S E 13 井 戸 掘形1.5m×1.35m 深さ20cm 枳一辺60cm 2時期重複
- 以上の他に9世紀末～10世紀の柵列, 9世紀中頃～後半の建物になると思われるS D 9 東側の柱穴群がある。

遺物 出土遺物は, 平安時代から江戸時代に至る遺物が整理箱に19箱出土した。その大半は, 平安時代の遺構より出土した前期から中期の土器や瓦などである。

平安時代の遺物には, 土師器(杯・高杯・蓋・甕), 黒色土器(杯・甕), 須恵器(杯・皿・蓋・甕), 灰釉陶器(皿・壺), 緑釉陶器(皿・椀), 白磁(椀・托), 青磁(椀・合子), 平瓦, 軒平瓦, 土馬などがある。

小結 本調査の主眼とした一町を東西に二分する溝は, 試掘段階で推定していた溝より西に確認され, 2回の掘り替えが行われるものの, それら3条の溝の位置が平安京条坊復原の測量数値とほぼ一致する知見を得た。調査区内の土地利用変遷の概略は, 平安時代前期には宅地を東西に二分することなく, 規模の大きな建物がそこに位置する。平安時代中期初頭に初めて一町を東西に二分する位置に溝や柵が築かれ宅地が分割される。二分された宅地は10世紀中頃まで続き, そののち廃絶し空閑地となる。更に, 現在の再開発に至るまでの間散発的な開墾に伴う耕地分割の溝が十一町を東西に二分する位置に重複し, 宅地割りが踏襲されるという結果を得た。

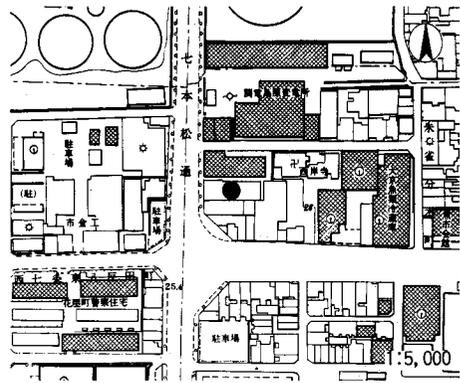
(中村 敦・梅川光隆)



遺構実測図 (1:200)

15 右京七条一坊

経過 倉庫の新築工事に伴う発掘調査である。調査地は右京七条一坊八町にあたり、皇嘉門大路東側溝の存在も予想された。調査は発掘対象地 487㎡のうち残土処理を考慮して当初東西 28 m、南北 5 m のトレンチを設定して行い、遺構の検出に伴って適時トレンチを拡張し、その規模・性格の解明に努めた。



遺構・遺物 調査地の層序は極めて単純で、約 20cm の表土下に中世の遺物を包含する灰褐色泥砂層があり、約 10cm の層厚である。その下に黄褐色砂泥層があり、この上面で遺構は検出される。

検出された遺構には土壌・柱穴・溝などがあり、平安時代前期に属するものである。溝は南北方向の溝 2 条が並列して検出された。西側の溝は、皇嘉門大路東側溝と推定され、幅 3.5 m、検出面からの深さ約 60cm で、底部は平坦面をなしている。溝の東側から瓦が多量に出土している。この溝から東 5.6 m（溝心々）でも溝が検出され、幅約 1.2 m、深さ約 50cm で多量の瓦が出土している。

掘立柱建物は 3 棟確認した。東西 5 間、南北 2 間の東西建物。東西 3 間、南北 2 間以上で南面に廂を持つ東西建物。東西 2 間、南北 3 間以上の南北建物である。

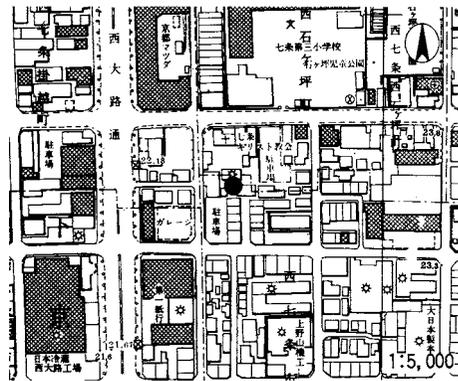
今回の調査で出土した遺物は土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器・瓦などであり、整理箱に 24 箱出土している。これらの遺物のうち、2 条の南北方向の溝から出土した丸瓦・平瓦が大多数を占めており、軒瓦・土器類は少ない。出土遺物の年代は平安時代前期に比定されるものである。

小結 今回の調査では、平安時代前期の大路側溝、犬走り・築地に相当する部分、建物などの一連の遺構が検出された。これらの調査成果は、平安京の条坊復元に有効な資料となると共に、平安京造営時における一町内の宅地割りを復元する上で貴重な成果といえる。なお、『平安京跡発掘調査概報』昭和 58 年度に詳細は報告している。

(菅田 薫・本弥八郎)

16 右京七条二坊

経過 調査地は下京区西七条西石ヶ坪町40番地に所在する約660㎡の宅地で、平安京右京七条西堀川小路に推定されている。昭和58年4月20日から5月14日にかけて発掘調査を実施し、平安時代前期の溝、土壇、柱穴、平安時代後期から室町時代にかけての流路跡、江戸時代末の西高瀬川流路跡などを検出した。



特に平安時代前期の溝、柱穴は西堀川小路東溝及び築地に比定されるものである。

遺構・遺物 検出した遺構は32基で、その内訳は溝7条、土壇12基、柱穴12基、その他1基であった。平安時代前期の遺構には土壇2基、溝1条、柱穴8基がある。平安時代中期の遺構は柱穴1基、その他1基が、平安時代後期から室町時代にかけては溝5条が、江戸時代以降では溝1条、土壇6基、柱穴3基がある。

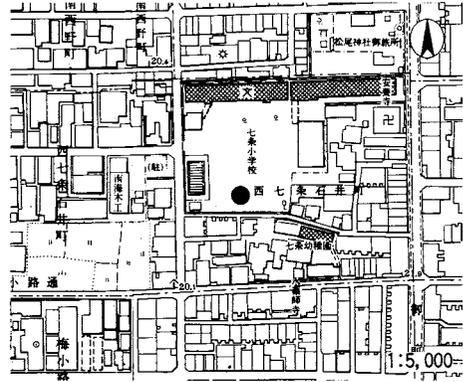
出土した遺物は土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、須恵質陶器、輸入陶磁器、陶器、施釉陶器、国産磁器、製塩土器などの土器類の他に土製品（土馬）、木製品、金属製品などがある。量的には平安時代前期の土器が大半を占め、続いて室町時代、江戸時代以降の順に減少する。調査地の西半地区が流路及びその氾濫原であった性格上、平安時代中期以降、室町時代までの遺構から出土する土器群中に占める前代の土器の混入比率は極めて高く、このことを本調査地での遺物出土特徴の一つに挙げることができよう。

小結 調査地は西堀川小路を東西に横切る位置にあるため、西堀川小路に伴う諸施設の検出が期待されたが、調査区東側に東溝、東築地に比定される遺構を検出したにとどまった。これは調査区西側が上限を平安時代中期とする時期幅の広い土器類を含む未整備の流路や氾濫原となっていたため、平安時代前期の遺構が流失したことによる。調査区一帯の西堀川を含めた氾濫や洪水は9世紀後半に多発したことが記録に残っており、調査区に洪水によったとみられる堆積層があることや、遺物の出土傾向からもこれを裏付けることができる。その他、調査区の中央で検出した流路は、付け替え以前の西高瀬川の旧流路である。昭和初期まで流路として機能していたことが出土遺物からも検証できた。

(平田 泰・丸川義広)

17 右京八条二坊

経過 今回の調査は、下京区西七条石井町61にある市立七条小学校の校舎増築に先立って実施されたものである。調査地は平安京右京八条二坊二町東三行北五・六門に推定されており、平安京西市の南に位置する。周辺地の調査例には、七条通の西市跡の発掘調査や道路における立会調査などがあり、いずれも遺構・遺物の良好な資料を得ている。



調査対象地は学校のグラウンドである。調査区は南北7 m、東西46 mに設定し、まず機械力で盛土を除去した後に調査を開始した。調査期間は昭和58年6月10日から同7月28日までで、途中で遺構の広がりを確認するために調査区の拡張を実施した。調査面積は420㎡である。

遺構 基本層序は、調査区の東と西では異なっている。東側では、近・現代の盛土層(70cm)があり、その下に茶褐色砂泥層(鎌倉～室町時代10cm)、灰褐色泥砂層(平安時代5cm)が堆積する。西側では、盛土のすぐ下より池状遺構の堆積土となる。池状遺構の最終堆積土は湿田の状況を呈する。

検出された主な遺構は、室町時代の土壙墓(SK 28)、井戸(SE 26)、平安時代の掘立柱建物(SB 1)などで、これらの遺構は調査区の東側で検出されている。調査区の西側約3分の2は池状遺構(SX 9)で占められる。この池状遺構は、調査区東側で南北に延び、西に向かって落ちる肩口を確認しただけで、全体の規模や形状は不明である。深さは東肩付近で約3 mあり、西に向けて更に深くなると考えられる。池内の基本的堆積土は13層を数え、上層部は泥土・腐植土が主体で、下層部は粘土・砂礫が主体となる。なお、池の肩は、池が埋まるにしたがって7回にわたって改修されている。平安時代における池岸には、杭と板材による護岸施設や木樋状を呈する施設が検出された。更にその下層では、池の中に南北に延びる堤防状の施設が検出された。基底部幅は3.7 m、高さ70cmで上面には小石を敷き詰めてあり、路面状を呈する。それより下層は、弥生・古墳時代の遺物包含層が約80cm堆積し、次いで遺構ベースの赤褐色砂礫層となる。

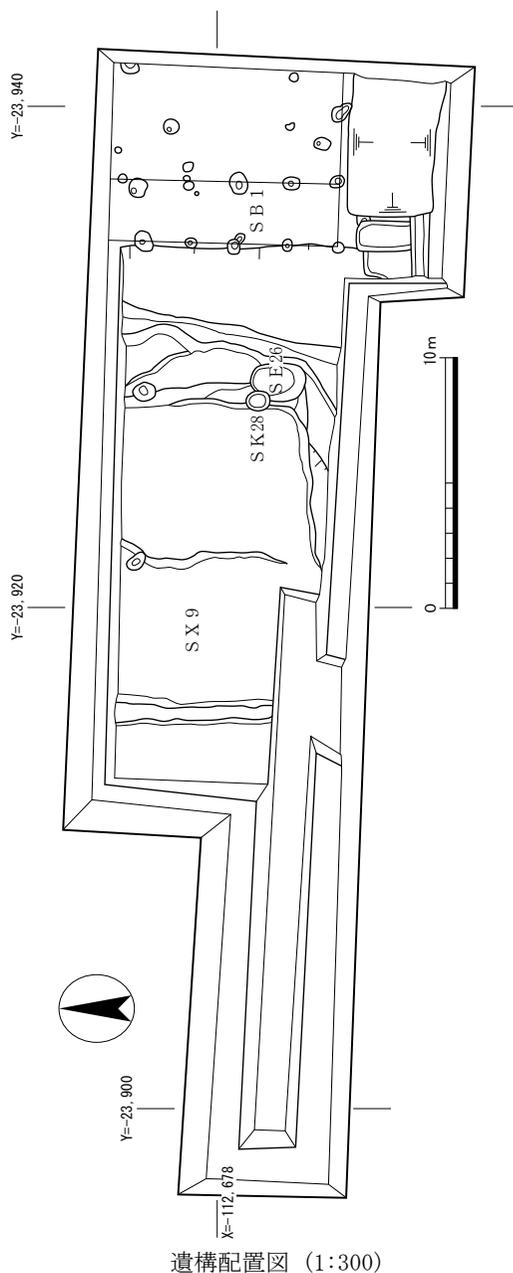
遺物 出土遺物は整理箱にして56箱である。その内訳は、瓦・土器類が47箱、木器類が9箱で、大半がSX 9より出土したものである。SX 9の第1層～第3層からは近世の陶磁器類、中世の土師器・瓦器・陶磁器類が出土し、第7層以下からは弥生式土器、古墳

時代の須恵器が出土している。S X 9 の中でも第 4～第 6 層からの遺物出土量が最も多く、その内容は、須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・磁器・瓦・金属製品・木製品・土製品などである。掲載した実測図は、第 4 層（28～37 土師器、38・39 緑釉陶器、40～44 灰釉陶器）、第 5 層（1～15 土師器、16～23 須恵器）第 6 層（24・25 土師器、26・27 須恵器）で出土したものである。他には、第 4 層～第 5 層で出土した土馬（45～53）、墨書土器（54～70）、土錘（71～78）、小型土製品（79・80）、木簡（81～96）がある。第 4 層～第 5 層が平安時代前期、第 6 層以下が平安時代以前と考えられる。

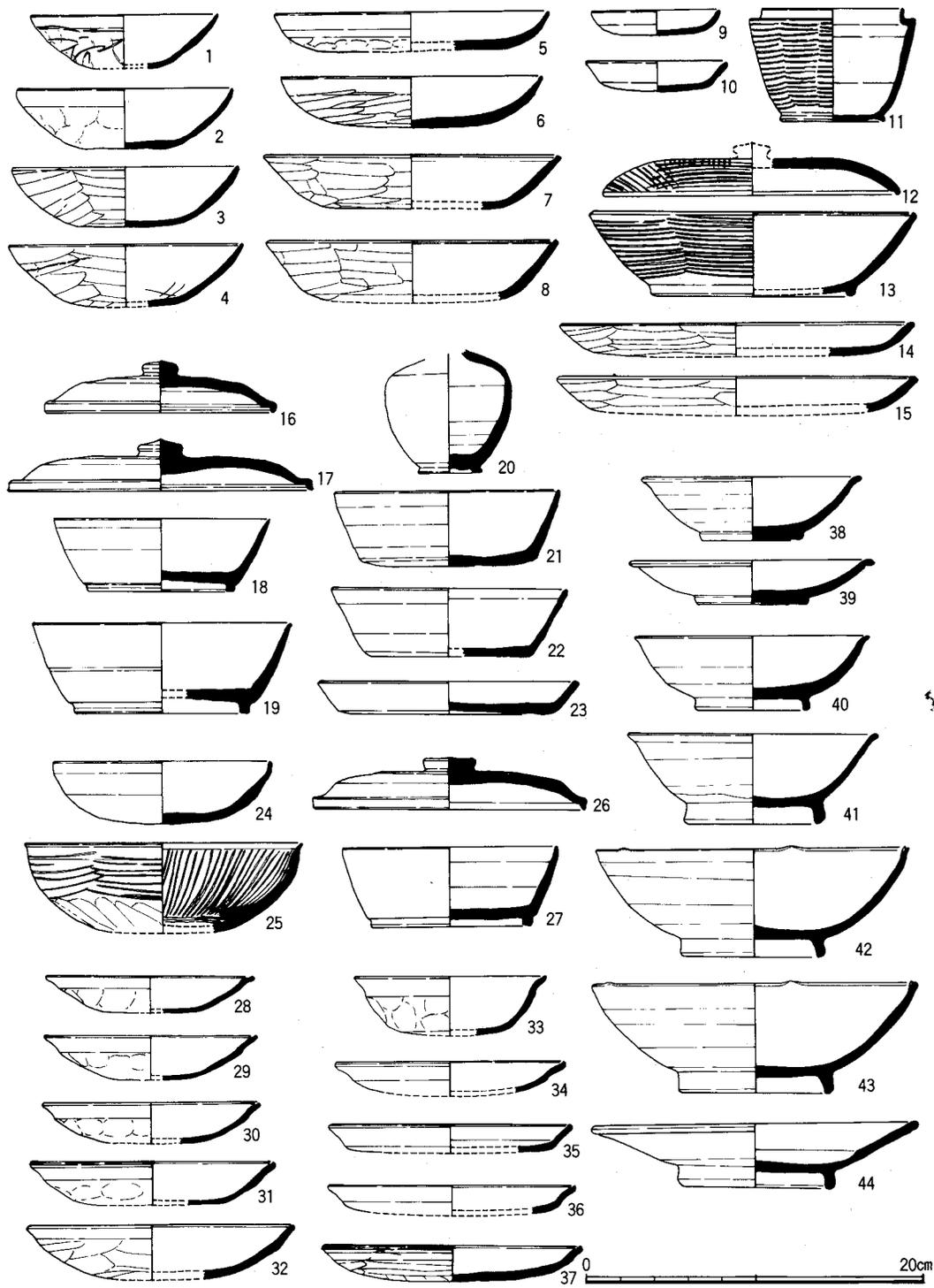
小結 今回の調査で検出された S X 9 は、平安京域内では例をみない特異な遺構である。下層の遺物を更に詳細に検討する必要はあるが、平安時代以前にも池状の自然地形が存在したことが木簡等の出土層位から推測される。更に、出土遺物から考えると、各時代の埋没の過程を経て近世の湿田に至るまで利用されていたことを窺うことができる。現在、調査地の南西に接してある水薬師寺の寺伝によれば、延喜年間に「大池」がこの地にあった^{注1}とされ、また「上世、村西に巨沢アリ」との伝承^{注2}も伝わる。今回出土した木簡には穀物の文字が多く、西市との関連性が窺われ、土馬については、池と水薬師寺との繋がりが注目される。なお、今回検出した池は、そのごく一部と考えられ、今後の隣接地での調査に期待したい。（菅田 薫・本弥八郎）

注1 『京都市の地名』日本歴史地名大系 27 平凡社

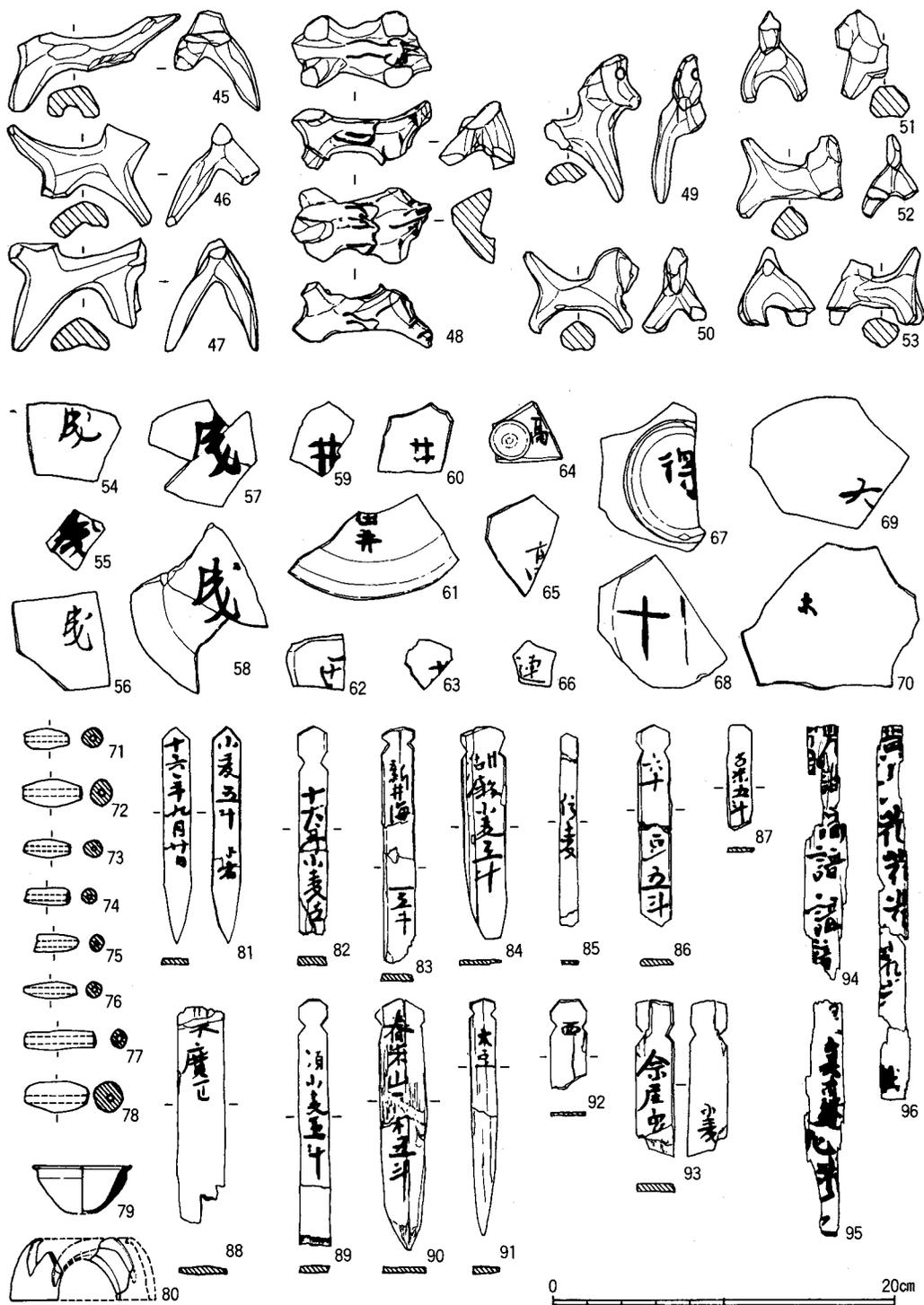
注2 同上



遺構配置図 (1:300)

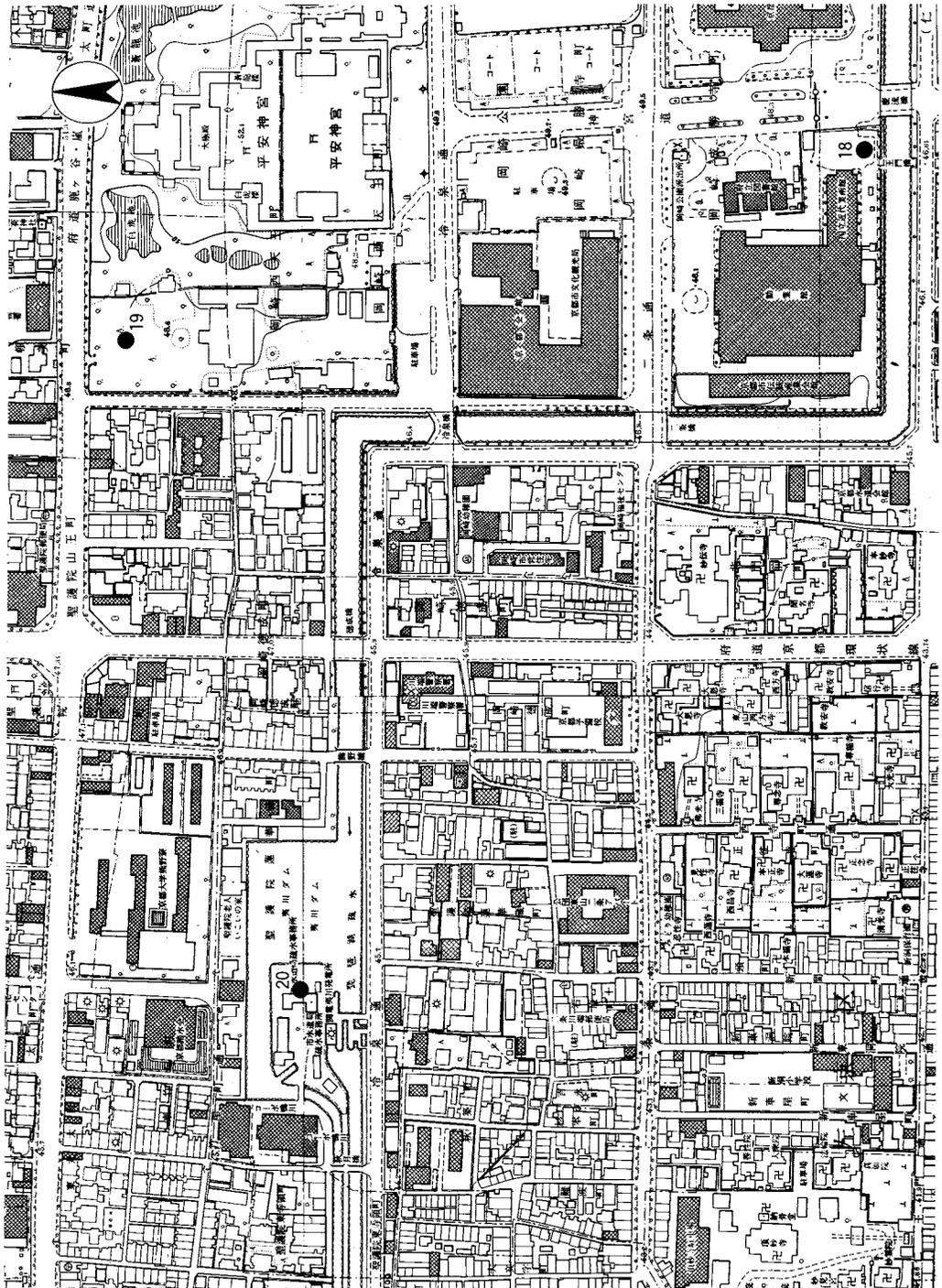


S X 9 出土土器実測図 (1:4)



S X 9 出土土馬·墨書土器·木簡實測圖 (1:4)

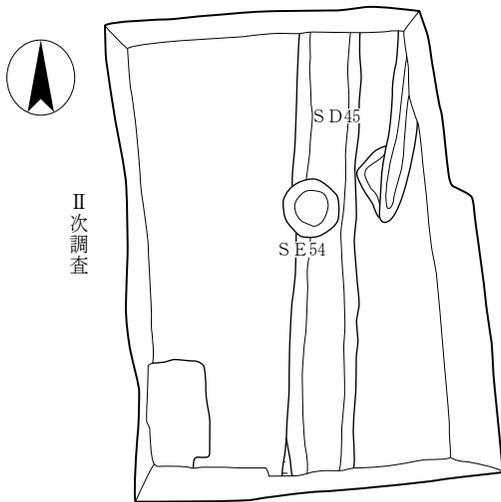
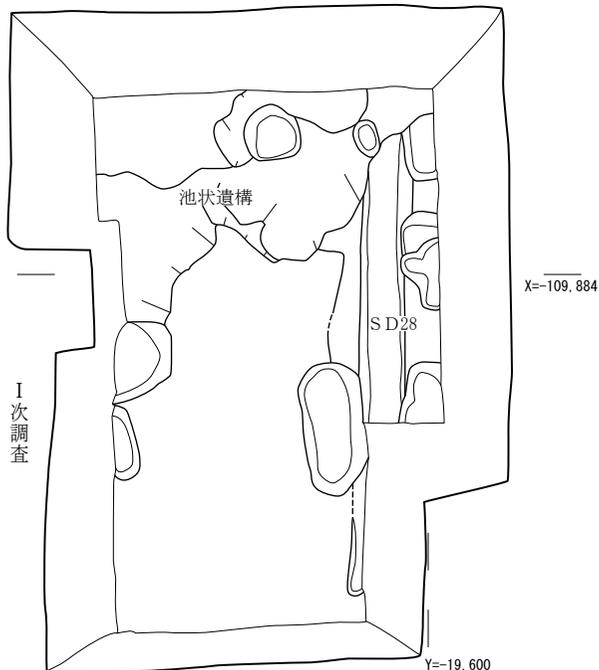
Ⅲ 白河街区



調査地位置図 (1:5000)

18 成勝寺跡

経過 国立近代美術館の新館建設に伴う発掘調査である。敷地の関係から前年度にⅠ次



調査区実測図 (1:200)

調査として約200㎡を調査。Ⅱ次調査の今回はⅠ次調査区の南側に位置する。またⅠ次調査区の北側も調査予定地に含まれるが、Ⅰ次調査の結果、池状遺構が中央部にあり、遺構面が地表より3mほど下がり、積土も崩壊しやすい砂を多く含むなど調査時に壁面の崩壊が予想された。このため、本工事に際し立会調査を実施することにして、今回の調査では除外した。トレンチは南北12.5m、東西8.5mで設定した。

調査は昭和58年3月14日より重機により積土層の掘削を開始し、4月9日に埋め戻しを完了し調査を終了した。最終調査面積は約85㎡であった。

遺構・遺物 基本層序は地表下2mまでが積土層で以下旧耕土が約10cm、褐色泥砂層が10cm、暗褐色泥砂層が約25cm、黒褐色砂質泥土層が10cmの厚さで順次堆積し

ており、以下無遺物層である砂層となる。

検出した主な遺構は、暗褐色泥砂層上面で溝、砂層上面で溝・井戸が検出された。暗褐色泥砂層上面で検出した遺構は、出土遺物とI次調査の結果から室町時代以降のものと思われる。平安時代の遺構は砂層上面で検出した溝と井戸だけである。

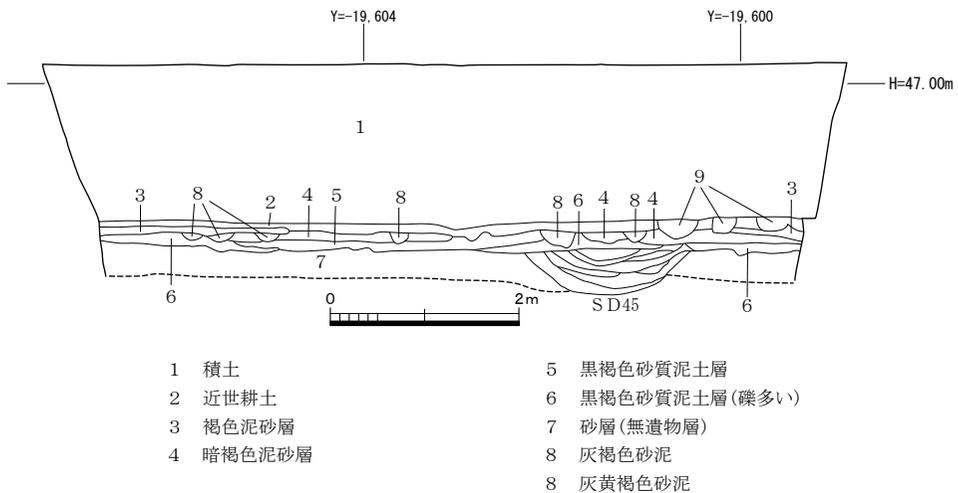
S E 54は無遺物層である砂層上面で検出された。直径約1.6 m、深さ約1.35 mの円形の掘形を呈している。平瓦・丸瓦を平面円形に組んで井筒を構成し、下部には一辺約65cmの方形木枠組みがある。井筒内からは、多量の平瓦・丸瓦片と少量の土師器・須恵器片が、また掘形埋土からも多量の平瓦・丸瓦が出土している。

S D 45はI次調査で検出したS D 28の続きと思われる。幅1.6 mから1.8 m、深さ25cmから45cmで、北から南へ緩やかに傾斜している。埋土は7層に分層できるが、層による出土遺物の時期差はない。

遺物は整理箱91箱出土している。そのうち89箱が瓦類であり、大半を平瓦・丸瓦が占め軒平瓦・軒丸瓦は少量である。またこれらの瓦はS E 54の瓦積井筒に使われたものが多数を占めている。土器類はS D 45から土師器が出土しているが、量は少ない。S E 54、S D 45から出土したこれらの遺物は平安時代後期に比定される。

小結 当該地は成勝寺南限及び押小路末に推定される地点であるが、I次調査を含めて、成勝寺、押小路末に関する明確な遺構の検出はできなかった。

(菅田 薫)



北壁断面図 (1:80)

19 尊勝寺跡

経過 今回の調査（Ⅱ次調査）は昭和57年度のⅠ次調査で検出した方形周溝墓などの全容の確認及び寺域などの究明を主目的として実施した。調査区の設定にはⅠ次調査の成果などを基にⅠ次調査区の北辺及び西辺に接してⅤ・Ⅵ区を設定した。

遺構 層序は基本的にⅠ次調査の層序と同様の状態を呈する。遺構は茶褐色泥砂及び黄灰色粗砂の上面で検出した。上記2層とも無遺物層である。検出した遺構は方形周溝墓・井戸・溝・火葬墓・土壙・ピットなどがある。主要な遺構について下記にその概略を記す。

方形周溝墓はⅠ次調査の周溝墓1・3・4の未確認部分を検出した。周溝墓1はⅥ区で検出した。検出面での規模は溝の心々間で東西約13.5m、南北約11.5mある。南辺溝内から壺1個体が出土した。主軸方向は北に対しやや東に振れる。Ⅴ区では周溝墓3・4を検出した。周溝墓3は北辺溝の一部を検出した。検出面での規模は溝の心々間で南北約6mある。Ⅰ・Ⅱ次調査を通じ遺物は出土していない。周溝墓4は北辺溝を検出した。検出面での規模は溝の心々間で東西約11.5m、南北約9.5mある。

井戸（SE1）はⅥ区北東隅で検出した。木枠組みで平面形は1辺約90cmの方形を呈する。検出面からの深さは約2.4mある。木枠はすべて腐植していた。平安時代後期である。

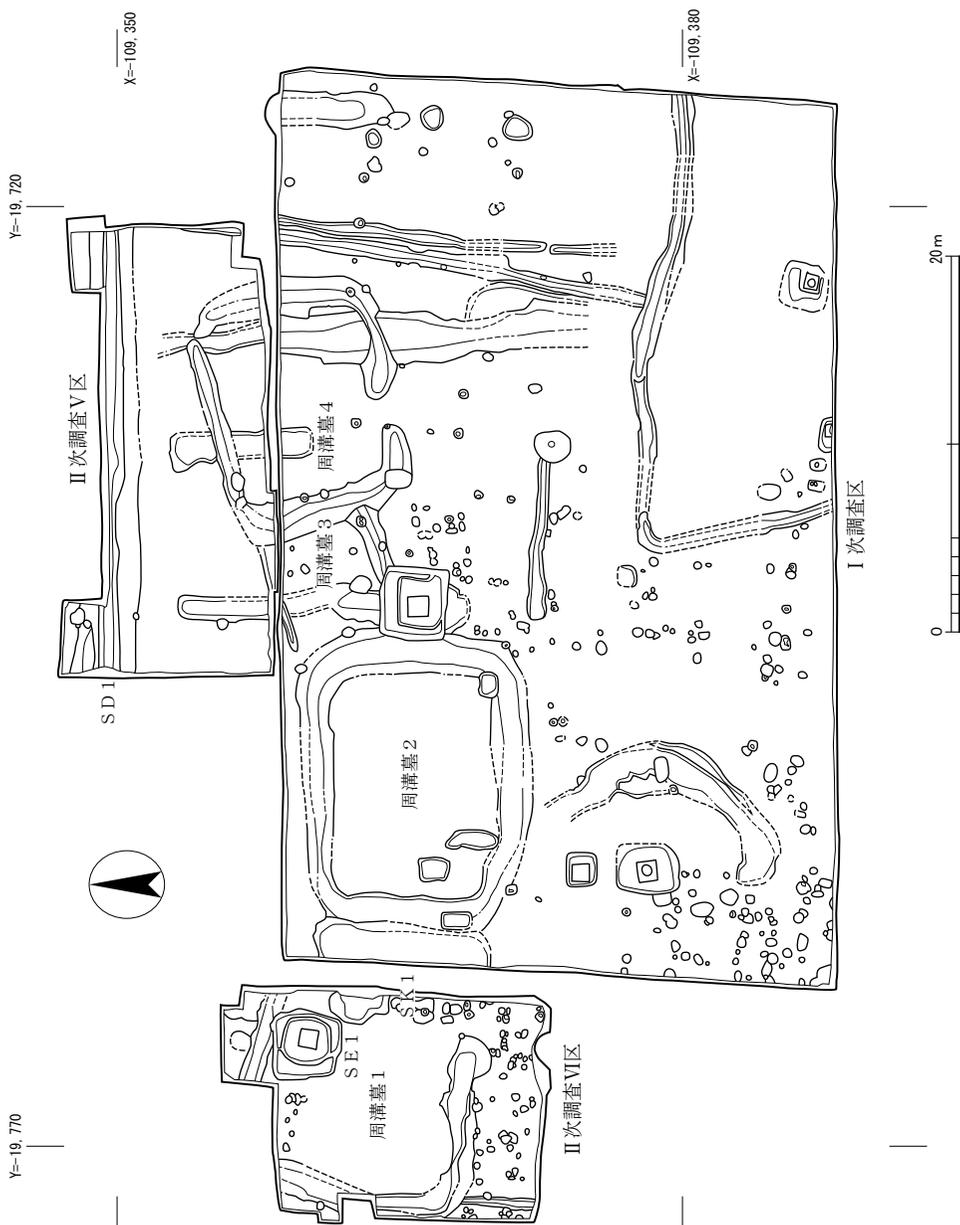
溝はⅤ区で5条検出した。南北方向の溝はⅠ次調査で検出した溝の延長部である。東西方向の溝（SD1）は調査区北辺で検出した。検出面での規模は幅約3m、深さ約1.5mある。溝内からは平安時代後期から鎌倉時代前半の遺物が遺物整理箱で60箱出土した。

火葬墓（SK1）はⅥ区東端で検出した。東辺は調査区外にある。検出面での規模は南北約1.4m、深さ80cmある。底部に10～30cm大の礫を敷き棺台とする。礫・壁体面は熱を受け赤く変色している。室町時代の土師器皿・金属器・鉄釘・骨片が出土した。

ピットは主にⅥ区で検出した。大多数は平安時代後期から鎌倉時代前半のものである。底部に根石を据える3基が建物の一部と考えられる。1間幅は約2.2mある。なお平安時代中期に属する遺物が出土したピットを2基検出したが、Ⅰ・Ⅱ次を通じて初見である。

遺物 遺物整理箱で66箱出土した。遺物内容は、弥生時代中期の壺・甕、平安時代中期の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦、平安時代後期から鎌倉時代前半の土師器・須恵器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦・石製品・金属製品・銭貨、室町時代の土師器・金属製品などがある。SD1から出土した遺物にみるべきものが多い。

小結 I・II次調査を通じて国際武道センター建設地内の方形周溝墓の全容を確認できた。周溝墓1からは、畿内第II様式に併行する弥生土器が出土し、周溝墓2とほぼ同時期であることが判明した。周溝墓3は主軸方向から周溝墓4（畿内第IV様式併行）に近い時期と考えられる。SD1は長さ24mにわたり検出した。その規模及び位置から寺域を画する溝と考えられ、白河街区を復原する上で貴重な資料となった。（辻 裕司・鈴木廣司）



遺構配置図 (1:400)

20 白河南殿跡

経過 当地は白河南殿の比定地内に所在する。しかし、白河街区の街区割が明確でない現在、白河南殿のどのような位置を占めるかは全く定かでない。このような研究の状況から、まず白河南殿関係遺構の発見に調査の主眼をおいた。

第1層（16世紀）の上面では近代の畑作に関係する畦・杭列・ノツボなどの遺構があった。第2層（14世紀）の上面では、調査区を東西に貫く溝、礫を集中して放り込んだ土壌などが若干あった。第3層（13世紀）の上面では、上記と同様な礫の集中する土壌や南北方向の柵などがあった。この時点で調査区の東辺がわずかな高みとなり、その部分に第3層よりも古い土層が露出していた。

第3層を除去し東辺の高みを精査したところ、そこに南北に走る2列の礎石据付痕を認めた。この礎石建物を明らかにするために調査区西半の調査を先行させ、11世紀以降の遺構の調査を終えると同時にその部分に排土を移し、調査区東半に南接する部分で礎石建物の南の続きを調べた。そこでは調査区南辺に礎石が残存し、東西に3個並び、それと直交して先の調査区東半の礎石据付痕2列がその残存礎石列まで達していた。

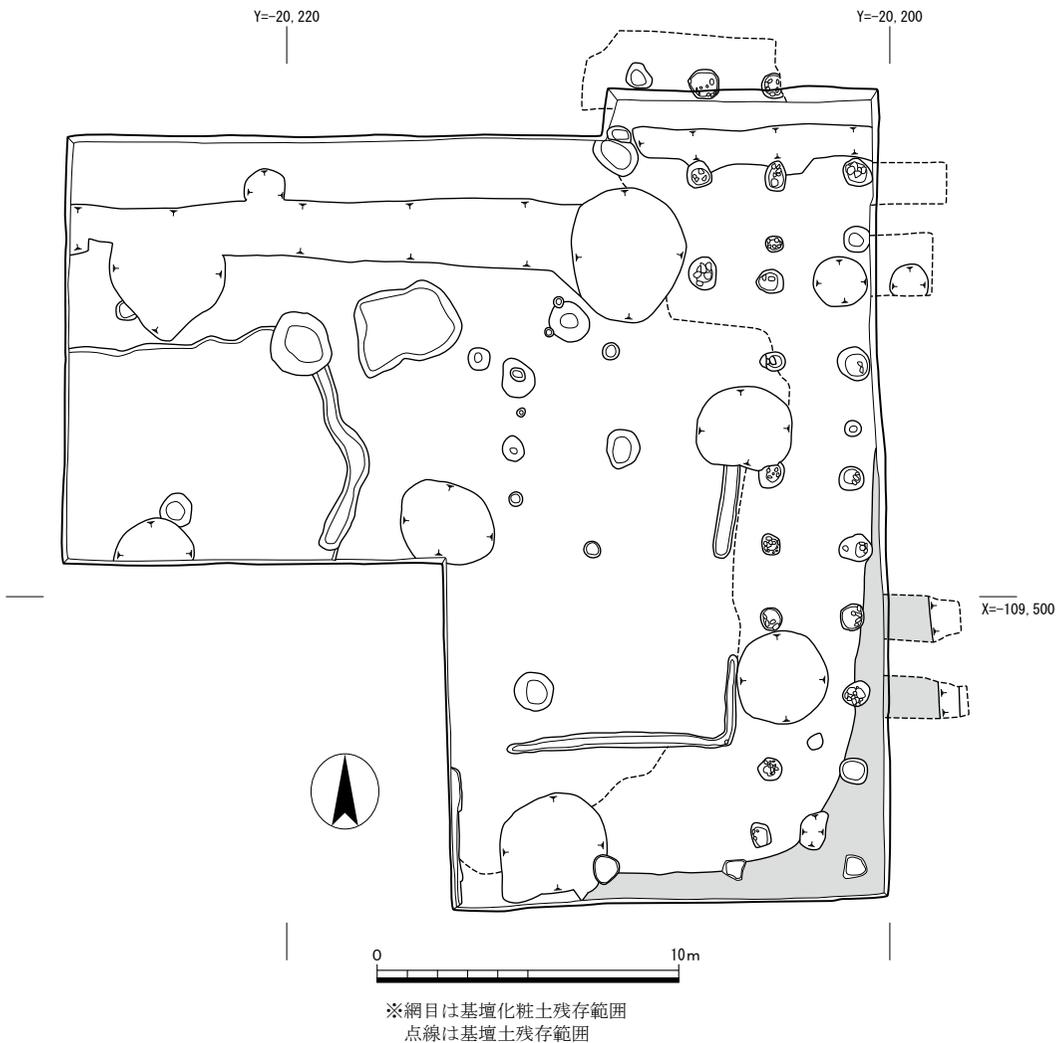
遺構の保存を考慮し、基壇土の確認や礎石列の北及び東への延びなどの補足調査をして遺構を埋め戻した。

遺構・遺物 近代の遺構はすべて畑作関係のものである。中世の土壌はいずれも中央部に礫が集中し、周縁部に泥が堆積していた。井戸と思われたが確証は得られなかった。柵は1.1～1.2m間隔で南北に1列走る。14世紀よりも下る可能性がある。溝は3回ないし4回の掘り替えを行っている。ほぼ真東西に走る。

白河南殿関係の礎石建物は、調査区南辺で発見した残存礎石列よりなる堂舎と、調査区東辺で発見した礎石据付痕よりなる廊に大きく分かれる。堂舎部分の基壇は、山土を用いた化粧土と同質な粘土が下にもう一層あり、形程度の版築をしている。基壇土の厚さは30cm、当時の推定地面からの高さ15～20cmで、基壇というイメージにはほど遠い。廊部分は基壇土を化粧土で覆っているのみで版築はしていない。基壇土の広がり、堂舎部分では礎石から4m、廊部分では礎石据付痕から西へ1.2m、東へ3.5m（以上）の範囲に認められた。基壇縁の施設は堂舎と廊の接続する部分を中心に細い溝状の遺構が認められたに過ぎない。

発見した残存礎石及び礎石据付痕を、完数尺に基づき割り付けると、堂舎部分は西から

14尺・13尺で西の柱間が広い。南北の廊は9尺離れて柱筋が相対し、東の柱筋は堂舎部分の発見したうちで最東の礎石にあたり、堂舎の柱筋と直交する。堂舎の柱筋から北へ11尺離れたところを基点に北へ8尺間隔で4間延び、更に13尺・12尺・9尺という間隔である。北寄り2間については、その西に8尺の出があり、廊は鍵型を呈する。北から2間目にはその北寄りを8尺、南寄りを4尺に分割する礎石据付痕が加わる。すなわち、この北から2間目の南寄り4尺と同3間目の9尺を加えた13尺が同4間目の13尺の広い柱間



平安時代遺構実測図 (1:250)

と見合う。また、北から1間目の9尺と2間目の北寄り8尺は廊の東西9尺及び西への出8尺と見合い、北1間が隅であることを示す。これから、廊は発見分よりも更に北へ続くことはないと考えられる。

なお、建物基壇は周縁から破壊・削平を受け、そこに13世紀の遺物を包含する第3層が堆積していた。

12世紀代の不定形な浅い窪みが廊の西側に9ヵ所ある。また調査区西側では、11世紀代の不整形で底の平らな大きな落込が1ヵ所あった。

遺物は鎌倉・室町時代の遺物が目立ち、東西方向の溝から多く出土した。平安時代の遺物は二次的に埋没した瓦が多く、白河南殿関係の遺構から出土した遺物は極めて少ない。

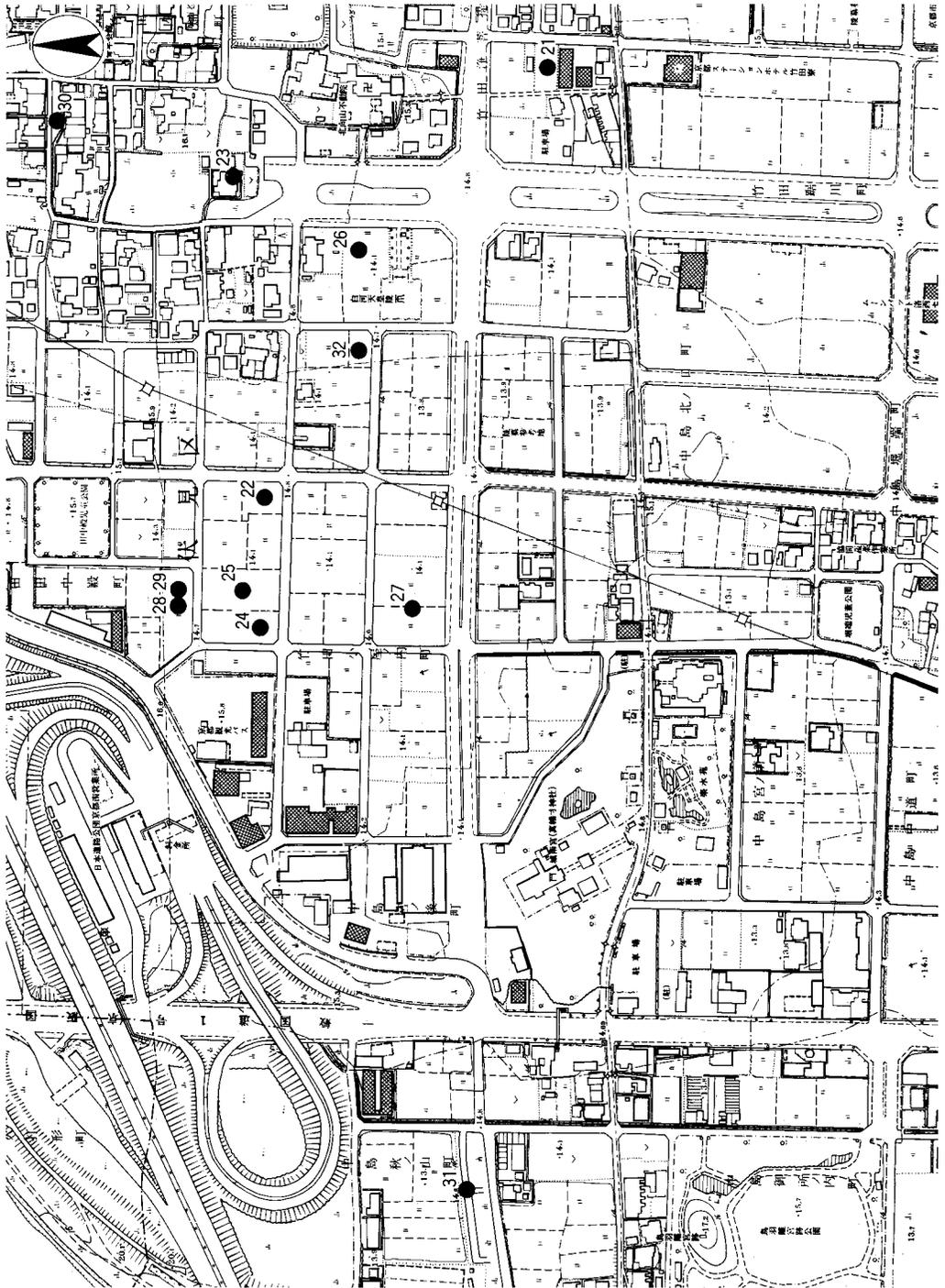
小結 白河南殿の礎石建物を発見した。それは堂舎と廊が南北に組み合わさった形であり、当研究所所長杉山信三の文献考証によって推定・復元した白河南殿の主要殿舎・御堂のうち、院内の配置を不問とすると、永久2年（1114）平正盛の縄張りになる九体阿弥陀堂とそれに接続する北廊に全くといってよいほど符合する平面形態である。しかし、白河南殿の四至が不明で、発見堂舎もごく一部のみの調査であり、それと断定するには至らなかった。それとは別に、堂舎に接続する北廊を発見し得たことは、建築史上の大きな成果であった。

（梅川光隆・本弥八郎）



残存礎石（北から）

IV 鳥羽離宮跡



調査地位置図 (1:5000)

21 第 86 次調査

経過 調査地は東殿西南部に位置し、第 10 次調査が西隣で、第 11 次調査がすぐ東側で実施されている。昭和 47 年度に実施した第 10 次調査では、拳大の石を突堤状に積み上げた遺構や庭園の一部を検出している。更に昭和 48 年度に行った第 11 次調査では、緩やかな曲線を描く池の汀線や遣水、要所に配した庭石などが検出されている。このため工事に先だって試掘調査を実施した結果、洲浜の一部と考えられる石敷面を検出した。このため調査は、試掘調査から発掘調査へ移行し継続して行った。

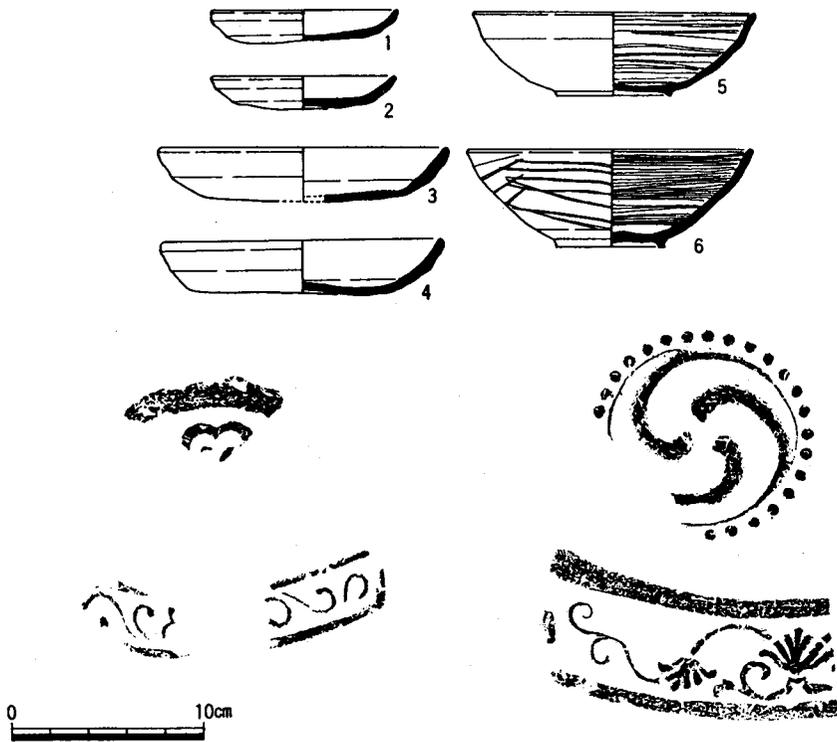
遺構 調査の結果、検出した主な遺構は池の汀線・庭石・溝などである。また、庭園遺構に伴う地業の一部を明らかにした。調査地の基本層位は、現代の盛土層の下に耕土・床土が認められた。その下層には、近世の耕土と思われる暗オリーブ灰色泥土層の堆積が認められた。更にその下に黒褐色泥土層が堆積する。この層より下は、調査区の東半部では池内の堆積土層となるが、西半部は池の肩口から陸になるためすぐ平安時代の遺構面となった。

S G 1 池の肩は緩やかな傾斜面を示し、水際には拳大の玉石や割り石を幅 80cm ～ 1 m にわたって敷き詰めている。この洲浜は場所によっては 2 面検出される部分がある。庭石は、池の水際よりやや高い位置に据え付けている。庭石は、チャートで長さ 1 m、高さ 55cm を測る。この他、庭石の抜取り穴が 2 ヲ所検出された。池の推定水位は 13.5 m 前後である。池内の堆積土は黒褐色または暗灰黄色の腐植土層である。

S D 2 池の汀線に沿う様に掘られた南北方向の素掘りの溝である。幅 1.5 m、深さ 40cm を測る。溝内の堆積土は S G 1 に認められたものと同一の腐植土層が認められ、園池とこの溝が同時期に機能していたと思われる。この溝は、池の水を外へ流し出していたものと考えられる。

S X 3 今回検出した陸部は、人工的に盛り上げられて形成されたことが掘り下げの結果明らかとなった。地業の単位は礫や土留板などによって、作業単位のおおよその規模を知ることができる。各単位内の埋土はそれぞれに異なる。水際付近になると作業単位は徐々に不明確になる。庭石の周辺部や陸部に認められる礫はすべて地業に用いられた礫である。

遺物 遺物は、池の水際や池底より土師器、瓦器、軒丸瓦、軒平瓦などが出土している。土師器皿 1・2 は口径 10cm、高さ 2 cm を測る小型の皿である。口縁部はやや外反する。口縁部はヨコ方向のナデ、底部外面は未調整。3・4 は口径 15cm、高さ 3 cm 前後を測る



第 86 次調査出土遺物 (1:4)

大型の皿である。口縁部内外面ともヨコ方向のナデ、底部外面は未調整。瓦器碗 5 は口径 14.5cm、高さ 4.5cm を測る。体部外面のヘラミガキはほとんど施さない。体部内面は粗いヘラミガキを施す。底部外面には低い高台を付ける。6 は口径 14.7cm、高さ 5.1cm を測る。体部外面にはやや粗いヘラミガキを施す。体部内面のヘラミガキは外面に比較し丁寧に施す。高台は断面台形の付け高台である。

軒瓦は、東海産のものと同内産のものが出土したが、いずれも小片である。

小結 今回の調査によって東殿に造営された園池の南半部はほぼ明らかになった。園池は、池の肩が緩やかに傾斜し水際には拳大の礫を敷いている。水際よりやや高い位置に庭石を点々と配している。池の肩部及び陸部全体は人工的に盛り上げて形成されたものであることが一部明らかになった。この地業は田中殿などで検出されているものと異なったものである。ただし、このような地業は周囲の調査では検出されておらず、今後の調査に期待したい。

(鈴木久男・吉崎 伸)

22 第 87 次調査

経過 調査地は田中殿の東部に位置し、建物が検出された第 2 次の南方 100 m、建物と園池が良好に遺存していた第 79 次の東方 60 m の地点である。調査は逆 L 字形の調査区を設定したが、調査区の東半部が流路にあたり、砂礫層が続いていたため、流路は肩部のみを検出することにし、西側の遺物包含層が残っている部分を掘り下げることにした。その結果鳥羽離宮期に相当する遺構は明確なものがなく、奈良時代以降の自然流路と奈良時代前期の土器溜（S X 6）及び遺物包含層が検出された。

遺構・遺物 流路は西肩部を検出したが、東側は調査区外まで広がり、川幅は 6 m 以上を測る。深さは調査中の湧水が激しく底部まで掘り下げることができなかったが、1.5 m 以上はある。埋土は粗砂と砂礫で遺物がほとんど含まれず、時期を確定し難いが、層位的関係で奈良時代から中世の間に入る。S X 6 は調査区の南西隅で検出された。土器類が集中して出土したが、調査区が狭小なため遺構の性格はつかめなかった。

出土遺物は整理箱で 3 箱と少なく、大半は S X 6 から出土した土器類である。これらは一括の遺物資料として取り扱うことができる。土師器には杯 A・杯 B・蓋・皿・高杯・甕があり、甕以外はいずれも茶褐色を呈する精良な胎土である。須恵器には杯 A・杯 B・蓋・短頸壺・甕・壺がある。墨書土器が 1 点出土している。土師器の皿と思われる口縁部外面に墨書したもので、2 文字が認められるが、字が薄れており判読し難い。

小結 鳥羽離宮期の遺構・遺物は検出されなかったが、下層で良好な一括の土器類が出土した。これらは奈良時代前期に相当すると思われるが、これまでの調査では当該期の遺構・遺物は明確ではなかった。今回の調査によって当該期の遺跡も存在することが判明し、古墳時代・飛鳥時代の集落跡に引き続いて人々の営みが確認された。しかし遺構については当調査で明らかにすることはできず、今後の周辺の調査が待たれる。（前田義明・吉崎 伸）



遺物出土状況（東から）

23 第 88 次調査

経過 当地は鳥羽離宮東殿跡に推定されており、周辺での既往の調査から、平安時代から江戸時代に至る数時期の遺構が検出されることが予想された。このため区画整理事業の道路建設に伴い調査を実施した。調査は民家立ち退きの都合から対象地を3区に分けて実施することになり、西側に第1区、東側に第2区、北東に第3区を設定し、第1区より開始した。第1区の調査終了後、第2区を開始したが、急遽第3区も調査に取り掛かることとなり、2・3区と同時に調査を実施した。

遺構・遺物 検出した遺構は古墳時代、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代から江戸時代に大別できる。

古墳時代の遺構は北東から南西方向の小規模な溝を一条検出したのみで、遺物も土師器、須恵器片を少量出土したにとどまる。

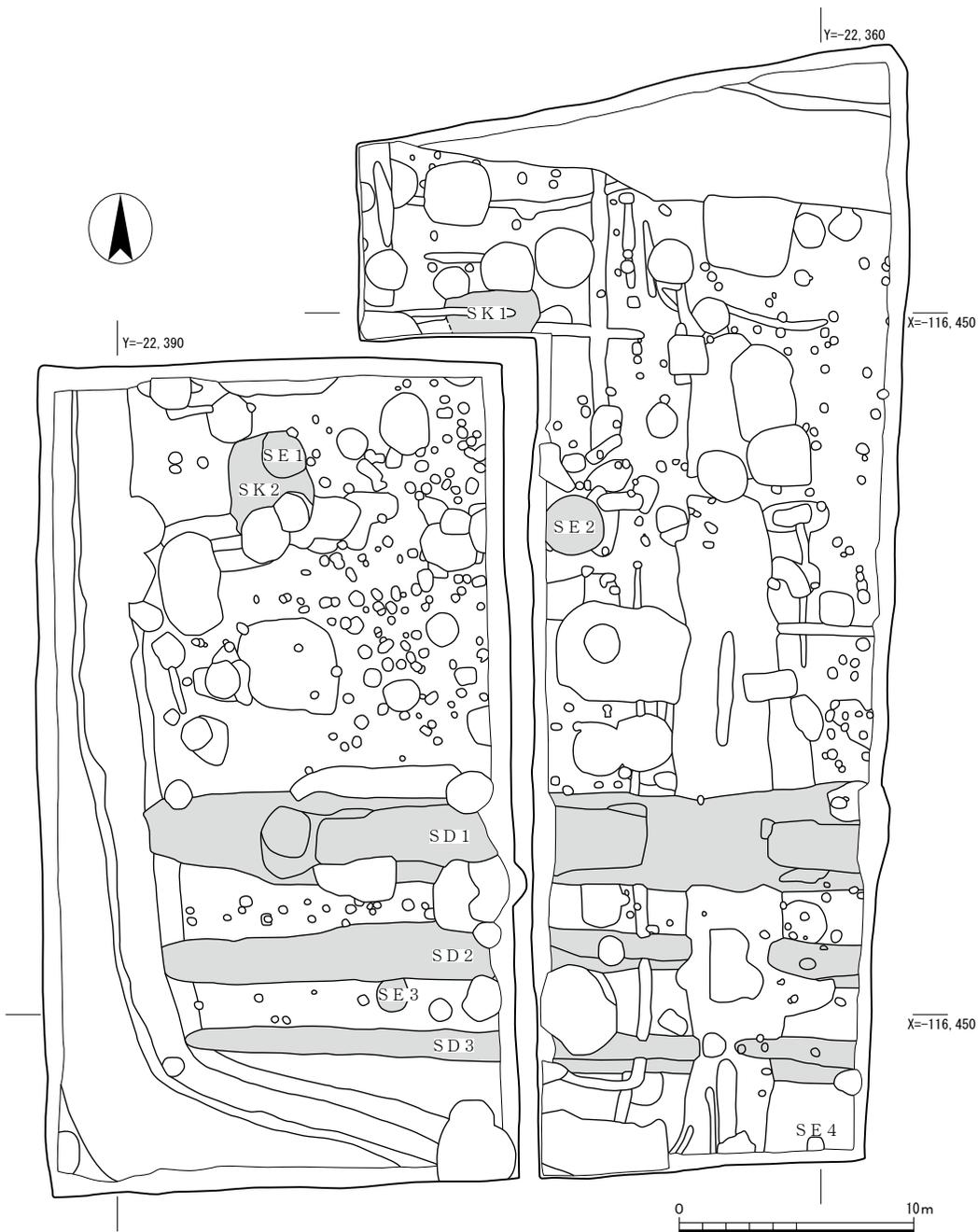
平安時代後期から鎌倉時代の遺構は井戸、土壙、溝を検出した。井戸は4基を検出し、井戸枠には縦板で方形に組んだもの（SE1・2）、曲物を積み重ねたもの（SE3）、平瓦を縦に組んだもの（SE4）がある。土壙は2基を検出し（SK1・2）、いずれも多量の土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器が出土した。溝は東西方向のものを3条並行して検出した（SD1～3）。SD1は幅約5mであるが、深さは50cmの浅い部分と1.3mの深い部分がある。この溝からは土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器などが良好な状態で出土した。SD2は幅約2m、深さ80cmで、この溝からは小型の瓦が多く出土している。SD3は幅約1m、深さ50cmで、ここからは、土師器の皿が多量に出土した。

室町時代から江戸時代の遺構は、柱穴、井戸、溝（堀）を検出した。柱穴、井戸は多数検出したものの複雑に重複しているため個別の建物としてまとめることはできなかったが、密集する部分とそうでない部分がみられ、建物の位置がある程度限定されていたことが考えられる。溝はこれらの柱穴群を取り囲む様な状態で検出された。遺物は主に溝、井戸から土師器、瓦器、陶器、輸入陶磁器などの土器類の他、卒塔婆、下駄、櫛、箸などの豊富な木製品が出土した。

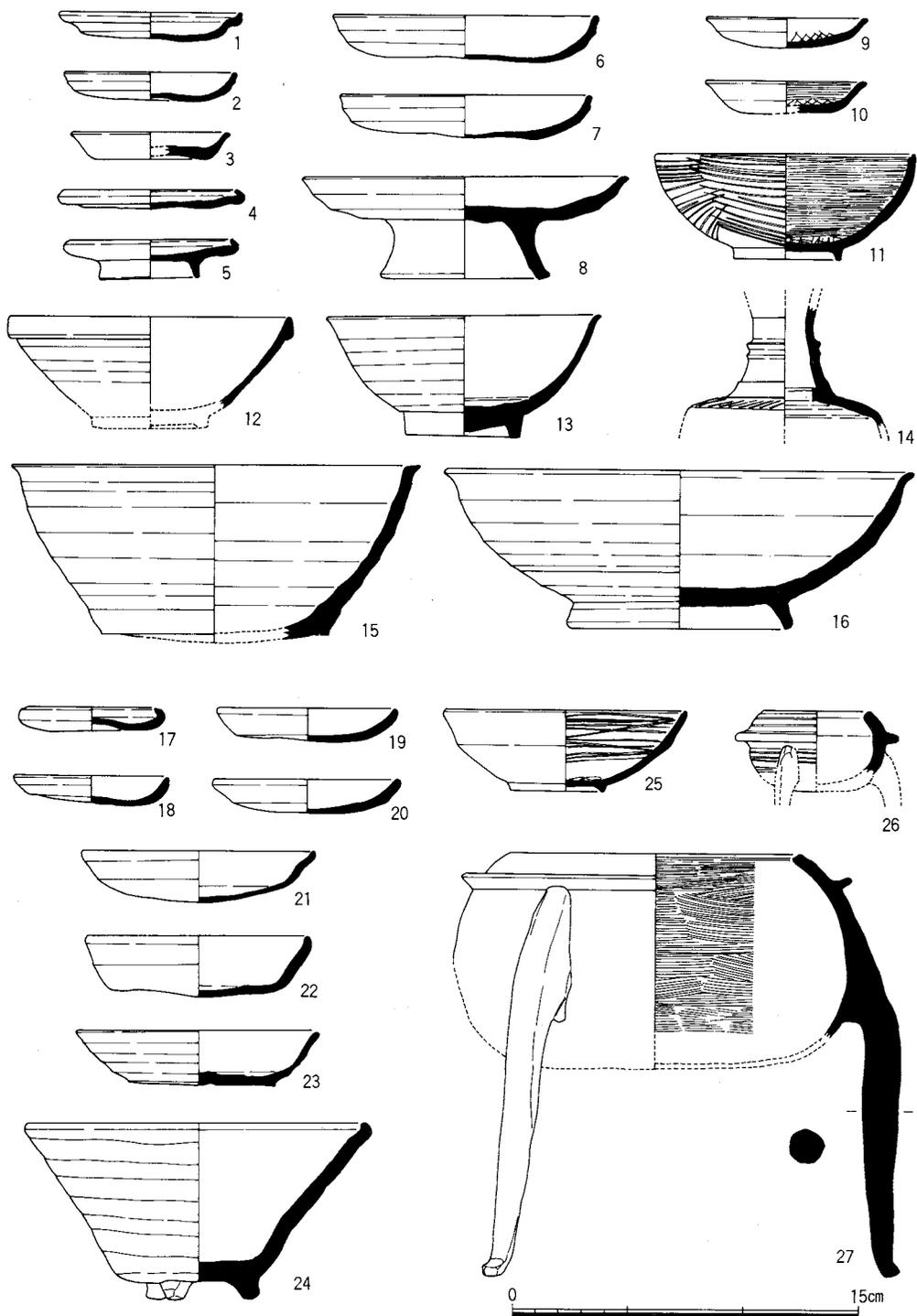
小結 今回の調査では鳥羽離宮の造営期である平安時代後期から鎌倉時代の遺構として井戸、土壙を検出し、更に各遺構からは多量の土師器、瓦器といった日用雑器類を検出した。こうしたことから当地は東殿に関連した雑舎が営まれた地区である可能性が高い。また、調査区の南側で実施した第21次調査では礎石建物を検出しており、今回検出した東西

方向の3条の溝はこれを画する溝であると考えられる。鳥羽離宮の東殿地区は調査例が多いものの、まだ不明な点が多く、今後もより綿密な調査を必要とするところである。

(吉崎 伸・鈴木久男)



遺構配置図 (1:300)



第88次調査出土遺物 SK 2 (1~16) 土師器 (1~8) 瓦器 (9~10) 白磁 (12~14) 灰釉系陶器 (16)
 須恵器 (15) SD 1 (17~27) 土師器 (17~24) 瓦器 (25~27) (1:4)

24 第 89 次調査

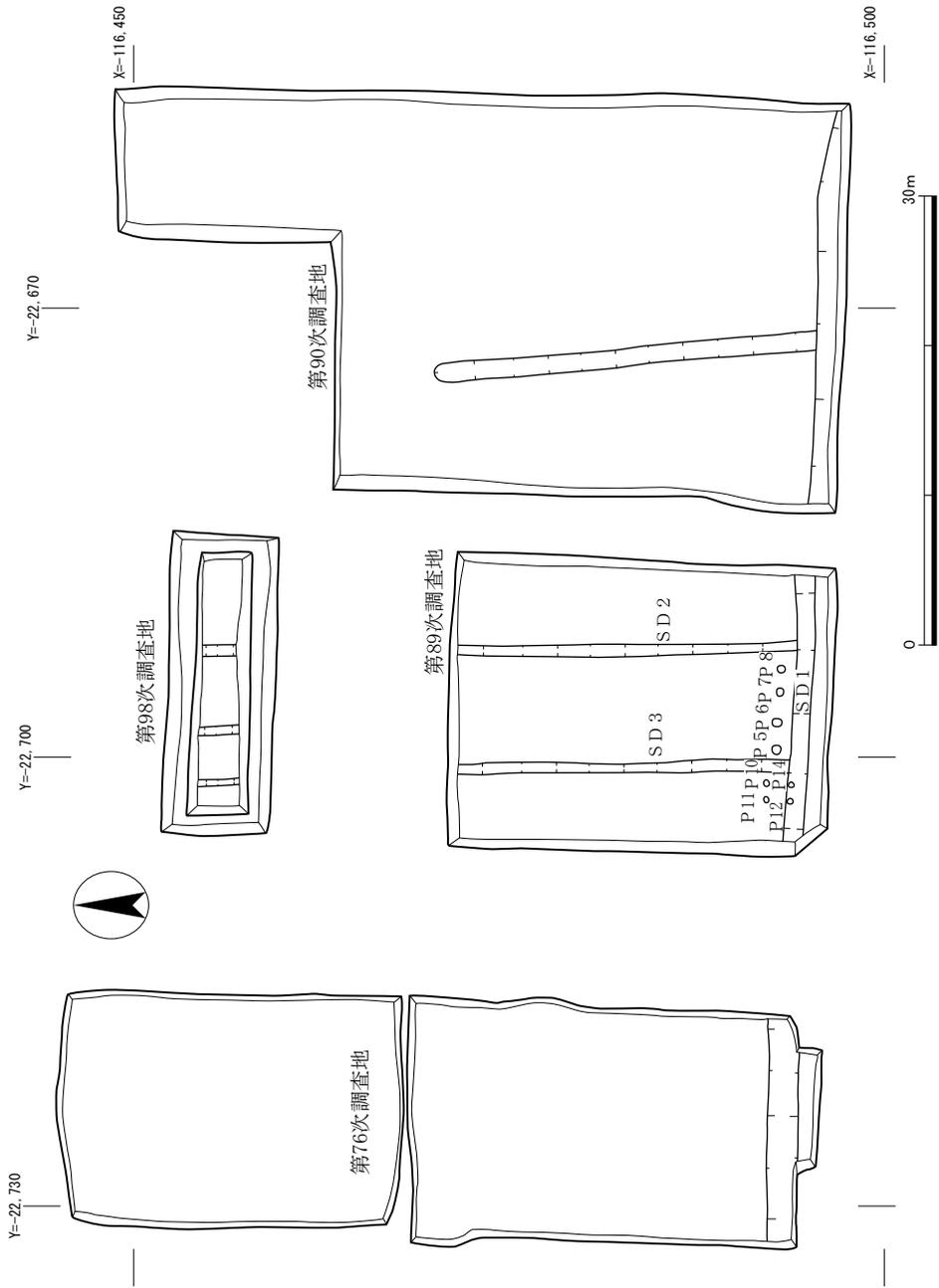
経過 今回の調査地の南側で実施した第 79 次調査は、田中殿金剛心院の建物 2 棟とこの東側に池を検出している。これらの遺構は周辺の調査からみて金剛心院の中心をなすものと思われる。こうした中で当調査地の西側で実施した 76 次調査では、調査地南端で東西方向に走る溝を検出し、これより北側では遺構が皆無の状況であることがわかった。この結果から、この溝が南方に広がる金剛心院の北限を画する遺構と判断でき、74・80 次調査で検出した西限築地に繋がるものと推定される。東限及び南限については未調査で今後の調査の課題である。したがって当調査地は、76 次調査で検出した東西方向の溝の続きを捉えることを主眼に調査に入った。

遺構・遺物 調査の結果、鳥羽離宮期の遺構では、南部で東西に通る溝（SD 1）、これに直交する形で北に延びる 2 本の溝（SD 2・3）、SD 1 の北側で SD 2・3 の間に東西に並ぶ柱穴 4 穴（P 5～8）、SD 3 の西側で柱穴 7 穴（P 9～15）を検出した。SD 1 は、掘り替えがみられるが、北肩のみを検出し南肩は区画整理道路内に推定される。調査地内での最も深いところで約 80cm を測る。幅は 2 m 以上を測る。埋土からの遺物は少量・小片で、西側で完形の平瓦が 4 枚出土した程度である。SD 2・3 は南北に並んでその間隔は約 8 m を測る。溝幅は 70cm、深さ 20cm を測る。P 5～8 は、約 1.8 m 等間で東西に並び他の柱穴よりも大きく、掘形約 60cm 四方、柱当り約 20cm を測る。P 12～15 は切り合いがあるが、1.4 m 等間で 3 個の柱穴が東西に並ぶ。

上述した鳥羽離宮期の遺構面直上には中世の小溝群が南北方向に多数検出され、SD 1 北部付近で東西に走る溝が検出された。これより古い遺構は、離宮期の調査面より約 1.5 m 下まで確認したが、湿地状堆積がみられるのみで、最も古い時期で弥生ないしは古墳時代の遺物を含む層、最も新しい離宮直前の堆積層には平安時代中期頃の遺物を包含していることがわかった。湿地状堆積は 76 次で西限、85 次で北限、90 次で東限を検出している。広範囲にしかもかなりの高低差を有しており、性格については今後の検討に待ちたい。

小結 調査は目的の通り金剛心院の北限を画す東西溝を検出した。この溝が西限築地と同様な構造を持つものと仮定するなら、築地外側の溝と思われる。しかし予想する中心部が道路下にあるため確認できない。更に南北溝（SD 2・3）、柱穴（P 5～8）の性格については今後の調査成果を得て検討したい。

（前田義明・長宗繁一）



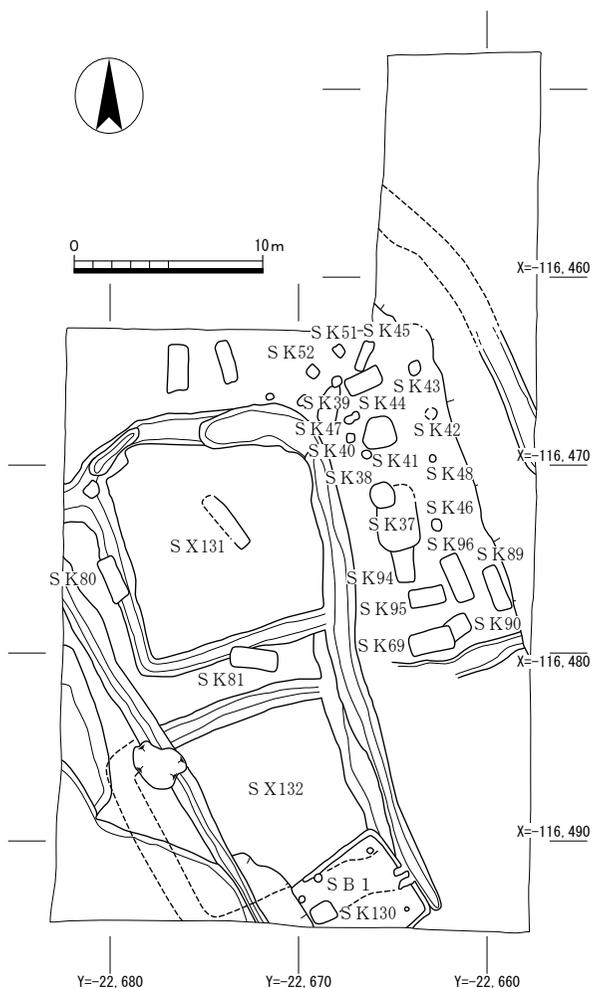
遺構配置図 (1:500)

25 第90次調査

経過 調査地は鳥羽離宮跡田中殿に推定されている地区にあたり、当該地周辺の発掘調査によって建物や庭園・道路などの遺構及び遺物が良好な状態で検出されている。また古墳時代の集落跡も検出され、遺構・遺物の密度が非常に高い地区である。

調査区は排土置場の関係で南部を広く設定し、耕土層及び床土層は機械によって除去した。鳥羽離宮期の遺構は、南北溝・東西溝が検出されたのみで、顕著な遺構は認められなかった。しかし、下層で古墳時代の堅穴住居や土壙墓群・溝、弥生時代の溝が検出され、下層遺構が良好に遺存していることが判明した。調査区の北部は流路にあたり、断割り調査を行うことにし、南半の土壙墓群の調査に重点を置いた。そのため一部北側へ拡張した。

遺構 基本層序は上より耕土層30cm・暗灰黄色砂泥(2.5Y5/2) 10～15cm・黄灰色砂泥(2.5Y5/1) 25cm・灰オレンジ色泥砂(5Y5/2) 10cmの順で、次に暗灰黄色泥砂(2.5Y5/2) 30cmの上面で鳥羽離宮期の遺構が検出された。そして灰黄褐色泥土(10YR5/2) 15cmの上面で古墳時代後期の遺構が検出され、次にぶい黄褐色砂泥(10YR5/4)に弥生時代の遺物が含まれる。北部では無遺物層である砂礫層の標高が非常に高い。検出した主な遺構としては弥生時代中期の溝・土壙、古墳



古墳時代 遺構配置図 (1:400)

時代後期の竪穴住居・土壙墓・土器棺墓・方墳状遺構・溝、平安時代後期の溝、鎌倉時代以後の小溝群、室町時代の井戸などがある。特に鳥羽離宮期の遺構は南北溝2条、東西溝1条がある。東西溝は調査区南端で検出されたが、南部が調査区外のため溝幅は不明である。現在は整理中のため、以下最も残存状態のよい古墳時代後期の遺構の概略を述べることにする。

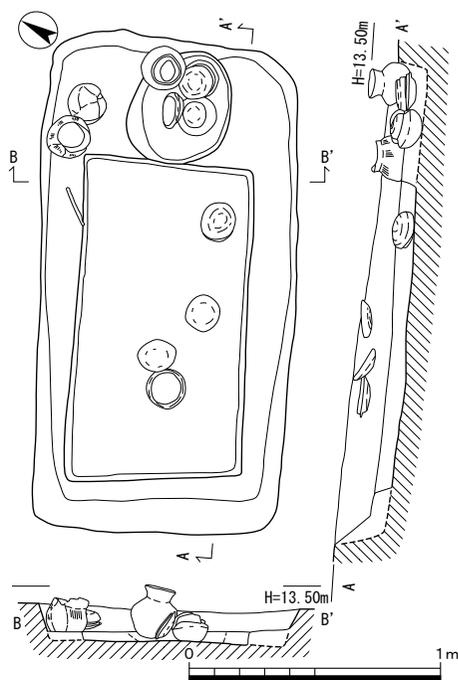
竪穴住居（S B 1） 調査区の南端で1基検出され、一辺5.6mを測る方形竪穴住居である。南西壁部は、流路のため削平を受けていた、北東壁中央には造り付けのカマドを有する。カマド袖部先端は、円筒埴輪を半截したもので補強していた。壁溝は北東壁・南東壁・北西壁の一部で検出された。

方墳状遺構 調査区西半で2基の方墳状遺構を検出した。一辺は13mを測り溝幅は1～2m、深さ20～60cmである。S X 131とS X 132は東辺の溝が合流し、S X 131の北西隅からも西へ溝が延びる。S X 132は西半部を流路で破壊されている。

土壙墓 土壙墓は木棺墓10基と土器棺墓8基がある。これらの土壙墓は二時期に分ける

遺構番号	棺の種類	形状・規模 (cm)	出土遺物・副葬品	方向	時期
S K 69	木棺	長方形 125 × 240	須恵器 (杯蓋1・杯身1・壺1)	N 73° E	I 期
90	〃	〃 115 × ?	須恵器 (甕1)	N 55° E	〃
89	〃	〃 80 × 240	土師器 (壺2)	N 22° W	〃
95	〃	〃 90 × 190	土師器 (甕2・高杯1・壺1)	N 79° E	〃
96	〃	〃 95 × 250		N 23° W	〃
94	〃	〃 120 × ?	須恵器 (短頸壺1・杯蓋1・杯身1) 須恵器 (杯蓋5・杯身6・壺1・短頸壺1)	N 8° W	〃
44	〃	〃 50 × 160	短頸壺蓋1) 土師器 (甕1)	N 66° E	II 期
80	〃	〃 90 × 240	須恵器 (杯身1・壺1) 土師器 (甕1)	N 23° W	〃
81	〃	〃 110 × 255	須恵器 (杯身1・杯蓋1・有蓋高杯1) 須恵器 (杯身2・杯蓋1・壺1)	N 83° W	〃
45	〃	〃 50 × 160	土師器 (甕1)	N 19° E	〃
41	土器棺	方形 40 × 50	須恵器 (杯身1・壺1)		〃
48	〃	円形 35	土師器 (甕1)		〃
40	〃	方形 40 × 40	須恵器 (杯身1・壺1)		〃
46	〃	円形 60 ~ 70	須恵器 (杯蓋)		〃
39	〃	円形 45	須恵器 (短頸壺1)		〃
43	〃	円形 60 ~ 70	須恵器 (杯身1・壺1)		〃
47	〃	円形 40 ~ 50	土師器 (甕1)		〃
42	〃	円形 60	土師器 (甕1)		〃

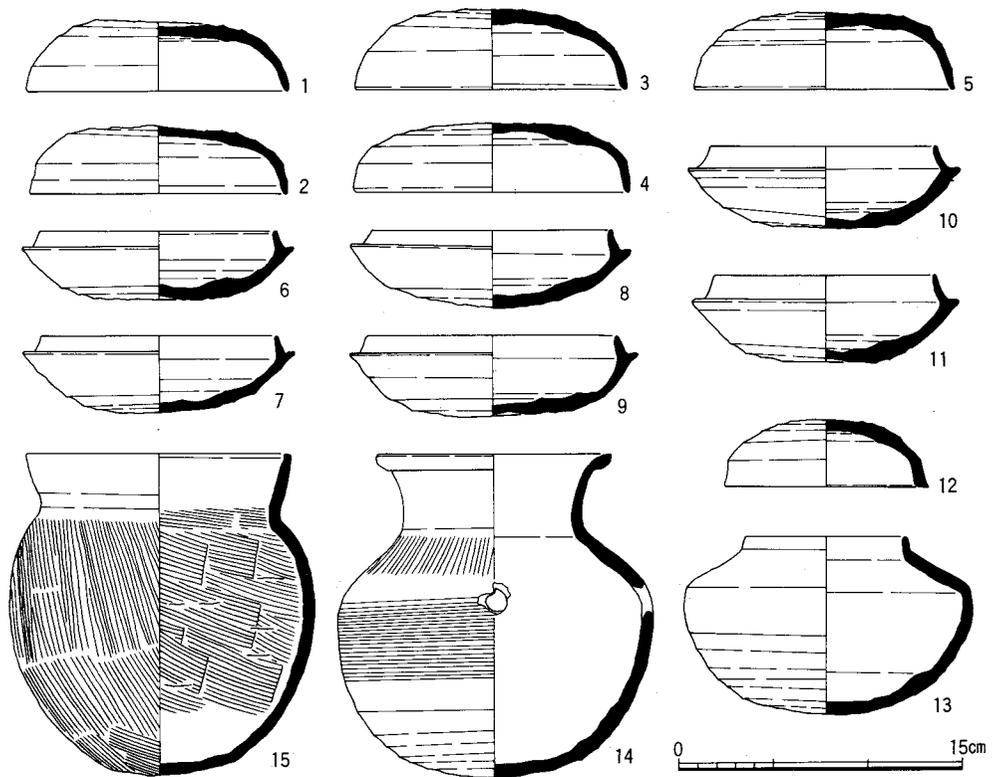
ことが可能である。Ⅰ期は6世紀初頭から6世紀中頃、Ⅱ期は6世紀後半から7世紀初頭に比定される。Ⅰ期は方墳状遺構に伴った土壙墓群（S K 69・89・94・95・96）で、S X 131の東側に密集して造られている。いずれも木棺墓である。S K 94は土壙内から炭と焼土を多量に検出し、土壙に木棺を置いた後、火葬にした可能性がある。Ⅱ期は土器棺墓（S K 39～48・80・81）が表れ、木棺墓もS X 131の周囲に展開する。S K 80・81はS X 131の周溝を切っており、溝が埋まった後造られたのであろう。しかし、溝と方位が合うため、墳丘を意識していると思われる。S K 44はS X 131の北東部で検出された。須恵器や土師器の副葬品が多く出土した。棺外に置いたものと、木棺の上部にのせたものがある。木棺の復原長は125cmと小さい。土器棺墓はS X 131の東部に集中している。須恵器の壺や土師器の甕を蔵骨器として用い、須恵器の杯身で蓋をしたものがある。



S K 44遺構実測図（1:30）

遺物 出土した遺物は整理箱に68箱である。古墳時代の遺物が多くを占め、次いで弥生時代、平安時代の遺物が少量ある。弥生時代中期・後期の遺物は溝・土壙から出土し、田中殿近辺の調査ではまとまった資料である。壺・甕・水差形土器・鉢などの土器類や石斧・石包丁の石器類がみられる。古墳時代後期の土器類は、土壙墓内より土器棺や副葬品として良好な状態で出土している。須恵器の杯蓋・高杯・壺・短頸壺・甕・甕や土師器の高杯・壺・甕などがあり、釘などの金属製品や砥石が少量ある。平安時代の遺物は土師器・須恵器・瓦器・緑釉陶器などの土器類と瓦類がある。大半が小片であるが、9世紀頃の須恵器壺が1点完形品で出土した。

土壙墓内の出土土器は、6世紀初頭から7世紀初頭までの一括遺物として重要な資料を得ることができた。今回は最も多く出土したS K 44の土器類を図示した。1～14が須恵器で、1～5は杯蓋である。3・4は口縁端部の外面を面取り風にヘラでナデる。天井部



S K 44 出土土器実測図 (1:4)

はケズリの範囲が狭く平たい。5は天井部と口縁部の境に凹線が認められる。6～11は杯身である。10・11は6～9に比べ受け部が薄く、立上がりが高い。底部外面のケズリは範囲が狭い。12と13は短頸壺とその蓋で組み合わさって出土した。13は体部下半が回転を利用したヘラケズリで上半はナデ調整。14は壺で焼成後体部中程に直径1.5cmの穿孔がある。底部はヘラケズリで体部はカキ目調整。15は土師器の甕である。体部は内外面ともハケ目を施す。口縁部は上方に延び、端部はやや内側に肥厚する。

小結 今回検出された古墳時代後期の土壙墓群は鳥羽遺跡で初めての検出例であり、集落復原に重要な資料を加えることができたといえよう。墓は方墳状遺構・木棺墓・土器棺墓と3種類がみられ、被葬者の階層差が考えられる。墳丘と主体部は削平されたと思われるが、木棺直葬による主体部であろう。土器棺墓は骨の検出がみられなかったが、おそらく洗骨した後、骨の一部を埋納したと思われる。

当調査区とその西側で実施した第89次調査では、南側の第79次調査などで検出された遺構群はまったくみられず、調査区南端の東西溝が金剛心院跡の北限の境界線と考えることが可能である。
(長宗繁一・前田義明)

26 第 91 次調査

経過 この調査は、伏見区竹田浄菩提院町 52 - 1 の貸し倉庫建設に伴って実施された。調査地周辺は、泉殿・東殿の一面で、白河天皇陵の北側に位置することから、これらに関連する遺構・遺物の検出が予想された。調査は、当初試掘調査のため東西 30 m、幅 3 m のトレンチ 2 条、南北 11 m、幅 3 m のトレンチ 1 条を工字形に設置したが、東半部で凝灰岩の破片が密に認められたことから、東半部全面に調査区を拡張した。また、西半南部で検出した堀の方向を確認するため、敷地西端に南北 11 m、幅 1.5 m のトレンチを設置した。

遺構 基本層序は、厚さ 25cm の近・現代の耕土層、厚さ 10cm の暗灰黄色泥砂の近世整地層、厚さ 35cm の灰色粘土層、厚さ 40cm 以上のオリーブ灰色粘土層（古墳時代の遺物を少量包含）となる。検出した平安時代から近世の遺構群は灰色粘土層上面で認められた。

確認した遺構群は、鎌倉時代後半から室町時代前半のものがほとんどなく、この時期を挟んで前後二時期に分かれる。平安時代から鎌倉時代の遺構には、柱穴、土壙、溝、堀などがある。このうち特記すべきものに調査区西半で検出した幅 8.5～8.7 m、深さ 1.6 m の逆台形を呈する堀（S D 10）がある。堀の隅は未確認ではあるが、ほぼ直角に折れ曲がっている。そして東西部分の南肩では、長辺 1 m 以上の自然石が三段に積まれ、また、南北部分の西肩でも一部分同様な自然石が認められたことから、南・西肩には三段築成の石垣があったと考えられる。堀の堆積は 4 層に大別できる。最下層は厚さ 70cm 前後の褐色腐植土で、平安時代後半から鎌倉時代の遺物を含む。最上層は安土桃山時代の遺物が出土する。溝（S D 42）は調査区の東北部で検出した東西溝で、少量の凝灰岩小片を含む。土壙は主に調査区東半で認められ浅いものが多い。東南隅の S K 32 は、凝灰岩の破片が底部に張り付いた様な状態であるため、凝灰岩の抜取り跡と考えられ、ごく近くに建物の存在が窺える。

室町時代後半から近世初頭の遺構には、井戸、土壙、小溝、柱穴、落込などがある。井戸（S E 31）は、調査区東南隅で検出した瓦積みの井戸である。掘形は径 1.8 m 前後の円形で、このほぼ中央に径 90cm の円形に瓦を小口積みにした井戸枠がある。深さは 2 m で底部中央には径 40cm、深さ 32cm の円筒形の桶を埋設している。井戸枠に使用された瓦は、すべて鳥羽離宮期のもので、軒瓦なども含まれ、瓦間には部分的に小礫が補填されている。井戸内の堆積は 3 層で、上層からは多量の瓦が出土した。溝は、いずれも幅 20～

40cm、深さ10cmほどの小規模なもので、調査区全域に認められ、東西方向のものが多い。

遺物 整理箱で34箱出土し、瓦磚類、土器類、木製品、石製品があるが、大部分は瓦磚類が占める。遺物の時期は、平安時代と室町時代のもが多く、堀・井戸から出土する。

瓦磚類は、軒丸瓦6点（複弁六弁蓮華文、複弁八弁蓮華文、三巴文など）、軒平瓦10点（均整唐草文、偏行唐草文など）と多量の丸・平瓦である。このうち軒丸・丸瓦の側縁、軒平・平瓦の凸面に段の付くいわゆる「段瓦」と呼ばれる一群があり、現在の所この周辺だけに出土するのが注目される。土器類は、破片が多い。堀の最下層で平安時代後期から鎌倉時代の土師器皿、瓦器椀・壺・鍋・釜、須恵器甕、焼締陶器などが出土する。土師器皿には、中・小の二種類ある。瓦器壺は、体部外面の肩部に一条の圏線と連続輪状文を施すものである。室町時代の遺物はS D 16から主に出土し、土師器皿、瓦器椀・鍋・釜、須恵器甕、瀬戸・美濃灰釉椀・皿・壺、焼締陶器、白磁、青磁、染付などがある。

木製品には、木球、加工材などがあり、堀から主に出土する。石製品には宝塔片、砥石などがあり、宝塔片は堀石組み抜取り部から出土した相輪の一部である、その請花部は反花の蓮華文を施し、覆鉢の下には露盤にはめ込むための乳状突起が認められる。

小結 調査の結果、柱穴、溝、土壌などの平安時代の遺構を検出したが、室町時代以降の削平を受けたと思われる、遺存状態が悪く不明瞭である。しかし、調査区西半で検出した幅8.5～8.7m、深さ1.6mの堀は、白河天皇陵の外堀と考えられる。現在の白河天皇陵は一辺約33mと鳥羽天皇陵・近衛天皇陵に比べて小さくなっているが、その当初は今調査の結果から一辺56mでその外側に幅8.5mの堀が回る大規模なもので、二陵とほぼ同じであったことが判明した。一方、調査区の東半部では凝灰岩の破片の散布が密に認められ、調査区のごく周辺に建物遺構が検出される可能性が大きい。

（堀内明博・前田義明）

27 第92次調査

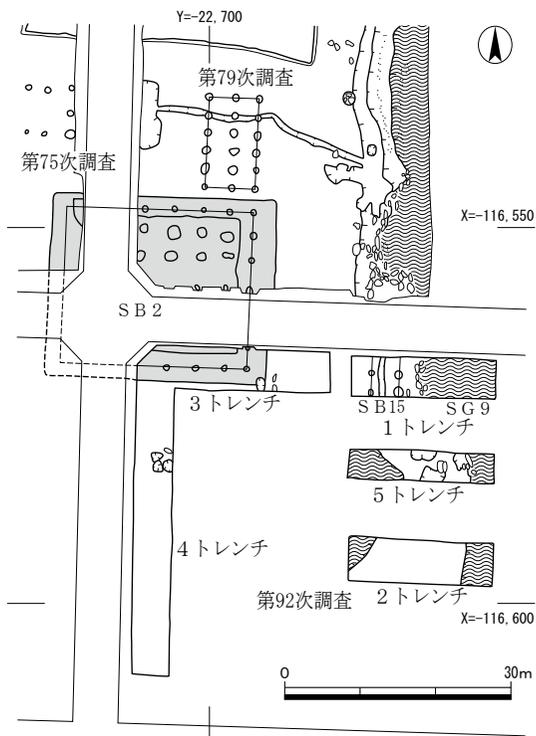
経過 調査地は金剛心院跡に位置し水田として利用されている。近辺の調査をみると、第75次・79次で建物と園池が、第80次で築地が検出されており、遺構・遺物が良好な状態で遺存している地区であることが判明している。これまでは開発に伴って調査が行われたのであるが、今回は試掘調査を先立って実施することによって、遺跡の遺存状況を明らかにし、保存の対策を行うことになった。

調査地は第79次の南側にあたり、その遺構群の延長を探る目的が今回の試掘調査である。第75次や第79次でみつかった建物や園池は南へ展開する様相を示しており、当該地によって金剛心院跡の南限を知る手掛かりが得られると予想された。

調査対象地は2筆の水田で5本のトレンチを設けた。その結果建物や園池が認められた。遺構は必要な箇所のみ掘り下げることにし、写真撮影及び実測を行った。そして基壇と庭石上にはグラウンドシートと砂をおおい埋め戻しを行った。

遺構 調査地の基本土層は近・現代の耕作土層20cm、灰オリブ色微砂(5Y6/2)10cm、灰色砂泥(5Y5/1)20cm、灰黄褐色砂泥(10YR5/2)10cm、灰オリブ色砂泥(5Y5/2)30cmの順で、ここまで機械力で排土した。以下はにぶい黄色砂泥(2.5Y6/3)があり、厚さ12cm～35cmで東及び南へ徐々に厚くなる。次いでオリブ灰色泥土(2.5GY5/1)15cm～20cm、暗灰黄色泥砂(2.5Y5/2)20cmである。灰色泥土層に室町時代の遺物を含む。以下が明茶灰色泥砂で、この上面において鳥羽離宮期の遺構を検出した。

検出遺構には基壇建物、礎石建物、園池などの鳥羽離宮期の最も顕著な



調査区配置図 (1:1000)

遺構群を検出することができた。以下その主要遺構について概略する。

S B 2 3トレンチと4トレンチの北端にて検出した掘込み地業を伴う基壇建物である。この建築遺構は第75次と第79次によって確認したS B 2の南半分に相当し、今調査で基壇南部及び東南隅を検出したことにより、ほぼその全容が明らかになった。掘込み地業の規模は東西約30 m、南北24 mである。また建物の南端桁行方向の礎石抜き取り痕跡を5個確認したことにより、桁行7間・梁行6間の規模を持つ東西棟礎石建物であることが判明した。桁行24.9 m梁行21 mである。礎石は今調査区内ではすべて抜き取られており、いずれも礎石据付け痕跡を確認したに過ぎない。しかし据付け痕跡の底部に花崗岩の風化剥落したものが認められたことから、礎石には花崗岩を用いていたことがわかる。基壇は掘込み地業で、河原石を積み上げる工法を用い、亀腹状を呈していたと考えられる。桁行方向の礎石列から南へ1.5 mほどで、帯状に幅40cmの凝灰岩破片の分布がみられ、基壇の外装施設として凝灰岩を使用していた可能性がある。

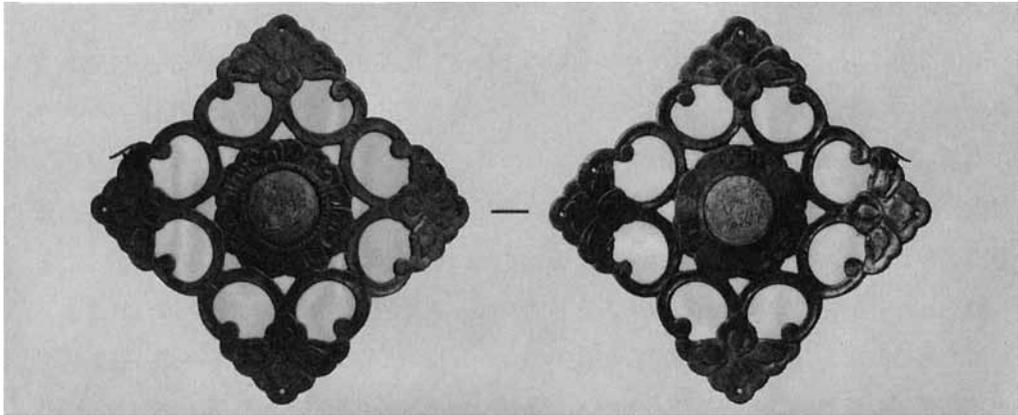
S B 15 1トレンチの西側に検出した東西1間、南北1間以上の礎石建物である。柱間寸法は南北2.4 m、東西3.6 mで礎石は残存していないが、抜き取り痕跡を検出した。いずれも底部に花崗岩の風化剥落したものが認められ、S B 2と同様に花崗岩の礎石を用いていたと思われる。

S G 9 1トレンチ・2トレンチ・5トレンチの各々東部で検出した苑池で、調査区内では南北に約28 mの水際を確認したが、第79次と合わせると58 m以上になることが判明した。1トレンチから5トレンチにかけて張り出す水際にはチャートなどを庭石として集中して配置しており、これより南側では顕著な施設はみられなかった。

遺物 今調査に出土した遺物は瓦埴類・土器類・金属製品などで整理箱31箱ある。これらの遺物は平安時代後期の瓦類が大半を占め、土器類は小破片ばかりで量的には少ない。軒丸瓦には複弁六弁蓮華文軒丸瓦、三巴文軒丸瓦などがあり、軒平瓦には均整唐草文軒平瓦、



1トレンチ園池（東から）



瓔珞

三巴文軒平瓦がみられる。金属製品には瓔珞・針がある。瓔珞は1トレンチSG9の最下層から出土した。銅製で一辺が9cmの正方形を呈し厚さ3mmを測る、中央に16弁の蓮華文を配し、四隅につるの付く宝相華文を表裏共に透し彫りしている。文様はタガネを用いて刻み、金メッキを施す。蓮華文の内側には直径2.3cm、厚さ5mmの中央がやや膨らむ円盤状の鉛ガラスをはめ込み、裏側から13弁の蓮華文を彫った銅版をあてて、3本の鉋で止めている。四隅と左右のやや上方に1個ずつ計6個の1.5mm程の穴が穿たれている。その左隅上方の穴には直径1mmの銅線が巻き付いていた。金メッキは剥げ落ち、鉛ガラスは灰白色に変色していることから二次的な熱を受けた結果と考えられる。

小結 幅の狭いトレンチによる調査ではあったが、第79次で検出された建物（SB2）と庭苑遺構の延長を確認し、当初の予想どおりの成果を挙げることができた。調査対象地の中央部以南は顕著な遺構はみられず、金剛心院の南限に近いと思われる。

SB2は東西7間・南北6間の東西棟であることが判明し、更にその東側に池の水際に接して建物（SB15）が存在することが明らかとなった。庭石には水際に第79次と同様荒磯風に組んだものと、前栽として配したものとがあり、SB2の東側や南側にみられる土壙群は、庭石として据えられた石を後世に抜き取った痕跡と考えられる。

今回出土した遺物の中で注目されるのは天蓋の瓔珞である。遺存状態も良好で流麗な文様に金メッキが施され、金剛心院かあるいは他の御堂に安置されている仏像をきらびやかに装飾していたものであろう。

鳥羽離宮跡の下層には弥生時代・古墳時代の遺跡が存在するが、今回は未調査であるためこれらの不明な点あるいは誤認している点の解明は、今後の当該地の本調査に譲りたい。

（堀内明博・前田義明）

28 第93 I次調査

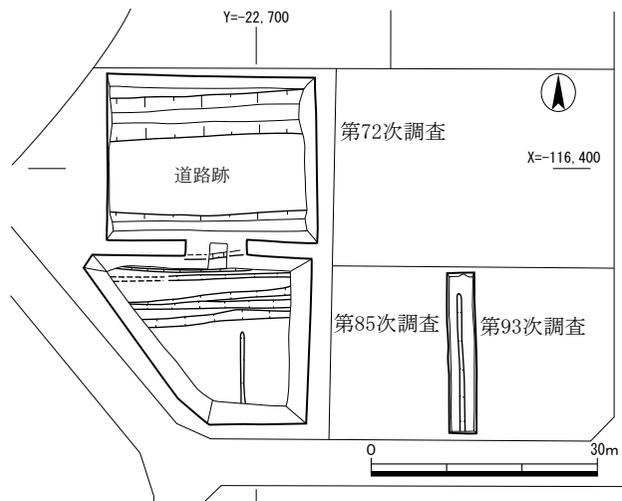
調査経過 今回の調査は、ホテル建設に先立ち鳥羽離宮跡の遺構の有無を確認する調査である。調査地は、名神高速道路京都南インターチェンジの南東にあたり、田中殿児童公園の西南40mに位置する。特に当敷地は、道路跡を確認した第72次・85次調査区の東に隣接し、今回の調査では道路の側溝の検出が期待されるところであった。

調査は、敷地中央に東西約4m、南北21mのトレンチを設定し、重機による掘削をGL-80cmまで行った。そして鳥羽離宮期の遺構面を検出し、土壌・溝を確認した。道路側溝及び建物などの遺構については、今回のトレンチでは検出できなかった。

遺構・遺物 遺構は中世の溝1条、土壌2基を検出した。また、トレンチ北側で凝灰岩の小破片が少し認められたがその性格を明らかにすることができなかった。下層遺構は、土層堆積の確認調査にとどまった。

出土遺物は、整理箱に1箱出土した。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、白磁、瓦、サヌカイト剥片などがある。大半は、平安時代後期から鎌倉時代後半のもので、弥生から古墳時代のものは数点出土しただけである。

小結 調査の結果、道路側溝や建物などの鳥羽離宮期の遺構は検出できなかったが、下層遺構については土層堆積の確認調査により古墳時代の層位であることが明らかになった。なお、隣接する第72次・85次・90次調査で古墳時代の溝・竖穴住居・土壌墓群が発見されており、当敷地にも古墳時代の遺構が発見される可能性が高い。(中村 敦)



調査区配置図 (1:1000)

29 第 93 II 次調査

経過 この調査は、伏見区竹田小屋ノ内町 79 - 1 の旅館新築工事に伴って実施された。調査地は鳥羽離宮田中殿の北部にあたり、これまでの周辺の調査では、東西の大路と推定される道路遺構や建物、その下層からは古墳時代の集落跡や土壙墓群が発見され、今調査地においてもこれらに関連する遺構・遺物の検出が予想された。まず遺構・遺物の有無を確認するために試掘調査を実施した。そして平安時代の溝及び古墳時代の遺物包含層を確認したことから、本調査が実施される運びとなった。調査地は敷地全体を対象とした。土置きなどの関係で、まず西半部から開始し、その後反転して東半部にかかることにした。

遺構 基本層序は、厚さ 40cm の近・現代の耕土層があり、次いで厚さ 20～25cm の橙色泥砂、厚さ 50cm 前後の灰色泥土の近世遺物包含層を認める。この層までを機械力で排土し、以下の層より調査を開始した。第 1 層は厚さ 10cm の灰黄色砂泥で、上面より鎌倉時代後半から室町時代にかけての南北小溝を多数検出した。第 2 層は厚さ 15cm の黄褐色砂泥で、この上面でも前者と同様な南北小溝を確認した他、東西小溝も認められた。第 3 層は厚さ 15～30cm のにぶい黄褐色砂泥で、上面で鳥羽離宮期に属する東西及び南北小溝、土壙などが認められた。この第 3 層から平安時代中期の土師器、黒色土器などが出土した。第 4 層は厚さ 20～25cm の灰色砂泥で、上面では顕著な遺構は認められなかった。この層には古墳時代の遺物が主に含まれ、平安時代中期までの緑釉・灰釉陶器、土師器、黒色土器なども含まれる。層の下半部からは獣骨が出土した。第 5 層は厚さ 15cm の暗灰黄色砂泥で、この上面でも顕著な遺構は認められなかった。第 6 層は厚さ 10～15cm の暗灰黄色泥砂で、上面から古墳時代の遺構が認められた。この層は調査区の西半部だけに認められたものである。第 7 層は厚さ 50～60cm の灰オリーブ色泥土及びオリーブ褐色砂泥で弥生時代の遺構群を検出した。

検出した遺構群は弥生時代から室町時代に及ぶ。その主要な遺構群を挙げると、第 3 層上面で検出した鳥羽離宮期のものがある。このうち南北小溝だけは鎌倉時代以降もほぼ同様に認められることから、以後踏襲されたと考えられる。その中で、鳥羽離宮期だけに認められるものに調査区北端で検出した東西方向の溝がある。溝幅は 0.7～1 m、深さ 50cm ほどの逆台形を呈しており、重複関係が認められる。更に溝の北及び南側では凝灰岩の小破片が密集した状態で認められた。既往の 72 次・85 次調査成果から東西道路の南側築地に関連した遺構と考えられる。

次いで古墳時代の遺構のうち主要なものとして、調査区東部で検出した方墳と考えられる1基がある。規模は内々東西10m、南北12mでその外側に幅1.5～3.5mの溝が回る。墳丘は削平されており、内部主体は確認できなかったが、周溝内より出土した遺物群から6世紀後半頃のものと考えられる。またこの古墳のすぐ南側で、南北80cm、東西50cmの楕円形の掘形を持つ、合わせ口甕棺墓1基を確認した。一方調査区西部では、幅4～5m、深さ0.8～1.6mの南北方向の流路があり、中央と南部で西方からの流路とそれぞれ合流している。流路の時期は、下層で弥生時代中期後半の土器群が出土し、上層から古墳時代後期の土器が出土していることから、ほぼこの時期が想定できよう。なお、流路と方墳の間には幅70～80cm、深さ20～30cmの溝2条が認められた。これらの遺構群の方位は、方墳だけが大きく東に振れ異っている。

弥生時代の遺構では、調査区のはほぼ中央で検出した井戸状遺構と溝がある。前者は径1.5mほどのほぼ円形を呈するもので深さ1.3mである。埋土のはほぼ中位くらいで一層の炭の堆積が認められ、その上部からまとまって遺物が出土した。後者は幅1.5～2mの浅いもので井戸状遺構に切られている。

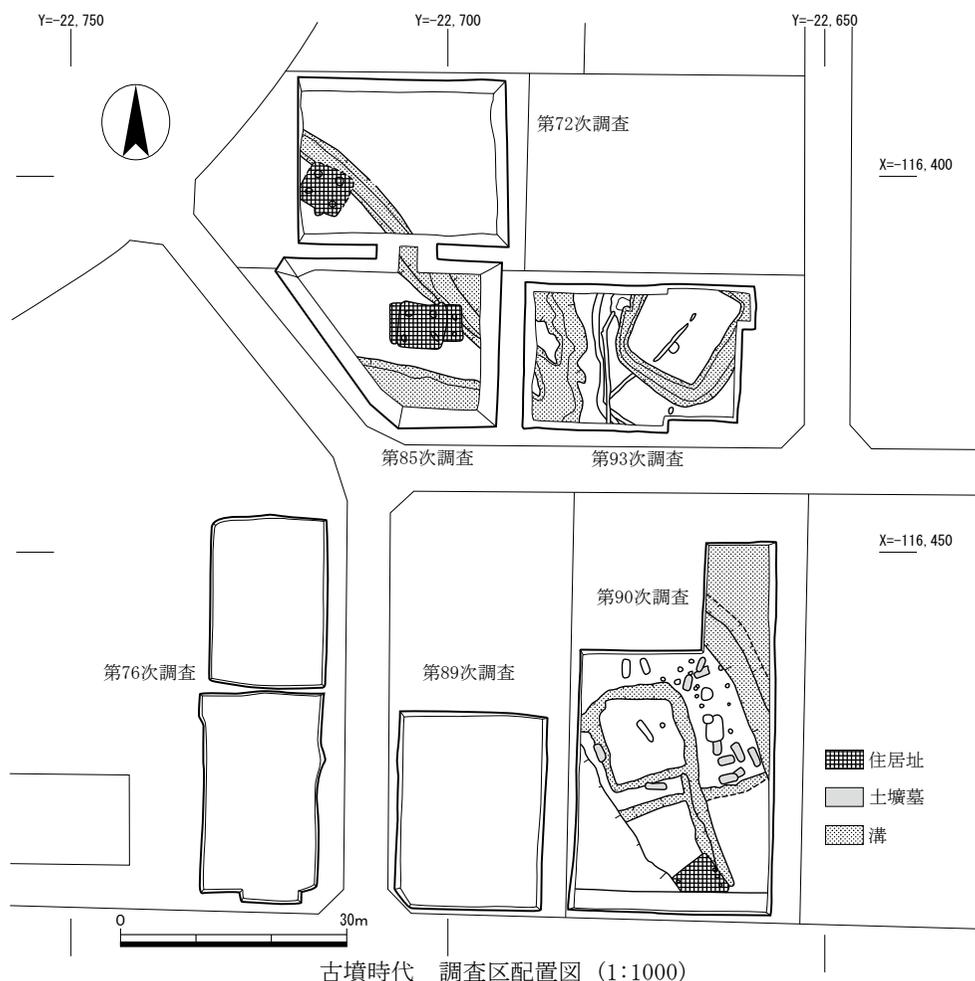
遺物 出土遺物は整理箱に26箱である。時期は弥生時代中期から室町時代に及ぶが、古墳時代後期のものが半数以上を占める。

弥生時代の遺物は、主に流路、井戸状遺構から出土し、田中殿付近では第90次調査出土資料と共にまとまったものである。流路の最下層からは、中期後半から後期にかけての壺、高杯、器台、甕などの土器類があり、井戸状遺構からは後期の壺、甕、高杯などの土器類と共に磨製石斧が1点出土した。古墳時代後期の遺物は、方墳と考えられる遺構の周溝、溝、土壙などから出土し、須恵器杯身・杯蓋・壺・甕・甗、土師器壺・甕などがある。周溝の東辺部の上層から、これらの土器群と共に有茎鉄鏃が1点出土した。

平安時代以降の遺物は、主に溝、遺物包含層から出土する。このうち、いずれも破片ではあるが平安時代前期から中期の土師器、黒色土器A・B類、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器が土壙・包含層から出土したことは、鳥羽離宮の下層でほとんど未確認であったことから注目すべきものである。平安時代後期以降の遺物は、土師器皿、瓦器椀・鍋・釜、須恵器鉢・甕、青磁、白磁椀・壺、青白磁合子などがある。この他注目すべきものに、鎌倉時代の南北溝から出土した漆器の折敷が1点ある。木質部はまったく残存しておらず、漆部だけが、ばらばらな状態で出土したため、形状・大きさは不明である。

小結 今回の調査での鳥羽離宮期の顕著な遺構は東西方向の溝、凝灰岩の分布のみにと

どまる。しかし鳥羽離宮期の遺構面で検出した南北溝は、平安時代中期に成立しており、以後、溝の規模、間隔などは変化しながらも確実に室町時代まで存続していたことが判明した。すなわち平安時代中期に何らかの農耕に関連する生産体制が成立して以降、鳥羽離宮期を経て、室町時代まで継続してきたと考えられる。一方その下層からは弥生時代から古墳時代の遺構・遺物が良好に遺存していることが判明した。ほぼ方形状に回る溝は主体部が削平されているが方墳と考えられ、このすぐ南側では土師器の長甕を用いた甕棺墓が検出され、第90次調査で確認した古墳時代の墳墓群が当該地まで広がっていたことが判明した。これらの遺構群は、第90次では方墳、木棺墓、土器棺墓の3種類が認められたのに対し、今回では木棺墓が未検出であること、方墳の方位が第90次では西に振れるのに対し、東に振れていることなど相異点があること、両調査区の間を流れると思われる流路との関連が不明確なことなど今後の課題といえる。(前田義明・堀内明博)



30 第94次調査

経過 第94次調査は、区画整理に伴う道路拡幅工事に先だって実施したものである。調査区は、民家や道路・水路などによりかなり制約された。調査地は、東殿西北部に位置し過去数次にわたる発掘調査が行われている。まず、第71次調査では平安時代から江戸時代に至る間の建物・溝・井戸・土壙などが重複して多数検出されている。また、下層からは弥生時代中期を中心とする遺構が検出され多量の土器と共に木器や石器などが出土した。また、その東側で実施した第77次調査でも平安時代から中・近世にかけての遺構が多数検出されている。特に鳥羽離宮関係の東西溝からは、板に楽人の絵が描かれたものが出土し、「白散」や「度嶂散」と墨書された壺の蓋などが発見されている。

遺構・遺物 調査の結果、中世から近世にかけての溝及び平安時代中頃の遺物包含層を検出した。溝は東西方向であるが、規模などは不明である。溝内埋土からは土師器、陶器などが数点出土している。また、平安時代中期の遺物包含層からは、土師器・須恵器・瓦などが発見された。

小結 鳥羽離宮関係の遺構は検出されなかったが、東殿の一面に平安時代中期の遺物包含層が新たに発見されたことは、貴重な成果といえる。また、これらの遺物はほとんど摩滅しておらず、この付近に同時代の遺構が存在する可能性が極めて強い。

(鈴木久男・吉崎 伸)



調査地全景（東から）

31 第95次調査

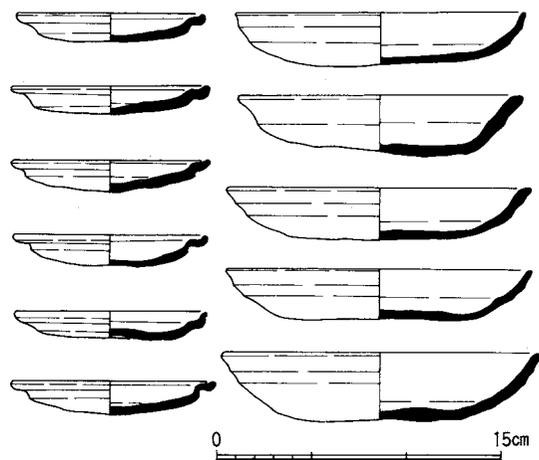
経過 当地は鳥羽離宮北殿跡に推定されており、東側で実施した既往の調査から平安時代後期の庭園の一部と考えられる池とその汀線が検出されることが予想された。このため区画整理事業の道路建設に伴い発掘調査を実施した。調査は池の汀線の位置を確認するための試掘調査から開始し、これを確認した時点で改めて調査区を設定する方法を取った。その結果、庭石・洲浜などを検出し、破壊を免れる部分については保存の処置を講じて調査を終了した。

遺構・遺物 検出した遺構は庭園の一部と考えられる池と北から南に突出した汀線・洲浜である。庭の形態は緩やかな丘状を呈しており、上部には径0.5～1.5mの庭石を配している。西側には汀線に沿って径30cm前後の石を同じ高さで一列に並べており、南から東側にかけては径0.3～1mの石を一定間隔に配置している。洲浜は庭を取り囲む様に径1～5cmの円礫・砂・瓦の破片を撒いて形成されており、南側は長く池の中に突出した状況がみられる。総じて庭の造りは東側に比べて西側が丁寧である。

この庭は自然の地形を利用したものではなく人工的に土砂を盛り上げて構築したものであるが、この構築方法は、最初に基底となる土を盛り上げ、次にこの中央部を掘り込み、更にこの中に核となる方形の土壇を築き、これらの上に全体の形状を整える様に土砂を盛り、最後に洲浜・庭石を配置するといった手の込んだものである。

遺物は主に洲浜の中から平安時代後期の瓦が多く出土しており、土師器・須恵器・瓦器などが少量認められる。また、庭の地業内からは鎮壇具と考えられる土師器の皿と墨書を有する鉛製の小円盤が出土している。

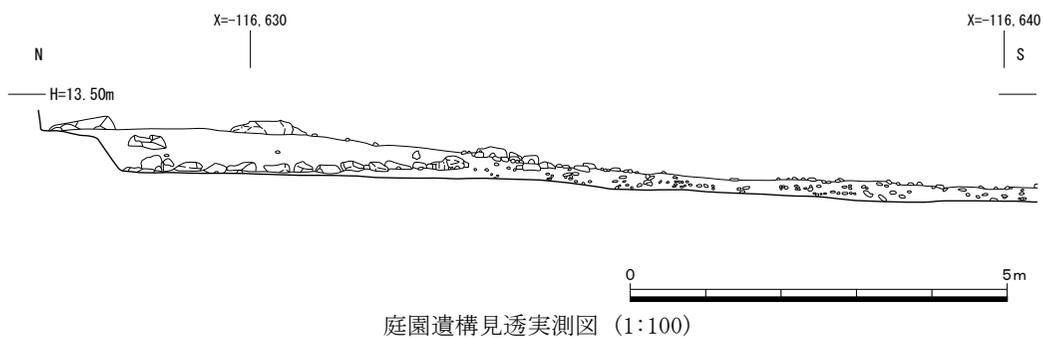
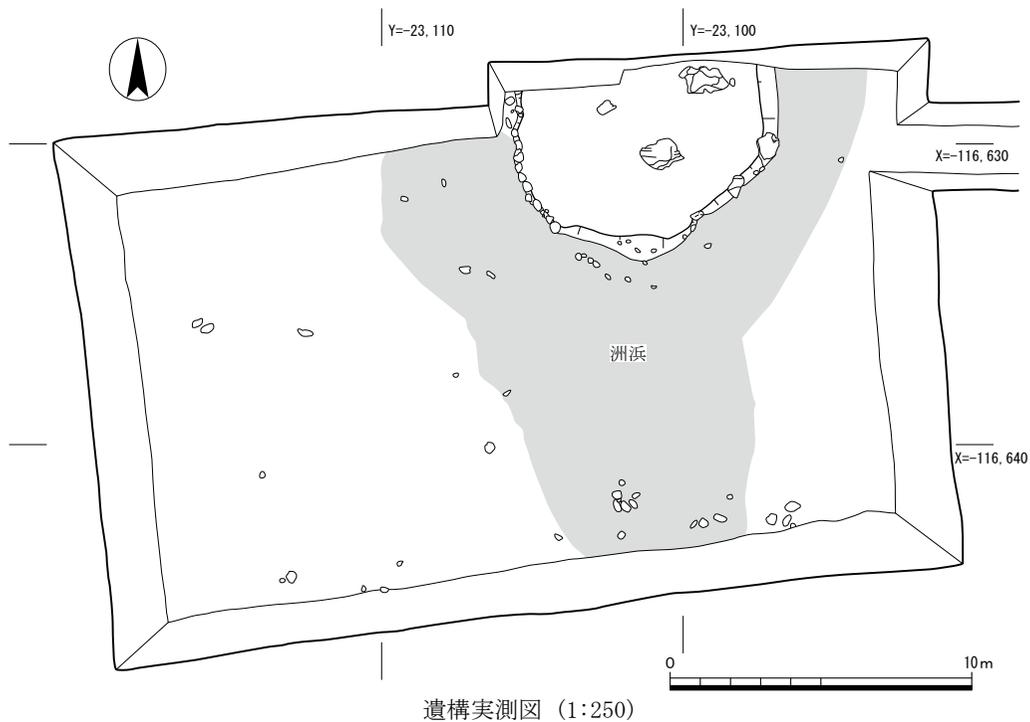
小結 今回の調査で検出した庭は複雑な構築方法と全体の形状から推測して、園池の中島である可能性が高い。しかし、調査区の北東側で実施した第81次調査では池の汀線が南西方向へ湾曲していたことから、北から南へ突出した半島である可能性もあり、



庭園地業内出土土器 (1:4)

この北側の調査結果に結論を委ねることとなった。いずれにせよ、今回検出した庭園はその規模から北殿の主要な一角をなすことは明らかで、この付近にも建物遺構の存在が考えられる。文献によれば北殿は鳥羽作り道に面して造営されたとあり、更に検出した庭が西側からの景観を意識して築造されていることを考え合わせれば、今回の調査区の西方にそれらの建物が推定できる。

(吉崎 伸・鈴木久男)



32 第96次調査

経過 調査は、伏見区竹田浄菩提院町89・90の貸し倉庫建設に伴って実施した。調査地は泉殿・東殿の一部で、白河天皇陵の北西20m、91次調査地の西方に位置するため、これらに関連する遺構・遺物の検出が予想された。調査は敷地全体を対象としたが、土置きなどのため北西部を除いた東西21.5m・南北12.8m矩形を呈する調査区を設定して行った。

遺構 調査地の基本層序は、現代耕土層（厚さ20～30cm）、床土と考えられる灰色砂泥（厚さ6cm）、灰色泥砂（厚さ10cm）、にぶい黄褐色砂泥（厚さ40cm、西半では泥砂）、灰色泥土となる。遺構群はにぶい黄褐色砂泥・泥砂の上面で確認されている。灰色泥土層からは円筒埴輪などの古墳時代の遺物が少量出土した。検出された主要な遺構は、平安時代後期の堀、室町時代後半から江戸時代初頭の溝・溝状遺構・土壙などがある。

堀は、調査区東半で東西方向から南へ直角に折れ曲がる幅7.1～7.6m、深さ1.7mの大規模な遺構である。この堀は91次調査の堀と同一のもので、今回もその内側だけに直径1.2mの自然石が二段築成されているのが認められた。元来は三段であったと考えられるが、上段と二段目の一部は安土桃山時代に抜き取られていた。堆積は5層に分けられ、下層には厚い黒褐色腐植土（SD10）が認められる。この層の上半には鎌倉時代から室町時代の遺物、下半には平安時代後期から鎌倉時代の遺物がまとまって出土した。溝状遺構は調査区西端で検出され、幅1.6m以上、深さ1m以上のもので、近・現代まで踏襲されていたのが認められた。

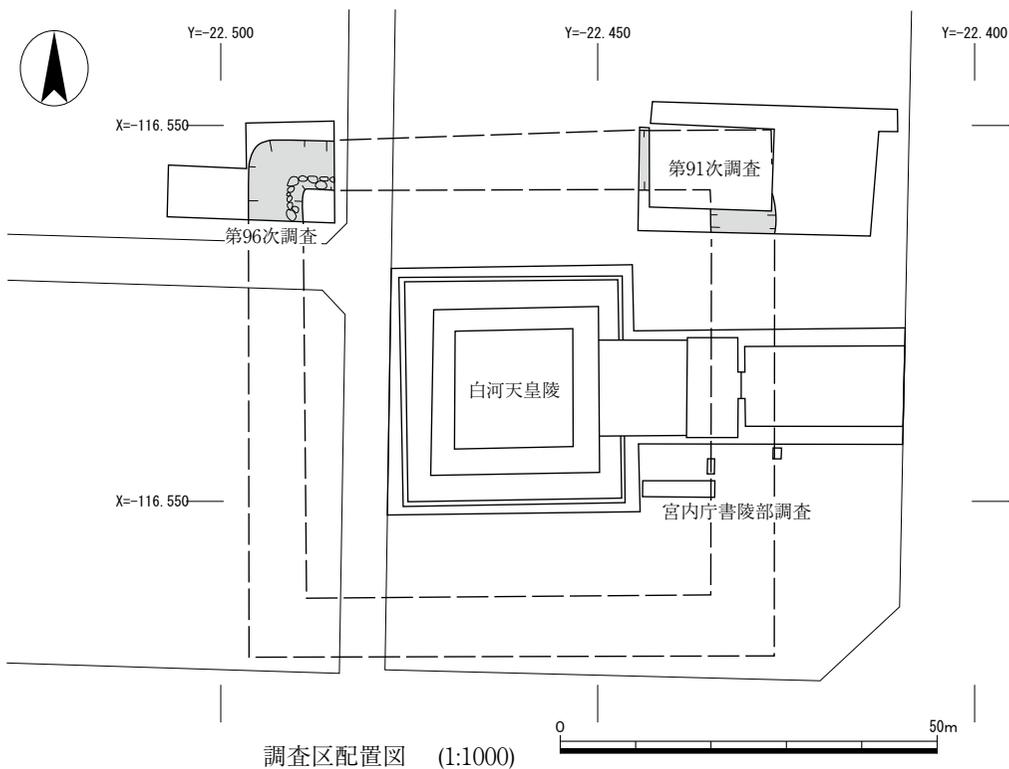
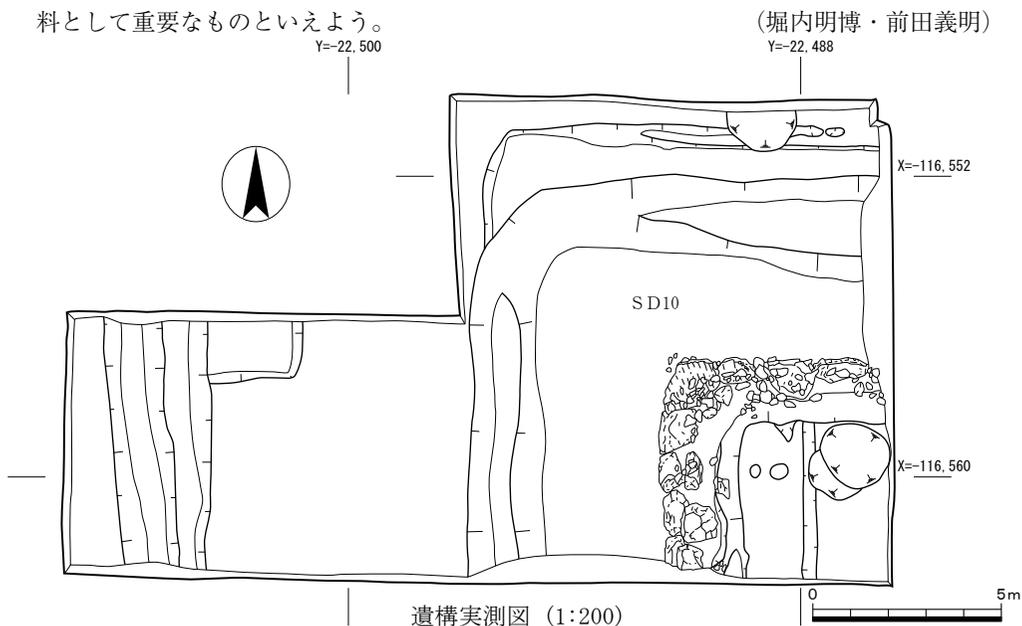
遺物 今調査で出土した遺物は整理箱で28箱あり、瓦埴類・土器類・木製品などがある。

瓦埴類は軒丸瓦18点（蓮華文9点・三巴文6点・剣頭状の蓮華文3点）、軒平瓦13点（唐草文8点・剣頭文1点・巴文1点・菱形文1点・斜格子文2点）、鬼瓦1点、丸・平瓦である。この内91次と同様に段瓦も含まれる。

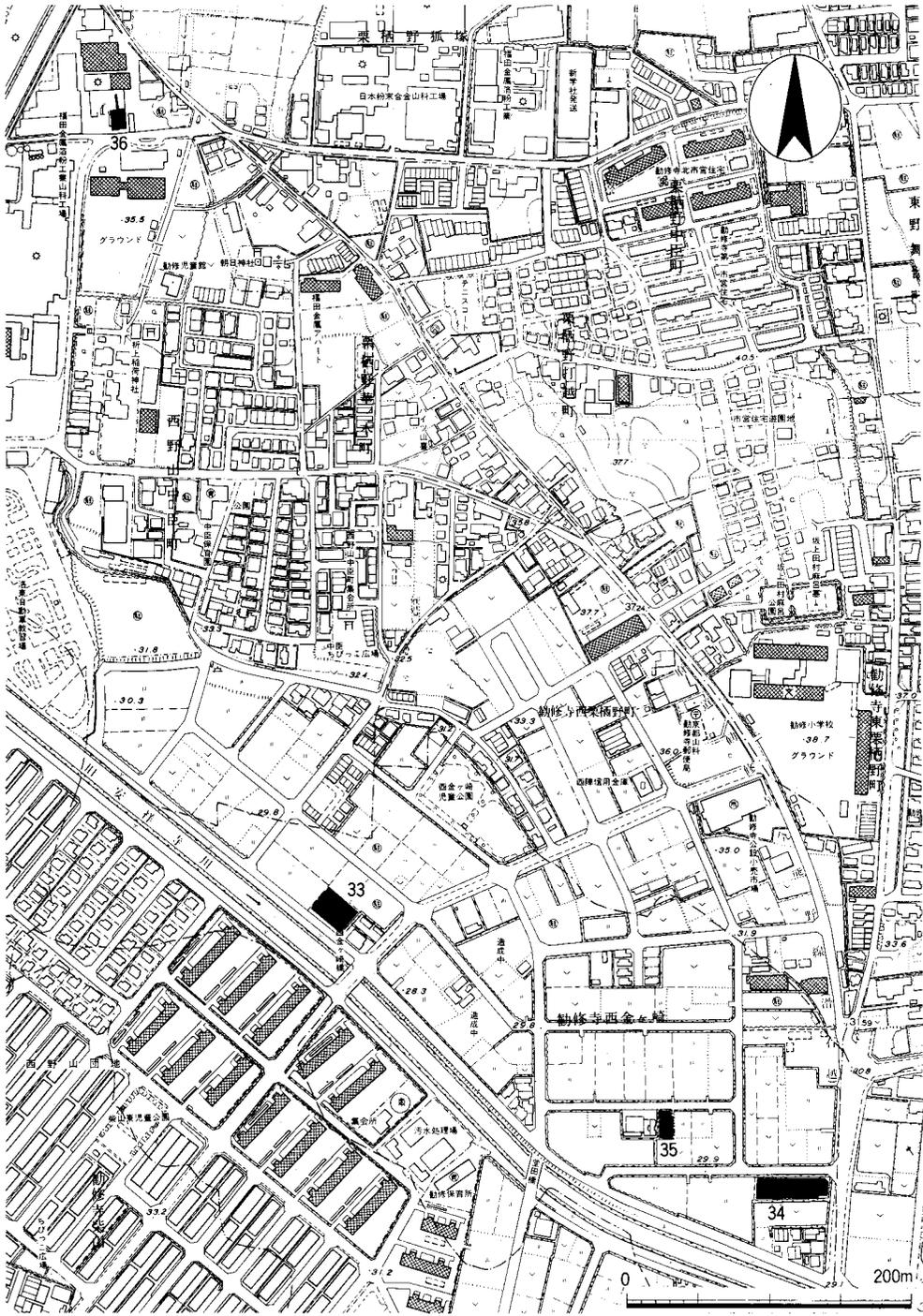
土器・木製品はSD10黒褐色腐植土層から一括して出土した。特に層下半から土師器皿（器形より口径14～15cmと10cm前後に分類）・壺・瓦器碗・須恵器甕などが出土した。4個体出土した土師器壺は特異な器形で、粘土紐巻き上げにより成形され、体部外面下半をヘラケズりする。瓦器碗には楠葉型と和泉型とがある。

木製品には、漆器碗・皿・折敷・仏像片・柿経・小塔などがある。特に注目するものに長さ6cmのにぎった状態の左手首部の破片があり黒漆で塗られている。その他、袈裟襷のある仏像背面部の破片もある。

小結 検出した堀は、白河天皇陵の外堀と考えられ、その北西隅を確認したことになる。ここから出土した遺物は91次のものよりはるかに豊富で、また土器・木器とも完形に近い良好な状態で、一括資料として貴重である。特に木製品は平安時代後期から中世の信仰資料として重要なものといえよう。

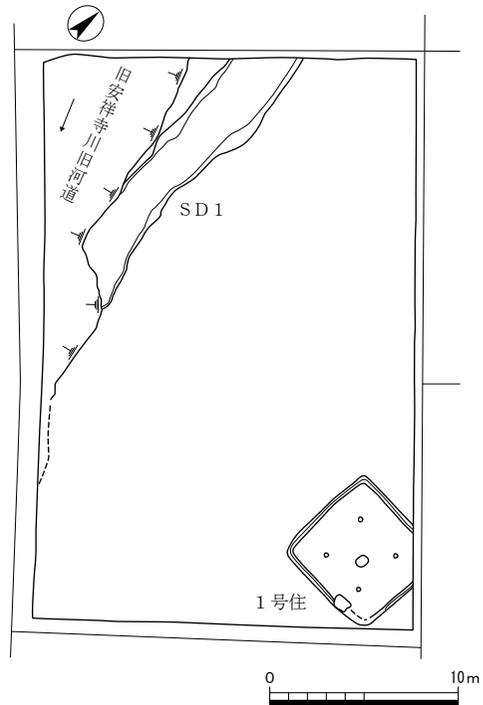


V 中臣遺跡



33 第55次調査

経過 調査地点は栗栖野丘陵から南西に広がる低位段丘部の末端に位置し、旧安祥寺川とは10mほど隔てた地点にある。当該地周辺におけるこれまでの発掘調査は、市街化道路及び宅地などに対し昭和48年度以降、断続的ではあるが実施している。その結果、当該地から北側の低位段丘部では縄文時代晩期の埋甕（甕棺墓）、弥生時代後期から古墳時代後期以降の竪穴住居、掘立柱建物、溝などを多数検出しているが、東側の低位段丘部では明確な遺構は検出していない。今回の調査はこの様な結果と、当該地が旧安祥



遺構実測図 (1:400)

寺川と接するという地形的な位置などから、周辺一帯に展開する集落の南限を確定する作業を進める上で重要な意味があった。調査は対象地のほぼ全面にわたって実施した。

遺構・遺物 調査区内の層序は耕土・床土が65～75cmあり、調査区中央付近から北・東側ではその直下が地山の黄褐色泥土である。南・西側では床土下に暗茶褐色泥土層が20～30cmあり、南西に向かって漸次厚く堆積し縄文土器、弥生土器（後期）が出土した。検出した主な遺構は古墳時代前期の竪穴住居1戸、古墳時代後期の溝1条、江戸時代後期の河川（旧安祥寺川の旧河道）1条である。遺物は各遺構及び暗茶褐色泥土層から整理箱で3箱出土した。竪穴住居は、調査区の東隅で検出した。平面形は方形を呈し、検出面での規模は長軸6.17m、短軸5.89m、床面までの深さ6～10cmある。壁溝と床面の間に地山削出しによる土堤状高まりがあり全周する。上幅5～14cm、床面からの高さ6～10cmある。溝（SD1）は南北方向に延長し、2次・3次調査の際に検出した溝の延長部である。検出面で幅2.1～3.5m、深さ25～30cmある。

小結 古墳時代前期（庄内式併行期）の竪穴住居は、当該地周辺に形成された弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居群（集落）の最も南辺に位置しており、集落の範囲を確定する作業を行う上で重要な成果を得た。
(平方幸雄・辻 裕司)

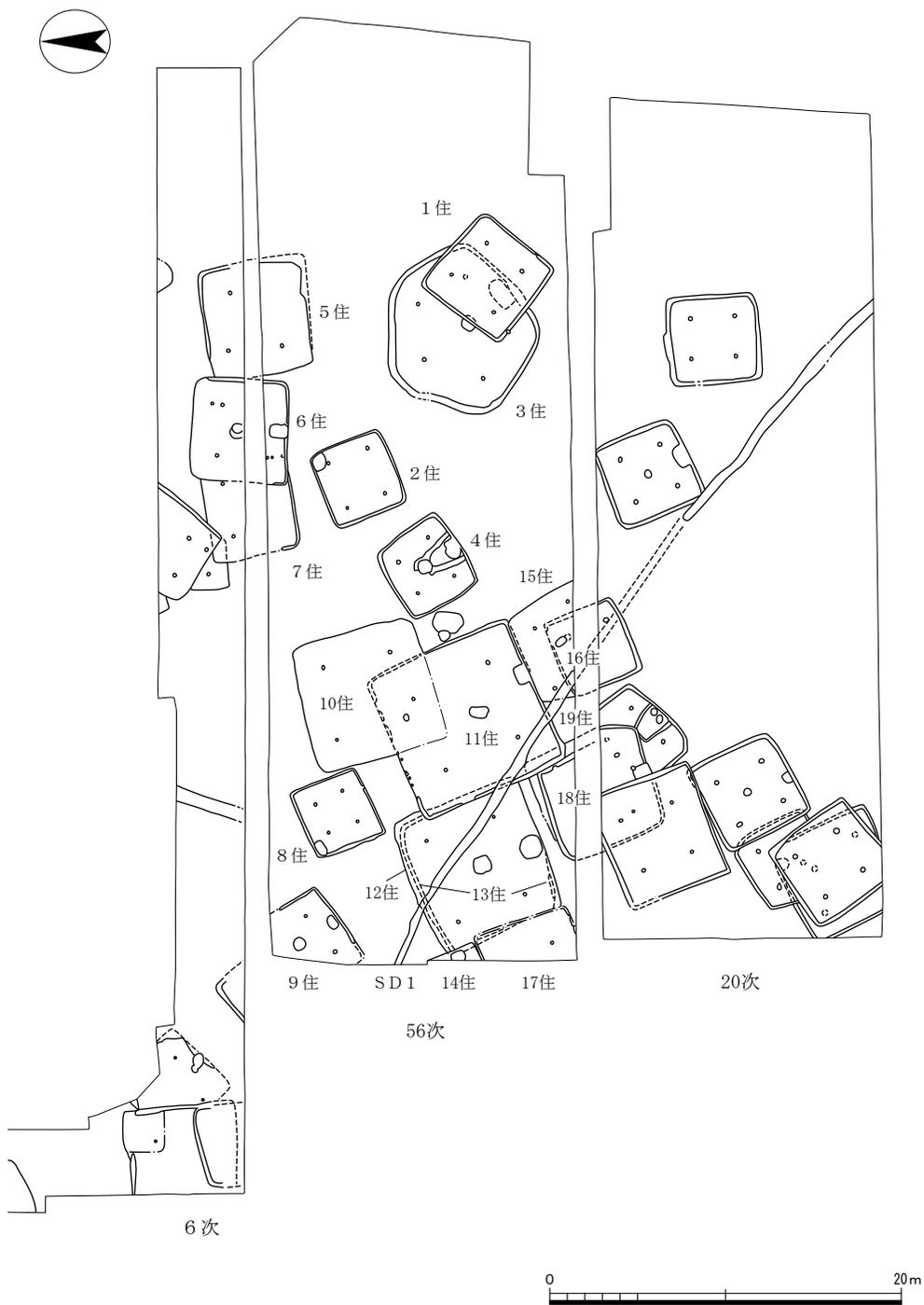
34 第56次調査

経過 調査地点は栗栖野丘陵南端から南へ約100m、旧安祥寺川とは約80m隔てた低位段丘部に位置する。当該地周辺は昭和50年以降6次・10次・20次調査などが実施されている。調査地点に北・南接する6次・20次調査地点では弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居を密集した状態で検出しており、また兩次調査区から当調査区にまたがる竪穴住居もあり、当該地には多数の竪穴住居が密集した状態で存在していると予測できた。調査は対象地のほぼ全面にわたって実施した。

遺構・遺物 調査区内の層序は現耕土・床土が約20cm、旧耕土・床土が約20cmあり、その直下が茶褐色泥土・黄灰色泥土・灰褐色砂礫（以上地山）である。遺物包含層は水田耕作などによりすでに削平されたと考えられ検出していない。また、遺構上面も同様に削平を受けたと考えられる。検出した主な遺構には弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居19戸、土壇2基、古墳時代後期の溝1条などがある。

竪穴住居は調査区のほぼ全面にわたってあり、出土した遺物から判断して比較的短期間に重複・建て替えなどが行われたと認められる状態で検出した。以下、これらの竪穴住居について概観する。竪穴住居の平面形態に付いてみると、方形を呈すもの18戸、多角形（五角形）を呈すもの1戸がある。多角形を呈する竪穴住居は弥生時代後期（末）で、方形を呈する竪穴住居は弥生時代後期～古墳時代前期（布留式併行期）である。方形竪穴住居は、一辺が4.28～8.84mと規模にばらつきがあり5m未満の小規模なもの（4戸）、5～6m強の中規模なもの（6戸）、7m以上の大規模なもの（4戸）とに大別が可能である。多角形を呈する竪穴住居の支柱穴は5カ所に認められ、方形を呈する竪穴住居は完掘できたものについてみると、4カ所に確認される。壁溝は完掘した竪穴住居についてみると、10・12号住居とした竪穴住居以外はすべて有している。このうち、11号住居はやや特異な状態を呈している。当住居の壁溝は北西壁の一部を除く壁体下にあるが、北西・北東・南西壁体下に径6～17cmの壁柱穴が22カ所で認められた。床面のほぼ中央にピットを有する竪穴住居は7戸あり、このうち地床炉と考えられる状態のものは3戸ある。貯蔵穴を有する竪穴住居は8戸あり、南・南東壁の中央付近に有するもの6戸、北東・北西角に有するもの2戸である。以上のように概観してきたが、3号住居とした竪穴住居はその平面形態が五角形という特異な形状を呈しており、概略を記すことにする。

検出面で北東—南西間8.74m、北西—南東間8.62mある。壁溝は全周し支柱穴は5カ

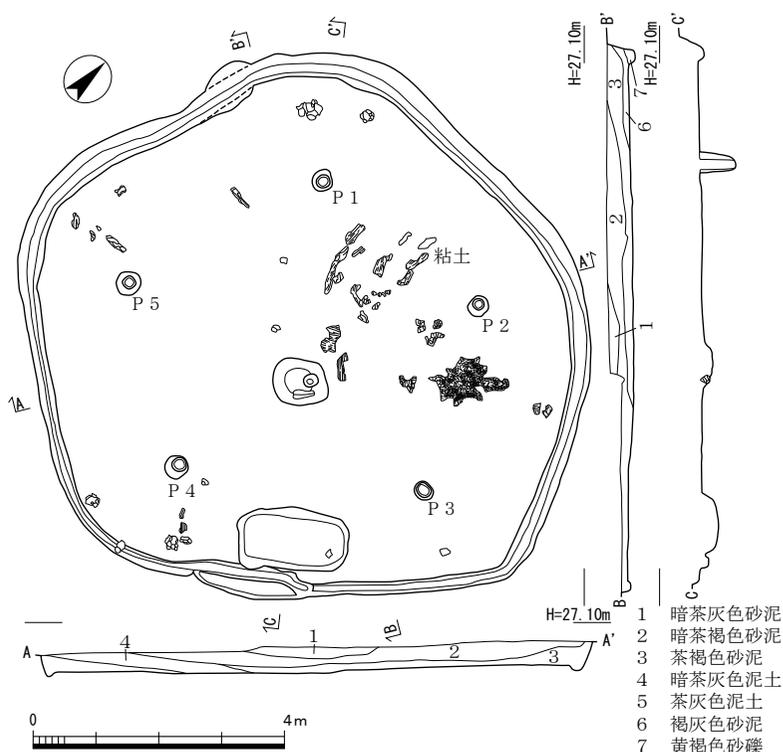


第6・20・56次遺構配置図（1:400）

所ある。床面中央から東に偏った位置にピットが1カ所あり、南東壁中央付近に貯蔵穴が1カ所ある。

遺物は各遺構から弥生土器、土師器、須恵器、鉄製品などが整理箱で54箱出土した。

小結 検出した竪穴住居群は周辺一帯に弥生時代後期～古墳



3号住居址実測図 (1:120)

時代前期に形成された竪穴住居群（集落）を構成する一部である。4～5世紀前半（ほぼ布留式併行期）の竪穴住居の実態は、これまでの中臣遺跡では判然とはしていなかった。今回、6戸ではあるが当該期の竪穴住居を検出したことにより、わずかではあるがその実態を明らかにする上で手掛かりを得た。その反面、当該期の集落が前代（第V様式～庄内式併行期）までと同様に竪穴住居のみによって集落が構成されるのか、あるいは竪穴住居と掘立柱建物とから構成されるのかという集落の構造（集団構成のあり方）に係わる重要な問題など、種々の課題は将来に持ち越された。

各竪穴住居から出土した土器は、やや器種に偏りが認められるが第V様式から布留式併行期までの時期に属する。これらの土器は、一括遺物としての評価が与えられ、中臣遺跡における当該期の編年作業を進める上で重要な位置を占める。また、これらは在地性の強い土器群であるが、その中には畿内中心部からの搬入品、畿内色の濃いもの、近江・東海色の濃いものなどがあり文化の伝播・交易圏などを考える上でも興味深い。

(平方幸雄・辻 裕司)

35 第57次調査

経過 調査地点は栗栖野丘陵を取り巻く様にして形成された低位段丘の西南部に位置し、旧安祥寺川とは約80m隔てた地点にある。当該地周辺の市街化道路及び宅地などに対し昭和50年度以降数次の発掘調査を実施し、弥生時代後期以降の竪穴住居・掘立柱建物・溝などを多数検出している。また、北接する10次調査地点では当調査区にまたがる掘立柱建物を検出しており、今回その未調査部分に対して調査を行った。調査は、対象地のほぼ全面にわたって実施した。

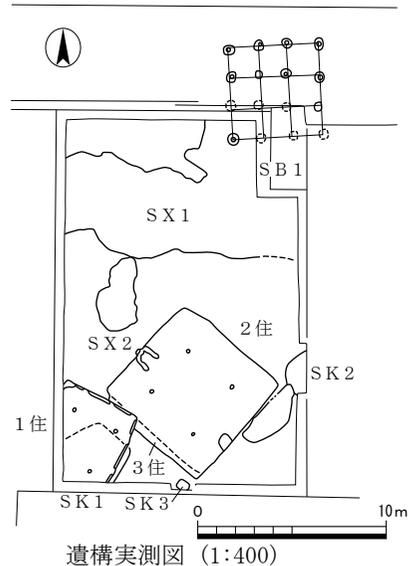
遺構・遺物 調査区の層序は耕土・床土が30～55cmあり、北側約3分の2では床土下に暗黄灰色泥土層が40～60cmあり、縄文土器(晩期)が少量出土した。南側3分の1では床土下が地山の黄灰色泥土である。検出した主な遺構は古墳時代後期の竪穴住居3戸、飛鳥時代の掘立柱建物1棟である。その他に弥生時代後期～古墳時代前期の土壌などがある。遺物は各遺構及び暗黄灰色泥土層から整理箱で17箱出土した。

竪穴住居は調査区南半で検出した。平面形は3戸とも方形を呈する。南西隅で検出した1号住居は2・3号住居の一部を掘り下げて構築する。当住居の南西部は調査区外にあり未調査である。2号住居は3号住居の建て替え後の竪穴住居であり、検出面で長軸6.80m、短軸6.40mある。なお、北西壁にカマドを付設する。

掘立柱建物(SB1)は、これまでの調査結果を総合すると3間×3間の総柱建物で、東西・南北の柱列とも柱間寸法は1.7-1.4-1.7mである。

小結 1・2・3号住居は古墳時代後期に形成され、周辺一帯に密に展開する竪穴住居・掘立柱建物群(集落)を構成する一部である。SB1は真南北に対して北で3.5°西に振るが、真南北に対して方位性を有する建物である。これまでの調査で、7世紀中頃以降の掘立柱建物は真南北に対して方位性を有すると考えられ、7世紀中頃以降の掘立柱建物の一端が窺える好資料である。なお、当該期以前の掘立柱建物は、竪穴住居と同じくその方向はまちまちでありその変化は大きい。

(平方幸雄・辻 裕司)



36 第58次調査

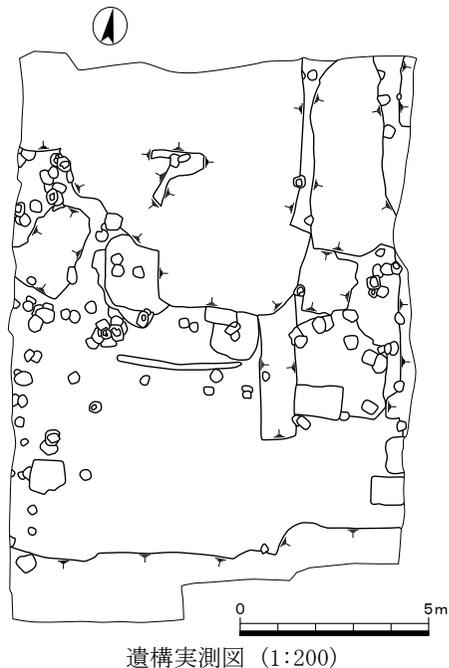
経過 福田金属箔粉工業（株）が当該地にCF電解工場を新築することとなり、遺構の残存状態などを確認するために試掘調査を行った。その結果、対象地の南半部で土壙などを確認したことから、発掘調査を実施することとなった。

調査地点は栗栖野丘陵の北西先端部付近に位置しており、旧安祥寺川によって削り出された低位段丘部に近接した地点にある。当該地周辺では、これまで1ヶ所（9次）について調査が実施されたのみであり、遺跡の実態が把握しきれていない地域であった。そのため、当該地周辺の実態を明らかにする上で今回の調査は大きな意義があった。

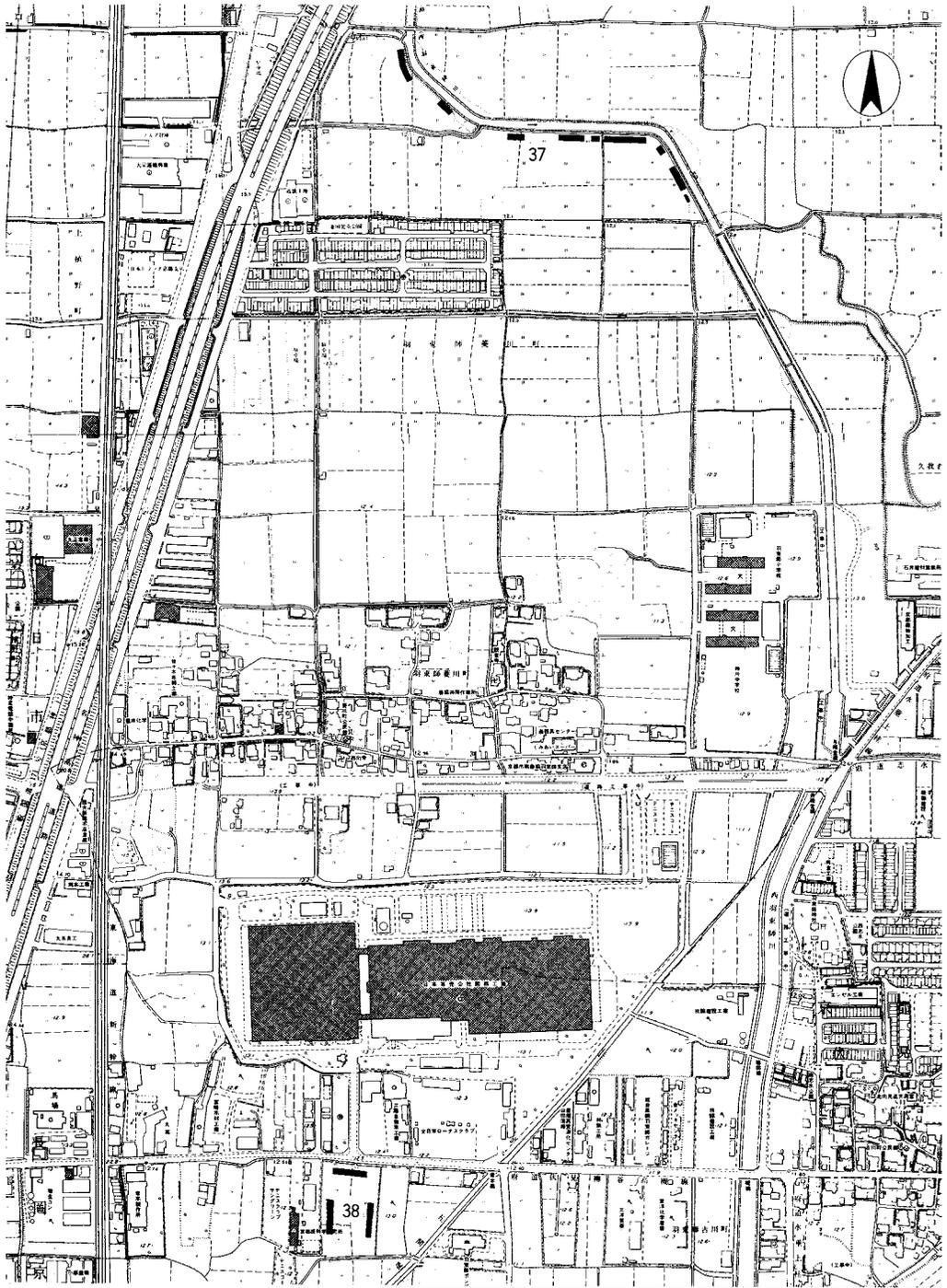
遺構・遺物 調査区の層序は積土が30cmほどあり、以下茶灰色砂泥（鎌倉～室町時代、10～20cm）。茶褐色砂泥（無遺物層、40～50cm）、暗黄灰色泥土（無遺物層）が堆積する。検出した主な遺構には土壙・柱穴などがある。柱穴には根石を有する柱穴と有しない柱穴があり、また重複している状態も認められ、数時期にわたると考えられる。柱穴の配置された状態から数棟分の掘立柱建物、柵などが考えられる。しかし、調査区が狭小なことから柱穴が密集している北半が現代攪乱により削り取られていることなどから、建物・柵などの規模・形態などを明確には復原し難い。土壙は6カ所で検出し、これらの時期は平安時代末～鎌倉時代である。遺物は茶灰色砂泥、土壙、柱穴などから土師器皿、須恵器甕・鉢、瓦器羽釜・鍋などが整理箱で3箱出土した。

小結 調査地点では平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物・柵・土壙などを多数検出し、更に鎌倉時代～室町時代の比較的良好な遺物包含層が遺存していることが判明した。この様な調査成果と9次調査の成果（鎌倉時代を中心とした時期の掘立柱建物を検出）と合わせ考えると、付近一帯には平安時代末～室町時代の集落が展開していることは確実である。中臣遺跡の当該期集落の様相を復元する作業を進めて行く上で重要な成果を得たといえよう。

（平方幸雄）



VI 長岡京跡



37 左京三条三・四坊

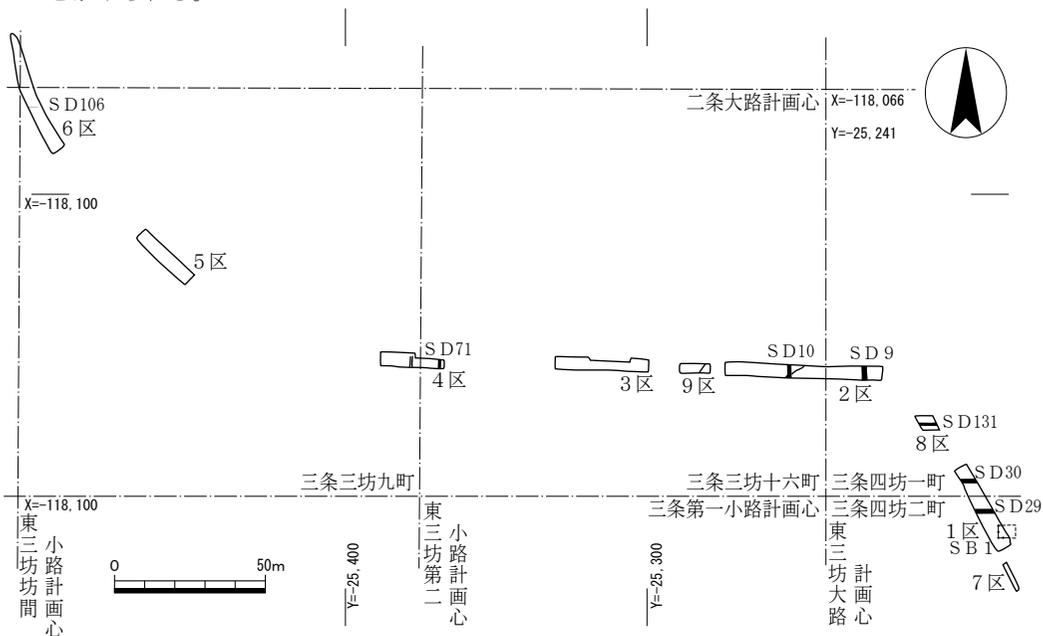
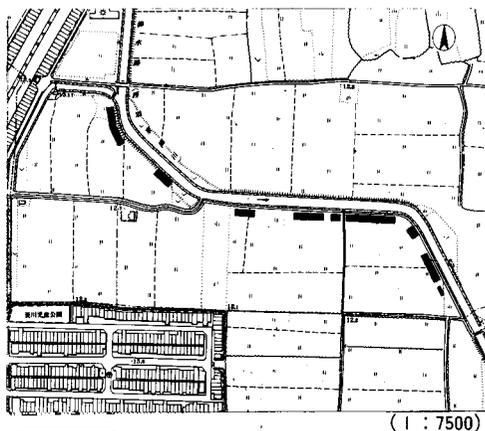
経過 西羽東師川改修工事に伴う発掘調査で昭和55年度より継続して実施している。今年度は、4年目にあたる。既往の調査については、昨年度の報告に述べた。

今年度の調査地は、長岡京左京三条三・四坊跡に位置し、河川の右岸のみを対象とした。

条坊関係遺構としては、東西路の二条大路・三条第一小路・南北路の東三坊大路・東三坊第二小路・坊間小路などの推定地である。

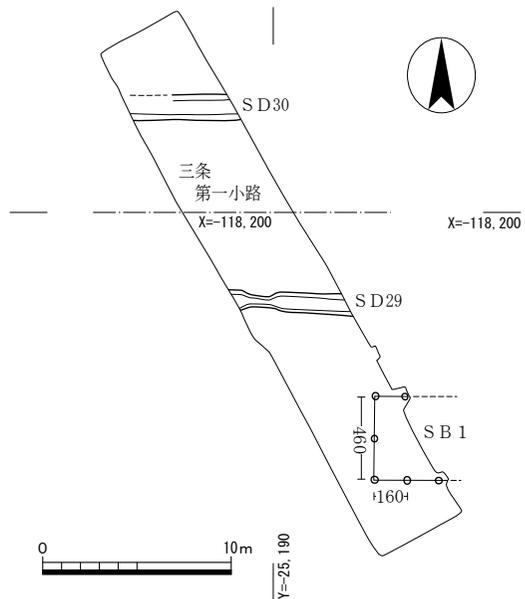
調査区は、上述した各路の推定地及び各町割りの中央にあたる部分に設定し、必要に応じてその間に新たに設け、幅4mで都合9ヶ所（1～9区）を設定した。調査区一帯は、すべて水田として利用されており、条里制をよくとどめている。

遺構・遺物 長岡京期の遺構面は、各調査区とも、水田耕作土より約60～80cm下で検出された。この上層あるいは同一面で、中世の遺物を包含する堆積土ないしは溝・落込などがみられる。



遺構配置図 (1:2500)

条坊遺構は、1区で三条第一小路、2区で東三坊大路を明確に検出した。残る東三坊第二小路推定地の4区では、東側溝と思われる部分で浅い溝状遺構（SD71）を検出したが、西側溝はわずかに溝らしき痕跡を認めるのみで、当小路については不明確である。また、今回の調査で最も期待された二条大路及び東三坊坊間小路推定地についても、東西に走る溝（SD106）を検出しているが、北側溝にあたる部分は砂礫層がみられ、溝らしき遺構は検出されなかった。以下各調査区の遺構・遺物を述べる。



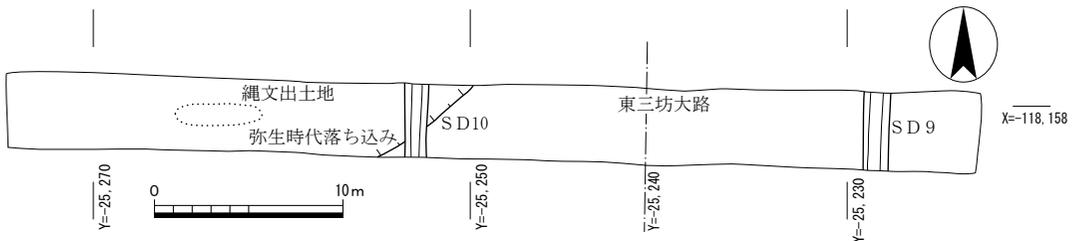
1区遺構実測図 (1:400)

1区：推定された三条第一小路両側

溝と小路南側の左京三条四坊二町内では桁行3間、梁行2間と思われる東西棟の建物跡を検出した。またほぼ同一面で弥生時代中期の壺が出土した。

第一小路の北側溝（SD30）と南側溝（SD29）の中心間距離は9.4m（中心座標 X = -118,200.10, Y = -25,191.00）を測る。SD30（中心座標 X = -118,195.40）は、幅1.1m、深さ0.2mを測る。埋土より土師器、須恵器、軒丸瓦（6133 A型式）・軒平瓦（6671 C型式）、和同開珎を出土している。SD29（中心座標 X = -118,204.8, Y = -25,188.0）は、幅80cm 深さ20cmを測る。建物は、南北2間、東西2間を検出した。梁行2間、桁行3間の東西棟と思われる。梁行1間2.2m、桁行1間1.6mを測る。

2区：長岡京期の遺構として、東三坊大路両側溝と、東端部で柱穴らしきピットを検出



2区遺構実測図 (1:400)

した。東側溝（SD9）と西側溝（SD10）の中心間距離は24.8mを測る。SD9（中心座標X = -118,160.0, Y = -25,228.45）は、幅80cm、深さ10cmの浅い溝である。南端部に集中して遺物がみられ、土師器（杯・皿・甕）などが出土している。SD10（中心座標X = -118,160.0, Y = -25,253.24）は、幅1m深さ10cmを測る。柱穴は、調査区東端部で1個のみ検出され、掘形は、方形に近く、一辺約20cmを測り、径16cmの柱根が残存していた。

同区では、SD10付近で北西方向へ落込む腐植土層の堆積がみられた。弥生時代の自然堆積と思われるが、遺物は出土していない。また、長岡京期の遺構面より約1m下の標高9.9m前後で、流木（径約20～80cm）を多数含む砂ないしは砂礫層の中で、北白川上層式の縄文土器片を6片出土している。

3区：左京三条三坊十六町の中央に設定した。瓦器片などを出土したものの、遺構はみられなかった。

4区：東三坊第二小路推定地に限定した。東側溝推定付近にSD71を検出した。この溝を境にして、東部は腐植土層が堆積しており、これより、瓦片、木簡を出土した。木簡は墨書をわずかに残すが判読は不可能である。

5区：左京三条三坊九町の中央に設定した。耕土下約1mで緑灰色粘土層がみられ、東へ全体に傾斜し、この部分に灰色砂及び砂礫層の堆積がみられた。この堆積土は粘土層上面まで瓦器片の混入があり、中世に削平を受けたことがわかった。

6区：二条大路と、東三坊坊間小路が交差する位置にあたる。調査区北半は、砂礫層、南半は灰色砂泥などの粘土層がみられた。調査区南部は、5区より続く中世の落込、溝などがみられた。長岡京期遺構は検出されず、わずかに溝SD106がこの時期と思われるが遺物の出土はない。

7区：1区の南に設定し、SB1南方の様子を確かめ遺物を少量出土したのみである。

8区：1・2区の間で設定し、SD131を検出したが、長岡京期と断定できない。

9区：2・3区の間で設定したが、遺構は検出されなかった。

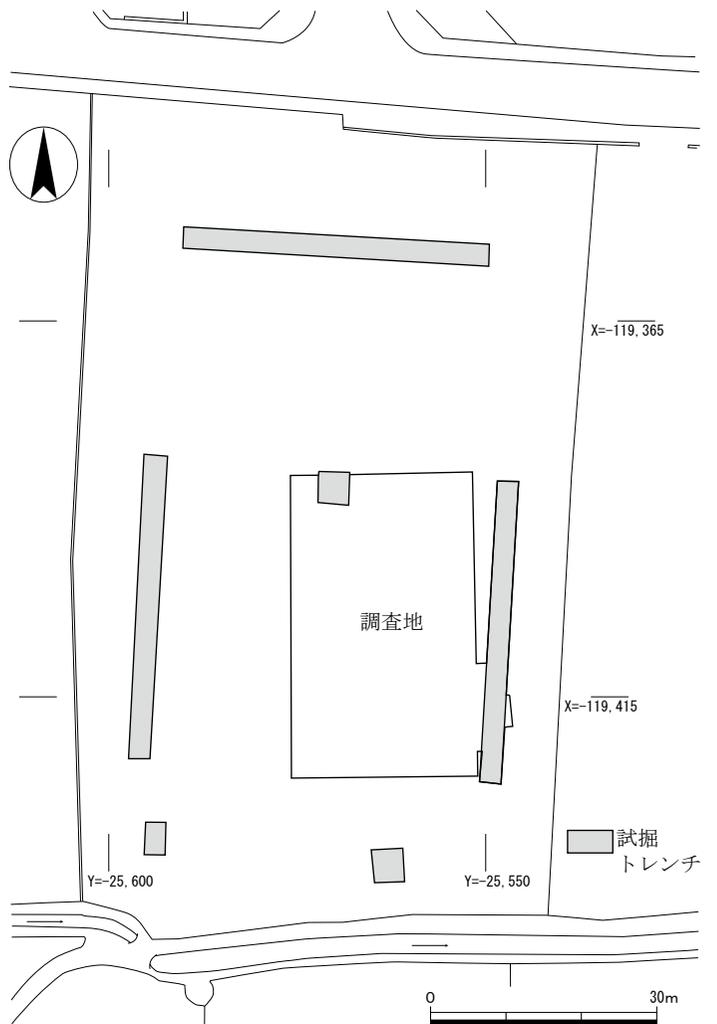
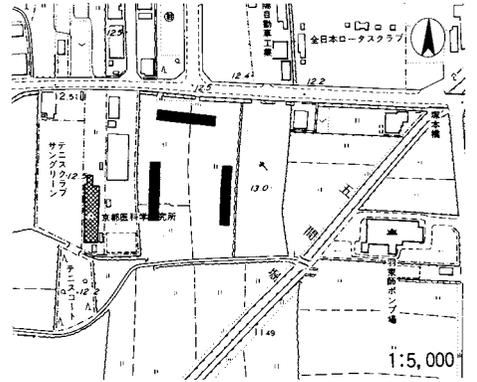
小結 今回の調査では条坊遺構として東三坊大路、三条第一小路の2本を検出した。三坊大路は既往の調査で確認されていたが、小路は今回初めて確認できた。各区とも中世土器片の出土がみられ、この時期に削平を受けた様である。全体を通して高低差をみると西が高く東へ緩やかに傾斜していることがわかる。この地形はベースとなる砂礫層の高低差に影響していることがわかった。（鈴木廣司・長宗繁一）

38 左京五条三坊

経過 伏見区羽東師古川町 332～336 に大日本スクリーンの工場が新設されることとなった。当地は長岡京左京五条三坊に推定できることから、昭和 59 年 2 月 8 日から 29 日にかけて試掘調査を行った。結果として五条条間小路の存在を明確にし得なかったものの、2 時期にわたる水田面を検出することができた。そのため水田遺構の調査を主眼として同年 4 月 12 日から 6 月 30 日に至る間、発掘調査を実施した。調査対象面積は試掘調査を加えると約 1300㎡である。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、現水田面（標高 12.2 m）下約 20cm まで耕作土がみられ、その下に若干の遺物を包含する数層を置いて、約 70cm で第 1 面水田遺構の成立する黄灰色泥土がみられる。次いで約 1.1 m で第 2 面水田遺構の成立する灰色粘土がみられ、約 1.4 m で第 3 面の緑灰色粘土となる。同層以下は無遺物層となり、粘土、砂及び腐植土が混ざる砂泥の互層がみられ、約 2 m で青灰色砂礫となる。この砂礫は北東に傾斜し最深部で約 2.5 m が測れた。

第 1 面水田遺構は、南北 2



調査区配置図 (1:1000)

本、東西1本の畦畔と多数の足跡を検出した。これらの畦畔は乙訓郡六条水将里6ノ坪に位置するもので、東西方向に検出した畦畔は坪（約109m四方）の中央を東西に走り、坪を南北に二分している。南北方向の2本の畦畔は東西に分割するための畦畔であろう。時期は平安時代と考えている。

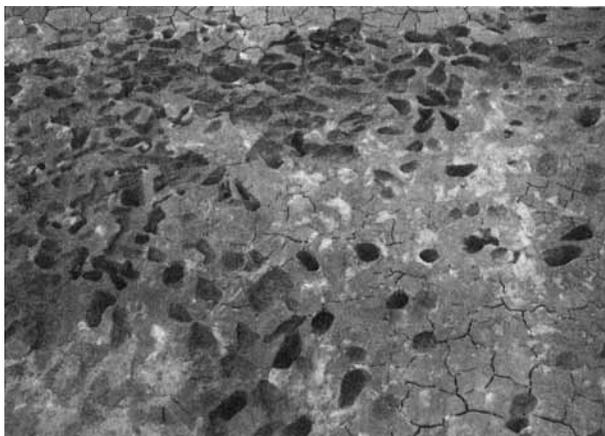
第2面水田遺構は北西から南東方向に走る畦畔と、これに直交する畦畔を多数検出した。このうち北西から南西方向に走る畦畔が主軸となり直線的に造られ、これに直交する形で任意に畦畔を造っている。しかし一枚単位の水田面積はかなりのバラツキが認められる。時期は古墳時代と考えている。

第3面は試掘調査では認めることができなかった。検出した遺構は、調査区北東隅で溝状の遺構、南東部で検出した工房跡と考えられる遺構の他に、ピット10数個、小溝5本がある。工房跡は、西側で溝2条が半円形に回り、北側には浅い溝と土壇1基を設けている。中央部には焼土塊・焼灰が多量に集中して堆積した。この焼土・灰の性格は遺物がまったく出土しておらず不明であるが、堅穴住居とも考えられる。弥生時代の遺構と思われる。

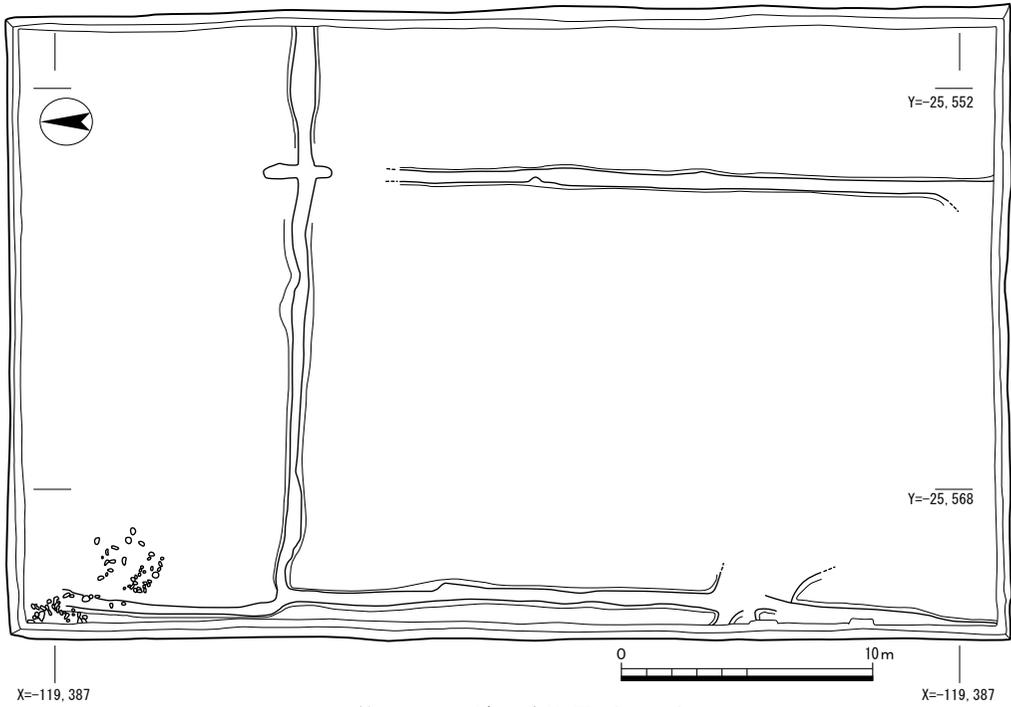
遺物の出土量はごく少なく、遺物整理箱にして2箱を数えるのみである。土器類は室町時代以降のものが全出土量の半数近くを占める。第1面水田遺構からは平安時代の土師器・黒色土器・須恵器が出土した。第2面水田跡からは古墳時代の土師器・須恵器・弥生土器・石鎌・石包丁が出土した。第3面では土壇・溝などから弥生土器が出土した。

小結 今回の調査により、初めて山城盆地における古墳時代の水田遺構を認めることができた。またその規模においても全国の数カ所で認められている古墳時代の水田遺構と類似した状況であることから同時代の水田経営のありかたを知る一端となるといえよう。しかしここで問題となるのは長岡京時代の遺構を認めることができなかったことである。これまでの周辺の調査で長岡京に関連する遺構が数多く認められているにもかかわらず、今回の調査ではみることができなかったことは、削平を受けたと考えるだけでなく、更に慎重に検討を加えねばならない。

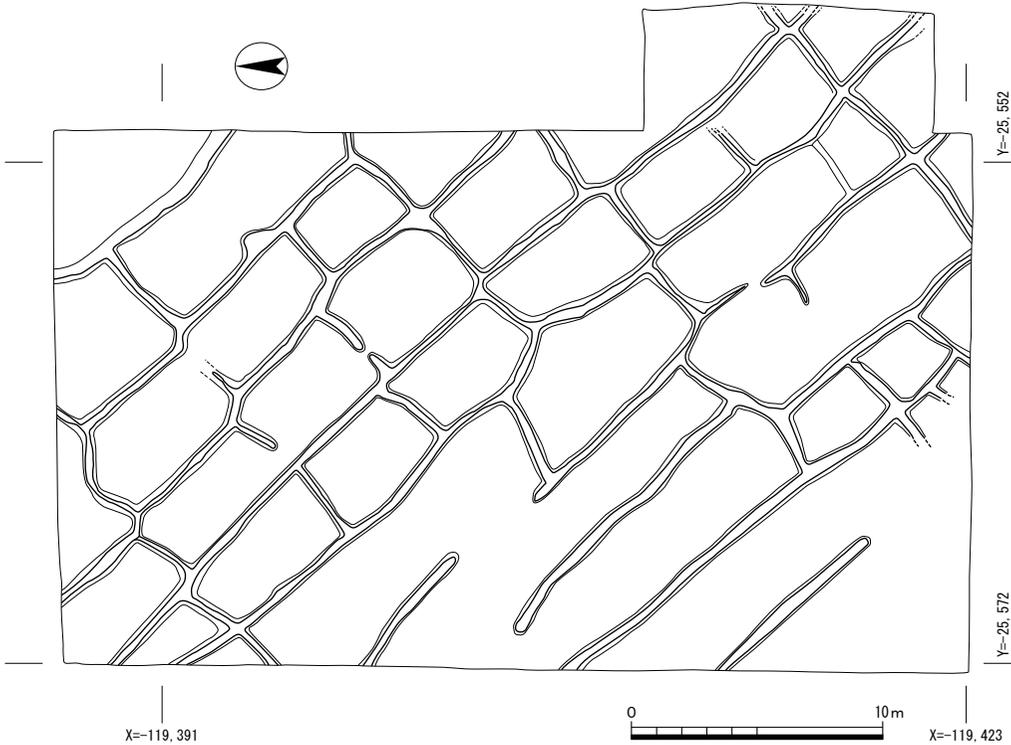
（長宗繁一・鈴木廣司）



第1面水田遺構（東から）



第1面水田遺構実測図 (1:300)

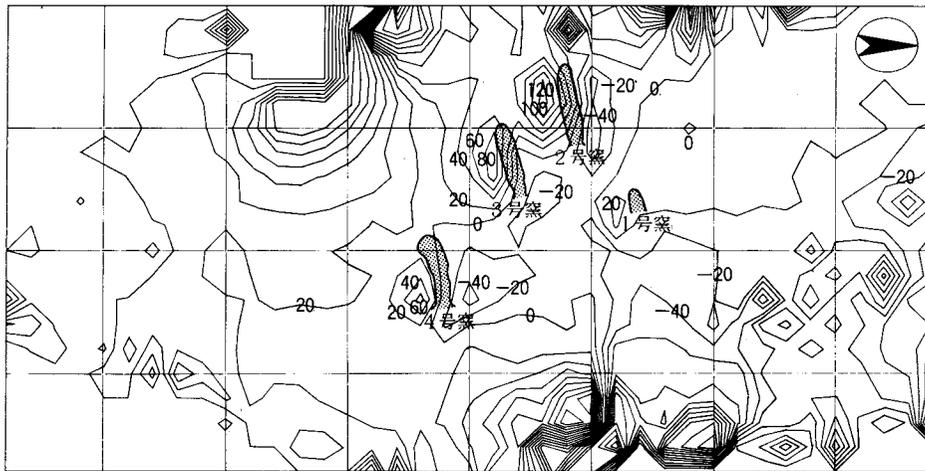
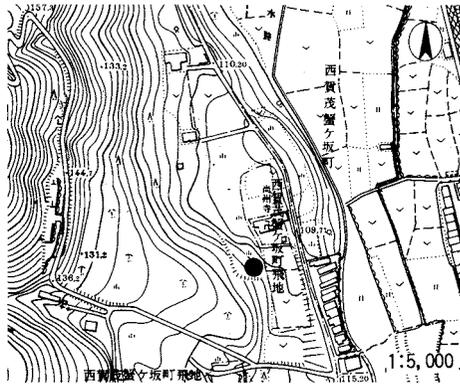


第2面水田遺構実測図 (1:300)

Ⅶ その他の遺跡

39 蟹ヶ坂瓦窯跡

経過 蟹ヶ坂瓦窯跡は賀茂川右岸の段丘上部（標高113～122 m）に位置する。付近一帯は、西賀茂鎮守庵瓦窯跡、醍醐の森瓦窯跡、船山窯跡など多くの窯跡が点在し、西賀茂窯跡群として知られている。本窯跡は昭和46年頃、土取りによって断面に露出した1基の窯が発見されたことにより窯跡として確認された。今回当地で京都市教育委員会により中学校建設の計画が立てられ、校舎予定地の一部が窯跡にかかることが予想されたため、窯跡一帯の分布調査及びボーリング調査を行った。分布調査の結果、既発見の窯跡（1号窯）の南部に少量の瓦の散布が認められ、またボーリング調査によっても若干の焼土を検出したが、調査地南部は竹林造成のため客土が非常に厚く、詳細を知るには至らなかった。そこで1号窯周辺の南北80 m、東西40 mにわたり、プロトン磁力計による磁気探査を行った。その結果1号窯の他にも窯跡が存在する可能性が極めて高いことが明らかになったため発掘調査を行うことになった。発掘調査は当初1号窯と、探査により磁気異常の認められた地点3カ所の試掘から始めた。試掘によって1号窯の南側に3基（2～4号窯）の窯体を検出したためトレンチを拡張し、これら4基の窯跡を含む地域を調査区とした。更に4号窯周溝を追及する過程で、もう一条の



地磁気分布図

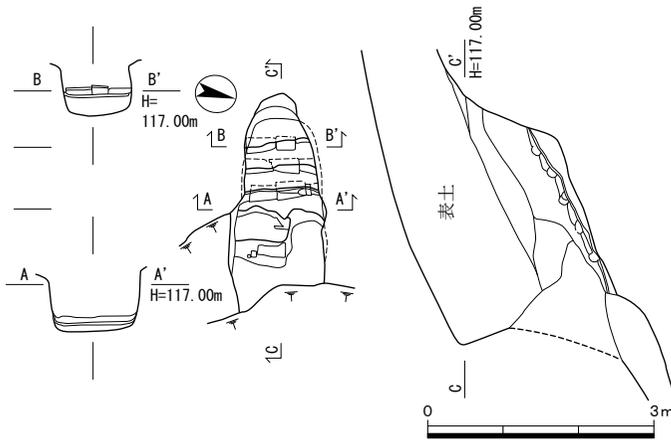


遺構配置図 (1:300)

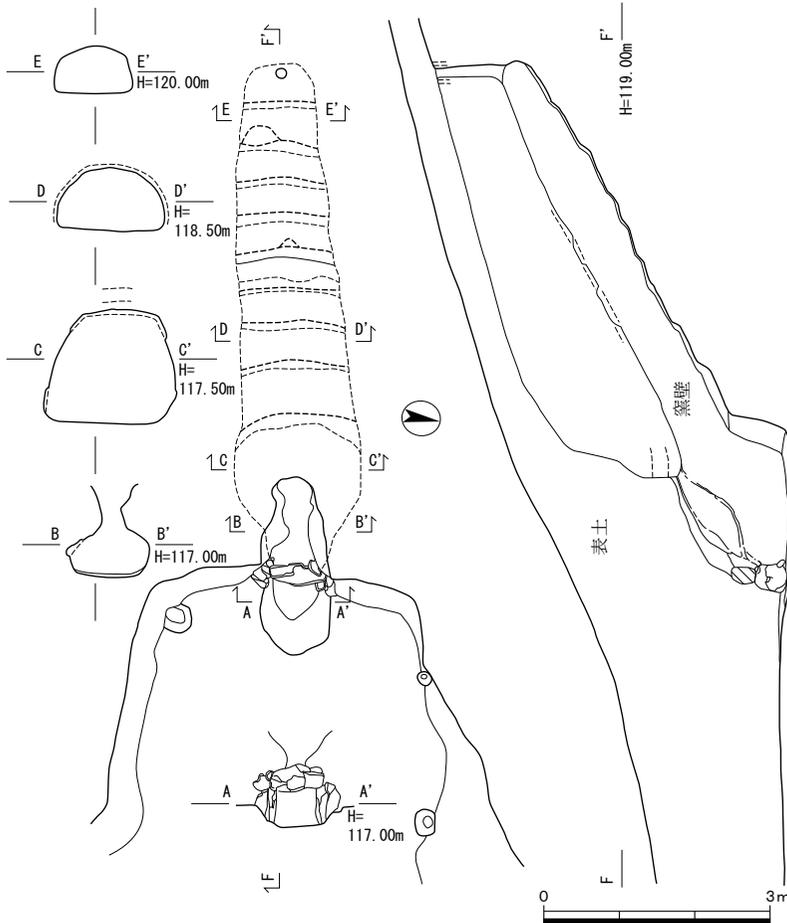
溝 (SD 02) が大きく他の3基の窯を取り囲む様な状況で検出されたため、斜面上方へも調査区を拡張した。

遺構 今回の調査で検出した遺構は、窯4基と窯に伴う溝2条、及び性格不明の焼土壙 (SX 03) 1基である。窯の存在する斜面下部には土取りの痕跡が認められたが、1号窯を除く3基の遺存状況はよく、特に2, 3号窯については天井部も完存していた。しかし各窯の灰原は土取りのためほとんど失われており、斜面下部で出土した遺物の大半が二次堆積土中のものである。以下に各遺構について述べることにする

1号窯 土取りのため半壊しており、焼成室の上部を残すだけである。更に断面が露出していたため一部盗掘を受けている。天井部も失われており、煙道部は不明である。床面は幅1m、約2.4m残存しており、瓦と粘土を用いて造られた段が5段確認できた。残存部の床面傾斜は約30°である。焼成室は赤褐色を呈する。



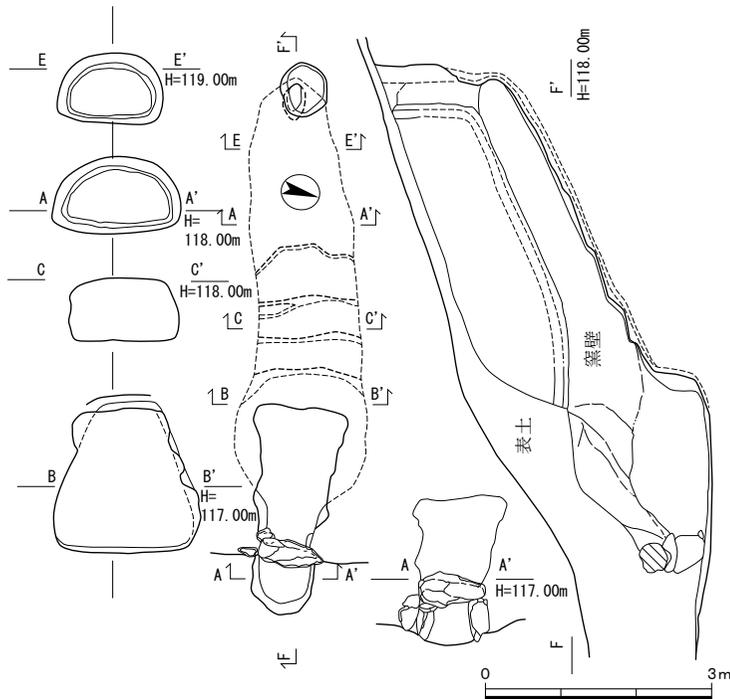
1号窯実測図 (1:100)



2号窯実測図 (1:100)

2号窯 灰原は全く失われていたが、窯の本体及び前庭部は完存していた。丘陵斜面を平坦に削り込んで前庭部とし、そこから更に上方へトンネル状に地山をくり抜いた地下式の穴窯である。全長約8m焼成室の最大幅1.5m、焼成室と燃焼室の境に約90cmの高低差を持つ。焼成室の床面には地山を

削り出して9段の段を造っている。床面の傾斜は27°である。天井部や段の一部に粘土で補修した痕跡は認められるが、複数の床面は確認されなかった。燃焼室床面は少なくとも2枚以上確認できたが、中央部が浅く窪んでおり、それが焚口前方の窪みに続いている。焚口にはチャート質の石材を用いた石組みが施されている。燃焼室天井部前部は失われていたが、これは製品取



3号窯実測図 (1:100)

長約7m, 焼成室最大幅1.5m。段は床面下方に4段確認できたが, 上方は不明である。床面の傾斜は約27°。焚口も2号窯同様チャートを用いて造られている。煙道部は一部が崩れていたが, 残存部からこれも2号と同様のものが推定できる。

4号窯 天井部の大半が失われており, また地下水のため壁や床面もかなり崩れていた。全長8m, 焼成室の幅2.2m。床面には瓦を用いて段を造った痕跡があるが, 湧水のため原形が著しく損なわれており, 正確な段数や床面の枚数は不明である。床面の傾斜は約24°。燃焼室床面は固くしまった面と炭層が相互に堆積し, 少なくとも4枚認められた。最下層では平瓦を敷き詰め, その上に粘土を薄く張り付けた床面を検出した。この床面と焼成室の高低差は約65cm, 最終床面では95cmになる。煙道部は主軸上と更にその北側にもう一つ検出した。焚口には石組みの痕跡があったが, 2・3号窯と異なり花崗岩を使用している。前庭部の規模は2号窯とほぼ同じである。前庭部には灰層の堆積が厚くみられたが, これは4号窯自体のもので, その上部に堆積した2・3号窯(主に3号)方向から流入したものの2層に大きく分けることができる。この3号窯のものと思われる炭層はSD1の北部を埋め, 更に4号窯前庭部北側に流れ込んでいる。

SD1・SD2 この2条の溝はいずれも窯体への地下水の流れを断つ目的で掘られた

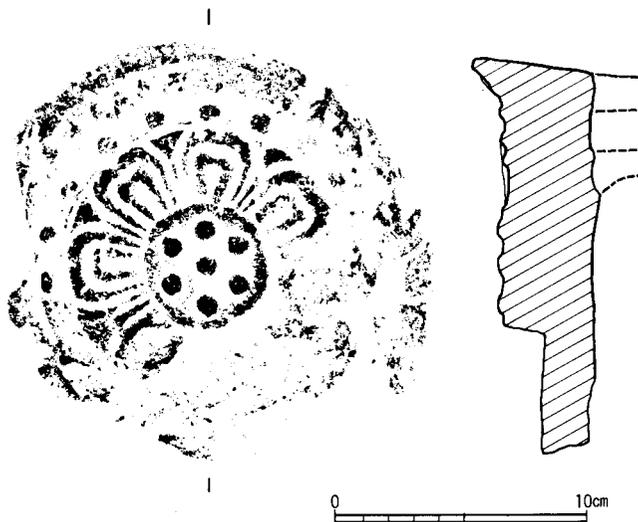
り出しの際のものと思われる。煙道は径15cm前後でほぼ垂直に立ち上っている。検出長は約1m。窯内はほぼ全面青灰色を呈する。前庭部は約4m四方の平坦な面をなし, 直上には灰混じりの土層の薄い堆積がみられた。

3号窯 窯体の構造は2号窯によく類似しており, 遺存状態も同様である。全

ものと思われる。SD1は幅1m～2m、深さは最も深いところで1.8m。4号窯を斜面上方から取り囲む様に掘られている。SD2は1～3号窯を取り巻く半円状の大規模な溝で、幅1.5m～3m、深さは最深部で約3mあるが3号窯主軸との交点あたりで急に浅くなりSD1に接続する。溝底部のレベルは深さが急変する部分から北方へ向かって低くなっている。

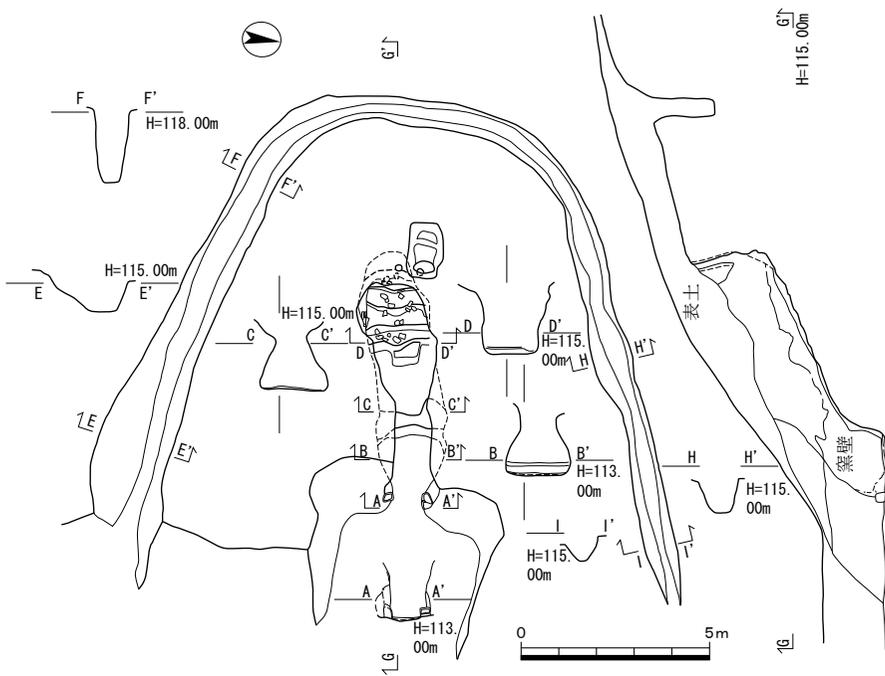
SX1 4号窯の南側に検出した長辺1.2m程の台形状の平面形を呈する焼土塋である。壁や床面が火を受けており、内部には炭や灰が堆積していたが、遺物は全く出土せず時期や性格は不明である。

遺物 灰原が削平されていたため遺物は少ない。整理箱に約200箱出土したが、この8割以上が二次堆積土からのもので、遺構に伴うものは少ない。内容は主に瓦類で、他に数点の須恵器、土師器、瓦質の円面硯がある。以下、概括的に述べる。

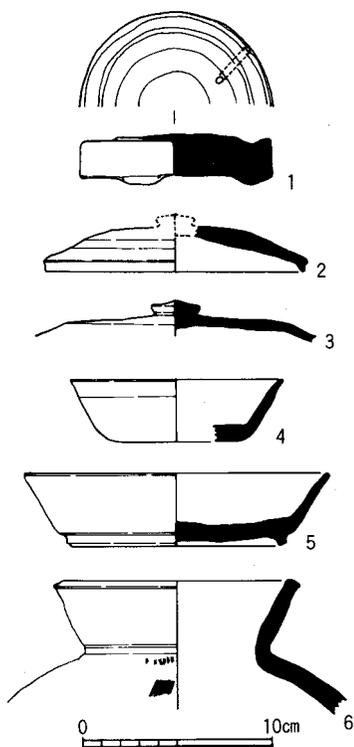


軒丸瓦拓影・実測図 (1:3)

瓦類には丸瓦、平瓦、軒丸瓦がある。大半が丸瓦、平瓦で、軒瓦は軒丸瓦が6点出土しただけである。丸瓦はすべて行基葺式のもので長さ39～40cm、広縁外弧長27～28cm、狭縁外弧長18～19cm。外曲面は縄目タタキが残る例もあるが、横方向に丁寧にナデ消す。布目は細かく均一なものが多い。平瓦には長さ36～38cm、広縁外弧長31～33cm、狭縁外弧長28～29cmで桶巻4枚作りのもの（Ⅰ類）と、やや小型で長さ32～33cm、広縁外弧長27cm、狭縁外弧長24cmで一枚作りのもの（Ⅱ類）とがある。Ⅰ類には広縁の両隅を斜めに切り欠くもの（Ⅰ-a類）と、切り欠きのないもの（Ⅰ-b類）があり、共に外曲面の調整には、平行タタキと縄目タタキの二種がある。いずれも布目は細かいものが多い。Ⅱ類の平瓦は外曲面縄目タタキ、四辺を丁寧にヘラケズリで調整している。軒丸瓦は6点すべて同文（おそらく同範）で、七葉の複弁蓮華文、中房の蓮子は1+6、外区に珠文、周縁には鋸歯文を配する。いずれも焼成は悪く、表面はかなり摩滅している。土器類には窯内から出土したものはなく、須恵器杯A（4）が2号窯、杯B（5）が4号窯前庭



4号窰実測図 (1:200)



土器類実測図 (1:4)

部から出土したもので、蓋（2, 3）及び甕はすべて二次堆積土中からのものである。図示したものの他に土師器甕の破片が少量出土しているが、これも二次堆積土中からのものである。硯（1）は円盤状の体部下面の三方に低い脚をはり付けたもので、陸部の周囲を浅く窪ませ、外縁をわずかに高く造っている。外縁上端部から斜め下方に小孔が穿たれている。焼成は非常に甘く軟質である。4号窯周溝に堆積した3号窯の灰層から出土した。

小結 前述した様に蟹ヶ坂瓦窯については、すでに窯1基が確認されていたが、今回の調査により新たに3基の窯を検出することができた。周辺の分布調査の結果や、外周の溝（SD 02）の配置などからはこの4基の窯が一つのまとまりをなすことは明らかである。また出土遺物からみるとこの窯が瓦専業窯で、西賀茂窯跡群の瓦窯跡としては現在の所最も古く位置づけら

れるもの（白鳳期）であることも確認できた。更に本窯跡出土の軒丸瓦と、上出雲寺跡に推定されている上御霊神社境内から出土した軒丸瓦の中に同範のものがあることが判明した点についても大きな成果であるといえよう。個々の窯の推移や出土瓦の窯による内容の差などの検討は今後の課題であるが、現在までに確認できた点を以下に挙げて、まとめに替えたい。

遺構について

窯体構造や、構築場所の標高は1, 4号と2, 3号窯がそれぞれ共通したものを持つ。灰層の関係から4号窯は3号窯より先に操業を停止している。

4号窯には独自の防水対策（燃烧室床面の瓦敷きやSD 01）がなされている。

遺物について

丸瓦の特徴はすべての窯に共通する。

平瓦は、2・3号窯ではI・II類ともみられるが、4号窯ではI類のみである。

1号窯床面の段の平瓦はI-b類、4号窯燃烧室床面のものには硬質のI-a類が多い。

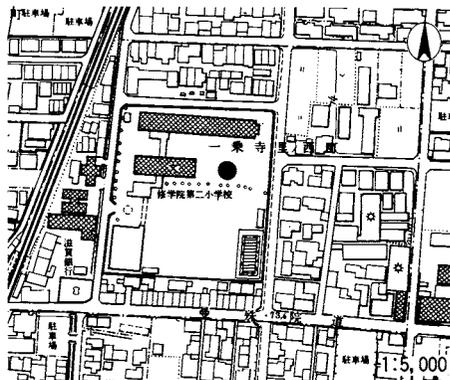
軒丸瓦は4号窯前庭部及びその下方の流土中からしか出土していない。

これらのことを挙げることができる。

（平尾政幸・久世康博）

40 一乗寺松田町遺跡隣接地

経過 この調査は、左京区一乗寺里ノ西町に所在する修学院第二小学校給食室改築工事に伴って実施されたものである。調査地周辺は、平安時代の遺跡である一乗寺松田町遺跡があり、これに隣接していることから、関連する遺構・遺物の検出が予想された。まず試掘トレンチを工事範囲に設定し遺跡の確認を行った。



その結果、平安時代後期の遺跡が認められたため、工事区全域に調査を行うことにした。調査は、建物範囲と同規模の東西12m、南北19.2mを対象としたが、その北側が既存建物の基礎により破壊されていることから、実際は東西11m、南北12mの調査区を設定し開始した。

遺構 調査区内での基本層序は、まず現地表から厚さ50～60cmの小学校建設時の整地層が認められる。次いで厚さ20cm程の近世の耕土と考えられる暗灰色泥土層が堆積する。この下は、厚さ5cmの薄い暗灰黄色泥砂があり、この上面から室町時代の遺構が認められた。次いで厚さ15～20cmの平安時代中期の遺物を含む黄褐色砂泥層があり、この上面で平安時代後期から室町時代に至る数多くの遺構を検出した。これより以下は、厚さ10～15cmのオリーブ褐色砂泥、厚さ20cmの灰オリーブ色泥砂、厚さ50cmの褐色砂礫となる。この層からはわずかに摩滅した弥生土器小片が出土した。この層より以下は砂と砂礫の互層となり、流路の堆積層である。

検出した遺構には、柱穴、溝、土壇などがあり、その時期は平安時代から室町時代までに属する。柱穴群は、主に調査区の西部で検出されたもので、数十個確認した。しかし、これらの柱穴は、調査区が狭小なためにどのような建物になるかは不明である。柱穴は径30～50cmの円形を呈するものが多く、深さは20～40cmである。このうち平安時代に属するものは、柱穴の底部に礎石に使用されたと考えられる扁平な河原石を据えているのが認められた。また、柱穴の上層は灰・焼土などに覆われていたことから火災にあったと考えられる。

溝は、調査区の中央部・東部で認められ、南北方向のものが多く、重複して検出されたものもある。溝の規模は0.5～2mと各々異なり、深さは40cm前後といずれも浅い。このうち調査区東部で直角に折れ曲がる矩形を呈する溝がある。この溝は、調査区の北東部か

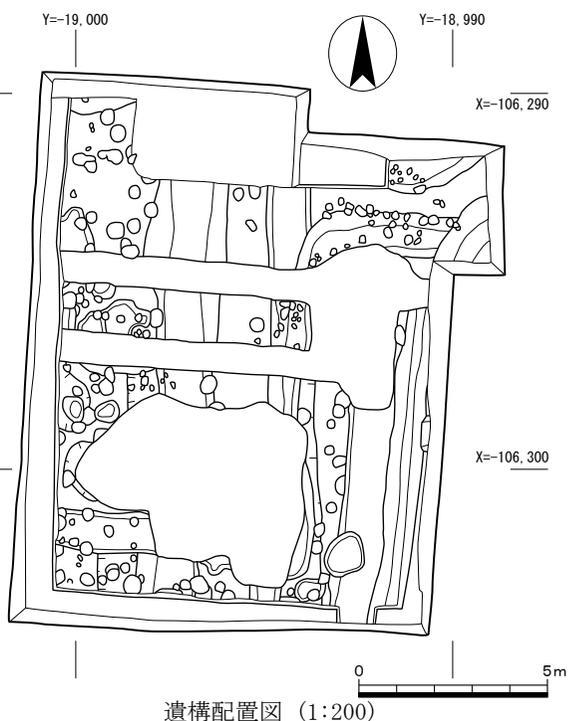
ら西に進み、中央部やや東で南に折れ曲がっている。溝幅は1.2 m、深さ30cmの逆台形を呈し、北肩と西肩には護岸の痕跡が認められた。護岸は、長径20～30cmの河原石及び花崗岩が使用され、一部で二段積みになっているのが認められた。この溝は、出土遺物から室町時代のものと考えられる。

遺物 遺物は整理箱で12箱出土し、土器、鉄製品、銭貨などで、その大部分は土器が占める。これらの遺物は、弥生時代から室町時代まで及ぶが、量的には室町時代のものが多く、主に溝より出土する。またこれらは、いずれも破片で少量出土したに過ぎない。

土器には、弥生土器、土師器、瓦器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器などがあり、室町時代に属するものが多い。鉄製品としては鉄釘、鉄片などで調査面積に比べてやや出土量が多く、目立っている。銭貨はすべて中国銭で、そのうち調査区西北部の土壙からは五枚出土した。このうち判読できたものに「天禧通寶」「元符通寶」「洪武通寶」などがある。

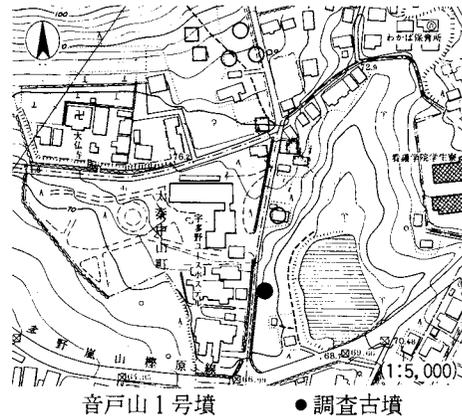
小結 調査の結果、平安時代から室町時代に至る遺構・遺物を数多く検出した。これらの遺構の検出状況を見ると、調査区の西部では柱穴、土壙が集中し、東部では南北溝が検出され、その様相が異なっている。また遺構群は重複関係や出土遺物から数時期に分かれ、このような遺構配置がかなりの期間踏襲されていたことが窺える。一方これらの遺構群の性格は出土遺物から知ることができないが、文献資料をみると調査地周辺には「藪里」という郷があり、室町時代後半、一乗寺周辺は土豪渡辺氏の勢力範囲であったと言われている。今調査で検出した遺構群もこれらとの関連が予想され、この地域の歴史の変遷を明らかにできたことは貴重なことである。

(鈴木廣司・堀内明博)



41 音戸山古墳群（1）

経過 京都市右京区太秦三尾町に所在する音戸山1号墳は、その東側にある通称播鉢池の埋立て工事と共に埋没し、その位置すら不明確な状態になったため、昭和58年4月から発掘調査を開始することになった。調査はまず古墳の位置を確認するため東西及び南北に細いトレンチを設け石室を検出し、南北トレンチにおいて周溝を確認した。石室内の調査



では床面を検出した状態での全景及び個別写真を取り、石室実測の後、最後の断割りを行ったところ、約30cm下から古墳築造当初のものと考えられる床面が検出されたため、更に全面を掘り下げ、完掘の後全景・個別写真を取り、図面の継ぎ足しを行った。最後に墳丘断割りトレンチにおける断面を記録して保存のために埋戻して調査を終了した。

遺構 本古墳の墳丘規模は、今回の調査と過去の踏査記録により復元すると、墳形は円墳で径約14m、高さ約3mのものが推定できる。

本古墳の主体部は両袖式の横穴式石室で東南東の方向に開口している。石室内の埋土は上部床面より上層において大きく4層に分かれる。この4層のうち上部3層は平安時代及び中・近世の堆積層であり、床面直上の副葬品が出土する堆積層は第4層で、約10cmの厚さであった。下部床面は上部床面の約30cm下で検出されるが、この間には赤褐色のよくしまった礫土層が堆積しており、上部床面を造る際に一度に入れられたものと考えられる。

下部床面まで掘り下げた状態での石室規模は、残存長7m、玄室長3.1m、同幅は奥壁付近で1.65mを測る。最大幅は袖石寄りにあり1.95mを測る。現存する最大高は奥壁で1.4mである。石材の規模は、石室全体を通して最も大きいのが南壁の袖石であり、幅93cm、高さ1.2mを測る。次に大きいものはやはり北壁の袖石で、幅72cm、高さ80cmを測る。なお、袖石の横の羨道に使用された石材もこれとほぼ同じ規模を持っており、この3石が現存する石材では特に大きいものである。石材の大半はこの付近一帯の基盤をなすチャートを使用している。石組みの状態は最下段石がほぼ均等大きさのものを使用しているのに対し、二段目以上の石材は大小を組み合わせて使用している。また二段目までがほぼ垂

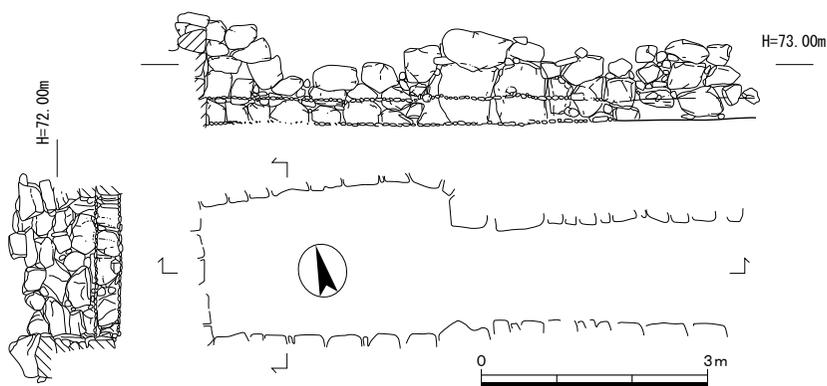
直で、3段目以上において持送りをを行っている。玄室内の最下段石は、床面が堅くしまっていることもあり、さほど掘り込んでいない。むしろ南壁などは床面よりも5～10cmほど浮いた状態にある。石室掘形は地山を掘り込んで成形しているが、この南壁ではその掘形が段状になっており、その段の平坦面に最下段石を据え付けた状態になり、床面はこの最下段石の下になってしまっている。床面に施された敷石は、上下床面共に10cm前後の板状の石を敷き詰めており、羨道部には閉塞石がみられる。

遺物 石室内上部床面からは須恵器10点（杯3・蓋2・長頸壺1・脚付長頸壺1・壺脚部1・高杯2）と鉄釘17本、銀環5個が出土している。また下部床面からは、須恵器3点（杯1・蓋2）と鉄鏃4本が出土している。これ以外の遺物としては石室埋土から平安時代～鎌倉時代の土師器・瓦器などが出土している。

小結 今回の調査で、古墳の石室床面は古墳築造当初の面と、更にそこから30cmほど土を盛って上部床面を造り出していること、またこの上下床面は共に敷石を施していることなどが明らかになった。この下部床面から上部床面までの堆積土は、明らかに自然流入ではなく人工的に土入れを行ったものである。

上下各床面直上の出土遺物によりその構築年代を判断すると、下部床面は6世紀末葉、上部床面は7世紀の前葉と考えられる。また使用された棺の種類を推定すると、上部床面は多数の鉄釘の出土により木棺と考えられるが、下部床面に関しては、棺の種類を推定するなんらの資料も得られなかった。下部床面の棺及び副葬品は追葬の際に片づけられたものと思われる。

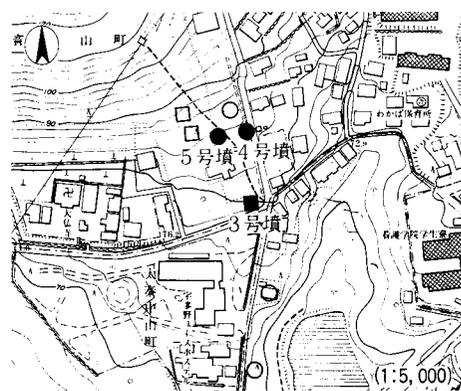
（北田栄造）



石室実測図 (1:100)

42 音戸山古墳群（2）

経過 当古墳群の立地する丘陵斜面で造成工事が実施され古墳が埋没・削平される事態に至ったので発掘調査を実施する運びとなった。音戸山3・4・5号墳の3基を対象に、昭和58年6月中頃より調査を開始した。調査地一帯を伐採し地形測量を実施したところ、4～6号墳の西隣で新たに2基の古墳を発見



音戸山3～5号墳 ●■調査古墳

し、これを7・8号墳と名付けた。今回の調査では古墳自体が盛土下で保存される点を考慮して石室内の調査を主として行い、墳丘については部分的に断ち割る程度とした。8月後半には地元住民を対象に説明会を催し、調査を終了した。

3号墳 調査開始時にはすでに盛土に覆われていたため、重機を使って元の墳丘を出す作業から始めた。墳丘は周溝心々で13mを測る方墳である。7ヵ所で断ち割った結果これを確認した。

主体部は無袖式の横穴式石室で南南東に開口している。石室長は現状で6.1m、石室幅は奥で1.25m、開口部で1.05mを測る。壁面の石材は大半が抜き取られており、最高3段を数えるのみであった。材質はすべてチャートで、長さ50cm、幅20～30cm程度のものが主に用いられている。石室床面には拳大のチャートが敷き詰められている。開口部には羨道閉塞の一種とみられる石材が2個据えられていた。

石室内より須恵器9点（杯4・蓋2・高杯1・短頸壺1・横瓶1）と金環1個、刀子1本が出土した。須恵器の杯や蓋は法量や調整手法の差によって2種類に分けられるが、出土状態からみれば一括品であり、7世紀前葉の年代が与えられる。

4号墳 古墳群中の東北端に位置する。墳丘の東半分は道路の拡幅時に大きく削平を受けており、主体部の破壊も十分予想されるところであった。

墳丘の4ヵ所を断ち割ったところ、そのいずれでも周溝を検出し、直径18mを測る円墳であることが判明した。

主体部は南南東に開口する横穴式石室であるが、石材の抜取りが著しく、わずかに最下段の基底石をとどめる程度であった。石室は現状で長さ7mを測る。奥壁より3.4m離れた東壁には袖石に該当する石材があり、これを生かせば片袖式となる。玄室幅は1.58m、

羨道は長さ 3.6 m, 幅 1.15 m を測る。石材はすべてチャートで、長さ 50～60cm, 幅 30cm 前後のものを横積みしている。玄室床面は敷石面であるが、場所によって敷かれた石材の大きさが異なっている。

石室内より須恵器 4 点（杯 1・蓋 1・高杯 1・長頸壺 1）と金環 2 個が出土した。杯と蓋は 3 号墳出土の杯・蓋のうちの法量の小さいものに似ている。金環は 2 個とも玄門付近から出土している。表面の金板は極めて残りが良い。

5号墳 直径 15 m, 高さ約 2 m の円墳である。墳丘の 4 ヲ所を断ち割ったところ、そのいずれでも周溝を検出した。

主体部は南南東に開口する無袖式の横穴式石室である。石室全長は 5.62 m, 幅は奥壁付近で 1.42 m, 開口部で 1.02 m を測り、同じ無袖式である 3 号墳の石室に比べやや大きい。3・4 号墳に比べると石材の残りが良く、最高 3 段目までを数えた。材質はすべてチャートで、比較的大型の石材もみられる。石室床面は全面に敷石を施すが、特に開口部にかけては板石を敷き詰めている。この敷石床面は奥より 2.75 m の位置に段差があり、開口部が一段低くなっている。墳丘上に 2 個、石室内で 1 個天井石に該当する大型石材を検出した。

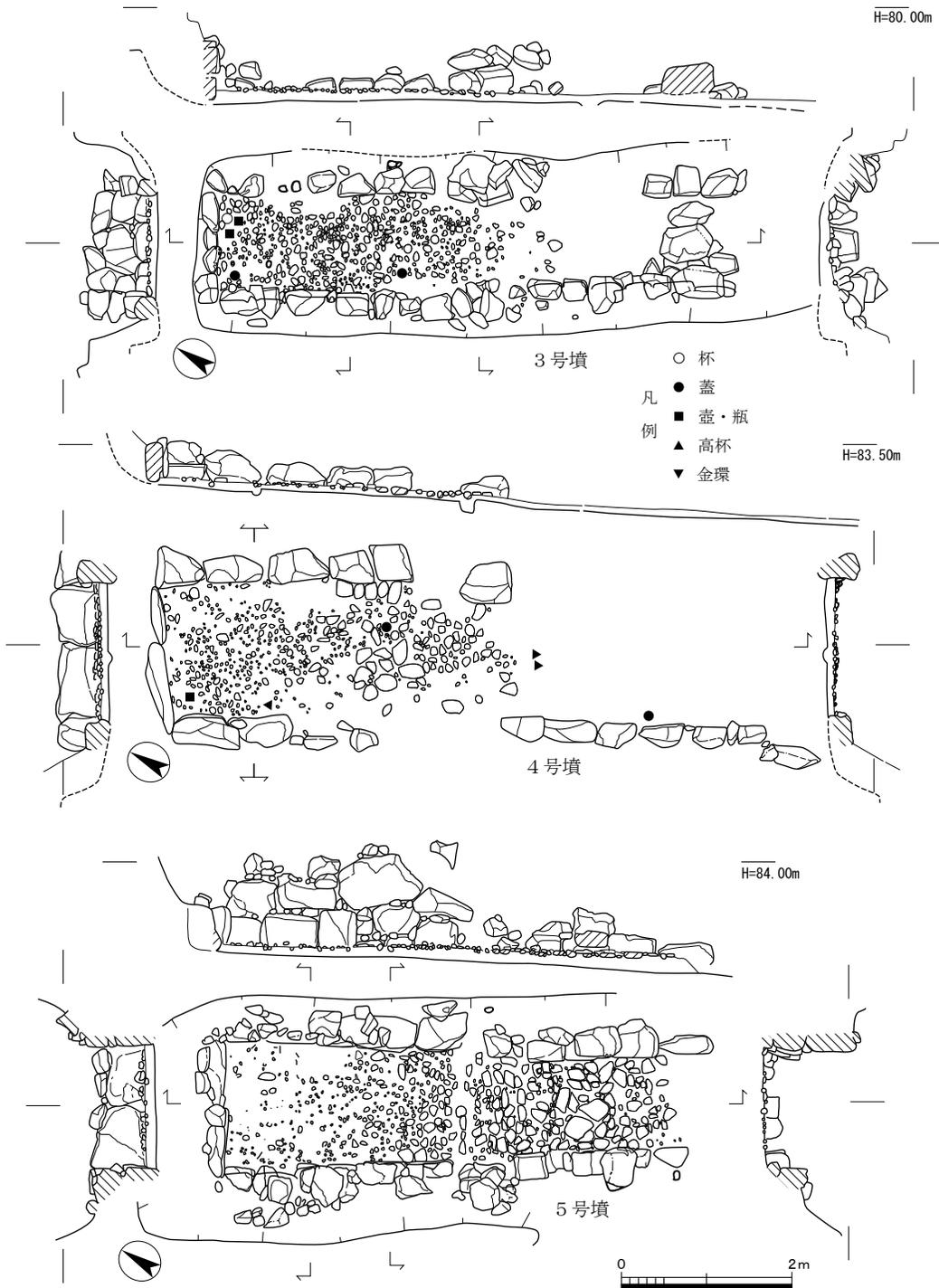
遺物は古墳造営時のものが少なく、石室内からは須恵器の破片と鉄器（釘・刀子・鏃）、開口部で家形石棺の破片が出土したにとどまった。この他、石室奥壁付近で平安時代前期に属する灰釉薬壺が出土し、この頃はまだ石室が開口状態であったことが窺われた。

小結 1 号墳も含め今回の調査で明らかになった成果をまとめて置こう。

まず本支群の構成は、2 基の新発見古墳を加え合計 8 基以上からなることが明らかになった。規模の面では直径 18 m を測る 4 号墳が最も大きい。墳丘は 1・4・5 号墳が円墳、3 号墳が方墳である。主体部はいずれの古墳も横穴式石室であったが、この中には両袖式（1 号墳）、片袖式（4 号墳）、無袖式（3・5 号墳）の三形態が認められた。石室床面はすべての古墳で敷石を検出したが、その状態は古墳ごとに異なっていた。埋葬形態については 1 号墳で追葬の形跡を認めたが、逆に 3 号墳などでは単次葬と予想された。

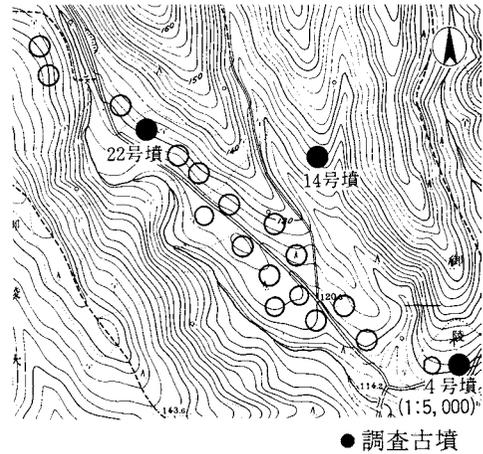
一方、出土遺物の面から本支群の動向を推察すると、まず 6 世紀末葉に 1 号墳が築造された後、7 世紀前葉になって 3・4・5 号墳の築造及び 1 号墳の追葬が行われており、比較的新しい時期に盛期を持つ群集墳とみることができる。また、5 号墳から出土した家形石棺の材質は二上山産の凝灰岩であり、嵯峨野地域で確認できる唯一の例である。なお本支群の調査成果については『音戸山古墳群発掘調査概報』昭和 58 年度が刊行されているので詳細はそれによらるたい。

（丸川義広・平田 泰）



43 大枝山古墳群

経過 調査は大枝山古墳群の第2次調査である。今回は第1次調査時に石室残存状態が良好で、移築復元が決定した4・14号墳の継続調査及び石材の搬出である。新たに22号墳の発掘調査も実施した。22号墳も残存状態が良好なため、4・14号墳と同様な調査を実施し、石材を搬出した。調査は古墳の築造過程の解明を目的とし、全面調査を実施した。



4号墳 直径20 m、高さ約3.8 mの円墳である。5号墳と共に谷を隔てた東の丘陵上に位置する。墳丘封土は4層に大別できた。最も上部の第1層は天井石及び側壁石材の第五・四段目に、以下第2層は第四段目、第3層は第三段目、第4層は第二段目の石材と対応関係にある。基底石は石室掘形内に据える。また各層の間には、整地層と考えられる灰白色粘土の薄い間層がみられた。

主体部は両袖式の横穴式石室で調査は前回に行った。須恵器（杯・蓋・高杯・長頸壺・提瓶）や、土師器（長頸壺、甕）、金環などが出土しているが、主だった遺物は盗掘された可能性が高い。石室の規模は、玄室の長さ3.65 m・幅2.1 m・高さ3.15 m、羨道の長さ7.65 m・幅1.45 m、高さ2.15 mである。天井石は玄室に2枚、羨道に2枚を残す。側壁・奥壁の石材は、平坦な小口面を内側に向け横積みするものが多い。石室掘形は、長さ13.2 m、幅3.2 m～5 mで、深さは奥部で60 cm、開口部で20 cmである。石材吊り出し時の重量計測の結果、最も重いものは最奥の天井石で5.8 t、石室全体としては約60 tに達することが明らかになった。なお、墳丘の基底面では薄い炭層を検出したが、これは古墳造営の当初に行った祭祀に関するものと考えられる。

14号墳 谷を隔てた北側の丘陵上に単独で立地する。直径13 m、高さ約3.5 mの円墳である。墳丘封土は3層に大別できた。第1層は天井石及び側壁石材の第五段目、第2層は第四段目、第3層は第三段目の石材に対応し、第二段目石材及び基底石は石室掘形内に据える。封土各層の境には灰白色粘土の薄い間層がみられたが、4号墳ほど明瞭でない。周溝は背後の丘陵側で明瞭にみられ、幅2.5 m、深さ0.4 mを有する。

主体部は片袖式の横穴式石室で、調査は前回に行った。須恵器（杯・高杯・長頸壺）と

刀子、金環などが出土している。石室の規模は、玄室の長さ3.1 m・幅1.55 m・高さ2.3 m、羨道の長さ5.55 m・幅1.05 m・高さ1.8 mである。天井石は玄室に3枚、羨道に3枚あり、玄室よりも羨道のものが先に架構されている。側壁・奥壁の石材は、小口を内側に横積みされている。石室掘形は、長さ9.5 m、幅3.7 mで、深さは奥部で1.1 m、開口部で20cmである。最も重い石材は玄室中央の天井石で1.2 tある。石室全体の重量は約50 tに達する。この古墳も4号墳同様、墳丘の基底面で薄い炭層を検出した。

22号墳 古墳群中の北部に位置し、丘陵南斜面に立地する。直径20 m、高さ3.2 mの円墳である。墳丘基底面は南へ傾斜し、南は盛土する。石室掘形は長さ12.9 m、幅4.25 m、深さは奥部で1.7 m、開口部で30cmである。基底面で薄い炭層を検出した。封土は4層に大別できる。第1層は天井石と墳丘全体を覆い、第2層は側壁第四段目、第3層は第三段目、第4層は第二段目の石材と各々対応する。基底石は掘形内に据える。第2・3・4層の上面には灰白色粘土を貼り付ける。第3層の前面で2～3段の下層葺石を検出した。墳丘前面には葺石を施し、範囲は開口部を中心に高さ1.4 mで東側6 m、西側12 mである。側壁・奥壁の石材は5～10段程度小口積みする。墳丘北側のみ幅2 m、深さ50cmの周溝を検出した。

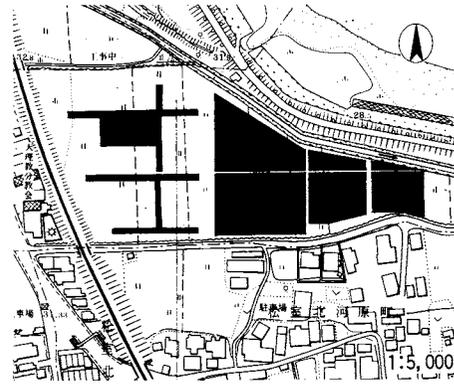
主体部は両袖式の横穴式石室である。規模は玄室で長さ3.5 m・幅2.25 m・高さ2.3 mで、羨道は長さ7.5 m・幅1.4 m、高さ1.9 mである。側壁は玄室で四～五段、羨道で三～四段積み、6～8°内傾している。天井石は玄室に2枚、羨道に2枚が残る。石材はチャートと砂岩で、平坦面を内側に向ける。石室床面は羨道中央まで敷石を施す。

遺物は主に石室両袖部と墳丘前面の開口部東側で出土した。両袖部では須恵器（杯・蓋・高杯・甗・短頸壺・脚付長頸壺）、土師器碗などを検出した。墳丘前面では須恵器（杯・蓋・壺・脚付子持壺）を原位置で検出した。更にこの前面では、須恵器（杯・蓋・高杯）、土師器甕などが出土した。これらの土器は6世紀末～7世紀初のものである。

小結 古墳はおおむね丘陵の傾斜面を大きく削平し、前面は若干の盛土を行って墳丘基底面を造成している。基底面中央に石室掘形を掘削し、石室石材の積み上げと封土の盛り上げとを交互に実施する。盛土は3～4層に分かれ、側壁石材の各段と対応する。盛土上には流出を防ぐため、何度も粘土の貼付けや葺石を施す。側壁・奥壁の石材は平坦面を内に向けた小口積みのものである。石材はチャートと砂岩である。基底面では炭層・墳丘周りでは焼土・炭の入った土壌を検出した。また墳丘前面では須恵器を検出し、様々な祭祀の状況が明らかになった。更に、副葬品から、当古墳群は6世紀後半に築造が始められ、7世紀初めまで営まれたものと考えられる。（上村和直・丸川義広）

44 松室遺跡

経過 発掘調査の対象地は桂川西岸の京都市西京区松室中溝町に位置している京都市立桂中学校北分校建設予定敷地約 17,000㎡である。同地は、古墳時代～古代において最大級の渡来系氏族とされる秦氏が本拠地を置いた葛野郡域内である。秦氏の氏神を祭る松尾大社は同じ桂川西岸の同地西北方向約 700 m に現



存している。昭和 58 年にこの地に京都市立桂中学校北分校を建設する運びとなった。その建設に伴い、遺跡台帳上では周知の遺跡外ではあったが同地域の歴史的重要性を鑑み、当研究所が、同年 10 月 5 日から 20 日までの 2 週間にわたり遺跡の有無を確認すべく試掘調査を実施した。

試掘調査では、現表土下 50cm 前後の遺構面上で掘立柱の建物群、流路と思われる遺構を検出した。遺構面は、その上に中世の遺物包含層が堆積しており、また古墳時代の溝の肩を形成する土層は、弥生土器片と思われる土器小片を包含している。

図 2 に実測図を掲載した土器は S X 1 上面から出土した須恵器杯身・高杯である。両者とも古墳時代後期（6 世紀代）に位置づけるものである。

試掘調査の結果、同地には古墳時代後期の遺構群が確実に遺存していることが判明した。加えて下層には弥生時代の遺構群が遺存している可能性も大きく、集落跡などによって構成される大規模な弥生時代から古墳時代の複合遺跡となる可能性もある。また、流路は秦

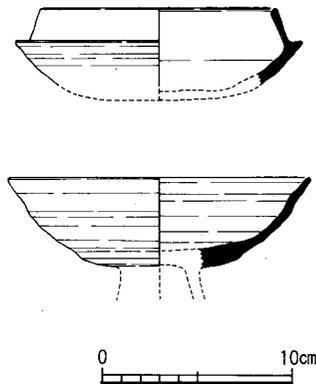


図 2 試掘 S X 1 出土須恵器 (1:4)

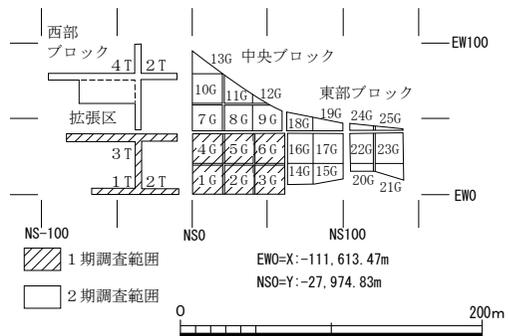


図 3 調査位置図 (1:5000)

氏の治水事業により構築されたとされる「葛野大堰」に関連する可能性もある。このため京都市埋蔵文化財センターと同市教育委員会との間で、中学校建設予定地全体を対象とした発掘調査を行うことが決定された。それを受けて当研究所が同地の発掘調査を1983年11月16日から実施することとなった。

調査を行うにあたって、全調査をまとめて実施することが、最良の方法ではあるが、諸般の事情により、調査範囲と期間を2期に分割して実施することとなった。グリット調査は、1～6Gを1期調査として実施し、残る7～25Gを2期調査として予定とした。確認トレンチ調査についても、一定範囲で分割し、グリット調査と随時並行して実施している。調査日程は、以下の通りである。調査地の区割については、図3を参照されたい。

層位 基本層位は、遺構面のベースで原地形を形成している無遺物の自然堆積層と、そ

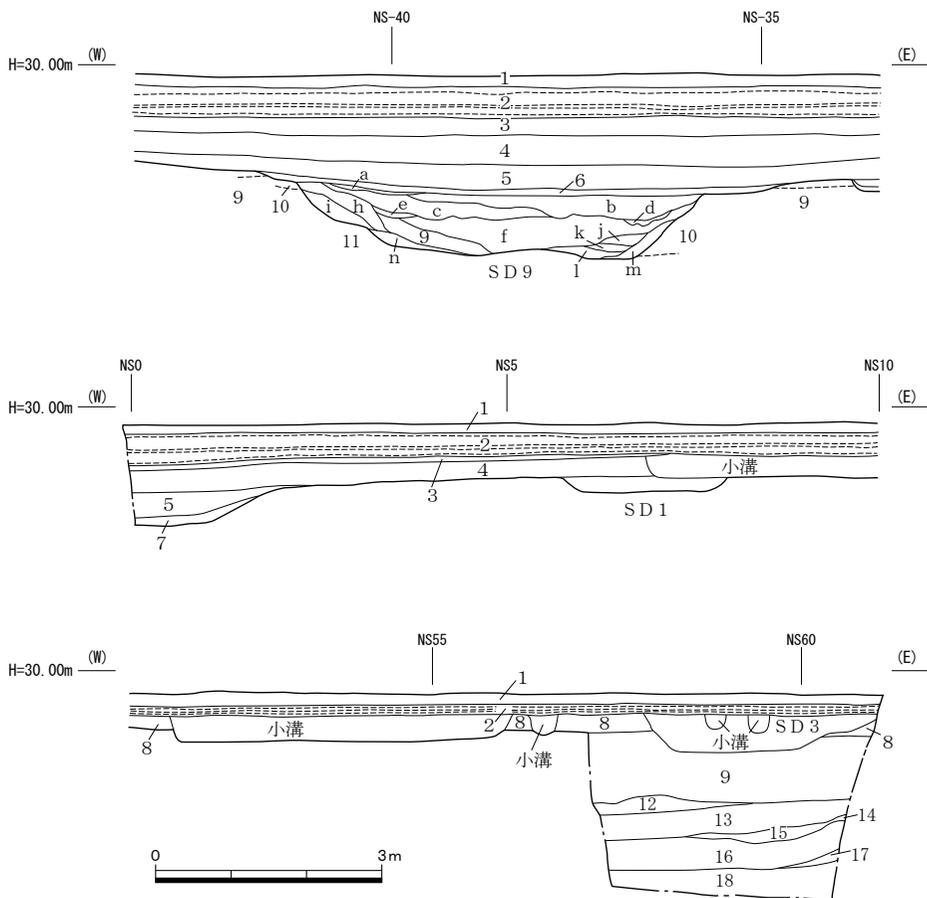
	調査区 No.	面積		期間
1期調査	1～6G1・2南半・3トレンチ	2400㎡ 600㎡	} 3000㎡	1983.11.16.～ 1984.9.30.
2期調査	7～23G2北半・4トレンチ	約5000㎡約550㎡	} 約5550㎡	1984.4.1.～ 1984.9.30.

の上に堆積した遺物包含層とに大別できる。層位の詳細については、図4を参照されたい。

原地形は、桂川沿いに延びる自然堤防状の微高地と、その南西側にある後背湿地的な小低湿地、及び低湿地を越えた西側の、川側微高地より若干高く西山裾まで至る比較的平坦な高さによって構成されている。この現地形を形成している無遺物の自然堆積層は、⑨黄褐色泥砂層、⑩淡青緑色シルト層、⑪茶褐色砂礫層、⑫淡茶灰色砂層、⑬濃褐色砂礫層、⑭暗灰色砂層、⑮淡茶灰色砂礫層、⑯淡茶色砂礫層、⑰淡茶灰色砂層、⑱茶灰色砂礫層の計10層を確認している。

⑩淡青緑色シルト層は、その下層に堆積している⑪茶褐色砂礫層から⑱茶灰色砂礫層の砂、砂礫層の互層堆積層上面の窪み部に堆積した土層とみられる。その窪みの最も大きな部分が、⑨黄褐色泥砂層堆積後も小低湿地として残ったものと理解している。⑩淡青緑色シルト層上面は、低湿地の傾斜面下部から底部で検出しており、同層はその傾斜面で⑨黄褐色泥砂層の下に入り込んでいる。

①暗灰茶色泥土層、②淡褐色泥砂・黄褐色粘質土互層堆積層、③灰色砂泥粘質土層、④茶灰色シルト層Ⅰ、⑤同Ⅱ、⑥同Ⅲ、⑦暗灰茶色シルト層、⑧濃茶褐色泥砂層の計8層は、原地形の上に堆積した各時期の遺物包含層である。この内④茶灰色シルト層Ⅰ、⑤同Ⅱ、



- | | | |
|-------------------------|------------|---------------|
| 1 暗灰茶色泥土層(耕土) | 11 茶褐色砂礫層 | SD 9 堆積土 |
| 2 淡褐色泥砂・黄褐色粘質土互層堆積層(床土) | 12 淡茶灰色砂層 | a 茶色砂礫 |
| 3 灰黄色砂泥粘質土層 | 13 濃褐色砂礫層 | b 暗灰色シルト I |
| 4 茶灰色シルト層 I | 14 暗灰色砂層 | c 濃茶色砂礫(シルト混) |
| 5 茶灰色シルト層 II | 15 淡茶灰色砂礫層 | d 茶灰色砂 I |
| 6 茶灰色シルト層 III | 16 淡茶灰色砂礫層 | e 暗灰色シルト II |
| 7 暗灰茶色シルト層 | 17 淡茶灰色砂層 | f 暗茶灰色シルト |
| 8 濃茶褐色泥砂層 | 18 茶灰色砂礫層 | g 茶灰色砂 II |
| 9 黄褐色泥砂層 | | h 淡青緑色シルト(礫混) |
| 10 淡青緑色シルト層 | | i 茶灰色砂礫(シルト混) |
| | | j 濃灰色シルト |
| | | k 青灰色砂 |
| | | l 茶灰色砂 III |
| | | m 淡緑青色シルト |
| | | n 暗灰色シルト |

図4 基本層位図 (E W40ライン断面) (1:100)

⑥同Ⅲ，⑦暗灰茶色シルト層の4層は，低湿地内の堆積層である。基本層位としては扱わなかったが，低湿地内ではこれらのシルト層の間に部分的に砂礫層が堆積している部分が見られる。また，⑦暗灰茶色シルト層は，中央ブロック4Gの低湿地部中央付近以南では，3層に分けられる。この最下層からは，弥生時代中期の遺物が出土している。SD9（溝）は，⑦暗灰茶色シルト層を切り込んで形成されている。③灰色砂泥粘質土層は，低湿地部分を中心にして川側の微高地と山側の高み周辺部まで広がって堆積している土層である。この③灰色砂泥粘質土層の堆積により，低湿地とSD9が完全に埋没し，山側の高みと川側の微高地は，ほぼ平坦に繋がる。⑧濃茶褐色泥砂層は，6G東辺の⑨黄褐色泥砂層直上で検出した部分的な土層であるが，東部ブロックへの広がりがみられる弥生時代中期以降から古墳時代に堆積した土層であろう。ピット群の内には同層上面から成立しているものもある。①暗灰色泥土層，②淡褐色泥砂・黄褐色粘質土互層堆積層は，調査区内が平坦化して後の土層であり，両層とも調査区全面で確認している。①暗灰色泥土層は田圃の現耕作土であり，②淡褐色泥砂・黄褐色粘質土互層堆積層はその床土である。

遺構 1期調査では，弥生時代中期，古墳時代前期，古墳時代後期以後など各時期の集落跡の一部とそれに関連する各種の遺構や，古墳時代後期には形成されていたとみられる溝などを検出し，本遺跡の歴史の変遷とその立地状況の一端を明らかにすることができた。

弥生時代中期の遺構は，円形竪穴住居1棟（1号住居），溝2条（SD10・12），土壙（SK6・7・9など），ピット（pit1など）があり，各遺構からは弥生時代中期の土器や石器などの遺物が出土している。また，低湿地内堆積土の下層からもまとめて弥生時代中期の土器が出土している。これらの土器類は，畿内第Ⅳ様式に属するものが中心である。

古墳時代の遺構は，前期のものを含めて数多く検出している。方形竪穴住居2棟（2・3号住居），溝（SD2～6など），他に掘込，落込，ピット（柱穴，杭穴を含む）などである。2号住居からは，布留式の土師器が一定量まとめて出土している。他の各遺構からも土師器，須恵器などの遺物が出土している。低湿地東肩沿いの傾斜面やその裾部付近からも，布留式土器がうちすてられた様な状態で多数出土している。

古墳時代及びそれ以後の新しい時期の遺構では，古墳時代後期には形成され，平安時代後期（もしくは，中世の早い段階）には埋没していたとみられる大規模な素掘溝（SD9），同じく古墳時代後期には形成され同末期には埋没していたとみている川側微高地東肩沿いに走る溝（SD7），平安時代から鎌倉時代には埋まっている小溝群などの遺構を含めて，溝・掘込・ピット・杭列・杭・不定形な落込などを多数検出している。

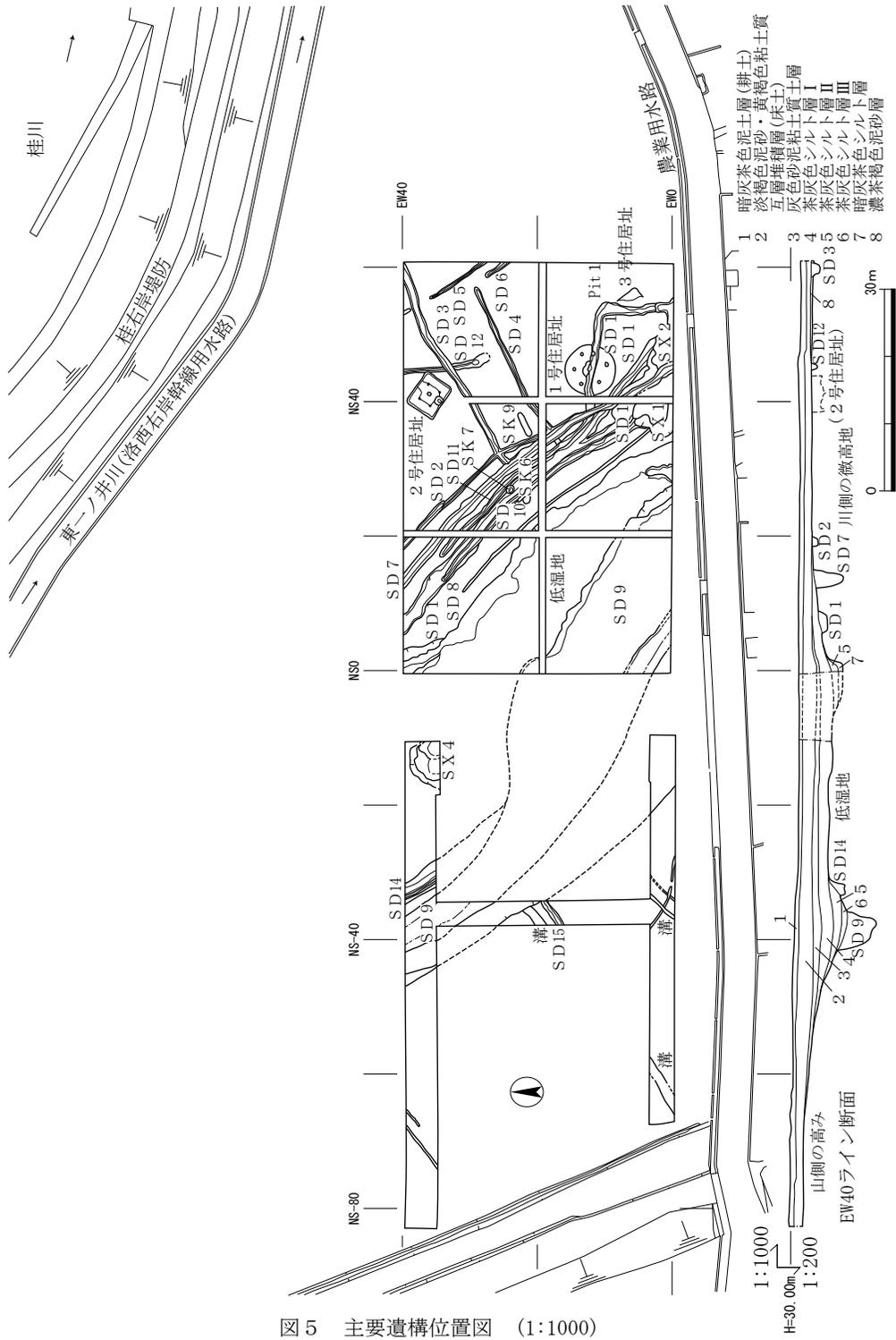


図5 主要遺構位置図 (1:1000)

遺物 弥生時代の土器・石器、古墳時代の土師器・須恵器と若干の土製品・石製品・木製品、及び奈良時代以後の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦器などの土器と、木製品などの遺物が出土している。各種の遺物は、出土量が調査面積に比べて、決して多いとは言えない。弥生土器・古墳時代の土師器類などは、器表面が非常に脆くなっているものが多く、一般的に遺存状態もあまり良くない。

しかし、弥生土器は、石器類を伴った畿内第Ⅳ様式とみられるものが中心をなしている。また、古墳時代前期の土師器は、いわゆる布留式土器である。布留式土器が一定量まとまって出土した層及び遺構からは、須恵器は出土していない。両期の資料が京都盆地内で、明確な遺構からまとまって出土している例は極めて少ない。その意味でも、本遺跡出土の両期の土器群は、極めて資料的価値の高いものといえる。注意深い扱いと、詳細な整理、研究が必要な資料である。

小結 発掘調査で発見した弥生時代中期及び古墳時代前期の竪穴住居や古墳時代後期以後のピット群（掘立柱建物の柱穴と見ている）と各時期に形成された溝などの遺構によって構成されたそれぞれの時期の集落跡は、桂川沿いの自然堤防状の微高地に展開している。この微高地は、桂川沿いに北西から南東方向へ延び広がっているものと推測される。今回の調査区での遺構検出状況及び予想される川側微高地の広がりからみて、これら集落の中心は、1期調査範囲の北方や東方と考えられる。微高地の西南側には後背湿地的な小低湿地があり、その低湿地を越えた西側には、西山裾に至る比較的平坦な高みを確認している。この山側の高みにも少数ではあるが古墳時代後期の溝を始め、各時期の遺構を検出しており、低湿地を越えた西側にも遺跡は広がるものとみられる。

S D 9とした大きな素掘り溝は、低湿地西肩沿いを北西から南東方向へ流れる。西部ブロックで検出した部分では幅約5.3 m、深さ1 m、中央ブロックでは幅約15 m前後、深さは最も深い部分で1.5 m程度もあり極めて大規模なものである。検出状況からみて構築された溝であると判断しており、その規模、北方への延び、及び古墳時代後期には形成されていた可能性が大きい点などからみて、古墳時代に秦氏によって現桂川の渡月橋付近に造られたとされる「葛野大堰」^注から分流された、灌漑用水路の一本にあたる可能性が大きい。

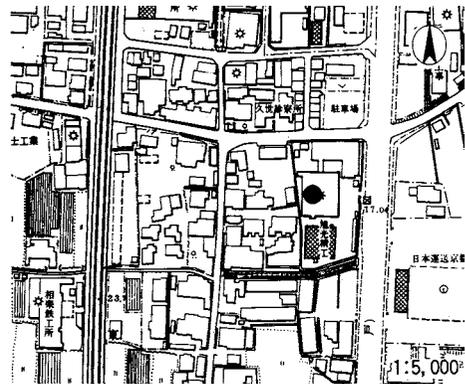
(平安京調査会)

注 『政事要略』第五十四「秦氏本系帳伝。造葛野大堰。於天下誰有比。是秦氏率催種類所造構。」

45 中久世遺跡

経過 工場の新築工事に先立ち、8月29・30日にわたり試掘調査を実施した。その結果弥生時代中期～鎌倉時代にわたる遺物包含層を検出した。そのことから当遺跡に関連する遺構の検出が予想されたため発掘調査を実施した。

遺構・遺物 調査区は試掘調査のトレンチから10m程離れたところに設定した。調査はま



ず、現地表下1.1m余りまでの現代層、旧耕土、床土を動力機械により排除し、その下に堆積する約20cmの中世遺物包含層の掘り下げを行い、試掘調査で確認した地山面で遺構を検出した。以下検出した主要な遺構・遺物について略述して置く。

S D 2は幅1.2～2m、深さ20～60cmで、北から南に直行し、調査区の北半部で西へ曲折するL字状の溝である。溝内からは土師器・須恵器・瓦器・陶器・陶磁器などの遺物が多量に出土した。溝の埋没時期は出土遺物から判断し、平安時代後期と考えられる。

S E 2は一辺70cmの縦板組みで、掘形は南北1.2m、東西1.25mの楕円形の井戸である。底部には曲物が据え付けられている。出土遺物は井戸内から土師器・須恵器・灰釉陶器が出土した。掘形からは土師器・黒色土器が出土した。遺物はいずれも平安時代中期である。

S K 4は南北4.4m、東西は調査区外に延びているため2.8m以上で、深さ30cmの土壇である。出土遺物は土壇内から瓦器・土師器・輸入陶磁器が出土している。出土した遺物は平安時代後期のもので、ほとんどが日常雑器類であるが、越州窯系の青磁椀が1点認められることは注目される。

建物は桁行3間以上、梁行3間以上の建物が多い。調査区の西部で非常に重複した状態で認められたことから、何度か建て替えられたものと考えられる。

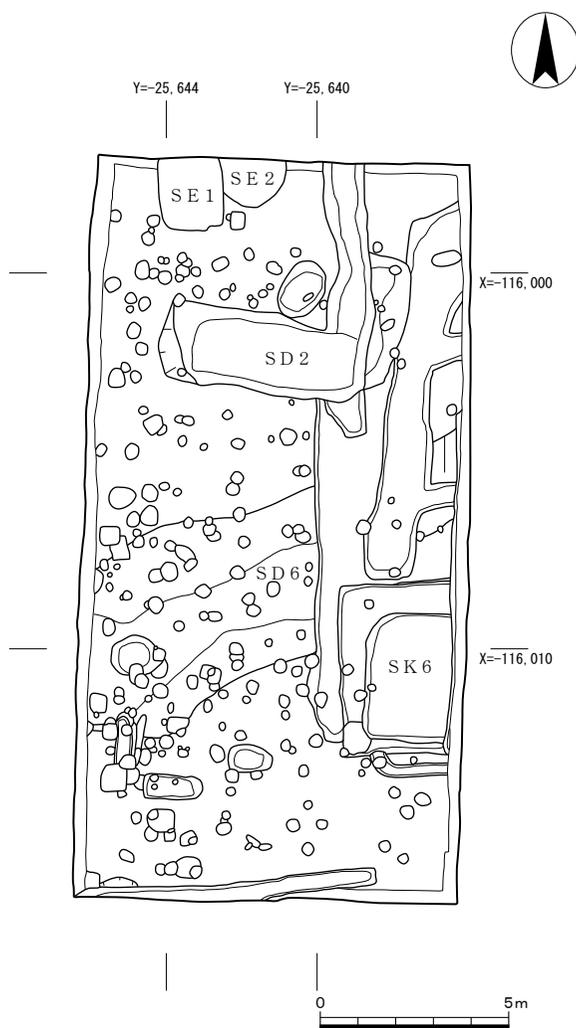
S D 6は幅5m、深さ70cmの大規模な東西溝である。溝内からは弥生時代中期～後期にかけての弥生土器が多量に出土した。出土した弥生土器の中には完形に復元し得るものが数個体あった。また、それらの中には杯部内面に突起状のものが回っている器台(5)や、体部外面上半部に耳状の把手が2ヵ所に付属する鉢(7)といった特殊な器形が認められる。その他には壺(1～3)・甕(6)・高杯(4)がある。

小結 今回の調査の成果は大きく2つに分けることができる。1つは平安時代の溝・井戸・土壇・柱穴などの遺構の検出である。建物を示す柱穴群は調査区西部に集中しており、居住地が更に調査区西外へ広がること、また柱穴の複雑な重複関係は同一の場所で何度も建て替えられたことを指摘することができる。更に井戸・土壇・溝は居住地に付属する施設として捉えられる。従来、当遺跡内においても古代末の村落構造に関連する遺構は各所、各地点で検出されているが、溝だけであるとか、土壇のみであるといった単独のものが多いことから、今回のまとまった遺構は貴重な資料といえよう。

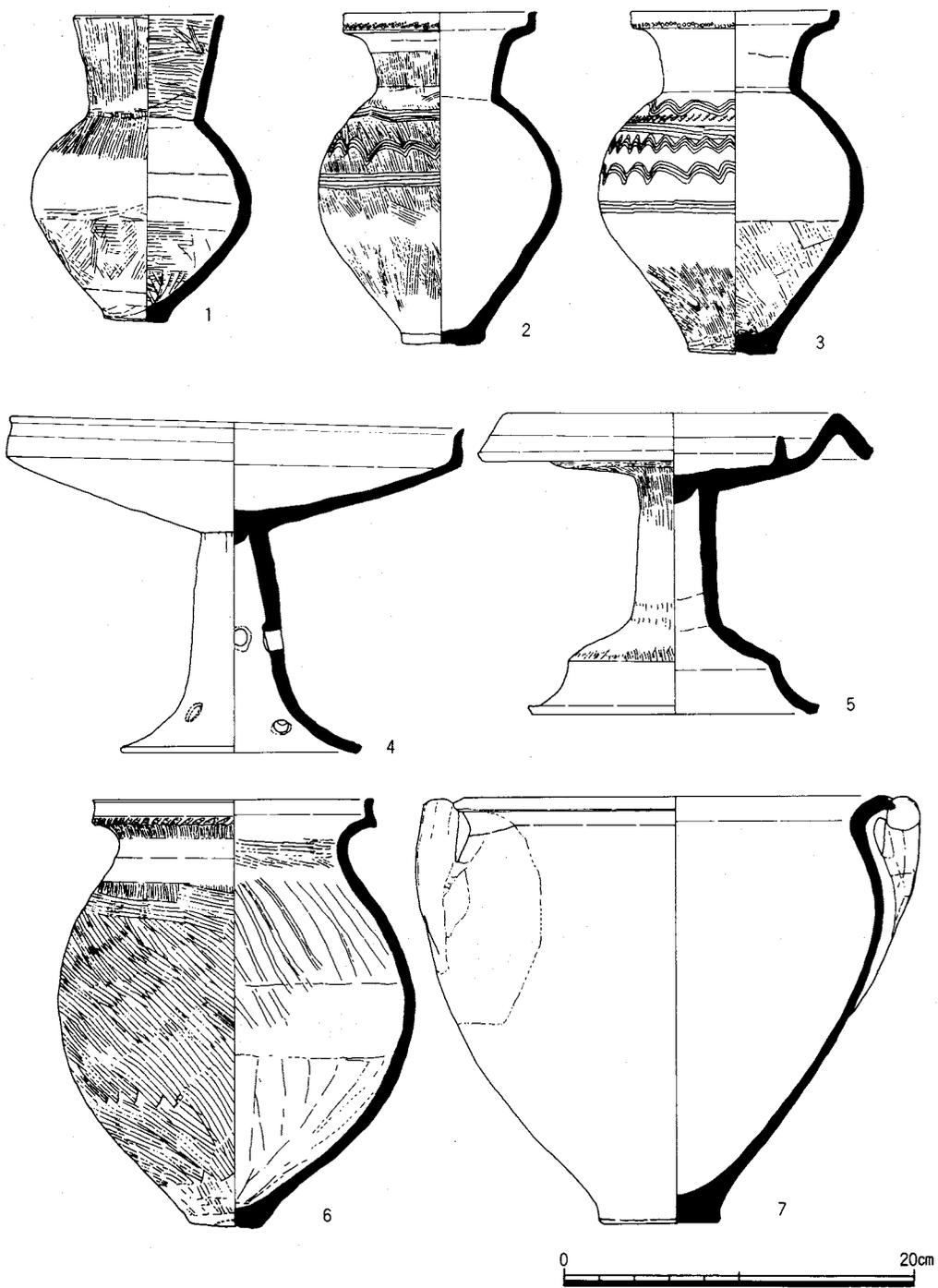
もう1つの成果は弥生時代の幅5mの規模を持つ溝である。溝は形態、土層の堆積から判断して人工的であり、多量の弥生土器が出土したことから、近辺に集落跡を想定することができる。当遺跡は京都盆地西南部の低地帯での有数の弥生時代遺跡の1つであるが、弥生時代の集落に直接に関わる遺構の検出は極めて希薄である。今回検出した人工溝は規模、地形などから考え、集落の区画に関わる様な性格を持つ溝である。

今後の近辺での調査が待たれる。

(木下保明・加納敬二)



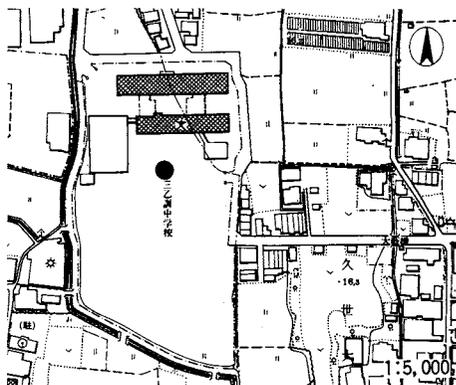
遺構実測図 (1:200)



SD 6 出土弥生土器実測図 (1:4)

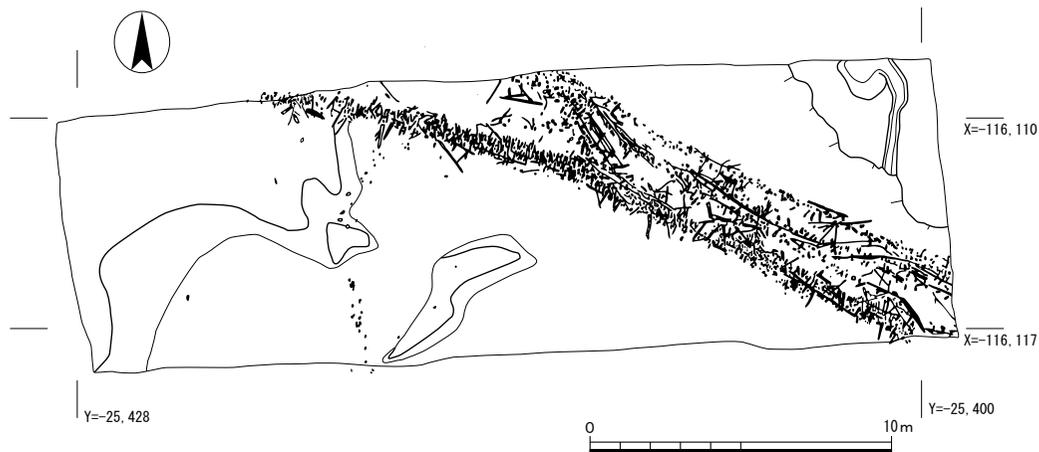
46 大藪遺跡

経過 この調査は、南区久世殿城町 481 - 3 の市立久世中学校々舎増築工事に伴って実施したものである。調査地は、中学校建設時に発掘を行ったところの南東にあたり、その際確認した流路及び杭列^注などに関連する遺構、遺物の検出が予想された。調査は、建物範囲とほぼ同規模の、東西 28.5 m、南北 10 m を対象とし、昭和 58 年 7 月 11 日から 10 月 5 日まで行った。



遺構 調査区の基本層序は、学校建設の際の盛土が厚さ約 90cm、厚さ約 40cm の旧耕土・床土、厚さ約 20cm の暗灰色粘土（鎌倉時代から室町時代の遺物包含層）がみられ、次いで灰色泥砂（標高約 14.9 m）となる。この層上面より流路及びこれに伴う杭列を確認した。この層以下は流路の肩部となる緑灰色泥砂を除き、すべて流路の堆積土である。

流路は、調査区の北西から南東に向かうもので、東側の肩部が認められた。杭列はこの流路の肩部に沿って 3 条検出し、流れ側（前列）では非常に密に、岸側（後列）ではやや粗く打たれている。3 条の杭列には北西から南東方向の杭列が取り付いている。流路内の堆積状況は杭列内が砂・粘土・腐植土などの互層状で、杭列外は部分的に腐植土を含む泥土層がみられるものの総体的に砂礫層が幾層にも認められた。最終的に流路を断ち割ったが明確な河床を認めるには至らなかった。



遺構実測図 (1:250)

今回検出した流路は、久世中学（旧名第三乙訓中学校）の設立にあたっての調査で検出された同様の方向に傾きを持つ流路に伴う杭列に連続すると考えられる。しかし今回の杭列はそれに比べると非常に堅牢に造られており様相を異にしていることから、今回の杭列は水量調整などを受けもつ施設ではなく護岸あるいは土留めと思われる。

杭列の構造は、縦、横、斜めと丸木・割り木・角材・板材などを複雑に組み合わせている。前列に使用した木材の長いものは3.5 m～4 mに達するが2.5 m～3 m程の長さが大多数である。組み合わせはまず垂直に杭を打ち、斜材を架け、横材を置き、再び斜材を掛け横材を置くなどをくり返し堅固に組み上げている。中列は長さ2 m前後が大多数でほとんどが垂直に打たれる。一部横材を挟む形でわずかに斜めに打たれるものもある。全体に横材の組み入れも少ない。また前列の斜材に突きささる杭もあることから、前列が埋め戻されたのちに打たれていると思われる。しかし時間的な差は明確でない。後列は長さ1 mを超す材は少ない。横材も小枝・柴などを杭間にかますのみですましている。さて、この施設を構築するにあたり、岸辺の粘土から河中の砂礫まで幅3.5 m～4 m、深さ2 m以上で溝状に掘り込んだ状況がみられる。この施設は単なるしがらみではなく、それ以上の機能を受けもっていたとも推定できよう。また前列から分かれ、北西方向へ延びる杭列は他と異なり、溝状の掘り込みを持たず垂直材より斜材を中心に構成している。杭の周囲の堆積状況などから、この杭列はしがらみとして水量調節を受けもっていたと考えられる。

杭列に使用された木材は、前列に檜、椎、樺などの広葉樹が多く、後列は松などの針葉樹が大部分を占めるという傾向がみられる。また、これらを構成する木材の中には明確な建築部材や大形の木製品などの加工材が多く認められる。このことは近辺にかなりの規模の建物、あるいは集落がありそれらの建築部材を転用したこと、そしてそれらを防護するためこの大掛かりな施設を築いたことは想像に難くない。

遺物 出土した遺物は、遺物整理箱にして、土器類が31箱、木器類が大小合わせて20箱に余る。流路内から縄文土器1片、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良・平安時代の土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器など、長期間にわたる各器種・各器形の土器類が出土した。瓦類はごく少なく数片を数えるのみである。土製品には祭礼用とみられるミニチュアの竈・甕及び土馬などがある。木製品（図版54・55）では人形7、削りかけ8～14、櫛、張形3、弓、日常の生活用具では柄杓6、曲物1・2、紡織具片15、鋤の柄、下駄、箸、大型の盤、獣脚部5、櫃の一部分4、全長1.8 mの大型の用途不明の木製品16、小形の長方形の盤17などがある。土器類、木器類ともに弥生時代のもの

を除き遺存状況は良好であり、原形を保つ土器類も数多く認められた。

出土の状況は、杭列の外側（調査区の西南寄り）では平安時代の遺物が中心に出土した。杭列内の堆積土は、杭列を覆う灰色泥砂に若干平安時代の遺物がみられるが、中心となるのは古墳時代から奈良時代までのものである。また標高12m以下の砂礫層では古墳時代の遺物が中心となり、奈良時代以降のものはみられなくなる。

図の1～3は弥生土器の甕、4は壺、5は器台。6～24は土師器で6～13は皿・椀・杯、14・15はミニチュアの甕・甗、16は人面土器、17～24は甕。25～46は須恵器で、25～31は杯蓋、32～37は杯身、38・39は高杯、40は瓶子、42～44は壺、45は甗、41・46は甕である。

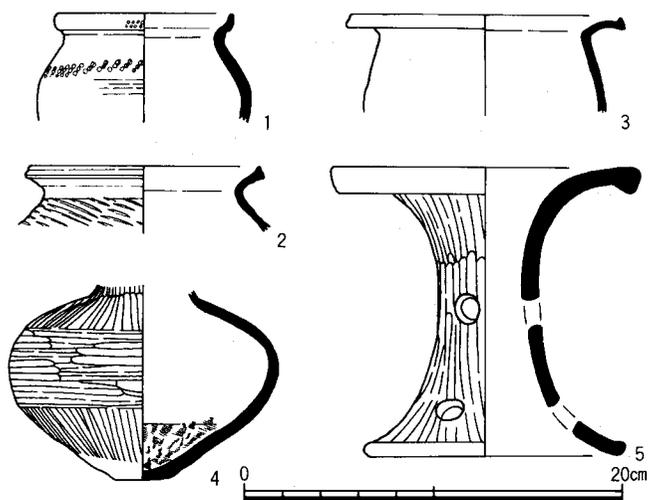
小結 周辺で、従来点々と行われてきた調査では、久世中学校を境として北東側は陸、北西側、南側は流路であり、国道171号線を越すと再び陸になることがわかっている。しかしこの流路の対岸は不明であり、したがってその規模などはまだ明確にされていないが、かなり大きな「河」というべき流れであったと想像できる。この流路範囲内では、数度弥生時代の遺物包含層が認められており、また流路周辺では弥生時代の遺構、更に縄文時代の遺構が認められていることから、これらの時代から開けていた土地であったといえる。

今回の調査で、その一部であるところの長期間にわたる遺物を包含する流路と、それに附属する古代の土木工事をみたわけである。この施設は、治水・灌漑のために造られたと考えられ、また全貌を確認していないため断言はできないが、工事にあたっては近在の集落単位ではなく、もっと大きい権力が動いていたのではないかと想像している。

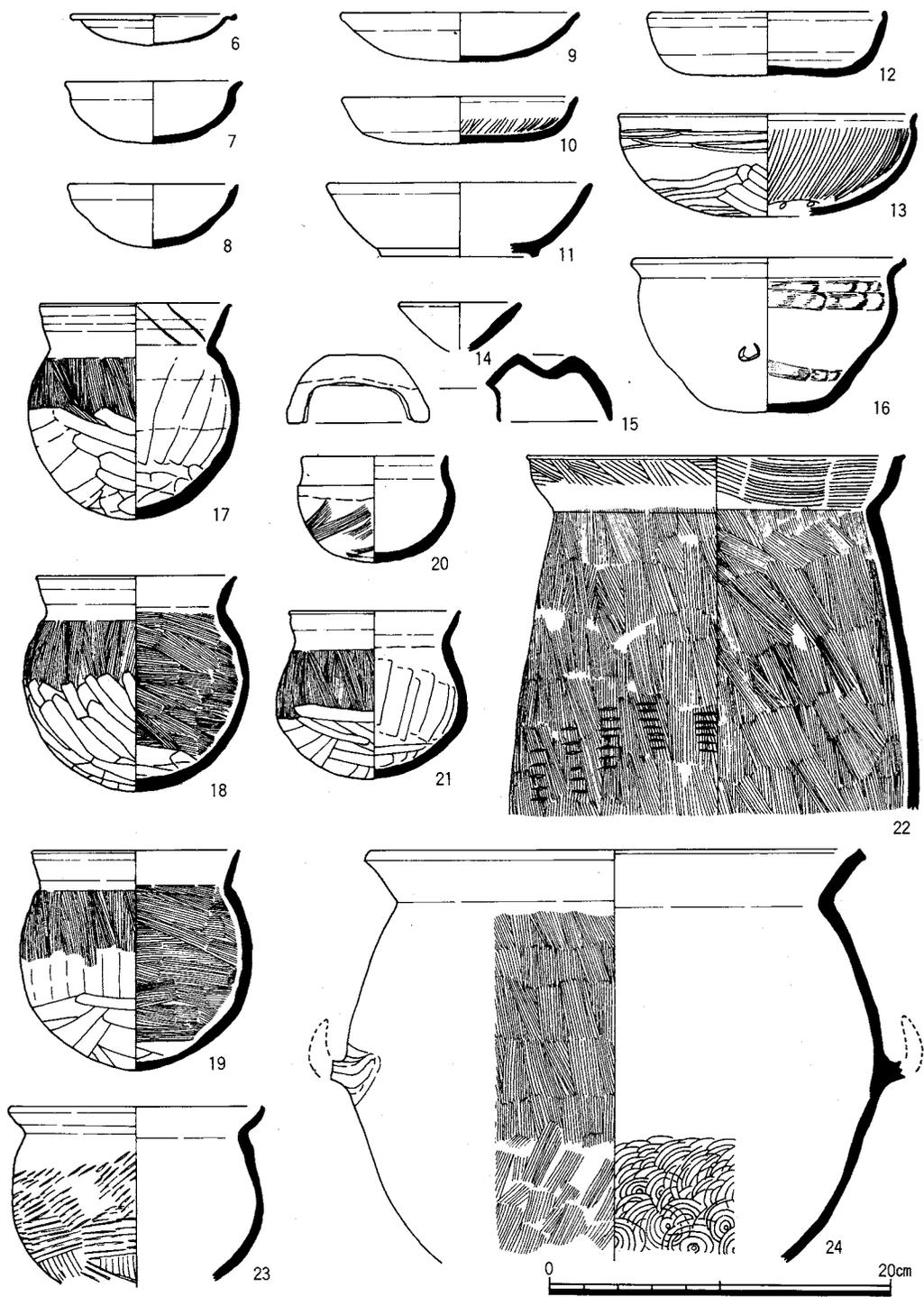
この施設の築造時期の問題であるが、杭列より下部の層は古墳時代以前であること、流路の終末期の杭列を覆う層は平安時代中期に求められること、奈良時代の土器類が杭列内から出土する遺物の多数を占めることなど、杭列の上限にふさわしいと思えることから、ここでは奈良時代に仮定して置きたい。

（堀内明博・鈴木廣司）

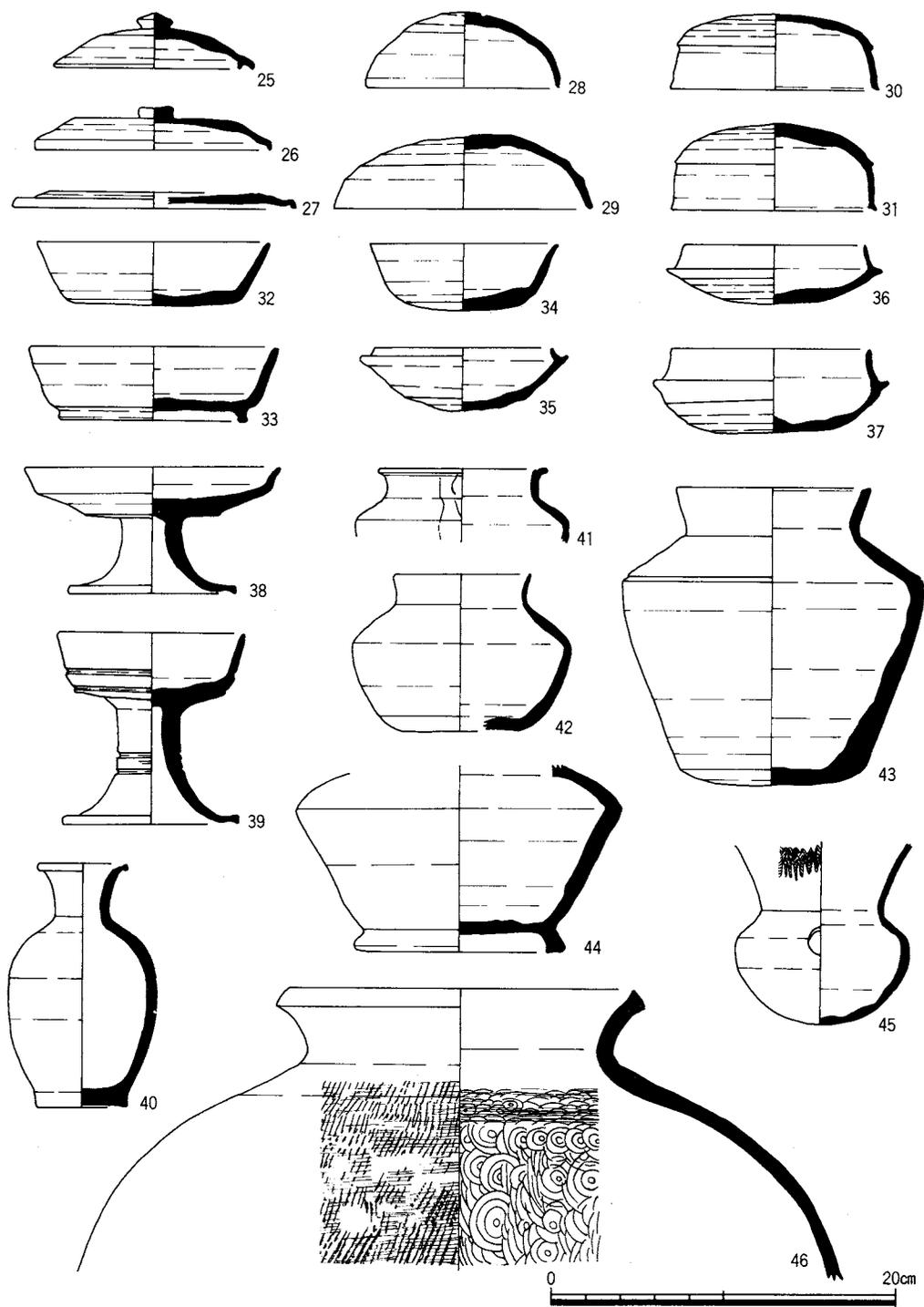
注 「大藪遺跡」1972 六勝寺研究会



弥生土器実測図（1:4）



土師器実測図 (1:4)

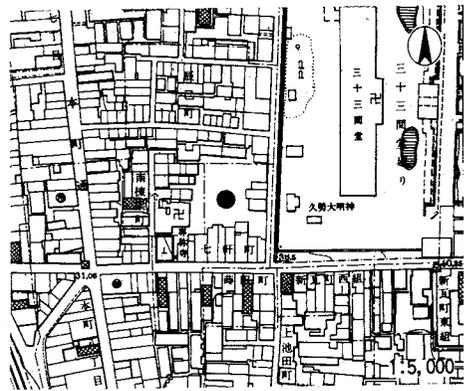


須恵器実測図 (1:4)

47 法住寺殿跡

経過 調査地は平安時代後期に建立された法住寺蓮華王院推定寺域内に位置する。院内の発掘調査は今回が初めてで、院内の建物配置及びその後の変遷を主眼に調査を実施した。

遺構 基本層位は上から第1層褐色土（現代層 40cm）、第2層黑色土（近世～近代整地層 20cm）、第3層灰褐色砂泥（中世包含層 50cm）、第4層茶灰色粘土（無遺物層）である。第3層上面は中世～近世の遺構面である。第4層上面は平安時代後期の遺構面で、建物・溝・道路遺構を検出した。この面は東から西へ緩やかに傾斜し、標高は 34.5 m である。今回は平安時代後期の遺構について報告する。



S B 1 2区西部で検出した南北棟建物である。基壇は削平され、残存する遺構は礎石据付穴2、小礎石2、東辺雨落溝である。築造前に東辺雨落溝より東1mの所から西に傾斜した面を灰褐色砂礫と砂で整地地業している。版築はしていない。礎石据付穴は南北間隔4.6mで、梁間1間（15尺）の向拝と推定できる。小礎石は北礎石据付跡より北4.8mで各々東に1.68m、西に1.8mの地点で検出した。東辺雨落溝は礎石据付穴より東へ3.4mの地点で検出した。雨落溝は向拝部で幅10.7mにわたり、東へ90cm張り出す。

礎石据付穴は径1.4m、深さ1mの掘形の底に礎盤を据え、上に瓦片や径10～40cmの石を入れ根固め石とする。小礎石は径30cm、厚さ15cmで、径50cm、深さ10cmの掘形に根固め石を入れて据える。雨落溝の構造は幅1.15m、深さ10cmの掘形の両側に、長さ20～35cm、幅15～25cm、厚さ10cmの自然石の平坦面を上にして2列据える。中央の溝は幅約30cmである。溝内の埋土は炭が多く、土師器が少量出土した。

S B 2 2区東部で検出した南北棟建物である。基壇は削平され、三辺の雨落溝が残存し北辺は石列据付跡を検出した。建物の中央部は周辺より15cm高く残る。雨落溝の心々距離は東西9.1m、南北12.2mである。雨落溝の構造はS B 1と同様であるが、溝の外側は2列、内側は1列の石組みを据える。溝内の埋土は炭が多く、土師器が多量に出土した。

S B 3 2区北端で東西雨落溝、3区で南北雨落溝2条を検出した建物である。基壇は削平され、礎石据付穴などは不明である。南北雨落溝の心々距離は11.7mで、東西溝は東辺雨落溝南端から3.5mの位置にある。西辺雨落溝は南辺雨落溝から10.8m北の地点で建

立後雨落溝の石を移動させ、南北幅 3.7 m、東西幅 1 m の付属施設を取り付ける。雨落溝の構造は S B 2 と同様であるが、東辺では外側石列の中央に間隔 1.7 m で径 50cm、厚さ 15cm の自然石の平坦面を上にして据え、2 列目は外側に回る。付属施設は幅 1 m のコの字状の溝の各隅と中央部に径 10cm の石の平坦面を上にして据え、その上に土居桁を据える。溝の両側では内・外一列ずつの石据付穴を検出した。雨落溝内の埋土は炭が多い。

S F 5・S D 4 2・3 区東端で検出した南北方向の道路である。路面は地山上に灰色砂土を敷き固め、2 区中央部より 0.7 m 高くなる。S D 4 は S F 5 の西側溝である。幅 1.4 m 深さ 30cm の断面逆台形で、護岸施設はない。埋土は灰色砂礫土で瓦を多く含む。

遺物 遺物は整理箱に 47 箱出土し、瓦類・土器類・木製品などがある。

瓦類 遺物のうち最も多くを占めるものは瓦類で、整理箱に 30 箱分ある。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがあり、小破片がほとんどである。瓦類は主に S D 4 や第 2・3 層から出土したが、S B 1～3 の雨落溝やその周辺からはほとんど出土していない。

軒丸瓦は 16 種 63 点出土している。瓦当文様には単弁蓮華文 4 種 5 点、複弁蓮華文 3 種 3 点、三巴文 6 種 31 点、珠文帯三巴文 3 種 24 点がある。三巴文 3 と珠文帯三巴文 2 が 24 点、22 点と多い他は、各種 1～3 点である。

軒平瓦は 20 種 70 点出土している。瓦当文様には均整唐草文 7 種 7 点、偏行唐草文 6 種 29 点、半截華文 1 種 2 点、剣頭文 3 種 27 点、連巴文 1 種 3 点、剣頭巴文 1 種 1 点、幾何学文 1 種 1 点がある。偏行唐草文 5 と剣頭文 8 が 24 点、21 点と多い他は、各種 1～4 点である。

軒瓦は大部分が平安時代後期のもので、法住寺殿・六勝寺・鳥羽離宮・六波羅密寺などで出土した瓦と同范と考えられるものが多数ある。この地域の主体軒瓦は、軒丸・軒平瓦各 2 種類である。その他は 1 種せいぜい 1～4 点しか出土しておらず、瓦当文様の多様性が特色であり、これは同時期の六勝寺や鳥羽離宮などと共通している。

土器類 土器類には弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器・瓦器などがあるが、量は少ない。S D 1～3 の雨落溝内からは土師器の皿が多数出土した。これらの土器は京大構内遺跡白河北殿 S D 13 や、平安京左京六条三坊 S K 26 出土土器と類似し、12 世紀後半に比定できる。

木製品 S B 1 礎石据付穴の礎盤として使用したもので、幅 35cm、長さ 60cm、厚さ 5 cm の板材 2 枚と、一辺 10cm、長さ 50cm の角材がある。板材には切り込みなどがあり、建物部材を転用したものと考えられる。

小結 今回の発掘調査の成果と問題点を以下にまとめる。

遺構の配置 蓮華王院の寺域は二町四方と推定され、調査地は寺域の中央西南寄りにあたる。SF5は推定寺域の中央を東西に二分する位置にあたり、これを境に西と東では約2mの段差がある。検出した建物と道路側溝の方位はいずれも北で東に振れ、SB1が0°44′、SB2が0°42′、SB3が0°31′、SD4が0°24′であり、ほぼ同一方向であるといえる。また現三十三間堂は北で東へ1°14′振れ、建物との差は大きくない。建物の配置は特に規則性がなく、敷地内に分散して建てられ、各々機能的に独立したものと考えられる。3棟の中ではSB1が向拝を持ち、礎石地業も強固なことから、この地域の中心的建物と考えられる。SB3はSF5に沿って建てられ、東辺雨落溝の礎石列もこれと関連する施設の一部と考えられる。

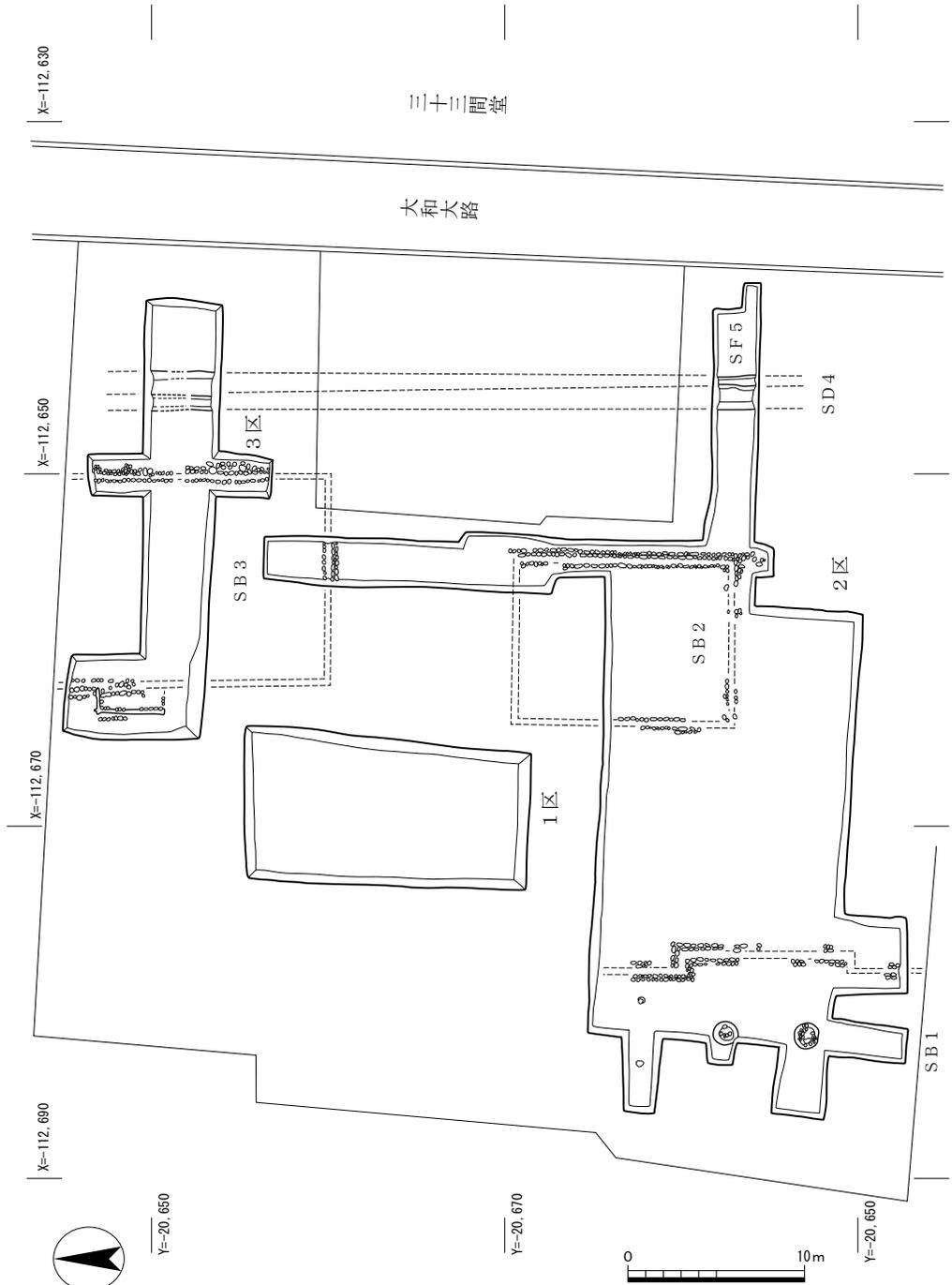
史料によると、蓮華王院内には本堂の他、不動堂・北斗堂・五重塔・総社・宝蔵・湯屋などの建物が建てられていたことが明らかであるが、SB1～3がどの堂舎に比定できるかは今後の検討課題である。

遺構の特徴 検出した建物はSB1が整地してあるのを除けば、いずれも版築などの地業はみられない。これは鳥羽離宮跡の一部や六勝寺跡などで検出した建物とは異なり、当地域の地理的条件によるものであろう。ただSB1の礎石据付跡は根石の下に礎盤を入れており注目される。また建物の雨落溝の構造は鳥羽離宮跡推定金剛心院建物・北殿九間堂や、六勝寺跡推定尊勝寺阿弥陀堂・回廊などで検出したものに類似する。使用された石材は、砂岩、チャート、頁岩などの自然石である。建物の雨落溝内からは瓦がほとんど出土していないことから、いずれも瓦葺ではなかったと考えられる。

遺構の年代 建物は3棟とも同一方向であることから同時期に建てられたものと考えられる。また建物の造営時期は不明であるが、SB1礎石据付穴から平安時代後期の瓦が出土したことから、蓮華王院の創建時（長寛二年1164）、もしくはそれから大きく離れる時期ではなかろう。建物の雨落溝内には多量の土器が堆積し、溝両側の石の上面は火を受けており、建物はいずれも焼失したと推定できる。焼失した時期は出土した土器から、12世紀後半と考えられる。

今回の調査は従来文献で推定するだけであった、平安時代末期における仏堂建立の具体的状況を知る上で貴重な資料を得ることができた。また、検出した道路遺構は蓮華王院の寺域のみならず、法住寺殿域の地割りを復元する上での貴重な拠り所となるであろう。

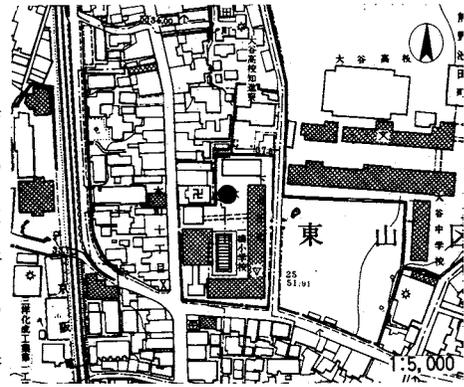
(久世康博・上村和直)



調査区配置図 (1:400)

48 法住寺跡

経過 この調査は京都市立一橋小学校体育館建設に伴うものである。付近一帯は法住寺の寺域及び最勝光院の推定地にあたり、当校では昭和 57 年度に本調査地北側において給食棟新築工事に伴う発掘調査が行われて^{注1}いる。この調査では平安時代後期の掘立柱建物や、建物基壇の地業と考えられる遺構が検出されているが、これらの遺構は出土遺物の年代から最勝光院に関連するものとみられている。また周辺では当校の北東に所在する大谷高校で、本調査とほぼ同時期に実施された発掘調査によって最勝光院のものと思われる池や平安時代中期の瓦窯などが発見され^{注2}、更に当校南部の東本町 12 丁目では立会調査により瓦積み井戸などが検出されて^{注3}いる。



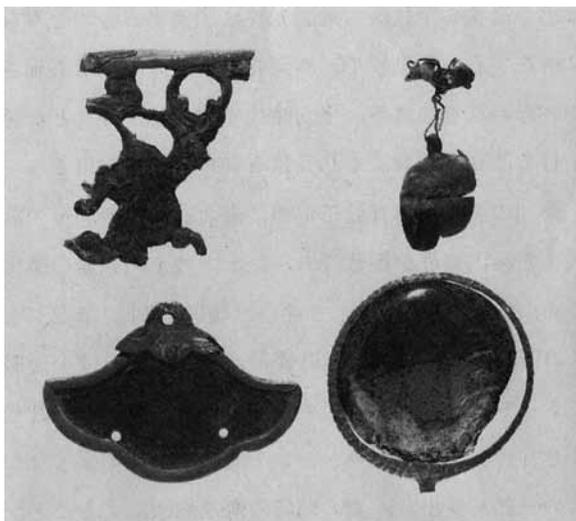
今回の調査は体育館予定地に南北 28 m 東西 23 m の調査区を設定した。敷地面積が少なく残土の場内処理が困難であったが、残土の頻繁な搬出は学校の安全対策上不可能であったため、調査区の表土を取り除いた後に、南北の 2 区に分け反転して調査を行った。調査区の西側約 1/3 は旧体育館基礎のため遺構はほぼ前面破壊されており、他の部分も独立基礎によって一部破壊されていたが、平安時代の井戸が、比較的良好な状態で検出された。

また井戸の調査のためトレンチ北部を一部拡張したが、この際に前回の調査で検出した地業の一部を検出し、この地業の南端を確認することができた。

遺構・遺物 この調査で検出した主な遺構としては井戸（S E 01）、溝（S D 02～05）などが挙げられる。S E 01 は調査区北東隅に検出したもので、井戸枠は 1 辺 1.4 m の方形縦板組みで各辺とも幅 35cm、厚さ 7 cm 前後の板が 4 枚ずつ組まれていた。底部は曲物などの設備はなく、砂礫層を平坦に掘って作られている。井戸枠は底部から約 2 m 程残存しており、各部材の保存状態は非常によい。井戸内からは土師器、瓦器、瓦類（図版）の他に瓔珞の一部とみられる金銅製品やガラス玉などが出土したが、これらの遺物、特に金属製品には火を受けた痕跡を残すものも多く含まれていた。遺物の時期は平安時代～鎌倉時代のものである。S D 02 は調査区西側に検出した南北方向の溝で、北が 4° 西へ振る方位を持つ。幅約 1.6 m 深さ 0.5 m。この溝を境に東側は一段高まっている。西側では路面状の堆積を一部で確認している。溝内から平安時代後期の土師器などが出土している。S D 03

はトレンチ南部で検出した幅5～6m、深さ約3m、断面は逆台形を呈する濠状の遺構である。堆積は砂層が主体で最上層に泥土がみられたが、S D 5と交わるあたりでは、南側から人的に埋戻された状況が窺われ、礫と粘質土で整地されていた。出土遺物は少なく、正確な時期は不明であるが、S D 02を切って成立しており、平安時代後期以降のものであることはわかる。S D 04はS D 03の北側にほぼ並行する形で検出された小規模な溝である。1ヵ所でクランク型に方向を変えるが、全体としてはS D 03に近い方位を持つ。幅約0.7m深さ0.1m。S D 05は、S D 02の東側で検出された南北溝、方向はほぼ真北にそう。幅1.5m深さ0.7m、断面逆台形の整った形状を持つ溝である。東肩の一部に石列状のものを検出したが、特に護岸されていた様な痕跡はない。S D 03が埋った後に作られており、室町時代後半頃の土師器などが出土している。

小結 最勝光院については『百鍊抄』、『玉葉』などを始めとする文献記録も比較的残されており、その研究も行われてきたが、正確な位置やその遺構については従来調査例も少なく、ほとんど不明であった。その意味では今回検出した井戸や溝、あるいは前述した



S E 01 出土瓔珞片

地業や、池はこの最勝光院に関連する遺構として重要なものであるといえるだろう。特にS D 02、S D 05はその西を限る施設の可能性が高く、またS E 01から出土した瓦や瓔珞は最勝光院に使用されていたものと考えてよいだろう。

(平尾政幸・梅川光隆・辻純一)

注1 『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和57年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所

注2 『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』昭和59年大谷高等学校法住寺殿跡調査会

注3 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和56年度 京都市文化観光局
財団法人京都市埋蔵文化財研究所

49 醍醐古墳群

経過 醍醐古墳群の立地する丘陵一帯で実施された造成工事によって、醍醐 14 号墳の石室が露出する事態となったため、緊急の発掘調査を実施した。当古墳群での発掘調査は 1978 年 9 月と 1980 年 3 月に実施されており、特に後者では醍醐耳塚古墳と 2・3・9 号墳の調査で小型の石室や須恵器が見つかった。今回の調査では古墳が斜面下に保存されることを考慮して主体部の調査を主におこない、墳丘については断ち割る程度とした。

遺構・遺物 墳丘の 5 ヶ所を断ち割ったところ周溝を検出し、墳丘は一辺 10 m を測る方墳と推定された。周溝は幅約 1.2 m、深さ約 30 cm あり、埋土は黒褐色砂質土層であった。墳丘の封土はおよそ 80 cm 程残存し、上・下 2 層に大別できた。上層は側壁石材の三・四段目、下層は二段目の石材を積み上げた際に盛られたものである。

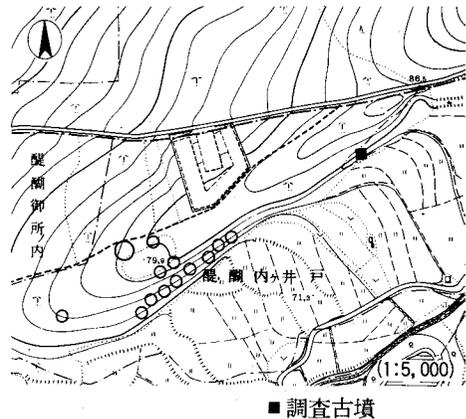
主体部は南南東に開口する無袖式の横穴式石室である。全長 3.9 m、幅は奥で 1.2 m、開口部で 1 m を測る。石材はすべてチャートで、長さ 50 cm、幅 20 cm 前後のものを小口を内に向けて横積みしている。石室床面には褐色泥土層の整地層が平均 10 cm 程あり、この上には棺台と思われる扁平な石材が数個みられた。石室掘形は 3 本のトレンチで検出した。主軸と直交するトレンチによると、幅 2.3 m、深さ 40 cm を測る。

石室内より須恵器 4 点（高杯 2・台付長頸壺 1・提瓶 1）と鉄器 10 点（直刀 1・鎌 7・刀子 2）が出土した。須恵器はすべて東壁沿いにあり、特に台付長頸壺（1）と高杯（2）は正立状態であった。直刀は長さ 55 cm あり、把縁金具に特色がある。鎌はすべて長頸鎌である。

小結 調査の結果、14 号墳は主体部に横穴式石室を持ち、墳丘は方墳と推定された。当古墳群は過去の調査で小型の石室を検出しており、新たな知見を加えたものといえる。なお、山科地域では同様の古墳群として旭山古墳群^註が知られている。いずれも小型の方墳で、主体部には小さな無袖式の横穴式石室をもち、7 世紀前半に築造された点で共通している。畿内地方の群集墳が一般に終焉を迎えるこの時期になぜ古墳群の造営がおこなわれたのか、興味深い事実といえる。

（丸川義広）

注 『旭山古墳群発掘調査報告』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981 年



第2章 試掘・立会調査

I 昭和58年度の試掘・立会調査概要

今年度に実施した試掘・立会調査件数は下記表の通りである。文化庁国庫補助分と合わせて893件を数えた。文化庁国庫補助以外の昭和58年度試掘・立会調査では京域外の件数が京域内の半数に達し、郊外地域の調査が増加したのが目立った。試掘調査から発掘調査に切り換えたものに左京九条二坊(14)、平安京跡隣接地(25)がある他、文化庁国庫補助による試掘から発掘に切り換えたものが10件ある。

以下今年度の調査で得られた成果を記す。

平安宮・京跡 平安宮で得られ

た成果には、内膳司(HQ 42)の平安時代前期の土器を多量に含む土壙や陰陽寮(HQ 52)の平安時代の瓦を多量に含む土壙が検出されたことが挙げられる。平安京域では、左京二条二坊(5)で前年度の発掘調査で検出された高陽院池跡の続きを検出し、検出地点が推定春日小路の路面上にあたるため、春日小路は高陽院二町四方によって分断されていたことを実証した。左京八条四坊(HL 164)では古墳時代後期の溝が検出され完形の須恵器類が出土した。当該地域での新たな遺跡の発見であり注目されよう。また右京北辺四坊・一条四坊・妙心寺境内(17)では妙心寺創建以前の遺構群を検出し、これが文献にみえる平安時代中期から後期にかけての貴族の別業跡であることを確認する成果を挙げた。条坊関係の遺構では二条大路北溝(HR 46)、野寺小路東溝(HR 50)、皇嘉門大路東溝(HR 5)、梅小路北溝(HR 28)、坊城小路西溝(HL 140)、四条坊門小路南溝(HL 77)四条大路北溝(HL 122)、錦小路南溝(HL 136)、針小路・猪熊小路の路面(13)、正親町小路南北溝・土御門大路北溝(17)が検出された。

昭和58年度 試掘・立会調査件数

	京域	京域外	計
試掘	5	10	15
立会	20	14	34
計	25	24	49

昭和58年度 文化庁国庫補助試掘・立会調査件数

	京域	京域外	計
試掘	74	57	131
立会	474	239	713
計	548	296	844

京域外の遺跡 岩倉忠在地遺跡(26)の試掘調査では、平安時代から鎌倉時代にかけての遺構を検出し遺跡範囲が更に南西に広がることを確認した。北白川廃寺(K S 12)の調査では縄文時代晩期船橋式の土器を多量に検出し、縄文時代中期から後期の遺跡として知られている上終町遺跡も含めた付近一帯の縄文遺跡の分布を再検討する必要に迫られた。白河街区・岡崎遺跡(28)では六勝寺跡の推定寺域から南にはずれた地点で平安時代後期から鎌倉時代の遺構が検出され、これも白河街区の拡がりを再検討する資料となった。法住寺殿跡(R T 15)では、平安時代の瓦窯数基及び溝などを検出し本格的な発掘調査が実施され^注た。一方山科地区では、勸修寺境内(33)の下水道工事に伴う立会調査で堅穴住居址、土壌、柱穴などが検出された。中臣遺跡が安祥寺川右岸地域に広がる可能性を示すものとして注目されよう。南春日町遺跡(40)では大規模な試掘調査が実施された結果、南春日町遺跡の範囲確定に必要な多くの資料が得られた。これと併行して実施された大原野一帯の分布調査でも未登録の古墳など数多くの新遺跡が発見された。中久世遺跡・長岡京跡(41)では、上久世遺跡・戌亥遺跡・鶏冠井遺跡の範囲も含めて調査が行われ、中久世遺跡などの範囲を確定できる資料や、長岡京の南一条条間大路南・北溝、南一条第一小路南・北溝、一条第一小路南・北溝などを検出する成果を挙げた。

以上が今年度における試掘・立会調査で得られた成果の概要である。先述したように土木工事の郊外地域での増大の傾向は、必然的に郊外地域に展開する分布域の不明確な遺跡や未登録の遺跡が破壊され消滅する機会も増えることを意味している。試掘・立会調査が市街地で有効な調査手段であることは、広域調査が可能であるという好条件に恵まれているが故に郊外地域においても優れて有効であろう。しかしここ数年間、調査人員は減少の一途を辿っているにも関わらず補充は全くなされていない。人員不足の状態では調査が実施され、試掘・立会調査に備わった有効性を十分に発揮できないまま調査を終えるケースが多くなっている。京都市域の埋蔵文化財保護の立場に立つ者にとって憂慮すべき事態を迎えているといえよう。現時点で最も緊急に要請されることは、調査に必要な人員を早急に確保することと、これを含めた調査体制の将来的な展望を持った確立を実現していくことに尽きよう。

(平田 泰)

注 『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』

大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会 昭和59年

	番号	遺 跡 名	調 査 地	調査期間	面積 (㎡)	調査	調査契機	概 要	担当者	本文 ページ	図版 番号
平 安 宮 跡	1	御井 (83AH-2)	中・西ノ京車坂町15-5朱雀第6小学校	'830523	28	試掘	給食室増改築工事	未検出	磯部		
	2	大蔵・主殿寮聚楽第跡 (83HQ-W57)	上・土屋町通、浄福寺通、裏門通各一条通～中立売通	'840123 ～ 0302	562	立会	配水管布設替工事	未検出	家崎		
	3	左馬寮他 (83G-10-10)	中・西ノ京笠殿町31～冷泉町138	'830625 ～ 0720	910	立会	瓦斯低圧管入替工事	平安中期の井戸、溝、土壌検出	百瀬	159	
	4	左京一条三・四坊他 (83G-10-16)	上・京都御苑地先	'831001～ 1216	341	立会	瓦斯低圧管入替工事	江戸の石垣、溝などを検出	百瀬	163	59
	5	左京二条二坊 (83HK-K28)	上・丸太町通大宮東入～東堀川東入	'830914 ～ '840308		立会	地下ケーブル敷設工事	高陽院池跡、縄文晩期、弥生前期の土器検出	家崎	165	60
	6	左京二条四坊 (83HK-W59)	中・竹屋町通寺町～堺町通他	'840203 ～ 0318		立会	配水管布設替工事	未検出	百瀬		
	7	左京三条二坊・四条二坊 (83HK-W29)	中・上巴町、樽屋町、上八文字町、岩上町、宮本町	'830825 ～ 0922	920	立会	配水管布設替工事	平安後期～室町の各遺物包含層検出	家崎		
	8	左京六条一・二坊・七条一・二坊 (83HK-W30)	下・柿本町 他	'830903 ～ 1105	900	立会	配水管布設替工事	平安前期～江戸の各時期の遺構検出	百瀬	167	61
	9	左京七条一坊東市跡 (83G-10-4)	下・朱雀正会町2～七条大宮東入大工町106	'830428 ～ 1007	765	立会	瓦斯低圧管入替工事	未検出	百瀬		
	10	左京九条一坊 (83AH-9)	南・八条内田町20-2南大内小学校	'830907	25	試掘	給食室増改築工事	未検出	磯部		
	11	左京九条一坊東寺 (83G-10-12)	南・八条町585～内田町27地先	'830826 ～ 1119	867	立会	瓦斯低圧管入替工事	壬生大路西溝を検出	吉村	169	
	12	左京九条一坊 (83G-10-19)	南・八条源町74～内田町39地先	'831121 ～ '840203	496	立会	瓦斯低圧管入替工事	未検出	吉村		
	13	左京九条二坊 (83HK-W36)	南・猪熊通八条通～東寺道他	'830913 ～ 1022	511	立会	配水管布設替工事	針工事、猪熊小路の路面検出	吉村		
	14	左京九条二坊 (83HK-BC)	南・西九条春日町19	'840301 ～ 0315	300	試掘	工場新築工事	59年度発掘調査に切替え	磯部		
	15	左京九条二坊 (83G-10-5)	南・西九条針小路町92～西蔵王町地先	'830529 ～ 1005	845	立会	瓦斯低圧管入替工事	未検出	吉村		
	16	左京九条四坊 (83G-10-15)	南・東九条東山王町11地先～南山王町36地先	'831121 ～ '840302	730	立会	瓦斯低圧管入替工事	未検出	吉村		
	17	左京北辺四坊・一条四坊・妙心寺境内 (83HK-SW34)	右・花園妙心寺町、寺中町大蔵町	'830912 ～ '840331	3040	立会	公共下水道工事	平安～江戸の遺構・遺物検出	平田	170	62 63 70
	18	右京三条一坊 (83G-10-24)	中・西ノ京星池町	'840315 ～ 0331	403	立会	瓦斯低圧管入替工事	未検出	磯部 百瀬		
	19	右京三条二坊 (83G-10-22)	中・西ノ京東中合町56～銅駝町56	'840213 ～ 0323	482	立会	瓦斯低圧管入替工事	西大宮大路西溝、西堀川小路流路を検出	百瀬	174	
	20	右京三条二坊 (83G-10-23)	中・西ノ京下合町32地先～西月光町地先	'840222 ～ 0509	394	立会	瓦斯低圧管入替工事	未検出	百瀬		
	21	右京六条三坊 (83G-10-18)	右・西院太田町地先～高田町地先	'831111 ～ '840303	526	立会	瓦斯低圧管入替工事	未検出	百瀬		

	番号	遺跡名	調査地	調査期間	面積 (㎡)	調査	調査契機	概要	担当者	本文 ページ	図版 番号
平安宮・京跡	22	右京七条二坊 (83G-10-1)	右・西院高田町 24 地先 ～下・西七条比輪田町 9 地先	'830607 ～ 0718	498	立会	瓦斯低圧管 入替工事	未検出	吉村		
	23	右京八条二坊 (83G-10-17)	下・七条御所ノ内本町 100 ～梅小路頭町 44	'831104 ～ '840203	513	立会	瓦斯低圧管 入替工事	未検出	吉村		
	24	平安京跡隣接地 (83AH-11)	右・梅津中村町 38 梅津小学 校	'830924 840203	30	試掘	屋内体育場 増改築工事	鎌倉～室町の遺物 検出	磯部		
	25	平安京跡隣接地 (83AH-18)	下・河原町通松原上ル二丁目 富永町 344 総合教育相談所	'840220 ～ 0224	75	試掘	建設工事	59 年度発掘調査 に切換え	磯部		
京 域 外 の 遺 跡	26	岩倉忠在地遺跡 (83AH-14)	左・岩倉下在地町明德小学校	'831105 ～ 1109	513	試掘	校舎新築工 事	平安中期～鎌倉の 遺構・遺物検出	磯部	175	
	27	大覚寺御所跡隣接地 (83AH-6)	右・嵯峨釈迦堂大門町 35-1 嵯峨小学校	'830721	32	試掘	屋内体育 場・給食室 増改築工事	未検出	磯部		
	28	白河街区・岡崎遺跡 (83KS-K2)	左・岡崎円勝寺町	'830413 14・30 1201～5	135	立会	電線埋設工 事	平安後期～鎌倉の 土壌と遺物検出	家崎	176	
	29	白河南殿跡 (83KS-W-4)	左・冷泉通、川端通 ～東大通西入地内	'830511 ～ 0528	578	立会	配水管布設 替工事	未検出	百瀬		
	30	唐橋遺跡 (83G-10-8)	南・吉祥院九条町 67 地先 ～定成町 17 地先	'830620 ～ 0826	1031	立会	瓦斯低圧管 入替工事	未検出	百瀬		
	31	鳥辺野跡・総山遺跡・ 南日吉町遺跡 (83G-10-20)	東・今熊野日吉町 8 地先 ～南日吉町 165 地先	'840111 ～ 0210	851	立会	瓦斯低圧管 入替工事	未検出	百瀬		
	32	山科本願寺跡 (83AH-7)	山・東野八反畑町 50-1 山科 中学校	'830719	15	試掘	教室増改築 工事	未検出	磯部		
	33	勧修寺境内 (83RT-SW25)	山・勧修寺仁王堂町、西北出 町、東北出町、堂山町、福岡 町、風呂尻町他	'830721 ～ 1110	3000	立会	公共下水道 工事	古墳～奈良の堅穴 住居、土壌、柱穴 検出	百瀬	177	64
	34	醍醐寺境内隣接地 (83AH-3)	伏・醍醐川久保町 1 醍醐小学 校	'830525	8	試掘	給食室増改 築工事	未検出	磯部		
	35	醍醐寺境内隣接地 (83AH-5)	伏・醍醐池田町 17-1 栗陵中 学校	'830623	10	試掘	校舎増築工 事	縄文の石器出土	磯部		
	36	上鳥羽遺跡 (83G-10-13)	南・上鳥羽鴨田町 18 地先 ～南花名町 43 地先	'830826 ～ 1008	181	立会	瓦斯低圧管 入替工事	未検出	吉村		
	37	深草遺跡隣接地 (83AH-12)	伏・深草鈴塚町 13 伏見工業 高等学校	'831004	22	試掘	格技場新築 工事	未検出	磯部		
	38	鳥羽離宮跡 (TB-88)	伏・竹田内畑町	'830610 ～ 1109		立会	土地区画整 理事業	未検出	鈴木 吉崎		
	39	鳥羽離宮跡 (83TB-W44)	伏・竹田小屋ノ内町他	'831012 ～ 1019	151	立会	配水管布設 替工事	平安後期の池跡検 出	家崎		
	40	南春日町遺跡 (83MK-HO Ⅲ)	西・大原野北春日町、南春日 町	'831203 ～ '840331	1995	試掘	再場整備事 業	平安中期～室町の 遺構と弥生～室町の 遺物検出	加納 辻裕	179	6569
	41	長岡京跡・中久世遺 跡他 (83MK-W9)	南・久世殿城町・中久世町向 日市鶏冠井町、森本町	'830502 ～ 0902		立会	公共下水道 工事	弥生～平安後期の 各遺構、弥生中期 ～室町の遺物検出	加納 長宗	181	
42	伏見城跡 (83AH-10)	伏・桃山町本多上野 107 桃山 小学校	'830916	38	試掘	屋内体育場 増改築工事	桃山の土壌検出	吉村 辻純			
43	伏見城跡・板橋廃寺 跡 (83AH-17)	伏・下板橋町 60 板橋小学 校	'830909	38	試掘	屋内体育場 増改築工事	未検出	磯部			
44	伏見城跡 (83G-10-2)	伏・桃山水野左近西町地先 ～伊掃部東町地先	'830521 ～ 0805	758	立会	瓦斯低圧管 入替工事	伏見城関連の溝を 検出	吉村	183	65	

	番号	遺 跡 名	調 査 地	調査期間	面積 (㎡)	調査	調査契機	概 要	担当者	本 文 ページ	図版 番号
京 域 外 の 遺 跡	45	伏見城 (83G-10-7)	伏・桃山町泰長老町157-1 地先～板倉周防地先	'830620 ～ 0826	351	立会	瓦斯低圧管 入替工事	未検出	吉村		
	46	伏見城 (83G-10-11)	伏・桃山福島大夫南町地先 ～毛利長門東町地先	'830715 ～ 0819	657	立会	瓦斯低圧管 入替工事	桃山時代の溝 を検出	吉村	185	
	47	伏見城 (83G-10-14)	伏・桃山筒井伊賀東町18地 先～桃山町金森出雲1-3地 先	'830905 ～ 1220	871	立会	瓦斯低圧管 入替工事	未検出	吉村		
	48	伏見城跡 (83G-10-21)	伏・御堂町618地先～両替 町一丁目417地先	'840209 ～ 0331	755	立会	瓦斯低圧管 入替工事	未検出	磯部		
	49	淀城跡隣接地 (83AH-16)	伏・淀美豆町明親小学校分 校	'831201 ～ 1205	615	試掘	敷地造成工 事	室町～江戸の 遺物出土	磯部		

昭和 58 年度 文化庁国庫補助による試掘・立会調査一覧表

平安宮 (H Q)

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
平安宮跡	上、六軒町下長者町下る七番町 303	立	4/6	巡回時工事終了。	HQ-1
〃	上、千本通下立売上る七番町 351-25	立	4/9	GL-0.4m にて土壌 1、時期不明。	HQ-2
〃	上、出水通千本西入七番町 323-1	立	4/12	GL-0.1m にて江戸の包含層。	HQ-3
〃	上、七本松通中立売下る三軒町東部 71	立	4/20	盛土のみ。	HQ-4
〃	上、仁和寺街道七本松西入二番町 197-2	立	5/2	盛土のみ。	HQ-5
〃	中、聚楽廻中町 27	立	5/12	巡回時工事終了。	HQ-6
〃	中、西ノ京内畑町 13	立	5/17	盛土のみ。	HQ-7
〃	中、西ノ京右馬寮町地先	立	4/25	検出できず。	HQ-8
〃	上、仁和寺街道七本松東入一番町 93-1,15,16	立	5/26	盛土のみ。	HQ-9
〃	上、淨福寺通出水上る白銀町 261	立	5/28	盛土のみ。	HQ-10
〃	上、七本松通中立売下る一番町	立	6/1	盛土のみ。	HQ-11
〃	中、西ノ京小堀町 2	立	6/11	GL-0.8m にて柱穴 3、時期不明。	HQ-12
〃	上、下長者町通日暮西入西辰巳町 116-5	立	6/17	GL-0.9m にて整地層、時期不明。	HQ-13
〃	上、千本通下立売下る小山町 889-2	立	6/23	盛土のみ。	HQ-14
〃	上、御前通下立売上る三丁目西上之町 278-18	立	6/25	盛土のみ。	HQ-15
〃	中、聚楽廻中町 50-4	立	6/27	盛土のみ。	HQ-16
〃	中、聚楽廻南町 19	立	6/27	盛土のみ。	HQ-17
〃	上、裏門通下長者町上る亀木町 216	立	7/1	盛土のみ。	HQ-18
〃	上、下長者町通御前東入三助町 280	立	7/2	検出できず。	HQ-19
〃	上、下立売通七本松西入西東町 367-3	立	7/9	GL-0.7m で江戸の包含層。	HQ-20
〃	上、日暮通下長者町下る秤口町 158-11	立	7/9	盛土のみ。	HQ-21
〃	上、下立売通七本松西入西東町 369	立	7/12	検出できず。	HQ-22
〃	中、聚楽廻東町 14	立	7/16	盛土のみ。	HQ-23
〃	上、中立売通淨福寺西入加賀屋町 405	立	7/18	検出できず。	HQ-24
〃	上、知恵光院通竹屋町下る主税町	立	8/5・6・10	検出できず。	HQ-25
〃	上、六軒町通仁和寺街道下る四番町 148	立	8/11	盛土のみ。	HQ-26
〃	上、知恵光院通上長者町上る須浜町 571-3	試	8/12	GL-0.4m にて江戸の包含層、井戸。	HQ-27
〃	上、淨福寺通出水上る白銀町 246-19	立	8/30	検出できず。	HQ-29
〃	上、下ノ森通下長者町下る鳳瑞町 245-47	立	8/30	盛土のみ。	HQ-30
〃	中、西ノ京内畑町 25-6・16	立	9/6	検出できず。	HQ-31
〃	中、西ノ京梅尾町	試	9/12	検出できず。	HQ-32
〃	上、下立売通七本松東入長門町 402	立	9/14	盛土のみ。	HQ-33
〃	上、下長者町通七本松西入上る鳳瑞町 239-13	立	9/17	盛土のみ。	HQ-34
〃	上、下長者町通七本松西入上る鳳瑞町 239	立	9/17	盛土のみ。	HQ-35
〃	中、聚楽廻東町 14	立	9/19	工事に伴う掘削なし。	HQ-36
〃	上、知恵光院通中立売上る新白水丸町 462	立	9/24	検出できず。	HQ-37
〃	中、聚楽廻南町 8-24	立	9/29	盛土のみ。	HQ-38
〃	中、聚楽廻中町 27、39-1	試・立	10/3・14	GL-0.7m にて江戸の土壌。	HQ-39
〃	上、丸太町通千本東入中務町 491	立	10/3、11/4	GL-0.3m 以下江戸の包含層 2、鎌倉・平安の包含層各 1。	HQ-40
〃	中、聚楽廻東町 11-4	立	10/5	盛土のみ。	HQ-41
〃	上、出水通千本西入尼ヶ崎横町 357	立	10/6	GL-0.2m にて江戸、-0.5m にて平安の包含層。-0.65m にて平安前期の土壌 1。	HQ-42
〃	中、西ノ京内畑町 12	立	9/29	盛土のみ。	HQ-43
〃	上、下ノ森通下立売上る鳳瑞町 247-1	立	10/18	盛土のみ。	HQ-44
〃	中、聚楽廻西町 101	立	10/20	盛土のみ。	HQ-45
〃	上、出水通千本東入尼ヶ崎横町 351-7	試	10/21	GL-0.4m 以下江戸の包含層。	HQ-46
〃	中、西ノ京左馬寮町 6-14	立	10/21	検出できず。	HQ-47

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
平安宮跡	中、西ノ京内畑町 27	立	10/22	盛土のみ。	HQ-48
〃	上、下立売通千本東入田中町 424-1	立	11/5	盛土のみ。	HQ-49
〃	上、千本通上長者町上る百万遍町 81-2	試	11/11	検出できず。	HQ-50
〃	上、上長者町通千本西入五番町 174-1	立	11/11	検出できず。	HQ-51
〃	上、知恵光院丸太町下る主税町地先	立	11/16	GL-0.6mにて平安前期の土壌 2。 陰陽寮に位置する。	HQ-52
〃	上、仁和寺街道七本松西入二番町 202	立	11/19	検出できず。	HQ-53
〃	上、千本通下長者町下る福島町 375	立	11/24	GL-0.65mにて土壌 2、時期不明。	HQ-54
〃	上、日暮通榎木町下る北伊勢屋町 740、742	試	12/12	GL-0.5m以下室町 1、江戸 2 の 包含層。	HQ-55
〃	上、土屋町通出水上る辨天町 302-6	立	12/12	盛土のみ。	HQ-56
〃	上、松屋町中立売下る神明町 440-4	立	12/16	盛土のみ。	HQ-57
〃	上、上長者町通浄福寺西入新柳馬場頭町 516	立	12/20	盛土のみ。	HQ-58
〃	上、出水通日暮西入金馬場町 166	立	12/6	巡回時工事終了。	HQ-60
〃	上、六軒町通中立売上る西入三軒町 66-3	立	2/21	盛土のみ。	HQ-28
〃	上、下の森通仁和寺街道上る二番町	立	1/10	巡回時工事終了。	HQ-59
〃	上、竹屋町通千本東入主税町 1187,1190 ~ 1195	試	1/23	盛土のみ。	HQ-61
〃	上、土屋通出水上る弁天町 298	立	1/26・27	盛土のみ。	HQ-62
〃	上、下の森通下立売上る鳳瑞町 247-1	立	1/27	GL-0.46mにて平安の包含層。	HQ-63
〃	中、西ノ京左馬寮町 7-27	立	1/27	盛土のみ。	HQ-64
〃	上、土屋町通一条下る伊勢殿横町 272	立	2/2	掘乱のみ。	HQ-65
〃	上、松屋町通下立売下る二丁目 647-1	立	2/2	盛土のみ。	HQ-66
〃	上、七本松通仁和寺街道下る東入二番町 215- 1	立	2/6	盛土のみ。	HQ-67
〃	上、七本松通仁和寺街道下る東入二番町 216- 6	立	2/6	GL-0.3m以下江戸の包含層。	HQ-68
〃	上、千本通丸太町上る小山町 884	試	2/7	GL-0.15mにて凝灰岩化粧の基壇 及び平安後期の遺物出土。発掘 調査に切り換える。	HQ-69
〃	中、西ノ京内畑町 26-5	立	3/12・13	GL-0.35m以下、平安後期の包含 層 2。-0.48 ~ 0.74mにて平安中 ~後期の土壌 5。	HQ-70
〃	上、下立売通松屋町西入浮田町 608	立	2/10・14・15	GL-0.1m以下平安前期~江戸の 包含層。	HQ-71
〃	上、下立売通七本松東入長門町 399	立	2/13	GL-0.3mにて溝 1、時期不明。	HQ-72
〃	上、裏門通中立売下る高台院堅町 209-8	立	2/14	盛土のみ。	HQ-73
〃	上、下長者町通浄福寺西入新御幸町 26	立	2/28	盛土のみ。	HQ-74
〃	上、六軒町通出水上る利生町 294-99	立	3/2	盛土のみ。	HQ-75
〃	上、裏門通中立売下る高台院堅町 209-4	立	3/7	GL-0.6mにて江戸の土壌 1。	HQ-76
〃	上、千本通二条下る東入主税町 812	立	3/13・23	盛土のみ。	HQ-77
〃	上、千本通丸太町下る東入主税町 1182	立	3/14	GL-1.0mにて平安の包含層 1。	HQ-78
〃	上、下長者町通千本東入二本松町 5-1	立	3/22	盛土のみ。	HQ-79
〃	中、西ノ京内畑町 17-17	立	3/21	盛土のみ。	HQ-80
〃	上、裏門通出水上る白銀町 246-3	立	3/29	盛土のみ。	HQ-81
〃	上、裏門通出水上る白銀町 246-3	立	3/29	盛土のみ。	HQ-82
〃	上、浄福寺通丸太町下る主税町 930	立	3/30	GL-0.5mにて、室町の包含層。 -0.7mにて平安の包含層。	HQ-8

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
北辺二坊	上、東堀川通中立売下る一丁目	立	4/26	GL-0.25mにて土壌 2、時期不明。	HL-22
〃	上、中立売通小川西入三丁目町 441	立	4/28	GL-0.45mにて江戸、-1.1mにて 室町の包含層。	HL-25
〃	上、葎屋町通一条下る福大明神町 102	試	5/13	GL-1.2mにて平安~室町の遺	HL-38
〃	上、七本松通中立売下る三軒町東部 71	立	4/20	盛土のみ。	HQ-4

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
北辺二坊				物を含む流れ堆積。	
〃	上、黒門通中立売上る飛弾殿町 170-2	立	6/6	検出なし。	HL-58
〃	上、中立売通室町西入 3丁目 441-1・3	立	6/22	GL-0.35mにて江戸の包含層。	HL-72
〃	上、猪熊通中立売上る小寺町 141-16	立	8/11	GL-0.65mにて江戸の包含層。	HL-125
〃	上、葎屋町通一条下る福大名神町 104	立	10/31	検出できず。	HL-179
〃	上、葎屋町通一条下る福大名神町 119-1	立	2/14	GL-0.45m以下包含層 2、江戸 1、 時期不明 1。-0.75mにて室町の土 壙 1。	HL-243
〃	上、小川通一条下る小川町 216	立	2/25	GL-0.1mにて江戸の包含層。	HL-253
北辺三坊	上、一条通新町西入元真如堂町 368-2	立	4/18	検出できず。	HL-17
〃	上、新町通中立売下る仕丁町 327-4	立	5/20	盛土のみ。	HL-42
〃	上、新町通中立売下る仕丁町 339	立	8/24	盛土のみ。	HL-129
〃	上、新町通中立売下る仕丁町 327-7	立	9/29	検出できず。	HL-149
〃	上、一条通室町西入東日野殿町地先	立	2/2	攪乱のみ。	HL-237
一条二坊	上、下立売通油小路東入西大路町 139-3	立	5/4	GL-0.48mにて江戸、-1.3mにて 室町後期の包含層。	HL-30
〃	上、大宮通上長者町下る東堀川町 620-2	立	5/12	盛土のみ。	HL-36
〃	上、下長者町通猪熊西入蛸子町 369	立	6/25	GL-0.5mにて土壙 1、時期不明。	HL-92
〃	上、油小路通下立売下る西裏辻町 268	立	7/28	盛土のみ。	HL-113
〃	上、大宮通榎木町下る一丁目 828-1、他	試	9/13	GL-0.6mにて包含層、時期不明。	HL-143
〃	上、猪熊通出水下る荒神町 434	立	9/29	盛土のみ。	HL-151
〃	上、榎木町通油小路西入西山崎町 246	立	10/4	GL-0.6m以下平安後期～江戸の 包含層 4。	HL-157
〃	上、下長者町通猪熊東入蛸子町 365	立	10/20	GL-1.5mにて包含層 3、時期不明。	HL-169
〃	上、葎屋町通下長者町下る亀屋町 327、他	試	10/28	GL-0.3mにて江戸、-1.1mで鎌倉 の包含層。	HL-174
〃	上、葎屋町通下長者町下る亀屋町 329、331	試	10/28	GL-1.15mにて室町の土壙 1。	HL-175
〃	上、大宮通下立売下る菱屋町	立	11/22	GL-0.9mにて包含層、時期不明。	HL-204
〃	上、大宮通出水上る清元町 748	試	8/5	盛土のみ。	HL-250
〃	上、黒門通下長者町下る吉野町 714	立	2/15・16	検出できず。	HL-246
〃	上、榎木町通大宮西入菱屋町地先	立	2/8	埋土のみ。	HL-251
〃	上、中長者町通小川西入中橋詰町 164-4	立	3/14	GL-0.4m以下、包含層 4、江戸 3、 室町 1。	HL-270
一条三坊	上、下長者町通室町西入西鷹司町 15-4	立	4/26	検出できず。	HL-24
〃	上、烏丸通下長者町下る桜鶴門町 380	試	7/6	検出できず。	HL-85
〃	上、室町通上長者町下る清和院町 561	立	2/2	GL-0.4mにて江戸の包含層。	HL-236
二条二坊	上、榎木町通黒門西入中御門横町 568-1	立	4/12	検出できず。	HL-13
〃	中、二条通堀川東入矢幡町 300-7	立	5/31	GL-0.3mにて江戸の包含層。	HL-51
〃	中、油小路通竹屋町下る橋本町	立	7/12	検出できず。	HL-93
〃	中、油小路通竹屋町下る橋本町 494-1	立	7/18	検出できず。	HL-95
〃	中、油小路通二条上る薬屋町 601	立	7/25	検出できず。	HL-106
〃	中、油小路通丸太町下る大文字町 51-3	立	7/28	盛土のみ。	HL-111
〃	上、黒門通榎木通町下る小伝馬町 543	立	11/1	盛土のみ。	HL-181
〃	上、榎木通町小川東入東魚屋町 372、372-1	立	11/29	盛土のみ。	HL-206
〃	中、東堀川通竹屋町下る八丁目 538、538-1	立	12/1	GL-1.6mにて室町の包含層。	HL-207
〃	中、丸太町通小川西入横鍛冶町 101	立	2/20	GL-0.1mにて江戸の包含層。	HL-248
〃	中、小川通丸太町下る中之町 73-57	立	3/30	GL-0.4mにて江戸の包含層。	HL-1
二条三坊	中、新町通竹屋町下る弁財天町 292、292-1	試	4/2	GL-0.55mにて江戸の包含層。	HL-64
〃	中、衣棚通二条上る堅大恩寺町 753 他	試	6/10	GL-2.6mにて鎌倉～室町の包含 層。	HL-64
〃	中、竹屋町通車屋町東入清水町 386-1	立	7/4	GL-0.5mにて江戸の包含層。	HL-82
〃	中、烏丸通丸太町下る大倉町 205	立	11/2	盛土のみ。	HL-182
〃	中、釜座通夷川下る大黒町 687-1	立	11/5	盛土のみ。	HL-187
〃	中、車屋町通夷川上る少将井御旅町 363、364	試	11/7	GL-0.7mにて江戸の包含層 2、	HL-188

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
二条三坊	中、丸太町通釜座西入梅屋町 168	立	12/14	-1.9mにて室町の包含層。	HL-219
〃	中、東洞院通竹屋町上る三本木町 450-1	立	1/28	旧基礎によって全て攪乱。	HL-234
〃	中、室町通竹屋町下る鏡屋町 28、29	立	3/9	GL-0.1mにて江戸の包含層。	HL-261
二条四坊	中、堺町通竹屋町上る橋町 86-2	立	4/28	GL-0.2mにて江戸の包含層。 GL-0.9mにて江戸の包含層、-1.5m にて同時期の土壌 3。	HL-26
〃	中、丸太町通寺町西入下御霊前町 637	立	5/30	検出できず。	HL-49
〃	中、御幸町通二条上る達磨町 615	立	6/15・18	盛土のみ。	HL-68
〃	中、夷川通寺町西入丸屋町 695	立	9/29	盛土のみ。	HL-150
〃	中、御幸町通竹屋町上る毘沙門町 537-4	立	12/7	GL-0.2m以下、鎌倉～江戸の包含層	HL-212
〃	中、竹屋町通麩屋町～柳馬場	立	2009/1/253/6	4。 埋土のみ。	HL-233
〃	中、間之町通夷川上る楠町 596-6	立	2/6	GL-0.1mにて江戸の包含層。	HL-238
三条一坊	中、西ノ京池ノ内町 22-27	立	5/24	検出できず。	HL-45
〃	中、西ノ京職司町 68-1	立	6/6	検出できず。	HL-59
〃	中、西ノ京南聖町 12-6	立	6/22	GL-0.7mにて包含層、時期不明。	HL-74
〃	中、西ノ京池ノ内町 22-29	立	7/7	盛土のみ。	HL-89
〃	中、西ノ京勸学院町 25-4	試	9/9・14・16・ 17～22・24	GL-1.05mにて平安後期の包含層、 -1.25mにて溝 2。発掘調査に切り換 える。	HL-140
〃	中、西ノ京小堀町 2-4	立	11/21	GL-0.9mにて江戸の土壌 1。	HL-203
〃	中、神泉苑通三条上る瓦師町 58	立	12/9	GL-0.2mにて江戸、-0.45mにて室町 の包含層、江戸の溝 1。	HL-213
〃	中、西ノ京南聖町 12地先	立	2/20	巡回時工事終了。	HL-249
〃	中、西ノ京勸学院町 3	立	3/1	攪乱のみ。	HL-256
〃	中、西ノ京職司町 67-49	立	3/8	GL-0.3mにて江戸末期の包含層。	HL-260
〃	中、姉小路通神泉苑東入姉西町 129	試	3/12	GL-0.95mにて湿地状堆積、時期不明。	HL-262
〃	中、西ノ京池ノ内町 20-55	立	3/21	検出できず。	HL-272
〃	中、西ノ京勸学院町 27	立	3/21	GL-0.6mにて平安後期の溝、坊城小 路東側溝に位置する。	HL-274
三条二坊	中、岩上通御池下る上巴町 437	立	4/12	GL-1.1mにて平安後期の包含層。	HL-14
〃	中、東堀川通御池上る押堀町 40	立	7/6	GL-1.15mにて江戸の落ち込み。	HL-86
〃	中、小川通姉小路下る西堂町 510	立	10/3	GL-0.35mにて江戸、-0.75mにて鎌 倉～室町の包含層。	HL-154
三条三坊	中、姉小路通両替町東入柿本町 43	立	4/7	GL-0.86mにて室町の包含層。	HL-8
〃	中、烏丸通御池上る二条殿町 541	立	4/18	検出できず。	HL-18
〃	中、両替町通押小路上る金吹町 465	試	4/21	GL-0.45～-1.68mにて平安～江戸の 包含層、鎌倉中期の土壌 1。	HL-19
〃	中、烏丸通三条上る場之町 596	試	5/4	GL-0.6m以下平安後期の整地層、室 町～江戸の井戸 3、土壌 3。	HL-31
〃	中、衣棚通三条上る突抜町 118	立	6/3	GL-0.1mにて室町の包含層。	HL-56
〃	中、新町通姉小路下る町頭町 87-2	立	6/10	盛土のみ。	HL-65
〃	中、西洞院通御池上る押西洞院町 593-1	立	6/14	検出できず。	HL-66
〃	中、烏丸通御池下る虎屋町 565-1、568、570	試	7/22	GL-2.12mにて鎌倉～室町の包含層。 -3.2mにて平安の土壌 1。発掘調査に 切り換える。	HL-102
〃	中、両替町通御池下る龍池町 430	立	9/14	盛土のみ。	HL-145
〃	中、室町通二条下る蛸薬師町 280	立	10/15	GL-0.2mにて江戸の包含層。	HL-163
〃	中、新町通三条上る町頭町 97	立	11/12	GL-0.3mにて江戸末期の包含層。	HL-195
〃	中、西洞院通姉小路下る姉西洞院町 536	立	1/24	GL-0.2m以下、江戸の包含層 2。	HL-232

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
三條三坊	中、押小路通新町東入頭町 21-2	立	1/30	GL-0.3mにて江戸の包含層。	HL-235
	中、押小路通両替町西入金吹町 460	立	2/14	GL-0.1m以下包含層5、室町1、江戸4。	HL-241
三條四坊	中、姉小路通両替町東入柿本町 415	立	2/16	GL-0.1mにて江戸の包含層。	HL-242
	中、御池通釜座東入橋之町 744 地先	立	2/15・16	GL-0.3m以下、江戸の包含層2。	HL-244
	中、御池通寺町西入ル亀屋町 371	立	4/4	GL-0.9mにて江戸の包含層。	HL-4
	中、麩屋町通二条下尾張町 223、224	立	5/18	盛土のみ。	HL-47
	中、間之町通二条下尾張町 476、478	立	6/6	盛土のみ。	HL-60
	中、寺町通御池上る上本能寺前町 489	試	7/6・11	GL-1.1mにて包含層、時期不明。 -2.2mにて室町の土壌1。	HL-87
	中、三條通寺町西入ル弁慶石町 60	立	7/25	検出できず。	HL-105
	中、三條通寺町西入ル弁慶石町 59	立	8/1	盛土のみ。	HL-115
	中、三條通柳馬場東入中之町 1-1	立	8/8	盛土のみ。	HL-118
	中、麩屋町通二条下尾張町 210-3	立	10/26	盛土のみ。	HL-171
	中、御池通寺町西入下本能寺前町地先	立	12/2	GL-0.45mにて江戸末期の包含層。	HL-208
	中、御幸町通姉小路下る丸屋町 334-5	立	1/7	GL-0.2mにて江戸の包含層。	HL-227
	中、二条通間ノ町西入松屋町 41-1	立	3/12・13	GL-0.3mにて江戸、-2.0mにて室町の包含層。	HL-263
	四條一坊	中、御池通東洞院東入笹屋町 436、438-2	立	3/13	GL-0.9m以下、江戸の包含層3。
中、壬生馬場町 24-1		立	4/12～14	GL-0.7mにて平安後期～鎌倉の包含層、土壌2。	HL-15
中、壬生坊城町 36		試	6/27	GL-0.76mにて平安前期～鎌倉の溝、路面。四條坊門小路とその南側溝に位置する。	HL-77
中、壬生御所ノ内町 2 地先～21-29 地先		立	6/27～	GL-0.75mにて平安後期の包含層。	HL-79
中、壬生坊城町 2-2		立	7/4	GL-0.5mにて包含層、時期不明。	HL-84
中、壬生坊城町 26-12		立	7/20	盛土のみ。	HL-101
中、壬生御所ノ内町 48		立	8/8	GL-0.8mにて土壌、時期不明。	HL-120
中、壬生御所ノ内町 27-15、16		試	8/10	GL-1.32mにて平安後期の溝1、四條大路北側溝に位置する。発掘調査に切り換える。	HL-122
中、壬生坊城町 24-3		立	9/2・3	GL-0.6mにて平安後期の包含層、-0.85mにて平安後期の土壌1、-1.2mにて時期不明の包含層。	HL-135
中、壬生坊城町 26-5・12		立	9/6	GL-0.9mにて平安後期～鎌倉の溝1、錦小路南側溝に位置する。	HL-136
中、壬生坊城町 53-16		立	10/3	GL-0.2mにて江戸の包含層。	HL-155
中、三條通神泉苑西入下る今新在家西町 7		立	10/26	GL-1.1mにて鎌倉の土壌1。	HL-172
中、壬生坊城町 45-3、35		立	11/7	GL-0.8mにて平安の包含層。	HL-189
中、壬生坊城町 3-3・16		立	11/11	検出できず。	HL-193
中、壬生坊城町 33-4		立	12/5	GL-0.95mにて平安中期の包含層。 -1.0mにて湿地状堆積。	HL-210
中、大宮通六角下る六角大宮町 205、206、他		試	1/19	GL-1.2mにて湿地状堆積、平安後期。	HL-231
中、壬生馬場町 1-7		立	1/27	GL-0.8mにて土壌1、時期不明。	HL-247
中、壬生坊城町地先	立	3/28	埋土のみ。	HL-277	
四條二坊	中、錦小路通猪熊西七軒町 484	立	4/28	GL-0.7mにて土壌1、時期不明。	HL-27
	中、四條大宮西入錦大宮町 133	試	5/9	GL-0.6mにて室町～江戸の二段掘り溝、-1.4mにて室町の石組の溝。	HL-34
	中、油小路通六角下る六角油小路町 317	立	6/28	盛土のみ。	HL-81
	中、油小路通四條上る藤本町 559	立	7/18	GL-0.8mにて包含層、-1.4m	HL-96

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号	
四条二坊	中、油小路通六角上る三条油小路町 179-1	立	7/28	にて土壌、いずれも時期不明。		
	中、猪熊通三条下る三条猪熊町 634	立	9/6	GL-1.0m にて江戸の包含層。	HL-112	
	中、大宮通錦小路上の四坊大宮町 161	立	9/30	盛土のみ。	HL-137	
	中、黒門通錦小路下る藤岡町 511、509	立	9/30	GL-0.4m 以下包含層 3、時期不明。	HL-153	
	中、油小路通錦小路上の山田町 517-1	試	10/24	検出できず。	HL-170	
	中、錦小路通西洞院西入空也町 498	立	3/3	GL-0.4m 以下、江戸の包含層 2。	HL-257	
	中、猪熊通錦小路上の下瓦町 563	立	3/3	攪乱のみ。	HL-258	
		立	3/21	GL-0.8m 以下、包含層 3、江戸 2、 平安後期 1。	HL-273	
	中、黒門通蛸薬師上る上黒門町 392	立	3/22	検出できず。	HL-275	
	中、六角通油小路西入越後町 193	立	3/29	GL-0.4m にて江戸の包含層。 -0.7m にて平安後期の土壌 1。	HL-279	
四条三坊	中、西洞院通蛸薬師下る古西町 433	立	6/1	検出できず。	HL-52	
	中、錦小路通室町東入占出山町 299	立	5/23	GL-1.75m にて江戸の包含層。	HL-63	
	中、東洞院通錦小路上の元竹田町 650	立	7/6	GL-1.6m にて包含層、時期不明。	HL-88	
	中、東洞院通錦小路上の元竹田町 631	立	8/1	-1.8m にて平安の流路。 検出できず。	HL-116	
	中、西洞院通六角下る池須町 416-1	立	8/22	盛土のみ。	HL-127	
	中、蛸薬師通室町西入姥柳町 203	試	9/14	GL-0.4m 以下包含層 4。鎌倉前期 1、室町 1、江戸 2。	HL-144	
	中、室町通錦小路上の山伏山町 558	試	9/21	GL-0.7m にて江戸の土壌 3。	HL-146	
	中、烏丸通蛸薬師西入橋弁慶町 222	立	10/4	GL-0.3m 以下江戸の包含層 4。	HL-156	
	中、錦小路通新町西入下る炭之座町地先	立	11/18	盛土のみ。	HL-201	
	中、西洞院通蛸薬師下る古西町 440、442	試	12/8	GL-0.55m にて鎌倉～室町の包含 層、-0.85m にて江戸の土壌 5。	HL-211	
	中、錦小路通烏丸東入元法然寺町 683	立	12/22	GL-0.3m 以下包含層 3。江戸 2、 室町 1。-0.8～1.35m、江戸の泥 砂と砂礫の互層の氾濫層。	HL-224	
	中、東洞院通三条下る三文字町 205-4	立	3/27	GL-0.2m にて江戸の包含層。	HL-276	
	中、富小路通六角上る朝倉町 535、537、539	試	5/24	GL-2.7m にて鎌倉～室町の土壌 2、落ち込み 1。	HL-44	
四条四坊	中、堺町通三条下る道祐町 145	立	6/7	GL-1.0m にて江戸の礎石 2。	HL-57	
	中、寺町通蛸薬師下る東側町 501-10	立	7/8	GL-1.0m にて江戸の包含層。	HL-90	
	中、寺町通蛸薬師下る菊屋町 512	立	7/8	検出できず。	HL-91	
	中、新京極通蛸薬師下る東側町 513-1	立	8/2	盛土のみ。	HL-117	
	中、錦小路通高倉東入中魚屋町 511	立	8/31	検出できず。	HL-132	
	中、三条通東洞院東入菱屋町 36	立	10/28	GL-2.0m にて包含層、時期不明。	HL-173	
	中、三条通麩屋町東入弁慶石町 47	立	12/16	GL-0.6m 以下江戸の包含層 3。	HL-221	
	中、柳馬場通六角下る井筒屋町 413	試	1/6	GL-0.26m 以下、鎌倉の包含層 3。 江戸の包含層 1。	HL-225	
	中、富小路通蛸薬師下る高宮町 572-1	立	1/10	検出できず。	HL-229	
	中、富小路通四条上る西大文字町 604、605	立	2/29	GL-0.3m 以下、平安後期～江戸 の包含層 6。	HL-254	
	五条一坊	中、壬生賀陽御所町	試	4/4	GL-0.68m にて鎌倉～江戸の包含 層。	HL-3
		中、壬生賀陽御所町 49	立	4/13	GL-0.4m にて平安前期の土壌、 -0.7m にて時期不明の包含層。	HL-16
		中、壬生賀陽御所町 27-7	立	5/23	検出できず。	HL-43
中、壬生賀陽御所町 20		立	5/23	GL-0.6m にて落ち込み 1、時期不 明。	HL-46	
下、大宮通高辻下る高辻大宮町		立	8/4	検出できず。	HL-110	
中、壬生相生町 20		試	8/11	GL-0.48m にて江戸、-0.72m にて 室町末期の包含層。	HL-124	

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
五条一坊	中、壬生郷ノ宮町 31	立	9/7	GL-0.2m 以下平安後期～鎌倉の包含層 2。	HL-139
〃	下、大宮通高辻下の高辻大宮町 107-5	立	10/6	GL-0.3m 以下平安後期～江戸の包含層 4。	HL-159
〃	下、仏光寺通大宮西入坊門町 820	立	12/21	GL-0.4m にて江戸の包含層。 -0.9m にて平安前期、江戸の土壌各 1。	HL-223
五条二坊	下、西洞院通仏光寺下る本柳水町 766	立	4/6	GL-0.78m にて室町後期の溝 1。	HL-7
〃	下、仏光寺通油小路東入木賦山町 171	立	4/9	GL-1.0m にて室町の包含層。	HL-11
〃	下、松原通油小路東入天神前町 326	立	5/7	検出できず。	HL-33
〃	下、岩上通四条下る佐竹町 386	立	5/316/1	GL-1.1m にて平安後期の土壌 1。	HL-50
〃	下、四条通大宮東入立中町 488-2、490-2	立	6/6	GL-0.8m にて平安の溝 1、土壌 2、室町の土壌 2。	HL-62
〃	下、油小路通松原上る籠町 643	立	6/21	GL-0.8m にて室町の包含層。	HL-71
〃	下、岩上通仏光寺下る徳屋町 430	立	6/25	検出できず。	HL-75
〃	下、仏光寺通油小路西入太子山町 590	立	8/29	盛土のみ。	HL-130
〃	下、油小路通綾小路下る風早町 577-1	試	9/26	GL-1.3m にて鎌倉～室町の包含層、-2.1m にて平安後期の包含層、土壌 4。室町時代の土壌 1。	HL-148
〃	下、岩上通高辻下る吉文字町 457	立	10/14	GL-0.4m にて江戸の包含層、-1.1m にて江戸の土壌 1。	HL-162
〃	下、西堀川通綾小路下る綾堀川町 306-1・2	立	10/29	検出できず。	HL-176
〃	下、猪熊通高辻上る榎屋町 326	立	11/1	盛土のみ。	HL-178
〃	下、綾小路通油小路西入西綾小路東半町 140	立	11/5	盛土のみ。	HL-185
〃	下、大宮通四条下る四条大宮町 18-7	立	11/7	盛土のみ。	HL-190
〃	下、猪熊通高辻上る高辻猪熊町 349	立	1/9	GL-0.4m 以下、江戸の包含層 3。	HL-228
五条三坊	下、新町通仏光寺上る船鉦町 399	立	4/26	検出できず。	HL-23
〃	下、仏光寺通新町西入菅大臣町 107	立	5/7	検出できず。	HL-32
〃	下、仏光寺通西洞院東入菅大臣町 198	立	5/18	GL-0.8m にて室町の土壌 1、包含層。	HL-40
〃	下、綾小路通西洞院東入矢田町 127-1	試	9/7	GL-1.4m 以下にて平安末期～鎌倉の包含層 2。	HL-138
〃	下、仏光寺通新町西入菅大臣町 200	立	11/17	GL-0.2m 以下室町～江戸末期の包含層 2、-0.7m にて室町の土壌 1。	HL-200
〃	下、高辻通烏丸東入因幡堂町 654	立	3/15	GL-0.2m 以下、包含層 4、室町 1、江戸 3。	HL-271
五条四坊	下、東洞院通綾小路下る扇酒屋町 285-1 他	立	5/20	GL-0.4m にて江戸の包含層。	HL-41
〃	下、御幸町通仏光寺下る橘町 432	立	6/6	盛土のみ。	HL-61
〃	下、東洞院通綾小路下る扇酒屋町 273-1	立	6/22	GL-1.65m にて包含層、時期不明。	HL-73
〃	下、綾小路通東洞院東入扇酒屋町 274-2	立	7/22	盛土のみ。	HL-103
〃	下、麩屋町通四条下る八文字町 341、343	立	7/25	検出できず。	HL-104
〃	下、高倉通高辻下る葛籠屋町 511	立	8/18	GL-0.8m にて江戸の包含層、-1.6m にて時期不明の包含層。	HL-126
〃	下、柳馬場通四条下る相之町 128	試	9/30	GL-0.2m 以下鎌倉～江戸の包含層、江戸の土壌 1。	HL-152
〃	下、寺町通綾小路下る中之町 577	立	10/20	GL-0.2m にて江戸の包含層。	HL-168
〃	下、柳馬場通綾小路下る永原町 150	立	11/1	盛土のみ。	HL-180
〃	下、柳馬場通綾小路下る永原町 153-1	立	12/12	GL-0.4m 以下、室町 1、江戸 2 の包含層。	HL-217
〃	下、御幸町通高辻上る橘町 435-2	立	12/141	GL-0.2m 以下、江戸前期～後期の包含層。	HL-220

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
五条四坊	下、四条通高倉西入立売西町 68	立	2/6	GL-0.2m にて江戸、-1.4m にて室町の包含層。	HL-239
〃	下、柳馬場通仏光寺下る新開町地先	立	2/9	GL-0.7m 以下、江戸の包含層 2。	HL-240
〃	下、堺町通仏光寺上る東前町	立	3/14・21	GL-0.3m にて江戸の包含層、	HL-269
六条一坊	下、下松屋町通五条下る 2 丁目下長福寺町 295-1	立	4/5	GL-0.42m にて平安後期の土壌 2。	HL-5
〃	下、大宮通松原下る西側上五条町 396	立	10/4	GL-0.8m 以下平安～江戸の包含層 5。	HL-158
〃	下、大宮通松原下る西側上五条町 399-2	立	11/5	盛土のみ。	HL-186
〃	下、松原通下松屋町西入上長福寺町 216	立	12/7	GL-0.8m 以下江戸、時期不明の包含層。	HL-222
〃	下、五条通下松屋町西入下長福寺町 295	立	3/30	GL-0.6m にて室町の包含層。 -0.7m にて、室町の土壌 1。	HL-280
六条二坊	下、大宮通五条下る南門前町 482	立	4/7・13・14	検出できず。	HL-9
〃	下、松原通堀川西入北門前町 757-1	立	4/7	GL-0.25m にて江戸の包含層。	HL-10
〃	下、万寿寺通醒ヶ井東入小泉町 85	立	7/4	GL-0.4m にて室町の土壌 2。	HL-83
〃	下、五条通堀川西入柿本町 659 地先	立	8/22	盛土のみ。	HL-128
六条三坊	下、松原通新町東入中野之町 182-1	立	5/12	検出できず。	HL-37
〃	下、西洞院通松原下る永倉町 561	試	6/8	GL-1.1m にて土壌 1、時期不明。	HL-53
〃	下、松原通鳥丸東入俊成町 444～446	立	6/15	盛土直下 GL-0.48m にて平安末期～鎌倉の包含層、-1.64m にて流れ堆積。	HL-67
〃	下、松原通西洞院東入藪下町 2	立	1/6	GL-0.2m 以下、包含層 4、室町 1 江戸 3。	HL-226
〃	下、鍵屋町通諏訪町東入鍵屋町 337	立	2/15	GL-0.1m 以下、包含層 4、室町 1 江戸 3。	HL-245
〃	下、万寿寺通不明門東入大堀町 495	立	3/6	GL-0.1m にて江戸の包含層。	HL-259
六条四坊	下、万寿寺通寺町西入安土町 645	立	4/28	盛土のみ。	HL-28
〃	下、東洞院通松原角大江町 533	立	6/2	検出できず。	HL-54
〃	下、御幸町通松原下る須浜町 647-5	立	6/18	盛土のみ。	HL-70
〃	下、河原町通五条上る西橋詰町 756-2	立	7/18	盛土のみ。	HL-97
〃	下、五条通高倉東入塩竈町 353	試	10/31	GL-0.75m にて江戸の包含層。	HL-177
〃	下、間之町通六条上る塗師屋町 78 地先～101 地先	立	11/4	巡回時工事終了。	HL-184
〃	下、寺町通松原下る植松町 719	立	12/9	GL-0.5m にて江戸の包含層、 -1.3m 以下流れ堆積。	HL-214
〃	下、五条通高倉東入塩竈町 349	立	3/13	GL-0.3m 以下、包含層 2、江戸。	HL-267
〃	下、六条通間之町東入塗師屋町 100	立	3/28	GL-0.2m 以下、包含層 3、江戸 2、 時期不明 1。	HL-278
七条一坊	下、夷馬場町 22-17	立	7/19	盛土のみ。	HL-99
〃	下、夷馬場町 22-18	立	7/19	盛土のみ。	HL-100
〃	下、朱雀正会町 24-5	立	9/1	GL-0.6m にて土壌 1、時期不明。	HL-133
〃	下、花屋町通壬生西入薬園町 152-4	立	11/14	GL-0.3m にて室町の土壌 2。	HL-197
七条二坊	下、東中筋通七条上る文覚町 386-5	立	6/18	GL-0.35m にて江戸の包含層。	HL-69
〃	下、七条通堀川西入～油小路	立	6/28	GL-1.35m にて平安の路面、溝。 各々七条大路、油小路東側溝に 位置する。	HL-80
〃	下、大宮通五条下る堀之上町	立	9/9	GL-0.2m にて包含層、-0.6m にて 土壌、ともに時期不明。	HL-141
〃	下、堀川通花屋町下る本願寺門前町	立	9/13・14	GL-0.6m にて平安の包含層 -0.8m にて、平安の土壌。	HL-142
〃	下、正面通堀川東、旧花屋町通堀川東	立	10/6・12・13	GL-0.10m 以下江戸の路面、室町、 江戸の包含層各 1。	HL-160
〃	下、門前町地先	立	11/11	盛土のみ。	HL-194

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
七条二坊	下、油小路通正面下る玉本町 196-1	試	11/28	GL-0.9mにて鎌倉～桃山、-1.2mにて平安の包含層、-1.3mにて柱穴1、時期不明。	HL-205
〃	下、七条通堀川西入八百屋町地先	立	12/12	GL-0.9m以下江戸の包含層2。	HL-215
〃	下、油小路通花屋町下る仏具屋町 231-1	立	12/12	GL-0.3mにて江戸末期の包含層。	HL-216
〃	下、門前町地先	立	12/13	GL-0.25m以下、室町、江戸の包含層。	HL-218
〃	下、門前町	立	2/18	GL-0.5mにて室町の包含層。	HL-142
〃	下、門前町地先	立	11/11	-0.9mにて、平安後期の包含層。GL-0.3mにて鎌倉の溝。	HL-194
七条三坊	下、若宮通花屋町下る四本松町 583	立	4/11・12	GL-1.4mにて包含層、時期不明。-1.64mにて古墳時代の河川の堆積。	HL-12
〃	下、西洞院通七条上る福本町 421	立	4/26	盛土のみ。	HL-20
〃	下、西洞院通北小路上る鍛冶屋町 446	立	7/13	検出できず。	HL-94
〃	下、烏丸通六条下る北町 193	試	10/14	GL-0.7mにて江戸、-1.0mにて室町の包含層。	HL-161
〃	下、不明門通七条上る粉川町 226-1、228-2	立	10/17	GL-0.5mにて江戸、-1.2mにて室町の包含層。	HL-165
〃	下、新花屋町通若宮東入若宮町 554-2・6	立	10/17	GL-0.2mで江戸、-0.5mにて室町の包含層。	HL-166
〃	下、烏丸通花屋町下る高槻町	立	11/4	検出できず。	HL-183
〃	下、若宮通正面下る鍵屋町 631	立	11/19	盛土のみ。	HL-202
七条四坊	下、上数珠屋町通東洞院東入花屋町 387	立	7/18	検出できず。	HL-98
〃	下、三ノ宮町通上ノ口下る高宮町 235	立	9/21	盛土のみ。	HL-147
〃	下、富小路通六条上る本塩竈町 530 地先	立	10/18	埋土のみ。	HL-167
〃	下、正面通土手町西入溜池町 371	立	11/15	GL-0.3mにて江戸の包含層2。	HL-199
八条一坊	下、和気町 3	立	2/29	GL-0.7m以下包含層2、時期不明。	HL-255
八条二坊	下、大宮通木津屋橋上る上之町 416-2	立	4/28	GL-0.6mにて江戸、-1.1mにて室町の包含層。	HL-29
〃	下、西洞院通七条下る大黒町 253	立	5/30	検出できず。	HL-48
〃	下、油小路通塩小路下る西油小路町 27	試	6/3	GL-0.66mにて平安時代の包含層、-1.1mにて弥生土器を含む流れ堆積。	HL-55
〃	下、西洞院通七条下る大黒町 240	立	7/30	盛土のみ。	HL-114
〃	南、西九条北ノ内町 42 地先	立	8/8	盛土のみ。	HL-119
〃	下、木津屋橋通堀川東入油小路町 308	立	8/9	盛土のみ。	HL-121
〃	下、大宮通木津屋橋下る上中之町 18	試	9/2	GL-0.78m以下平安の包含層2。	HL-134
〃	下、猪熊通木津屋橋下る金換町 102	立	11/12	GL-0.4m以下平安末期～江戸の包含層2。	HL-196
〃	下、油小路通塩小路下る西側西油小路町 17	立	11/14	GL-0.8mにて室町の包含層、-1.1m以下流れ堆積。	HL-198
〃	南、西九条寺ノ前町 10-5	試	1/17	GL-1.5mにて江戸の包含層。	HL-230
〃	南、大黒町 290	立	2/22	-1.8mにて平安末期の井戸。GL-0.5m以下、包含層2、平安後期、室町。	HL-252
八条三坊	下、烏丸通七条下る東堺町 191	立	4/6・7	GL-0.9mにて鎌倉～室町、-1.05mにて平安後期～末期、-1.35mにて平安時代前期の包含層。	HL-6
〃	下、塩小路通西洞院東入東塩小路町 841-5	試	5/17	GL-0.6mにて江戸、-1.7mにて室町の包含層。-1.9mにて流れ堆積。	HL-39
〃	南、西九条院町他地内	立	6/27	盛土のみ。	HL-78

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
八条三坊	下、西境町、東塩小路町	立	11/8	埋土のみ。	HL-191
〃	下、木津屋橋通新町西入東塩小路町	立	11/9	盛土のみ。	HL-192
八条四坊	下、小稲荷町	立	4/2・4	GL-0.85mにて多量の骨を含む江戸の土壌、-1.35mにて平安後期の包含層。	HL-2
〃	下、七条通河原町西入材木町	立	10/15・17	GL-0.3m以下平安前期～江戸の包含層、古墳時代後期の溝。図版67。	HL-164
九条一坊	南、九条町 339、339-20	立	7/25	検出できず。	HL-107
〃	南、九条町 339-20・21	立	7/25	検出できず。	HL-108
〃	南、九条町 339	立	7/25	検出できず。	HL-109
〃	南、壬生通東寺下る八条内田町	立	3/12	盛土のみ。	HL-265
九条二坊	南、西九条西蔵王町他	立	4/26	検出できず。	HL-21
〃	南、西九条蔵王町2	立	6/25	GL-0.6mにて江戸の包含層。	HL-76
〃	南、西九条鳥居口町	立	8/29	盛土のみ。	HL-131
〃	南、西九条鳥居口町 1	立	3/14・22	GL-0.55m以下、江戸の包含層 6 -1.5m以下、弥生土器を含む流れ堆積。	HL-268
九条三坊	南、西九条院町 18-2	立	5/11	検出できず。	HL-35
〃	南、東九条南鳥丸町 24、25、26、27-1	立	12/10	GL-0.92m以下湿地状堆積。	HL-209
〃	南、東九条室町 64、64-2	立	3/12	GL-0.8m以下包含層 2、時期不明。	HL-264
九条四坊	南、東九条北河原町 26-4	立	8/10	盛土のみ。	HL-123
〃	南、東九条中御壺町	試	2/6～13	中世半ばまでの湿地、中世後半の整地層。	HL-282

平安京右京（HR）

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
北辺二坊	上、一条通御前西入下る西町 175	立	5/14	検出できず。	HR-18
北辺三坊	北、大將軍坂田町 8	立	12/5	GL-0.1mにて室町の土壌 1。	HR-127
北辺四坊	右、花園天授ヶ岡町地先	立	6/8～10	すべて攪乱。	HR-52
〃	右、谷口円成寺町 5-10	立	7/22・26	検出できず。	HR-62
一条二坊	上、仁和寺街道天神通下る他地内	立	4/20・21・23	GL-0.35、-0.75mで包含層各 1、時期不明。	HR-6
〃	中、西ノ京門町 24	立	5/23	検出できず。	HR-22
〃	中、西ノ京中保町 69、71	立	6/7	GL-0.4mにて柱穴 2、土壌 3、時期不明。	HR-30
〃	上、御前通西裏上ノ下立売上る北町 574-29	立	7/19	GL-0.9mにて包含層、時期不明。	HR-58
〃	上、御前通西裏上ノ下立売上る北町 574-29	立	7/19	GL-0.9mにて包含層、時期不明。	HR-59
〃	北、大將軍東鷹司町 154	立	11/16	GL-0.47m以下、平安中期～後期の包含層 3。	HR-113
〃	上、天神通下立売上る行衛町 470-1	立	11/30	GL-0.25mにて包含層、時期不明。	HR-118
〃	中、西ノ京南大炊御門町 25	立	1/14	GL-0.7m 包含層 1、時期不明。	HR-138
一条三坊	中、西ノ京御輿岡町 15-1	立	10/11	GL-0.6mにて江戸、-0.8mにて平安中期の包含層、-1.0mにて平安中期の溝。	HR-96
〃	中、花園巽南町 9-1	立	11/21	検出できず。	HR-116
〃	中、西ノ京御輿岡町 12-8	立	12/1	GL-0.15m以下包含層 2、時期不明。	HR-121
〃	北、大將軍西鷹司町 63	立	12/5	GL-0.5mにて平安の土壌 2。	HR-126
〃	中、西ノ京御輿岡町地先	立	2/2	攪乱のみ。	HR-151
一条四坊	右、御室小松野町他	立	4/2・5・8	GL-0.5m以下、平安～室町の包含層、時期不明の溝。	HR-13
坊・四門寺			12・20・21・26		
一条四坊	右、花園寺ノ前町 20	立	7/18	検出できず。	HR-55

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
三条二坊	中、西ノ京原町 80	試	9/16	GL-0.95mにて平安中期の包含層。	HR-88
〃	中、西ノ京樋ノ口町 115	立	10/19	-1.1m以下湿地状堆積。 GL-0.35mにて包含層 2、-0.66にて土 壌 1、いずれも時期不明。	HR-103
〃	中、西ノ京原町 36-8	立	1/12	GL-1.2m以下、湿地状堆積、時期不明。	HR-92
三条三坊	中、西ノ京月輪町 38	立	6/27	盛土のみ。	HR-39
〃	中、西ノ京月輪町 8	立	2/14	盛土のみ。	HR-156
〃	中、西ノ京月輪町 8	立	3/28	GL-0.45mにて江戸の包含層 1。	HR-179
三条四坊	右、山ノ内五反田町地先	立	6/30	盛土のみ。	HR-42
〃	右、山ノ内宮脇町 13-4	立	2/28	盛土のみ。	HR-166
〃	右、山ノ内宮脇町 12-2	試	3/14	GL-0.5mにて江戸の包含層。	HR-171
四条一坊	中、壬生中川町 9	立	4/27	検出できず。	HR-11
〃	中、壬生天ヶ池町 42-9	立	6/10	GL-0.55m以下に土壌 1、時期不明。	HR-31
〃	中、壬生神明町 1	立	7/25	耕土のみ。	HR-65
〃	中、壬生森町 49	立	8/3	GL-0.65mにて平安の包含層。	HR-69
〃	中、壬生森町 39-19	立	9/29	GL-0.4mにて平安中期の包含層。	HR-91
〃	中、壬生神明町 1-13	立	2/3	-0.5m以下低湿地状堆積。 盛土のみ。	HR-152
〃	中、壬生森町地先	立	2/21	GL-0.98mにて江戸の包含層。	HR-163
〃	中、壬生神明町 1-3	試	3/23	検出できず。	HR-177
四条二坊	右、西院東淳和院町 6	立	7/12・13	GL-0.9m以下包含層 2、時期不明。 -1.1mにて平安前期～中期の溝 1、土 壌 2、溝は野寺小路東側に位置する。	HR-50
〃	中、壬生西大竹町 5	立	8/6	GL-0.1mにて包含層、時期不明。	HR-82
〃	右、西院東淳和院町 25-4・5	立	8/24	検出なし。	HR-76
〃	中、壬生仙念町	試	9/5	GL-1.0mにて御土居の堀。	HR-84
〃	中、壬生東淵田町 11	立	9/13	GL-0.65mにて包含層、時期不明。 -0.8mにて土壌 1、時期不明。	HR-87
〃	中、壬生東大竹町 8-1	立	2/14	GL-0.3mにて包含層、時期不明。	HR-157
〃	中、壬生上大竹町 13	試	3/9	GL-0.55mにて包含層、時期不明。	HR-169
〃	右、西院西今田町 24	立	3/21	GL-0.4mにて平安中期の土壌 1。時 期不明の包含層。	HR-172
四条三坊	右、西院小米町 35-2	試	6/1	GL-0.9mにて鎌倉～室町の包含層、 溝。	HR-27
〃	右、西院金樋町 4-1	立	7/20	盛土のみ。	HR-60
四条四坊	右、山ノ内西裏町 15	立	11/18	検出できず。	HR-115
五条一坊	中、壬生高樋町 56 地先～松原町 13 地先	立	4/18	盛土のみ。	HR-3
〃	中、壬生高樋町 30-12	立	5/4	GL-0.31mにて土壌 3、時期不明。	HR-14
〃	中、壬生東樋町 30	立	5/9	検出できず。	HR-16
〃	中、壬生森前町 8-12・61・55	立	6/10	検出できず。	HR-32
〃	中、壬生下溝町 23-11・12	立	6/30	GL-0.55mにて土壌 1、時期不明。	HR-41
〃	中、壬生高樋町 65-4	立	7/2	盛土のみ。	HR-45
〃	中、壬生下溝町 1	立	7/25	GL-0.8mにて湿地状の堆積層、時期 不明。	HR-63
〃	中、壬生下溝町 9	立	8/24	GL-0.6mにて土壌 1、時期不明。	HR-75
〃	中、壬生森前町 16-17	立	10/6	GL-0.8mにて包含層、時期不明。	HR-101
〃	中、壬生松原町 49-6・9	立	1/26	GL-0.55mにて平安中期の包含層。	HR-148
〃	中、壬生森前町、壬生椰ノ宮町	立	3/22・23	-0.7mにて平安中期の土壌 1。 埋土のみ。	
五条二坊	中、壬生東高田町 23、23-7	立	7/11	GL-0.35mにて平安の包含層。	HR-49
〃	中、壬生樋町 6-1	立	11/4	GL-0.6mにて平安の包含層 2。	HL-109

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
三条二坊	中、西ノ京原町 80	試	9/16	GL-0.95mにて平安中期の包含層。 -1.1m以下湿地状堆積。	HR-88
〃	中、西ノ京樋ノ口町 115	立	10/19	GL-0.35mにて包含層 2、-0.66にて土壌 1、いずれも時期不明。	HR-103
〃	中、西ノ京原町 36-8	立	1/12	GL-1.2m以下、湿地状堆積、時期不明。	HR-92
三条三坊	中、西ノ京月輪町 38	立	6/27	盛土のみ。	HR-39
〃	中、西ノ京月輪町 8	立	2/14	盛土のみ。	HR-156
〃	中、西ノ京月輪町 8	立	3/28	GL-0.45mにて江戸の包含層 1。	HR-179
三条四坊	右、山ノ内五反田町地先	立	6/30	盛土のみ。	HR-42
〃	右、山ノ内宮脇町 13-4	立	2/28	盛土のみ。	HR-166
〃	右、山ノ内宮脇町 12-2	試	3/14	GL-0.5mにて江戸の包含層。	HR-171
四条一坊	中、壬生中川町 9	立	4/27	検出できず。	HR-11
〃	中、壬生天ヶ池町 42-9	立	6/10	GL-0.55mにて土壌 1、時期不明。	HR-31
〃	中、壬生神明町 1	立	7/25	耕土のみ。	HR-65
〃	中、壬生森町 49	立	8/3	GL-0.65mにて平安の包含層。	HR-69
〃	中、壬生森町 39-19	立	9/29	GL-0.4mにて平安中期の包含層。 -0.5m以下低湿地状堆積。	HR-91
〃	中、壬生神明町 1-13	立	2/3	盛土のみ。	HR-152
〃	中、壬生森町地先	立	2/21	GL-0.98mにて江戸の包含層。	HR-163
〃	中、壬生神明町 1-3	試	3/23	検出できず。	HR-177
四条二坊	右、西院東淳和院町 6	立	7/12-13	GL-0.9m以下包含層 2、時期不明。 -1.1mにて平安前期～中期の溝 1、土壌 2、溝は野寺小路東側に位置する。	HR-50
〃	中、壬生西大竹町 5	立	8/6	GL-0.1mにて包含層、時期不明。	HR-82
〃	右、西院東淳和院町 25-4・5	立	8/24	検出なし。	HR-76
〃	中、壬生仙念町	試	9/5	GL-1.0mにて御土居の堀。	HR-84
〃	中、壬生東瀬田町 11	立	9/13	GL-0.65mにて包含層、時期不明。 -0.8mにて土壌 1、時期不明。	HR-87
〃	中、壬生東大竹町 8-1	立	2/14	GL-0.3mにて包含層、時期不明。	HR-157
〃	中、壬生上大竹町 13	試	3/9	GL-0.55mにて包含層、時期不明。	HR-169
〃	右、西院西今田町 24	立	3/21	GL-0.4mにて平安中期の土壌 1。 時期不明の包含層。	HR-172
四条三坊	右、西院小米町 35-2	試	6/1	GL-0.9mにて鎌倉～室町の包含層、溝。	HR-27
〃	右、西院金槌町 4-1	立	7/20	盛土のみ。	HR-60
四条四坊	右、山ノ内西裏町 15	立	11/18	検出できず。	HR-115
五条一坊	中、壬生高樋町 56 地先～松原町 13 地先	立	4/18	盛土のみ。	HR-3
〃	中、壬生高樋町 30-12	立	5/4	GL-0.31mにて土壌 3、時期不明。	HR-14
〃	中、壬生東樋町 30	立	5/9	検出できず。	HR-16
〃	中、壬生森前町 8-12・61・55	立	6/10	検出できず。	HR-32
〃	中、壬生下溝町 23-11・12	立	6/30	GL-0.55mにて土壌 1、時期不明。	HR-41
〃	中、壬生高樋町 65-4	立	7/2	盛土のみ。	HR-45
〃	中、壬生下溝町 1	立	7/25	GL-0.8mにて湿地状の堆積層、 時期不明。	HR-63
〃	中、壬生下溝町 9	立	8/24	GL-0.6mにて土壌 1、時期不明。	HR-75
〃	中、壬生森前町 16-17	立	10/6	GL-0.8mにて包含層、時期不明。	HR-101
〃	中、壬生松原町 49-6・9	立	1/26	GL-0.55mにて平安中期の包含層。 -0.7mにて平安中期の土壌 1。	HR-148
〃	中、壬生森前町、壬生榎ノ宮町	立	3/22-23	埋土のみ。	
五条二坊	中、壬生東高田町 23、23-7	立	7/11	GL-0.35mにて平安の包含層。	HR-49
〃	中、壬生樋町 6-1	立	11/4	GL-0.6mにて平安の包含層 2。	HL-109

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
五条二坊	中、壬生西土居ノ内町 36	立	11/25	盛土のみ。	HR-136
〃	右、西院三蔵町 48	立	1/20	GL-0.5m にて包含層、時期不明。	HR-143
〃	中、壬生檜町 14-5	立	2/15	GL-0.23m にて室町の土壌 1。	HR-160
〃	右、西院高山寺町	立	2/28	埋土のみ。	HR-165
〃	右、西院三蔵町 36	試	3/26	検出できず。	HR-178
五条三坊	右、西院巽町 9	立	10/27	GL-0.7m にて包含層 2、時期不明。	HR-107
〃	右、西院北矢掛町 7	立	12/12	盛土のみ。	HR-131
〃	右、西院久田町 150	立	3/29	GL-0.5m 以下流れ堆積。	HR-180
五条四坊	右、西院東貝川町 27	立	5/23	GL-1.4m にて鎌倉の包含層。	HR-23
〃	右、西院西田町 27、34	立	10/11	GL-0.65m 以下包含層 2、時期不明。	HR-99
〃	右、西院日照町 10	立	11/9	検出できず。	HR-111
〃	右、西院安塚町 71	試	11/18	GL-1.0m にて古墳時代の包含層。	HR-114
〃	右、西院月双町 20-1・2	試	11/25	GL-1.45m にて平安の小穴 6、溝 3、古墳時代の落ち込み 2。	HR-117
〃	右、西院東貝川町地先	立	2/9・10	検出できず。	HR-155
六条一坊	下、中堂寺北町 33-36	立	6/25	検出できず。	HR-38
〃	下、中堂寺栗田町 1	立	7/25	検出できず。	HR-64
〃	下、中堂寺庄ノ内町 46	立	8/30	GL-0.7m にて包含層、時期不明。	HR-79
〃	下、中堂寺命婦町	立	10/24・26	埋土のみ。	HR-105
〃	下、中堂寺庄ノ内町 40	立	3/13	検出できず。	HR-170
六条二坊	右、西院南高田町 10 地先～下、西七条掛越町 34 地先	立	5/11・12・20	検出できず。	HR-17
〃	中、壬生高田町 1-2	立	6/17	GL-0.55m にて室町の土壌 1。	HR-34
〃	右、西院西中水町地先	立	7/28	埋土のみ。	HR-66
六条三坊	右、西院西溝崎町 1	立	8/4	検出できず。	HR-70
〃	右、西院溝崎町 11	立	12/3	盛土のみ。	HR-124
〃	右、西院溝崎町 12、他 7 筆	立	1/10	GL-0.6m 以下、包含層 2、時期不明。	HR-135
〃	右、西院太田町 83	立	1/17	GL-0.95m にて平安中期の包含層。	HR-140
六条四坊	右、西京極東大丸町 43 他 4 筆	立	5/6	検出できず。	HR-15
〃	右、西京極東大丸町 2、3、4	試	7/18	GL-1.24m にて湿地状の堆積、時期不明。	HR-53
〃	右、西院月双町 94	立	8/6	盛土のみ。	HR-73
〃	右、西院月双町 77-2	試	10/25、10/31 ～11/5	GL-1.6m 以下古墳～平安の包含層、溝 2。	HR-104
〃	右、西京極東大丸町 16	立	3/1	盛土のみ。	HR-167
七条一坊	下、朱雀分木町 47	試	4/20	GL-0.4m で平安の南北方向の溝、皇嘉門大路東側溝に位置する。他に南北溝 4、柱穴、土壌各 1。発掘調査に切り換える。	HR-5
〃	下、朱雀宝蔵町 58	立	5/28	GL-0.5m にて平安の土壌 2。	HR-26
〃	下、西七条北東野町	立	7/18	検出できず。	HR-56
〃	下、西七条御領町 70	立	7/19	検出できず。	HR-57
〃	下、西七条御領町 8	立	9/5	GL-0.7m にて江戸の包含層。	HR-82
〃	下、朱雀堂ノ口町地先	立	10/3	検出できず。	HR-93
〃	下、朱雀分木町 24-2、25-1	試	1/20	検出できず。	HR-142
七条二坊	下、西七条東御前田町地先	立	4/18	GL-1.26m で平安の包含層。	HR-4
〃	下、西七条市部町	立	7/9	GL-0.25m にて桃山～江戸、-0.5m にて平安の土壌。	HR-48
〃	下、西七条西石ヶ坪町 4-1	立	7/18	巡回時工事終了。	HL-54

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
七条二坊	下、西七条北月読町 78-13	立	9/7	GL-0.25mにて平安の包含層。	HR-85
〃	下、西七条掛越町 65	立	9/10	検出できず。	HR-86
〃	下、西七条北衣田町 14-5	立	12/1	GL-0.3mにて平安中期の包含層。 -0.64mにて平安中期の柱穴1、時期不明。	HR-120
〃	下、西七条北月読町 78-36	立	1/24	GL-0.26mにて平安中期の包含層。	HR-145
〃	下、西七条東石ヶ坪町 71-2	立	2/22	検出できず。	HR-164
七条三坊	下、西七条八幡町 21	立	4/28	GL-1.1mにて江戸の包含層。	HR-12
七条四坊	右、西京極豆田町 4	立	5/18・20	GL-1.0mにて、古墳時代の竪穴住居、平安前期の土師器甕2個体を合せ口にして埋納した土塋。	HR-20
〃	右、西京極畔勝町 60、61、62	試	7/1	GL-0.4mにて平安の包含層、 -0.45mにて流れ堆積。	HR-43
〃	右、西京極豆田町 5	試	10/7	GL-0.9mにて溝1、-1.0mにて包含層、弥生土器出土。	HR-95
八条一坊	下、西七条西久保町 21 地先～西久保町 11 地先	立	4/14・26・30	検出できず。	HR-2
〃	下、梅小路東町 17	立	6/3	GL-0.3mにて平安前期の溝。梅小路北側溝に位置する。	HR-28
〃	下、西七条南東野町 37	立	7/1	盛土のみ。	HR-44
〃	下、梅小路東町 72-9	立	11/14	GL-0.15mにて包含層、時期不明。	HR-122
〃	下、梅小路東町 24	立	12/23	検出できず。	HR-134
〃	下、朱雀内畑町 6	立	2/17	GL-0.35m以下、江戸の包含層2。	HR-149
八条二坊	下、梅小路石橋町 68	立	4/12	検出できず。	HR-1
〃	下、七条御所ノ内北町	立	4/23	GL-0.4mにて平安の包含層、南北方向の溝1。全体に湿地状。	HR-9
〃	下、西七条石井町 50	立	8/24	GL-0.8mにて湿地状堆積。	HR-77
〃	下、西七条石井町 37	試	12/2123～27	GL-0.35m以下平安前期、後期の包含層、古墳前期の池状堆積。 図版 67。	HR-133
〃	下、七条御所ノ内北町 64	立	1/17	GL-1.0mにて湿地状堆積、時期不明。	HR-139
〃	下、西七条南西野町 8	立	1/24	検出できず。	HR-144
〃	下、七条御所ノ内北町 10	立	2/7	GL-0.72m以下、湿地状堆積、時期不明。	HR-154
〃	下、七条御所ノ内北町 69～73	試	2/15	GL-0.9mにて湿地状堆積、時期不明。	HR-158
八条三坊	右、西京極中沢町地先	立	7/22	検出できず。	HR-61
八条四坊	右、西京極畑田町地先	立	7/8	検出できず。	HR-47
九条一坊	南、唐橋高田町 57	立	12/3	検出できず。	HR-125
〃	南、唐橋西寺町 5	立	2/15	耕土のみ。	HR-159
九条二坊	南、吉祥院西ノ庄東屋敷町 39	立	5/18	GL-0.5mにて包含層2、時期不明。	HR-21
〃	南、唐橋平垣町 68	立	5/26	GL-0.6mにて平安の包含層、 -0.75mに平安の柱穴1。	HR-25
〃	下、西大路通両側八条～九条通他	立	6/15	検出できず。	HR-33
〃	下、七条御所ノ内本町地先	立	6/17・18	盛土のみ。	HR-35
〃	南、唐橋大宮尻町 18	試	6/22	GL-0.3mにて江戸の土塋1。	HR-36
〃	南、唐橋平垣町 44	立	6/23・25	GL-0.8mにて包含層、-1.1mにて土塋1、いずれも時期不明。	HR-37
〃	南、吉祥院中島町 31	立	9/16	検出できず。	HR-90
〃	下、七条御所ノ内本町 100-2	立	10/31	GL-0.55mにて包含層、時期不明。	HR-108

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
九条二坊	下、梅小路高畑町 19-12	立	11/1	GL-0.9mにて奈良期の湿地状堆積。	HR-112
九条三坊	南、吉祥院西ノ庄馬場町 1	試	10/17	検出できず。	HR-100
〃	南、吉祥院中河原里南町 19-2	立	2/7	GL-1.03mにて湿地状堆積、時期不明。	HR-153
〃	南、吉祥院西ノ庄猪之馬場町 1 地先	立	2/18	巡回時工事終了。	HR-161
九条四坊	南、吉祥院宮ノ東町 18-2・4	立	8/2	検出できず。	HR-68

太秦地区 (UZ)

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
嵯峨院跡	右、嵯峨観空寺明水町地先	立	4/4	検出できず。	UZ-1
平安京跡隣接地	右、御室岡ノ裾町地先～岡ノ裾町 32 地先	立	4/8	検出できず。	UZ-2
嵯峨院跡	右、嵯峨観空寺明水町 61-6	立	5/4	盛土のみ。	UZ-3
一ノ井遺跡	右、太秦森ヶ西町地先	立	6/3	検出できず。	UZ-4
仁和寺院家跡	右、宇多野長尾町 22-4, 23, 24-1	試	8/26	山土のみ。	UZ-5
蜂岡寺跡	右、太秦蜂岡町 36	立	10/14	GL-0.14mにて平安の包含層。	UZ-6
円宗寺跡	右、御室岡ノ裾町地先	立	11/11	盛土のみ。	UZ-7
嵯峨院跡	右、嵯峨大沢町	試	11/16	検出できず。	UZ-8
上ノ段町遺跡	右、太秦青木元町 6-2	立	10/11	検出できず。	UZ-9
常盤仲之町遺跡	右、太秦東峰ヶ岡町 10	試	12/14	GL-1.7m以下平安前期・後期、鎌倉の包含層、平安前期・後期の土壌各 1。	UZ-10
散布地	右、嵯峨広沢西裏町 32-4	立	12/14	検出できず。	UZ-11
常盤馬塚古墳隣接地	右、常盤馬塚町 14-4	立	1/11	検出できず。	UZ-12
散布地	右、太秦京ノ道町、他	立	1/18	土止めのため観察不能。	UZ-13
嵐山隣接地	右、嵯峨野々宮町	立	1/26	巡回時工事終了。	UZ-14
門田町遺跡	右、太秦門田町 15	試	1/30	検出できず。	UZ-15
嵯峨院跡	右、北嵯峨北ノ段町 88-2	立	2/2	盛土のみ。	UZ-16
広隆寺境内	右、太秦蜂岡町 36	立	2/20	盛土のみ。	UZ-17
蛇塚古墳	右、太秦面影町 20-46	立	3/12	盛土のみ。	UZ-18
音戸山古墳	右、鳴滝音戸山町 4-41	立	3/21	検出できず。	UZ-21
群隣接地	右、太秦面影町	立	3/22	GL-0.2mにて古墳後期の包含層 1。	UZ-19
古墳群	右、常盤北裏町	立	3/22	検出できず。	UZ-20

洛北地区 (RH)

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
聚楽第跡	上、浄福寺通笹屋町下る笹屋町 1 丁目 561	立	4/21	検出できず。	RH-1
聚楽第跡	上、一条通浄福寺東入北新在家町 318	立	5/7	GL-0.6mにて江戸の包含層。	RH-2
聚楽第跡	上、一条通智恵光院西入	立	5/7	GL-0.6mにて江戸の包含層。	RH-3
相国寺旧境内	上、相国寺門前町地先	立	5/17	GL-0.4mにて落ち込み、時期不明。	RH-4
植物園北遺跡	北、土賀茂畔勝町 67-3	立	6/1	盛土のみ。	RH-5
相国寺旧境内	上、烏丸通上立売下る御所八幡町 104-1	立	6/28	GL-0.75mにて江戸の包含層。	RH-6
聚楽第跡	上、笹屋町通浄福寺東入笹屋町 1 丁目 559-1	立	7/4	GL-0.6mにて江戸の包含層。	RH-7
紫野齋院跡	上、大宮通寺之内上る前之町 427	立	7/11	検出できず。	RH-8
植物園北遺跡	北、上賀茂榊田町 45-2	立	7/29・30	GL-0.3mにて落ち込み、時期不明。	RH-9
大深町須恵器窯跡支群	北、西賀茂南今原町	立	8/19・22	検出できず。	RH-10
北野遺跡	北、平野宮本町 34 地先	立	8/22・23・25	検出できず。	RH-11
室町殿跡	上、烏丸通今出川上る西入岡松町 258-1	試	8/25, 9/9	GL-0.8mにて室町の包含層。	RH-12
聚楽第跡	上、一条通智恵光院東入鏡石町 37	試	8/31	GL-1.1mにて江戸の包含層。	RH-13
相国寺旧境内	上、室町通今出川上る築山北半町 229	立	9/21	GL-0.2mにて江戸の包含層。	RH-14

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
相国寺旧境内	上、相国寺門前町 670-8	立	10/11・14	GL-0.15m にて鎌倉～室町の包含層、 -0.35m にて土壌 1。	RH-15
聚楽第跡	上、葺屋町通元誓願寺下る徳屋町 454-1・2・3	立	10/15	GL-0.15m 以下室町、江戸の包含層。	RH-16
室町殿跡	上、室町通上立売下る東入裏築地町 98	立	11/1	GL-0.7m にて江戸の包含層。	RH-17
植物園北遺跡	北、上賀茂藪田町 10	立	11/14	GL-1.0m にて包含層、時期不明。	RH-18
紫野斎院跡	上、大宮通西裏廬山寺上る 3 丁目目撃社北半町 209-3	立	11/16	GL-0.65m 以下、平安前期～江戸の 包含層 3。	RH-19
聚楽第跡	上、浄福寺通一条上る福本町 125	立	11/19	GL-0.9m にて包含層、時期不明。	RH-20
聚楽第跡	上、大宮通一条上る西入栄町 682	立	11/30	GL-0.4m にて江戸末期の包含層。	RH-21
室町殿跡	上、室町通上立売下る裏築地町 97	立	12/15	GL-0.8m 以下包含層。江戸 3、室町 1。	RH-22
植物園北遺跡	北、上賀茂藪田町 34-2	立	1/10	GL-0.9m にて古墳前期の包含層。	RH-23
小野瓦窯跡	左、上高野小野町地先	立	1/25	GL-0.8m にて土壌 2、平安の瓦多量 出土。灰原の一部か。	RH-24
小野瓦窯跡	左、上高野尾保地町、上高野小野町	立	1/30	検出できず。	RH-25
相国寺旧境内	上、相国寺門前町 699	立	2/3	GL-0.35m にて江戸の包含層。	RH-26
相国寺旧境内	上、上御堂馬場町 391	立	2/8	盛土のみ。	RH-27
植物園北遺跡	北、上賀茂餅ヶ垣内町 47	試	2/27	GL-0.2m にて包含層。-0.35m にて住 居 3。弥生末～古墳前期の遺物出土。 発掘調査に切り換える。	RH-28
聚楽第跡	上、元誓願寺通黒門西入寺今町 514	立	3/1	GL-0.2m にて江戸の包含層。	RH-29
相国寺旧境内	上、烏丸通寺ノ内上る東入相国寺門前町 699-2	立	3/22	GL-0.2m 以下、包含層 2、室町 1、 時期不明 1。	RH-30

北白川地区 (K S)

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
白河南殿跡	左、聖護院蓮華蔵町 20、20-2	立	4/6	検出できず。	KS-1
白河街区	左、東竹屋町 68-1、64	立	4/18	盛土のみ。	KS-2
白河街区	左、聖護院蓮華蔵町 56-15	立	4/23	盛土のみ。	KS-3
一乗寺向	左、一乗寺向畑町 5	立	4/27	GL-0.5m にて縄文早期の包含層、 -1.0m にて同時期の土壌 3。	KS-4
畑町遺跡	左、岡崎円勝寺町 39	試	4/28、6/4	GL-1.36m にて平安の包含層。	KS-5
白河街区・岡崎遺跡	左、北白川堂ノ前町	立	5/7	検出できず。	KS-6
小倉町別	左、北白川堂ノ前町	立	5/12	GL-0.85m にて縄文時代と思われる 包含層。	KS-7
当町遺跡	左、北白川堂ノ前町	立	5/12	GL-0.85m にて縄文時代と思われる 包含層。	KS-7
吉田山遺跡	左、吉田神楽岡町 5-27	立	5/18	山土のみ。	KS-8
白河街区	左、新車屋町 173	立	5/21	盛土のみ。	KS-9
白河街区	左、聖護院川原町 11-5	立	5/23	盛土のみ。	KS-10
法成寺跡	上、寺町通荒神口上る荒神町 120-1	立	5/28	盛土のみ。	KS-11
北白川廃寺	左、北白川大堂町 57	試	5/30、6/6	GL-0.4m にて縄文晩期の包含層。図 版 66。	KS-12
一乗寺向	左、修学院中林町 49	立	6/4	検出できず。	KS-13
畑町遺跡	左、聖護院川原町 35	立	6/10	GL-0.4m にて土壌 1、時期不明。	KS-14
白河街区	左、古川町筋仁王門下る東門前町 512-4	立	6/15	検出できず。	KS-15
白河街区・岡崎遺跡	左、聖護院円頓美町 11-8 他	立	6/17	GL-0.2m にて包含層、時期不明。	KS-16
白河街区	左、聖護院円頓美町 11-8 他	立	6/17	GL-0.2m にて包含層、時期不明。	KS-16
白河街区・岡崎遺跡	左、岡崎天王町 51、51-2・4	試	6/21、7/25	GL-0.3m 以下江戸の包含層、-1.52m にて鎌倉の土壌 1、江戸の土壌 2。	KS-17
白河街区	左、聖護院蓮華蔵町 43-2	立	6/22	検出できず。	KS-18
北白川廃寺	左、北白川上別当町 9 No B	立	6/22	盛土のみ。	KS-19
北白川廃寺	左、北白川上別当町 9 No A	立	6/22	盛土のみ。	KS-20

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
白河街区	左、東竹屋町 72-2	立	6/24	盛土のみ。	KS-21
一乗寺西浦畑 町遺跡隣接地	左、一乗寺西浦畑町 53	立	7/8	検出できず。	KS-22
白河北殿跡	左、聖護院蓮華蔵町 2-3	立	7/13	GL-1.2mにて平安後期の小穴、溝。	KS23
北白川廃寺	左、北白川大堂町 23	立	7/14	盛土のみ。	KS-24
白河街区・岡崎遺跡	左、聖護院蓮華蔵町 7	立	7/25	盛土のみ。	KS-25
白河街区・岡崎遺跡	左、岡崎円勝寺町 1-10	試	7/20	GL-1.6mにて平安後期の土壌 3。	KS-26
白河街区	左、岡崎法勝寺町（京都市動物園）	立	7/27	GL-0.5mにて土壌 7、柱穴 1、時期不明。	KS-27
白河街区	左、岡崎円勝寺町 91	立	8/2	検出できず。	KS-28
法成寺跡	上、西三本木通丸太町上る 3 丁目出水町地先	立	8/3	盛土のみ。	KS-29
小倉町別 当町遺跡	左、北白川別当町 3-2	立	8/5・10、9/1	GL-0.3mにて平安～鎌倉の包含層。-0.7mにて土壌 1、小穴 9、時期不明。	KS-30
白河街区	左、聖護院東町 2	立	8/6	検出できず。	KS-31
白河街区・岡崎遺跡	左、岡崎天王町他地内	立	8/9	検出できず。	KS-32
白河街区	左、岡崎入江町 21、21-4～11	試	8/19	GL-0.92mにて流れ堆積。	KS-33
白河街区	左、聖護院円頓美町 11-8	立	8/30	GL-0.8mにて平安後期の土壌 9。	KS-34
白河街区	左、聖護院蓮華蔵町 27、28	立	9/3	盛土のみ。	KS-35
白河街区・岡崎遺跡 京都大農学部 構内遺跡	左、岡崎法勝寺町（京都市動物園） 左、北白川西町 80	立 試	9/5 9/13	GL-0.5mにて平安中期の包含層。 検出できず。	KS-36 KS-37
白河街区・岡崎遺跡	左、岡崎法勝寺町（京都市動物園）	立	9/19	盛土のみ。	KS-38
白河街区・岡崎遺跡	左、岡崎南御所町 9-3	立	9/19	盛土のみ。	KS-39
小倉町別 当町遺跡	左、北白川下別当町 132	立	9/29	GL-0.43mにて室町の包含層。	KS-40
北白川廃寺	左、北白川山田町 60、60-1	試	10/3	GL-0.25mにて平安の包含層。	KS-41
白河街区	左、東丸太町 29	立	10/12	GL-0.1m以下平安末期～江戸の包含層 5。	KS-42
白河街区	左、大菊町 116	立	10/21	室町～江戸の包含層 4。	KS-43
白河街区	左、東丸太町 11-4	立	10/27	GL-0.4mにて包含層、時期不明。	KS-44
白河街区・岡崎遺跡	左、岡崎徳成町	立	11/4	GL-0.9mにて土壌 1、時期不明。	KS-45
京大農学部 構内遺跡	左、北白川追分町 89	立	11/11	GL-0.3 mにて平安末期～鎌倉初期の包含層。	KS-46
白河街区・岡崎遺跡	左、岡崎円勝寺町 91	試	9/29	GL-1.5mにて江戸の井戸 1。	KS-47
白河街区	左、岡崎北御所町 33	立	11/17・18	GL-0.4mにて平安の包含層。	KS-48
白河街区	左、東竹屋町 60-6	立	12/5	GL-0.3mにて江戸末期の包含層。	KS-49
白河街区	左、聖護院川原町 35	立	12/8	盛土のみ。	KS-50
白河街区	左、正往寺町 460	立	12/12	盛土のみ。	KS-51
白河街区	左、聖護院円頓美町 11-30	立	12/15	GL-0.5m以下、平安後期・室町の包含層。	KS-52
白河街区	左、聖護院円頓美町 11-39、40、42、43	立	12/26	GL-0.45m以下、平安後期・室	KS-53
得長寿院跡	左、聖護院蓮華蔵町 1 地先	立	1/12・18	埋土のみ。	KS-55
北白川廃寺	左、北白川山田町 59	立	1/20	盛土のみ。	KS-54
北白川廃寺	左、北白川大堂町 62	立	2/3	盛土のみ。	KS-56
白河街区	左、吉田近衛町 16	立	2/8	盛土のみ。	KS-57
白河街区	左、吉田下大路町 40	立	2/8	GL-1.0mにて平安後期の包含層。	KS-58
白河街区	左、岡崎北御所町 33 地先	立	2/8	埋土のみ。	KS-59
白河北殿跡	左、聖護院蓮華蔵町 1	試	2/9	GL-0.3mにて江戸の井戸 1。 -1.0mにて鎌倉～室町の包含層、	KS-60

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
白河街区	左、聖護院円頓美町 11-30	立	2/15	時期不明の落ち込み 1。	
白河南殿跡	左、聖護院蓮華蔵町 35	試	2/22	検出できず。 GL-1.5m 以下、包含層 3。平安末 期 1、江戸 1、時期不明 1。発掘 調査に切り換える。	KS61 KS62
白河北殿跡	左、東九大町 20-2	立	2/27	検出できず。	KS-63
法勝寺跡	左、岡崎法勝寺町 (京都市動物園)	立	2/29	盛土のみ。	KS-64

洛東地区 (RT)

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
法性寺跡	東、今熊野宝蔵町 65	立	4/4	GL-0.56m にて江戸の包含層。	RT-1
珍皇寺境内遺跡	東、小松町 11-40	立	4/6・9・11・ 12・13	GL-0.25m 以下土壌 10、平安、鎌 倉各 1、室町 2、時期不明 6。	RT-2
法住寺殿跡	東、本瓦町 660-4	立	4/14・16	GL-0.8m にて室町の土壌 1。	RT-3
中臣遺跡	山、西野山中臣町 75-5・6	立	4/14	検出できず。	RT-4
法住寺殿跡	東、東瓦町～泉涌寺雀ヶ森町	立	4/18・23・ 25・26	すべて攪乱。	RT-5
中臣遺跡	山、西野山中臣町 76	立	4/20	検出できず。	RT-6
六波羅政庁跡	東、上新町 364 地先	立	4/30	GL-1.0m にて江戸の包含層。	RT-7
中臣遺跡	山、栗栖野狐塚町	立	4/16・20	GL-0.6m にて溝、時期不明。	RT-8
六波羅政庁跡	東、五条橋東 2 丁目 4 地	立	5/2	検出できず。	RT-9
法住寺殿跡	東、東瓦町 964	立	5/7	盛土のみ。	RT-10
六波羅政庁跡	東、西御門町 464-5	立	5/13	盛土のみ。	RT-11
法性寺跡	東、泉涌寺五葉ノ辻町 13-4	立	5/17	GL-0.7m にて落ち込み、時期不明。	RT-12
中臣遺跡	山、勸修寺東栗栖野町 18-7	立	5/17	テラス状の台地から山科川へ傾 斜していく変換点と思われる箇 所。	RT-13
鳥辺野跡	東、清閑寺池田町 35 地先	立	5/17・19	検出できず。	RT-14
法住寺殿跡	東、今熊野池田町 12	試	5/18	GL-0.68m にて瓦を多量に含む平 安後期の溝。発掘調査に切り換 える。	RT-15
法性寺跡	伏、深草願成町 18-5	立	5/23	山土のみ。	RT-16
法興院跡	中、新樫木町通竹屋町西草堂町 205-3	立	6/1	盛土のみ。	RT-17
法性寺跡	東、泉涌寺雀ヶ森町 7-6	立	6/11	検出できず。	RT-18
六波羅政庁跡	東、新宮川筋松原下る西御門町 453-1	立	6/14	盛土のみ。	RT-19
中臣遺跡	山、勸修寺東金ヶ崎 26-1	立	6/10	盛土のみ。	RT-20
六波羅政庁跡	東、芳野町 77	立	6/27	盛土のみ。	RT-21
勸修寺境内	山、勸修寺福岡町地先	立	6/28	盛土のみ。	RT-22
六波羅政庁跡	東、蛭子町 259	立	7/1	GL-1.05m にて室町の包含層。	RT-23
六波羅政庁跡	東、田中町 507-8	立	7/19	検出できず。	RT-24
中臣遺跡	山、勸修寺東栗栖野町 84	立	7/19	盛土のみ。	RT-25
法住寺殿跡	東、東瓦町 677-23	立	7/25	巡回時工事終了。	RT-26
勸修寺境内	山、勸修寺福岡町地先	立	8/4	検出できず。	RT-27
中臣遺跡	山、西野山中臣町 3	立	8/9	検出できず。	RT-28
山科本願寺跡	山、東野狐蔵町	立	8/17	検出できず。	RT-29
法興院跡	中、中町通夷川上る銚田町 287	立	8/25	検出できず。	RT-30
勸修寺境内	山、勸修寺福岡町～西北出町	立	9/6	検出できず。	RT-31
中臣遺跡	山、西野山中臣町 71-39	立	9/7	盛土のみ。	RT-32
法性寺跡	東、泉涌寺門前町 23-4	立	9/26	検出できず。	RT-33
六波羅政庁跡	東、石垣町東側 62	試	9/29	GL-1.2m にて流れ状堆積。	RT-34
法性寺跡	東、今熊野宝蔵町 17-20	立	11/19	検出できず。	RT-35
鳥辺野跡	東、上馬町 535	立	9/29	検出できず。	RT-36
鳥辺野跡	東、今熊野宝蔵町 27	立	10/12	盛土のみ。	RT-37

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
中 臣 遺 跡	山、西野山中臣町 20	立	10/17	GL-0.35mにて平安後期の包含層。	RT-38
鳥 辺 野 跡	東、今熊野池田町 6-9	立	10/24	盛土のみ。	RT-39
鳥 辺 野 跡	東、今熊野北日吉町 52-42 地先、51-21 地先	立	10/27	検出できず。	RT-40
中 臣 遺 跡	山、栗栖野狐塚町 41-1	試	11/1	検出できず。	RT-41
鳥 辺 野 跡	東、今熊野日吉町	立	11/1	盛土のみ。	RT-42
中 臣 遺 跡	山、西野山中臣町 3	試	11/4	GL-0.8mにて鎌倉の土壌、時期不明の小穴。発掘調査に切り換える。	RT-43
六波羅政庁跡	東、渋谷通東大路西入上新シ町、鐘鐺町	立	11/5	盛土のみ。	RT-44
山科本願寺跡	山、東野舞台町地先	立	11/7	巡回時工事終了。	RT-45
中 臣 遺 跡	山、栗栖野華ノ木町 22-6	立	11/9	GL-0.95mにて溝 1、時期不明。	RT-46
中 臣 遺 跡	山、勸修寺西金ヶ崎	立	11/19	盛土のみ。	RT-47
法 性 寺 跡	東、今熊野宝蔵町 17-9	立	11/21	検出できず。	RT-48
法 性 寺 跡	東、本町 12 丁目 221	立	11/22	GL-0.8mにて湿地状の落ち込み、時期不明。	RT-49
法 性 寺 跡	東、一橋野本町 94-18、87-14	立	12/26	盛土のみ。	RT-51
中 臣 遺 跡	山、西野山中臣町 3	立	11/4、1/7	GL-0.6mにて土壌 2、時期不明。	RT-43
法性寺跡・本多山古墳群	東、泉涌山ノ内町	立	1/9～2/24	古墳 3 基検出。	RT-50
法住寺殿跡	東、東瓦町 676	立	1/17	盛土のみ。	RT-52
法 性 寺 跡	伏、深草車坂町	立	1/26	攪乱のみ。	RT-53
中 臣 遺 跡	山、勸修寺西金ヶ崎 83-2	試	2/2	検出できず。	RT-54
中 臣 遺 跡	山、勸修寺西金ヶ崎 83-3	試	2/2	GL-1.0mにて溝 1、時期不明。	RT-55
勸修寺境内	山、勸修寺泉玉町地内	立	2/2	検出できず。	RT-56
山科本願寺跡	山、西野山階町 30-6	立	2/14	GL-0.3mにて包含層、時期不明。	RT-57
山科本願寺南殿跡	山、音羽伊勢宿町地先	立	2/14	巡回時工事終了。	RT-58
中 臣 遺 跡	山、栗栖野狐塚町 41-1	試	11/1、2/16	検出できず。	RT-41
鳥 辺 野 跡	東、今熊野阿弥陀ヶ峰町	立	2/24	岩盤のみ。	RT-60
法住寺殿跡	東、東瓦町 677-5、20	試	2/24	GL-0.2mにて土壌 2、時期不明。	RT-59
法 性 寺 跡	東、本町十五丁目 814-16	立	3/3・7	GL-0.1mにて室町の包含層。	RT-61
中 臣 遺 跡	山、栗栖野華ノ木町 22-6	立	3/13	検出できず。	RT-62
中 臣 遺 跡	山、勸修寺西金ヶ崎 70	試	3/17	旧安祥寺川の氾濫原。	RT-63
中 臣 遺 跡	山、勸修寺西金ヶ崎 73	試	3/17	上と同じ。	RT-64

伏見地区 (F D)

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
伏 見 城 跡	伏、両替町 14 丁目 157-1・2、159-1	立	4/6・7	GL-0.9m 以下、流れ堆積。	FD-1
遺 跡 外	伏、深草谷口町	立	5/9	埋土のみ。	FD-2
伏 見 城 跡	伏、両替町 11-241	立	6/6	GL-0.15mにて桃山時代の包含層。	FD-3
伏 見 城 跡	伏、桃山町泰長老 110-1	試	7/7	検出できず。	FD-4
伏 見 城 跡	伏、御香宮門前町 184	立	7/12	GL-0.35m 以下桃山時代の包含層 2。	FD-5
伏 見 城 跡	伏、深草墨染町 12-2	立	7/13	GL-0.3mで桃山の包含層、-0.9mにて同時期の小穴。	FD-6
伏 見 城 跡	伏、桃山筑前台町地先	立	8/4	検出できず。	FD-7
伏 見 城 跡	伏、大阪町 602	立	8/20	検出できず。	FD-8
伏 見 城 跡	伏、鷹匠町	立	8/23	GL-1.3mにて江戸の包含層。	FD-9
伏 見 城 跡	伏、京町 8 丁目横町	立	8/26	検出できず。	FD-10
伏 見 城 跡	伏、桃山最上町 39	立	8/30	盛土のみ。	FD-11
嘉 祥 寺 跡	伏、深草瓦町 10	立	9/12	GL-0.3mにて包含層、時期不明。	FD-12
伏 見 城 跡	伏、大亀谷万帖敷町 1-14	立	9/16	盛土のみ。	FD-13

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
極楽寺跡	伏、深草野手町地先	立	9/29	GL-0.26mにて包含層、時期不明。	FD-14
伏見城跡	伏、御駕籠町、東堺町	立	10/11・13	検出できず。	FD-15
伏見城跡	伏、桃山町烏津 69-10	立	10/13	盛土のみ。	FD-16
伏見城跡	伏、肥後町 376	立	10/14	盛土のみ。	FD-17
伏見城跡	伏、桃山水野左近東町 75	立	10/19	検出できず。	FD-18
伏見城跡	伏、山崎町 361、367-1	立	10/24	盛土のみ。	FD-19
伏見城跡	伏、桃山井伊掃部東町 16	試	11/14	検出できず。	FD-20
伏見城跡	伏、桃山町三河地先	立	11/26	検出できず。	FD-21
国立京都病院構内遺跡	伏、深草向畑町 1-1	試	11/30	GL-0.4m以下、砂と砂泥の互層。	FD-22
伏見城跡	伏、両替町 1丁目	立	12/8	検出なし。	FD-23
伏見城跡	伏、新町 5丁目 486	立	12/13	盛土のみ。	FD-24
伏見城跡	伏、桃山町鍋島 26-2・6・8	試	12/16	検出できず。	FD-25
御香宮廃寺	伏、深草墨染町地先	立	1/23	GL-0.8mにて整地層。-1.1mにて堀。	FD-26
伏見城跡	伏、西大手町 307-60	立	1/30	巡回時工事終了。	FD-27
伏見城跡	伏、柿ノ木浜町 456	立	2/14	掘乱のみ。	FD-28
伏見城跡	伏、両替町十五丁目 120 地先	立	2/29	検出できず。	FD-30
深草寺跡	伏、深草田谷町 1	試	2/29	埋土のみ。	FD-30
深草遺跡	伏、深草西浦町四丁目 22	立	3/26	GL-0.7mにて土壇 5、柱穴 1。平安 1、時期不明 5。	FD-29
貞観寺跡	伏、深草瓦町 34	立	3/27	耕土のみ。	FD-31
伏見城跡	伏、風呂屋町 256-8	立	3/29	盛土のみ。	FD-32
極楽寺跡	伏、深草野手町地先	立	3/31	巡回時工事終了。	FD-33
				検出できず。	FD-34

鳥羽地区 (TB)

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
鳥羽離宮跡	伏、竹田浄菩提院町 48-9	立	4/14	検出できず。	TB-1
鳥羽離宮跡	伏、竹田浄菩提院町 50	試	4/18	GL-0.9mにて平安末期の包含層、池状堆積。	TB-2
下鳥羽遺跡	伏、毛利町 1、1-2	試	5/10	GL-2.0mにて平安の遺物を含む流れ堆積。	TB-3
鳥羽離宮跡	伏、竹田小屋ノ内町 71-1	試	5/19	時期不明の流れ堆積、及び鳥羽離宮期の遺構面。発掘調査に切り換える。	TB-4
鳥羽離宮跡	伏、竹田浄菩提院町 51	試	5/20	全域が池状の堆積。	TB-5
鳥羽離宮跡	伏、竹田小屋ノ内町 21	試	5/23	流れ堆積及び鳥羽離宮期の遺構面、古墳時代の包含層。	TB-6
平安京跡隣接地	南、西九条烏町 8	立	5/24	検出できず。	TB-7
平安京跡隣接地	南、四ノ塚町 65	立	5/25	盛土のみ。	TB-8
鳥羽離宮跡	伏、中島外山町 9	立	6/7	検出できず。	TB-9
鳥羽離宮跡	伏、中島御所ノ内町 7-7	立	6/9	盛土のみ。	TB-10
下鳥羽遺跡	伏、竹田真幡木町 41-1	立	6/30	GL-0.75mにて平安中・後期の包含層。	TB-11
平安京跡隣接地	南、唐橋堂ノ前町 33	立	7/7	耕土のみ。	TB-12
鳥羽離宮跡	伏、中島前山町 29、29-1・2、14-2	立	7/79/26	耕土のみ。	TB-13
鳥羽離宮跡	伏、中島宮ノ前町 28 他	試	7/18	GL-0.88mにて南へ落ちる汀線。	TB-14
鳥羽離宮跡	伏、中島秋ノ山町	立	7/18・19	耕土のみ。	TB-15
鳥羽離宮跡	伏、竹田小屋ノ内町	立	7/28	埋土のみ。	TB-16
下鳥羽遺跡	伏、毛利町 25 他	試	8/1	GL-0.8mにて鎌倉、室町の包含層。	TB-17
鳥羽離宮跡	伏、竹田小屋ノ内町	試	8/30	検出できず。	TB-18

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
深草遺跡	伏、深草西浦町4丁目76	立	8/3	検出できず。	TB-19
深草遺跡	伏、深草西浦町7丁目28	立	7/29	盛土のみ。	TB-20
平安京跡隣接地	南、西九条開ケ町他	立	7/26	GL-0.4mにて包含層、時期不明。	TB-21
深草遺跡	伏、深草塚本町	立	8/4	検出できず。	TB-22
唐橋遺跡	南、吉祥院西定成町	立	8/9	検出できず。	TB-23
唐橋遺跡	南、吉祥院西定成町35	試	8/22	検出できず。	TB-24
鳥羽離宮跡	伏、竹田内畑町80	試	8/29	GL-1.16m以下湿地状堆積、鎌倉～室町の土壌1。	TB-25
鳥羽離宮跡	伏、竹田小屋ノ内町	立	8/29	検出できず。	TB-26
下鳥羽遺跡	伏、下鳥羽城ノ越町2・2・3、18-1・6、43	立	9/7	検出できず。	TB-27
鳥羽離宮跡	伏、中島前山町24-1	試	9/9	GL-1.8mにて池の堆積、時期不明。	TB-28
鳥羽離宮跡	伏、中島河原田町109-3	立	9/17	盛土のみ。	TB-29
上鳥羽遺跡	南、上鳥羽南花名町8、9	試	9/19	GL-1.75mにて湿地状堆積、時期不明。	TB-30
鳥羽離宮跡	伏、中島中道町31	試	9/21	GL-1.2m以下湿地状堆積。	TB-31
鳥羽離宮跡	伏、中島宮ノ後町	試	12/9	GL-0.25mにて池状堆積。	TB-32
唐橋遺跡	南、九条通御前東	立	10/17・21	検出できず。	TB-33
下鳥羽遺跡	伏、下鳥羽北ノ口町31-2	立	10/19	耕土のみ。	TB-34
下鳥羽遺跡	伏、下鳥羽北ノ口町31-2	立	10/19	耕土のみ。TB-34と同一敷地。	TB-35
上鳥羽遺跡	南、上鳥羽花名町18地先	立	11/16	埋土のみ。	TB-36
深草遺跡	伏、深草西浦町2丁目39	立	11/19	検出できず。	TB-37
鳥羽離宮跡	伏、中島掘端町41-1	試	11/21	GL-1.25mにて池状堆積、弥生土器含む。	TB-38
鳥羽離宮跡	伏、中島北ノ口町1-1A、28-1	立	12/19	GL-1.1～1.3mにて東へ落ちる汀線。	TB-39
鳥羽離宮跡	伏、中島御所ノ内町15-1	立	12/19	埋土のみ。	TB-40
鳥羽離宮跡	伏、竹田舘川町49	試	12/23	GL-0.74mにて池状堆積。	TB-41
鳥羽離宮跡	伏、中島北ノ口町18-2	立	1/11	盛土のみ。	TB-42
鳥羽離宮跡	伏、中島中道町23-1、23、24	試	1/17	GL-1.08mにて古墳後期の包含層。	TB-43
鳥羽離宮跡	伏、竹田浄菩提院町	立	1/17	発掘済。舟入り及び東へ落ちる汀線再確認。	TB-44
下鳥羽遺跡	伏、竹田弘ノ川町4-2	試	2/20	GL-1.1mにて池状堆積。	TB-45
唐橋遺跡	南、吉祥院九条町39-9	立	3/21	GL-0.2m以下、包含層4、時期不明。	TB-46
唐橋遺跡	南、吉祥院九条町39-7、39-8	立	3/21	GL-0.2m以下、包含層4、時期不明。	TB-47

南・桂地区 (MK)

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
中久世遺跡	南、久世殿城町112-3、113-8	立	4/2	検出できず。	MK-1
大藪遺跡	何、久世大藪町地内	立	4/20・23	GL-0.4mで包含層、-0.85mに	MK-2
中久世遺跡	南、久世殿城町、中久世4～5丁目	立	5/25～30、 10/13～25	弥生～平安中期の包含層、土壌6、柱穴1、落ち込み1、流路。	MK-3
中久世遺跡	南、久世中久世町3丁目74地先	立	5/30	埋土のみ。	MK-4
上久世遺跡	南、久世中久世町1丁目348地先～20地先	立	6/18	検出できず。	MK-5
上久世遺跡	南、久世中久世町1丁目	立	7/4	検出できず。	MK-6
中久世遺跡	南、久世中久世町3-88-1	立	7/23	工事に伴う掘削なし。	MK-7
上久世遺跡	南、久世中久世町地先	立	7/26・27	検出できず。	MK-8
中久世遺跡	南、久世殿城町88	試	8/29・30	GL-1.05m以下古墳時代～室町の包含層2、-1.2mにて平安の溝1。発掘調査に切り換える。	MK-9
中久世遺跡	南、久世中久世町2丁目130	立	12/6	GL-0.33m以下包含層4、平安前期1、時期不明3。	MK-10

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
南春日町遺跡	西、北春日町、南春日町	試	12/3～3/31	平安～室町の土壌、溝、柱穴、 包含層。	HO-3
中久世遺跡	南、久世殿城町11-4、他4筆	立	2/7	GL-0.64mにて包含層、時期不明。	MK-11
下津林遺跡	西、川島松ノ木本町27	立	2/9	攪乱のみ。	MK-12
大藪遺跡	南、久世殿城町522-6	試	3/21	GL-0.26mにて鎌倉～室町の土壌 3、柱穴1。	MK-13

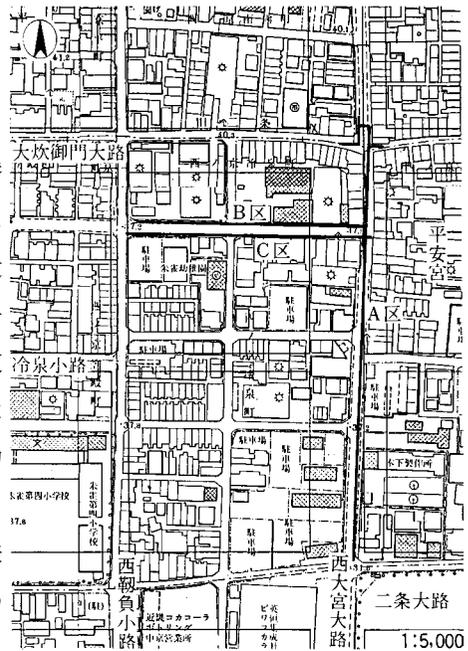
長岡京地区 (NG)

遺跡名	調査地	調査	調査日	概要	調査番号
長岡京跡	伏、羽東師菱川町568-1地先	立	4/11	検出できず。	NG-1
長岡京跡	伏、横大路西海道65	立	4/12	検出できず。	NG-2
長岡京跡	南、久世東土川町418、423	立	4/21・23	GL-0.35mにて長岡京期の溝、柱 穴、落ち込み、弥生の土壌1。	NG-3
長岡京跡	伏、納所町地先	立	5/25	GL-0.35mにて流れ堆積、時期不 明。	NG-4
旧淀城跡・ 長岡京跡	伏、納所薬師堂地先	立	5/26	GL-0.8m以下、宇治川と桂川に 挟まれた氾濫原の堆積。	NG-5
長岡京跡	南、久世東土川町200-92	立	5/31	盛土のみ。	NG-6
長岡京跡	伏、羽東師古川町233-2	立	6/10	GL-0.8m以下、江戸末期の包含層。	NG-7
長岡京跡	伏、淀本町地先	立	6/28	GL-0.55mにて江戸の包含層。	NG-8
長岡京跡	南、久世東土川町79	試	7/13	GL-1.1mにて鎌倉の柱穴。	NG-9
長岡京跡	伏、淀本町174-19、167-3	立	7/25	検出できず。	NG-10
長岡京跡	伏、納所町143-1地先	立	9/9	盛土のみ。	NG-11
旧淀城跡・ 長岡京跡	伏、納所北城堀地先	立	9/14	盛土のみ。	NG-12
長岡京跡	伏、納所町地先	立	10/21	全て攪乱。	NG-13
長岡京跡	伏、淀池上町、他	立	11/2	盛土のみ。	NG-14
長岡京跡	伏、納所町57地先～303地先	立	11/4	盛土のみ。	NG-15
長岡京跡	伏、久我西出町11-29他6筆	試	11/17～25	GL-0.5mにて弥生時代中期～後 期の溝3、長岡京時代の井戸1、 柱穴4。図版68。	NG-16
長岡京跡	伏、淀池上町地先	立	12/2	盛土のみ。	NG-17
長岡京跡	南、久世築山町462	立	2/7	耕土のみ。	NG-18
長岡京跡	伏、羽東師古川町332～336	試	2/8～29	水田址3、平安1、長岡京以前2、 発掘調査に切り換える。	NG-20
長岡京跡	南、久世東土川町368-1	試	3/5	GL-1.3mにて弥生～古墳前期の 溝1。	NG-19

II 平安京・京跡

3 左馬寮・右京二条二坊

経過 調査地は京都市中京区西ノ京右馬寮町、西ノ京冷泉町で、平安京の右京二条二坊にあたり、西大宮大路、西靱負小路などの条坊遺構検出が期待された。調査地点は御前通と太子道の南北両歩道である。御前通をA区、北歩道をB区、南歩道をC区として調査した。A区は路面下層に灰褐色砂礫が厚く堆積し、出土遺物の年代から御前通の近世流路と推定された。B区からは土壌、溝、柱穴など、平安時代から鎌倉時代の遺構を検出した。C区では平安時代の井戸、溝、土壌などを検出した。



遺構 B区 12.9 mから 15.4 mにかけて深さ 60cm の土壌を検出した。検出地点の土層は上から現代路面、旧耕作土、灰褐色泥土（床土）と続き、礫・炭混じりの暗灰色砂泥の土壌埋土となる。土壌下層は土器を含む暗灰色泥砂、次に灰色砂礫の地山となる。埋土中から土師器、白磁、常滑窯の甕など平安時代後期末の遺物が出土した。

45 m地点では現路面、旧耕作土下層には茶灰色泥砂層があり、この下面から成立する柱穴を数個検出した。規模は 30～50cm で小さなものである。

93 m地点の土層は現路面、旧耕作土、淡茶灰色泥砂、茶灰色泥砂、暗灰色泥土、灰色泥土混じり砂礫層と続く。Ⅲ、Ⅳ層には鎌倉時代の遺物を含み、最下層の灰色砂礫層は流路埋土である。

C区では 10.3～11.4 mにかけて井戸状遺構を検出した。この地点の土層は現路面、近代整地層、灰色泥砂、褐色砂、暗灰色礫混じり泥砂層となっていた。最下層の暗灰色泥砂層は井戸埋土で多量の土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などが出土し、また径 10～15cm 程の河原石もある。井戸の成立面は地表下 1 m前後で肩部の暗灰色泥砂層を切って成立している。

遺物 井戸からは、土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、緑釉陶器素地、灰釉陶器、

延喜通寶、炭などが出土した。土師器には、供膳形態の皿、杯、鉢と、煮沸形態の甕がある。皿は口径12.8～14.0cm、器高1～1.5cmのものが出土している。法量的には12.8cm前後のもの(1)と、やや大きい14.0cm前後(2,3)の2群に分かれる。杯は口径13.2～15.6cm、器高1.9～3.6cmである。法量により、13.3cm前後(4～7)と、15.5cm前後(8～10)の2群に分かれる。調整はいずれも口縁外面上半部をヨコナデする。鉢(11)は口径32cm前後、器高6cm。高台は低い三角形、内面調整はハケメとヨコナデ、外面には粘土紐巻き上げ痕が残る。甕(12)は頸部が「く」字状に屈曲するもので端部を内側に丸め込んでいる。体部外面はハケ調整。この他、短く「く」字状にまがり、体部外面を未調整、内面に青海波の叩き目が残る甕(13)もある。黒色土器は杯と甕が出土した。杯はいずれも高台つきのもので、口径10.4～16.6cm、器高3.2～5.3cm。(14)は内外面を黒色処理し、口縁端部にヘラを外面から押し、輪花を付けている。内面だけを黒色処理した(15,16)は杯形に低い三角高台を付ける。内面は横方向にヘラミガキを密に行っているが、外面調整は、口縁端部をヨコナデする技法は共通するが、体部はヘラケズリする(16)と未調整のままにする(15)に分かれる。胎土はいずれも粘質で甕同様金雲母を少量含む。

須恵器には杯、蓋、壺などがあるが杯と壺口縁以外は小破片でみるべきものがない。杯(24)は口径15cm、器高4.3cm前後、口縁端部を外側に肥厚させ、鉢状にする。体部下半のヨコナデは凹凸が激しい。胎土は粘質で色調は灰青色、糸切りの平高台が付くものと推定される。壺(25)は口縁部の破片、端部を外反させ、つまみあげている。胎土中には細砂を含み、色は青灰色。

緑釉陶器には皿と椀がある。(19)は口径12.6cm、器高3.1cm、体部中位に稜が付く皿。稜から底部にかけて、ロクロケズリ調整し、底部は幅5mm、深さ3mmで円周状にケズリ出す。見込み部はヘラミガキ調整する。緑色釉を底部外面を除いて施釉する。焼成温度が高かったのか、口縁端部の釉がとび、素地が見える。胎土は灰青色、白色細砂を少量ふくむ。(20)は椀の底部破片。外面全体をロクロヘラケズリ調整し、内面はロクロナデだけ。施釉は暗緑色釉を全体に塗るが、底部外面には一部しか塗っていない。胎土は粘質、素地の色は淡灰褐色と淡灰青色をしている。他に皿で口縁端部が屈曲し、輪花がつくものも出土している。

灰釉陶器には皿、椀が出土したが全体を観察できるものはない。(21)は皿の底部破片で、短い三角高台が付く。体部はヨコナデ調整している。(22)は椀の底部破片、低い三日月高台が付く。外面調整は底部外面ロクロヘラケズリ、体部ヨコナデで施釉は漬け掛け、(23)は三日月高台の椀、調整・施釉は同様である。

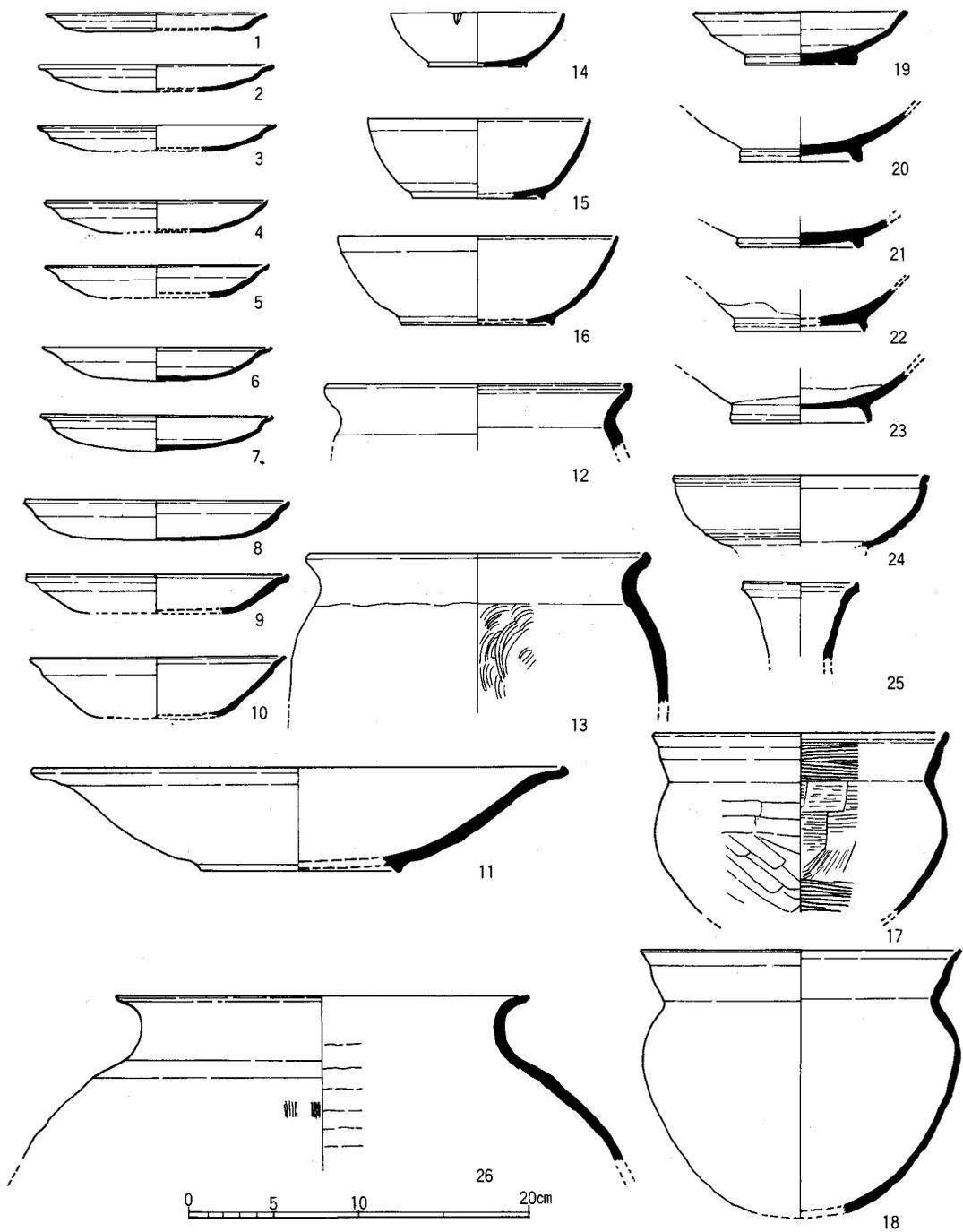
(26) はB区 12.9 m地点の土壙出土遺物で常滑窯の甕口縁部破片、径 50cm の大型品で口縁端部は短く外反し素直に終わる。体部にはタタキが一行ある。平安時代後期末の社山様式に該当する。他に中国製白磁玉縁椀、土師器の細片が出土している。

小結 調査の目的とした西大宮大路などの条坊遺構の検出はできなかったが、平安時代中期から鎌倉時代の遺構検出ができ、この地域の遺構の残りが良いことが知られた。このことは周辺地域の調査結果とも合う。調査地の右京二条二坊内では、この間およそ 62 件の立会・発掘調査が行われている。その内、京都市埋蔵文化財研究所調査分として、49 件の調査カードがあり、26 ヶ所から平安中、後期を中心とした遺構、遺物が発見されている。直接調査に関連する条坊の右京二条二坊、二、三、六、七町内では 20 件の調査がある。この内二、三町で遺構、遺物の出土が目立ち、六、七町は近世の御土居に関連するの地表下 1 m でも盛土層があり、遺構の検出はない。

今回の立会調査と直接関連するのは、1981 年の平安京右京二条二坊の調査(辻裕司「右京二条二坊(2)」『平安京跡発掘調査概報』昭和 56 年度)である。なかでも、「天曆七」の墨書土器を出土した遺構 S X 1 が注目され、この遺構に関連する過去の調査として、昭和 53 年度の試掘・立会調査の右京二条二坊跡立会調査 No.440、昭和 56 年度のガス立会調査などがある。No.440 の調査では地表下 30cm から 2 層の遺物包含層(流路埋土)があり、10 世紀の遺物が完形で出土している。ガス立会調査では地表下 1 m から暗灰色泥砂が堆積し、鎌倉時代の遺物が出土した。No.440 と S X 1 は堆積状況と出土遺物の年代が一致するなど同一の流路と推定できる。ガス立会調査検出の流路遺構は、前記 S X 1 と No.440 を結ぶ線に東肩がくるが、年代と流路の深さが一致しないなど複雑な状況を呈している。

更に S X 1 と井戸の関係については、S X 1 埋土が南接する試掘トレンチに広がっておらず、ここで検出された大炊御門大路南側溝と推定される S D 1 埋土が S X 1 下層埋土と同様であるなど S X 1 の広がり具合がはっきりしない。立会調査 B・C 区では S X 1 と同一埋土(上層茶褐色砂礫・粗砂、下層暗茶褐色混礫泥砂)ではないが、暗灰色泥土混じり砂礫の流路状土層を確認しており、これが S X 1 に関連する可能性がある。立会調査検出の井戸はこの流路上層を切って成立している。出土遺物の上からは、井戸と S X 1 の土師器は 10cm 代の皿を含まないものの同一法量を持ち器形も似ている。ただ陶器関係は井戸出土遺物の方が古式である。S X 1 は井戸や S E 1 より新しいタイプの遺物を多く含み、天曆七を年代の一点としつつもやや幅がある様に見える、したがって井戸出土遺物は S X 1 より古く 10 世紀中葉に位置する。(百瀬正恒)

※ 出土遺物の実測は伊藤 潔が行い一部百瀬が補足した。



出土土器実測図 井戸 (1～25), 土壙 (26)

土師器 (1～13), 黒色土器 (14～18), 緑釉陶器 (19・20), 灰釉陶器 (21～23),
須恵器 (24・25), 陶器 (26), (1:4) (26) は (1:8)

4 左京一条三・四坊・二条三・四坊

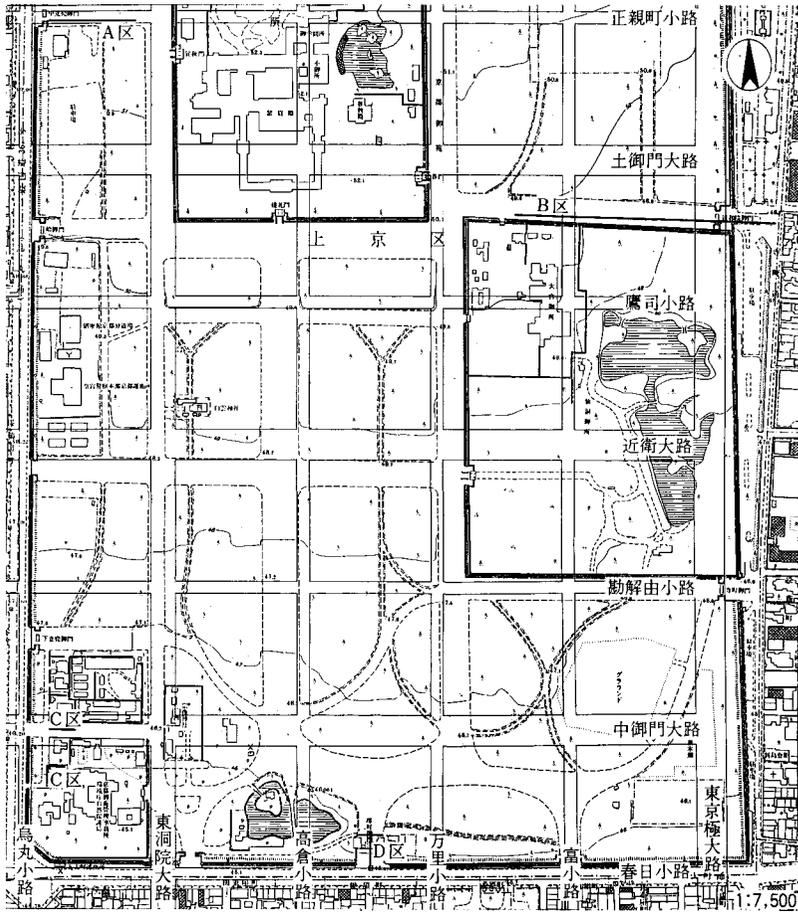
経過 京都御苑内で4カ所、瓦斯管埋設に伴って立会調査を実施した。調査地点は平安京左京一条三・四坊・二条三・四坊にあたる。調査区を北からAからDの4区を設定した。

A区は中立売御門から東に掘削し、幅1.8m前後の南北向きの石垣状遺構を検出した。

B区では焼土層、洪水層、平安中期の包含層などを確認し、遺構は近世の土壌を検出した。C区は攪乱が多く、近世の溝を検出したにとどまった。

遺構 主要な遺構についてA区から順に説明する。

A区は中立売御門の調査区で、延長40m程ある。基本土層は、路面敷、暗灰色砂泥、焼土、灰色砂、暗灰色砂泥層で、いずれも近世の土層である。烏丸通から東へ29.05～30.85mにかけて石垣状遺構を検出した。構造は、地下1m～1.2mに幅30cm、厚さ20cmの花崗岩切石を、内法で1.4m離れて置き、側石とする。その間には径20cm程の川原石をぎっしりつめる。川原石の上端は地表下60cm前後にあり、約60cm程の厚さを持つ。



B区は大宮御所の築地の外、清和院御門の東西通である。この地点の土層は路面敷の砂利、焼土層、灰色砂礫層（洪水層）、灰色礫混じり砂泥、暗灰色泥土層と続く。土層は洪水堆積層の灰色砂泥を切って成立しており規模は幅2.5m、深さ60cmである。埋土は暗灰色砂泥で、土師器、染付、貝、炭などが多量に出土した。他に最下層の暗灰色泥土層から平安時代中期後半の土師器が出土した。調査地点は、東京極大路近くに位置し、平安京の土地利用の一点を知ることができた。

またC区では幅70cmの川原石で護岸した南北溝を検出した。土層はB区の洪水層の上層で、暗灰色砂泥層を切っている。この層は整地層で固くしまっている。

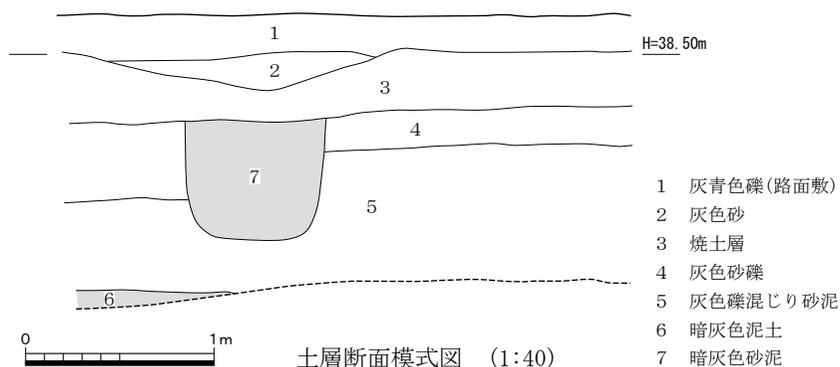
D区は攪乱が多く、遺構は検出されなかった。

遺物 遺物の出土量は、調査面積が狭く、かつ工事掘削深が、1m前後と浅かったため多くない。B区の平安時代包含層の遺物も掘削が包含層上面をかすめた程度で少ない。B区土層の遺物は量が多く、器種も豊富で、17世紀後半の一括遺物である。

小結 京都御苑は広大な面積があり、良好な遺跡調査対象地となっている。立会調査で検出できたのは近世の石垣状遺構、溝、整地層などで今後、近世京都御所復元の手掛かりになると思われる。

B区で検出した平安時代包含層は面的に広がると推定されるが、B区東端の調査地点、寺町通では未検出であった。近辺には中川などの流路があり、遺構、包含層が流失した可能性もある。今後も東京極大路付近の調査を進める必要がある。

(百瀬正恒)



5 左京二条二坊

経過 調査地は、上京区と中京区にまたがる丸太町大宮東入～東堀川東入の間で、当該地は左京二条二坊七・十町に相当する。当地近辺では以前の発掘調査^注によって、藤原頼通の邸宅・高陽院の遺構の一部（池跡）が検出されており、今回の調査においては、それら庭園遺構の広がり把握することに主眼をおいて調査を行った。調査期間は、昭和58年9月14日から昭和59年3月8日の内9日間実施した。

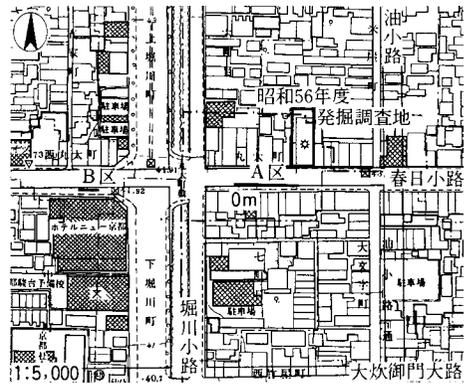
遺構 A区全域にわたって高陽院の池跡を検出した。調査地は現在の丸太町通の道路部で、全体の基本層序としては、路面・盛土が40～60cmの厚さであり、暗褐色泥砂層が60～80cm、黒褐色泥砂層が20～30cm堆積し、この下面より池跡を検出した。以下は褐灰色砂礫の無遺物層となる。

高陽院の池跡と思われる堆積層はA区0m地点より東へ5m地点まで続き、5mから10mの間は近世の遺構などにより削平を受け、再び10m地点より東へ調査区東端まで間断なく続く。池の堆積層は灰黄褐色を呈し、上より泥砂、粗砂、泥土の3層に分層できる。特に20m地点以東では20～40cmの厚さで多量の土師器皿が堆積層の上層に見受けられた。また34m地点より最下層に瓦堆積層があらわれ東端まで続く。池底では拳大の河原石を一部検出したが、全体として敷き詰めたものかどうかは不明であった。

その他の遺構としては、12m地点から17m地点にかけて、幅約5m深さ50cm程の流路を検出した。流路堆積土は暗褐色の泥土混じりの砂礫層で、縄文時代晩期～弥生時代前期の土器類が出土した。

B区は、現路面下近世層を確認したのみで、以下褐灰色砂礫の無遺物層となり、顕著な遺構・遺物は認められなかった。

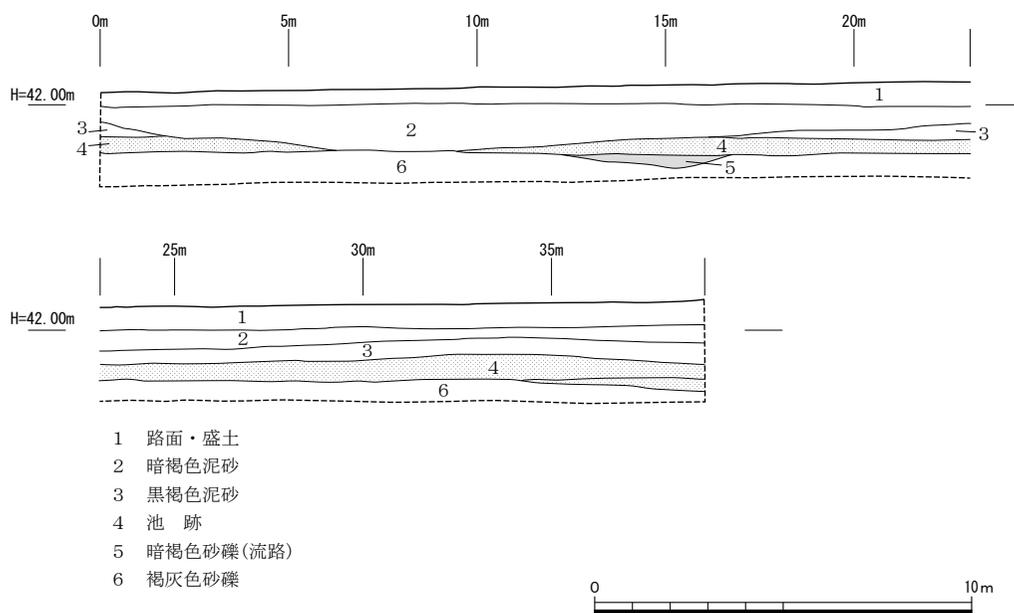
遺物 池堆積土より多量の土器類、瓦類が出土している。土器類には、土師器皿・高杯・須恵器甕、瓦器椀などがある。瓦類には瓦当をもつものはなく、いずれも平瓦・丸瓦などである。時期は平安時代後期～鎌倉時代のものである。15m付近の流路より出土した弥生土器には壺・甕がある。また縄文土器には浅鉢がある。以上の他にも、室町時代から江戸時代の土師器、陶器、輸入陶磁器などが少量出土している。



小結 今回の調査では、堀川通東側の調査区全域で高陽院の池跡を確認することができた。高陽院は平安時代後期の代表的な寝殿造建築であり、文献などから左京二条二坊内、九・十・十五・十六町の二町四方の地割りを占めていたことが知られるが、本調査で検出した池は、条坊復原図によれば、春日小路の路面上に相当することから考えて、当該地内は春日小路が分断されていたことが明らかとなった。高陽院の庭園遺構の問題としては、池の南側の汀線の検出などが今後の課題となろう。

(家崎孝治)

注 平尾政幸・辻純一『左京二条二坊(2)』『平安京跡発掘調査概報』京都市文化観光局
昭和56年度



A区北壁断面図 (1:200)

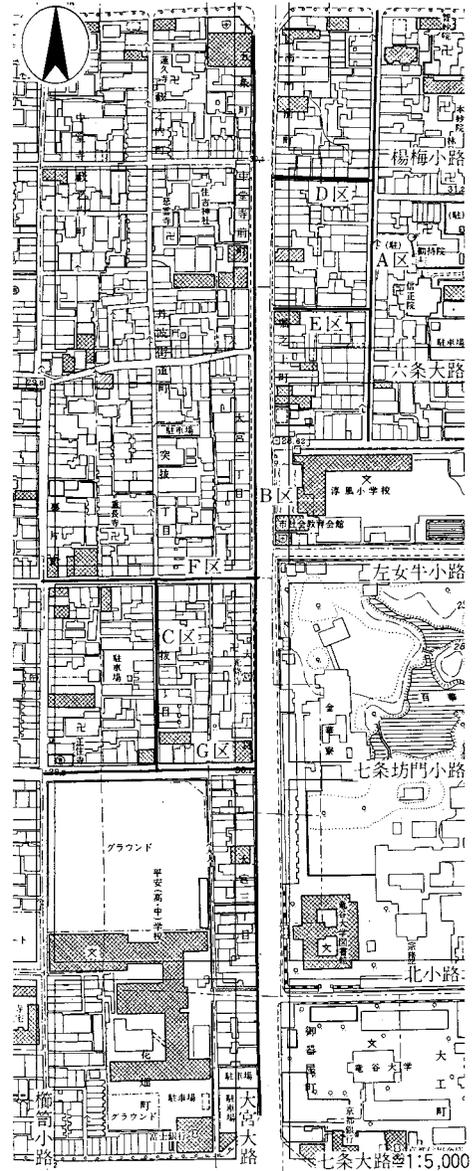
8 左京六条一・二坊・七条一・二坊

経過 調査地は京都市下京区柿本町、堀之上町、下五条町、中堂寺前町、大宮一丁目、大宮二丁目、大宮三丁目、御器屋町、突抜二丁目、裏片町などで、大宮通五条下ル一帯である。この地域は平安京の左京六条一・二坊、七条一・二坊にあたり、鎌倉時代になると、東部に日蓮宗本圀寺が成立する。

調査は、道路によってA～G区の7区を設定し行った。A、D、E区は大宮通の東部、B、C、F、G区は大宮通の西部にあたる。調査の結果、大宮通東部の調査区では土壌、柱穴、溝、旧路面などの遺構を確認したが、西部の調査区は攪乱が多く、一部で室町時代の包含層、旧流路を確認したにとどまった。

遺構 A区は、近現代の攪乱が少なく、良好な土層断面が確認できた。特に遺構が多数出土した南部の土層は84m地点を例に取れば、上から現路面、旧路面、茶灰色砂泥、灰色砂泥、灰色砂礫層と続き、第3層は室町時代の遺物包含層、4層は鎌倉時代の包含層である。この地点を中心とし、鎌倉から室町時代の溝、柱穴、土壌などを多数検出した。遺構の埋土は暗灰色砂泥層が多く、土師器、瓦器などの遺物も出土したが量は少ない。A区144.4m地点で平安時代前期の溝を検出した。規模は幅1m、深さ34cm、埋土は淡灰黄色砂泥で土師器、灰釉陶器椀などが出土した。他にA区全体で旧路面を確認したが、路面は鎌倉・室町時代の包含層の上層にあり、近世のものとは推定できる。

B区は七条通の西歩道上の調査区で、七条通から北に向かって掘削したが、花屋町通大



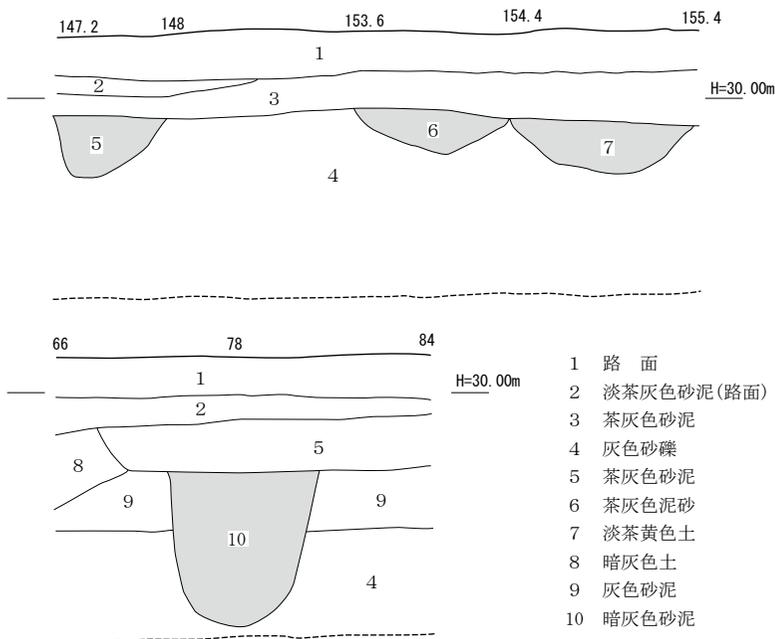
宮の北部までは淡茶灰色泥砂、灰色砂層を中心とする土層が続き、旧流路の埋土と考えられる。B区と直交する調査区のG区ではB、G区の交点から約5m西で流路の西肩を検出しB区検出の流路がかなり大規模なものと推定できる。

小結 調査地は、平安京左京六条一・二坊、七条一・二坊にあたり、西大宮大路、六条大路、五条坊門小路、六条坊門小路などの条坊遺構の検出が期待された。

調査により検出した遺構は、平安時代前期から近世までの各時代にわたる。平安時代前期の遺構はA区だけで検出した。鎌倉時代の遺構はA区の全域で検出でき、その時代と検出位置から本圀寺関連遺構と判断できる。室町時代の遺構は調査地の全域で検出され、広範な地域に広がっている。近世の遺構は各地点で検出できるが、B区で検出した流路は規模が大きい。

A区は黒門通の調査区である。黒門通は旧本圀寺域内とその外では方位と道幅が異なっている。『京都市の地名』（日本歴史地名大系27 平凡社）によると、この道は豊臣秀吉の京都市街改造後に開かれたとするが、寺域内の道路は『寛永後万治前京都全図』によると本圀寺と関連する形で描かれており、近世の本圀寺の発展による多数の塔頭の成立と関係するものであろう。

(百瀬正恒)



A区土層断面模式図 (1:40)

11 左京九条一坊・東寺

経過 調査位置は、南区八条通壬生西入ル八条町より八条内田町の間で、主に歩道上の部分約 1.3 m の深さで掘削した。付近には東寺が東側に平行しており、平安時代以降あまり変化を受けていない所と考えられた。平安京条坊復原図によると南北方向に壬生大路が走り、西側溝が推定された。また、針小路、九条坊門小路、信濃小路をも発見できる可能性があった。

遺構・遺物 SD1A の溝の幅は、2.9 m あって深さは 90 cm であった。内部には遺物はまったくみられず黄色砂層になっており、近年中に埋め戻されたものと思われる。

SD1B の溝の幅は 3.3 m あり深さは 1 m を測った。内部には、布目瓦片、瓦質火舎などを包含していた。埋土は灰色泥土で、上面は削平されており、中世の土師片と東寺で見られる軒平瓦もあった。

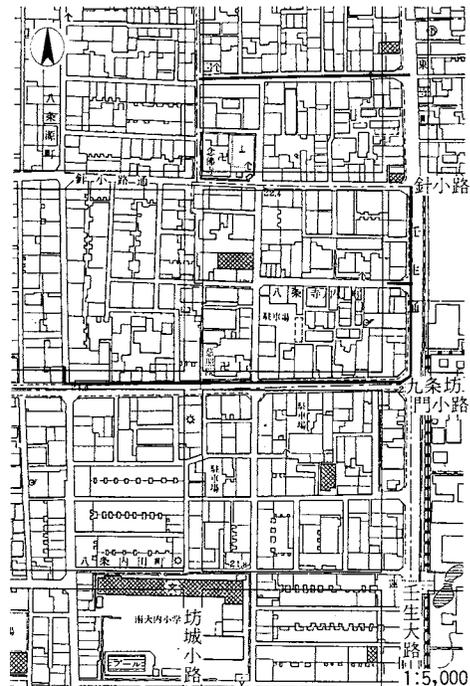
SD2 の溝の幅は 1.4 m、深さ 1.25 m あり遺物は発見できなかった。堆積層は灰色泥土、青灰色泥土である。

A 区では六孫王神社の南側において石垣と杭を打ち込んだ幅 2 m の溝を発見した。B 区は 1.2 m の深さで掘削したが、近・現代の遺物を含む堆積層の確認に終わった。

C 区は東寺西門通にあつて西へ向かつて工事が行われた。地山は、褐色砂層か灰褐色泥土で SD1A・B、SD2 の溝を検出している。D 区は壬生通に平行した歩道上を掘削したが、既設管が多く一部分でしか断面観察ができなかった。

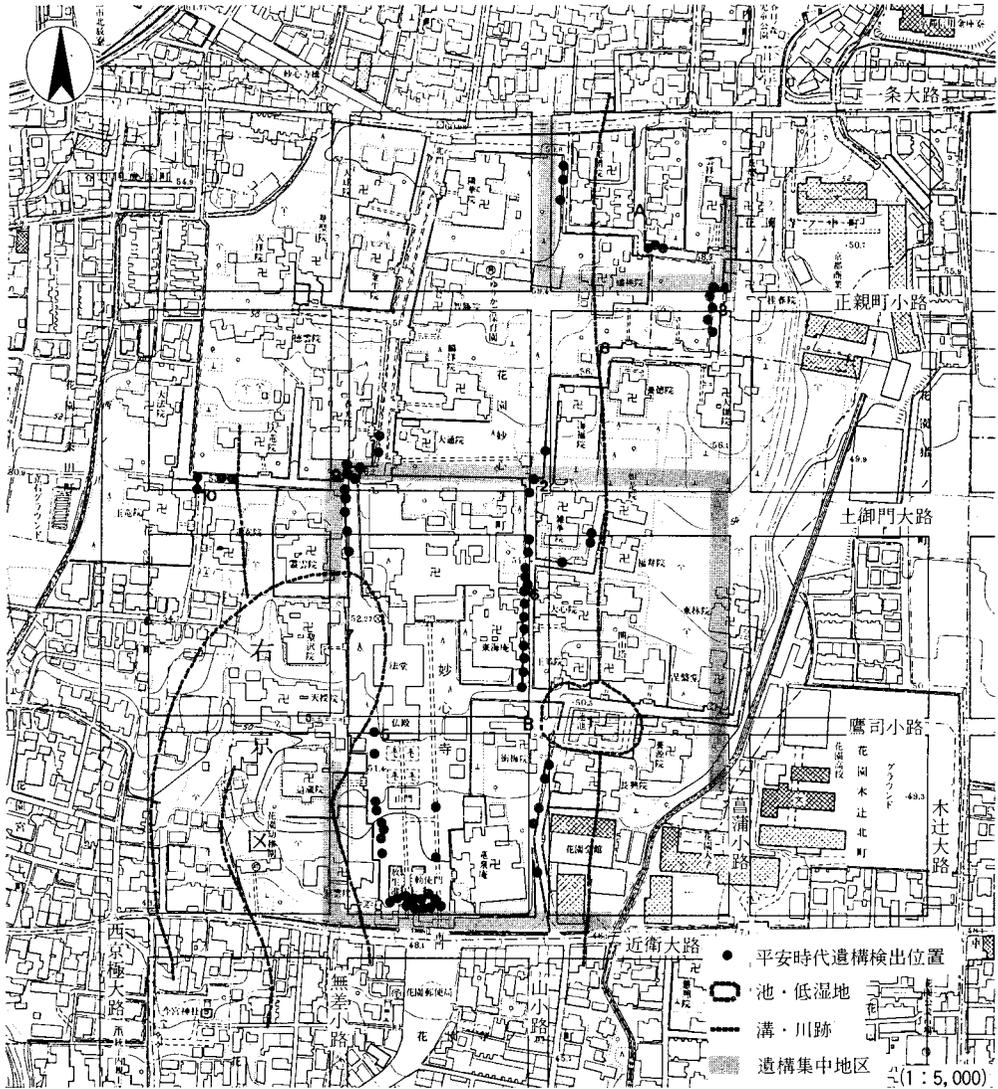
小結 今回の成果に、A 区で検出した壬生大路西側の側溝が挙げられる。ここには中世の土師器片に混じって東寺創建時の瓦類も含まれていた。そのため中世まではこの付近では条坊溝が破壊されずに残っていた様である (SD1B)。近代になって溝の掘り替えがあり (SD1A)、現在に至つたとみられる。

(吉村正親)



17 右京北辺四坊・一条四坊・妙心寺境内

経過 右京区花園妙心寺町，花園町，寺ノ中町，花園大藪町に所在する史跡妙心寺境内で，西部排水区花園系統（その6）公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。境内一帯は平安京右京北辺四坊・一条四坊に該当している。調査期間は昭和58年9月13日から翌年3月29日までであった。



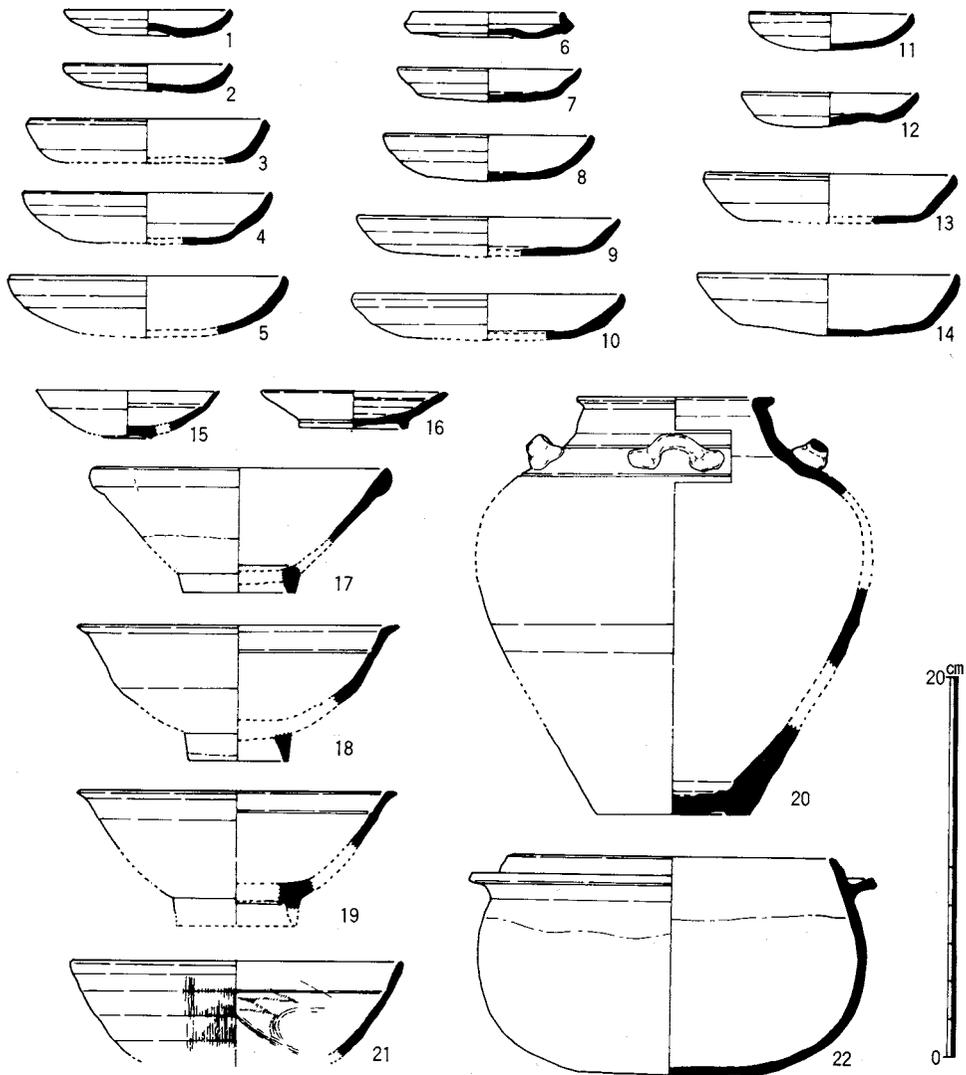
調査の結果、平安・室町・桃山・江戸各時代の遺構・遺物を検出し、これらの分布状況を明らかにした。

遺構 検出した遺構の総数は192基に及んだ。このうち平安時代に属するもの91、室町時代が29、桃山時代が35、江戸時代以降が26、時期不明11となっている。今回は平安時代の遺構を中心に報告する。

平安時代の遺構は土壙38、溝16、井戸8、池2、柱穴19、その他8を検出している。

溝の主要なものにS D 40・S D 51・S D 53・S D 94・S D 150・S D 155・S D 179がある。S D 51(3)・S D 53(4)は推定正親町小路南北溝に合致する。両溝ともに10世紀に属する土師器片が出土した。前者は幅90cm、深さ60cmを測り逆台形の断面を持つ。後者は幅80cm、深さ30cmで半円の断面形を呈する。堆積土はいずれもよく締った黄褐色砂泥層である。S D 179(10)は土御門大路北溝推定線上に合致する。幅90cm、深さ25cmを測り、茶褐色泥砂層の堆積を見せる。極めて浅いことから削平を受けたと考えられる。10世紀に属する土師器片が出土した。S D 94(5)は南北方向に延びる溝状遺構で、西端の肩部を検出し、これを南北15m以上にわたって確認した。深さ40cm、幅1.5m以上を測る。堆積土層は上層に茶灰色砂、下層に茶灰色泥砂層がある。下層から輸入陶磁器を中心とした12世紀後半の遺物が出土した。S D 40(2)・S D 155(9)は土御門大路北溝付近を東西に走る溝で、幅3m、深さ2m以上を測り、濠と考えられる規模を持つ。100m前後離れた東西2カ所で検出されたが、両者ともに規模、堆積土、方向が共通するため同一の溝と考えられる。区域を画す役目を負った溝であろう。下層に12世紀後半、上層に14世紀の遺物が出土した。S D 150(8)は幅10m、深さ2m以上を測る溝で、妙心寺北端光圀院付近からほぼ直線的に開山塔に達し池(S G 6)に注ぎ込み、花園会館の南側で宇多川に合流すると考えられる。下層に10世紀、中・上層で12世紀後半の遺物が出土した。

池はS G 6・S G 137が検出されている。S G 6(1)は東西約70m、南北約50m、深さ2m以上と推定される。南端は鋭角的な斜面を持ち人工的な開削痕をとどめている。西及び東端はゆるやかな水際を見せる。南西肩付近から12世紀後半の土師器が多量に出土した他、一部下層で10世紀の遺物も出土している。この池は現在も「蓮池」として残っているが、当時はこの3倍の水面積を有していたことが調査の結果から推定できる。S G 137(7)は法堂西側一帯に検出された低湿地と考えられる遺構で、厚い灰色粘土層の堆積がみられる。聖沢院・天授院・退蔵院周辺から西南方向に展開する谷地形の一部と推



出土土器実測図 土師器 (1～14), 輸入陶磁器 (15～21), 瓦器 (22) (1:4)

定され、「西ノ川」西遷以前の旧流路に伴ったものであろう。現在も等高線にその痕跡をとどめている。上層から12世紀後半の遺物が出土している。

井戸は5ヵ所で検出されたが、特にSE 98 (6)からは土師器・輸入陶磁器・瓦器・瓦などの12世紀後半の遺物が出土した。幅1.7 m、深さ2.0 m以上を測る。木枠は遺存していない。堆積土層は廃絶後の埋土と考えられる暗茶色泥砂と使用時に堆積したと考えられる下層の暗灰色泥土に分けられる。12世紀後半の遺物は下層から出土した。

遺物 出土した遺物の内訳は土師器 (皿・甕・塩壺), 須恵器 (椀・鉢・壺・甕), 緑釉

陶器（椀）、灰釉陶器（椀・鉢）、瓦器（椀・皿・鉢・鍋・釜）、須恵質陶器（鉢）、陶器（甕）、施釉陶器（椀・甕）、輸入陶磁器（椀・皿・壺・水注）、国産磁器（椀・皿）、瓦（平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・塼）、木製品、金属製品（釘、棺金具）、人骨（4体分）である。平安時代に属する遺物では、S G 6・S D 94・S E 98から比較的良好な資料が得られたのでこれを中心に報告する。

S G 6からは多量の土師器皿が出土した。図示したもの（6～10）はその一部である。S D 94からは断面精査中の出土ではあるが、輸入陶磁器を中心とした豊富な遺物が出土した。土師器皿（1～5）、白磁皿（15）・椀（17～19・26）、壺（23）・褐釉小壺（24）・四耳壺（20）・水注（25）、須恵器杯、緑釉陶器椀、瓦などがある。S E 98は土師器皿（11～14）、青磁椀（21）、瓦器椀・釜（22）、瓦が出土した。白磁皿（16）はS D 94より東方の整地土層からの出土である。

小結 今回の調査では、平安時代後期の遺構群が検出されたことが第一の成果に挙げられよう。これらの遺構はB地区（右京一条四坊七・八・九・十町）に集中して検出され、時期も一部12世紀前半に遡るものを含むが、大半は12世紀後半に属している。文献によれば、妙心寺の所在する平安京の西北地区には造営時に方八町規模の「籬田」が設けられ、南は近衛、北は土御門、東は紙屋川（宇多川）を限り、西は齊宮小路（無差小路）を限ったとある。これは後に「華園離宮」と称したが、12世紀に至って白河院が左大臣源有仁に下賜し、源有仁が「池館」を増開した。またこの「池館」は源平争乱期の兵火にかかり烏有に帰したともある^注。

この「池館」の位置とB地区が重なること、検出遺構の時期が「池館」の廃絶期に近接すること、火熱を受けたと考えられる遺物が多いことなどから、B地区に展開する遺構群が源有仁の「池館」に直接関係したものである可能性は極めて高いといえる。このことを踏まえるなら、北域を画したと考えられる濠（S D 40・S D 155）や池（S G 6）とこれに流下する溝（S D 150）などは「池館」を構成した重要な遺構であろう。調査では池（S G 6）の西北方にある玉鳳院・大心院・東海庵・微妙殿周辺に遺構が密集して検出されており、この付近に「池館」の中心的な建物の存在が推定できよう。

その他、妙心寺創建以降の遺構では、室町時代はB地区にその分布が限定されていること、桃山・江戸時代に至ってA地区も含めた北辺一帯に分布を拡大し、現在の寺域に重なることなどが確認された。妙心寺域の変遷を跡付ける上でも貴重な資料が得られた。

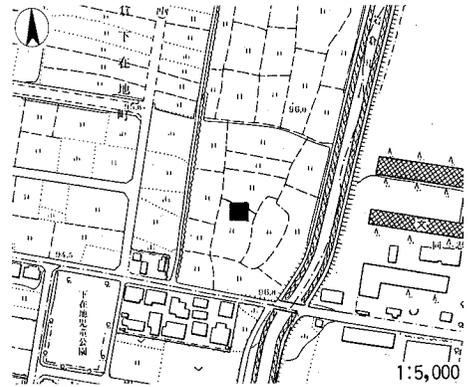
（平田 泰）

注 雪江宗深「正法山妙心禅寺記」『正法山六祖伝』

Ⅲ 京域外の遺跡

26 岩倉忠在地遺跡

経過 京都市教育委員会が左京区岩倉下在地町に京都市立明德小学校南分校を建設することになった。当地周辺は弥生時代～室町時代の遺物散布地として知られる地域であり、京都市教育委員会、文化財保護課との協議の結果遺跡の遺存状態を知るため試掘調査を実施した。調査は学校用地（12,000㎡）内に13ヵ所（約600㎡）のトレンチを設け実施した。



遺構・遺物 調査地の基本層序は耕土（約20cm）、床土（約15～25cm）、暗褐色泥砂層（約10cm）が堆積し、以下は砂礫層が3m以上堆積している。暗褐色泥砂層からは平安時代～鎌倉時代の遺物が出土、下層の砂礫層からは遺物の出土は認められなかった。

調査では学校用地北西部で2基の土壌を検出した。0.8×1mの楕円形を呈し深さ15cmを測るものと、径70cmのほぼ円形で深さ25cmのものである。

出土した遺物は平安時代～鎌倉時代の土器類が整理箱で1箱分ある。内容は土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器などがある。これらの遺物のほとんどは暗褐色泥砂層より出土したものであり、土壌から出土した遺物は少ない。

小結 調査地周辺における発掘調査（同志社高校、洛北中学校）では多くの成果を上げており当地においても遺構、遺物の検出が期待されたが平安時代の土壌2基を検出したにとどまった。しかし平安時代～鎌倉時代の遺物包含層を検出したことにより岩倉忠在地遺跡の範囲が南西に延びることが確認された事は大きな成果である。

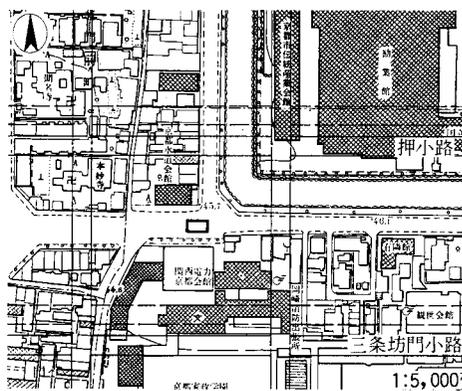
（磯部 勝）



6 トレンチ土壌検出状況

28 白河街区・岡崎遺跡

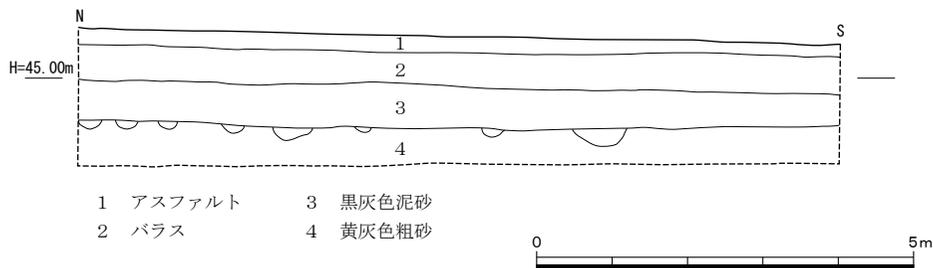
経過 調査地は京都市左京区岡崎円勝寺町、東山仁王門より東へ約120mの地点である。当該地は、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である岡崎遺跡及び平安時代後期の寺院延勝寺の南辺部に想定される地点である。調査は10m四方の竖坑部の立会調査で、昭和58年4月13、14、30日及び12月1～5日の計7日間調査をおこなった。



遺構・遺物 調査区全体の基本層序は、上から現路面、バラス層、黒灰色泥砂層（近・現代層）、黄灰色粗砂層（小礫混）となる。黄灰色粗砂層はいわゆる白川砂といわれるもので、この付近の遺跡のベースとなるものである。

検出した遺構は土壇が14基、井戸1基である。井戸は近代のものである。土壇はすべて黄灰色粗砂層の上面で検出したもので、埋土はいずれも淡褐色の泥砂である。断面で観察し得た土壇の規模は、幅0.2～1.2m、深さ5～40cmで比較的小規模のものが多い。出土遺物には、土師器皿、瓦などがある。瓦類の中には剣頭文軒平瓦1点が含まれる。時期は平安時代後期から鎌倉時代のものである。

小結 近・現代層直下は、白川砂の無遺物層となり、対象となる遺物包含層は認められなかった。しかし、遺構検出に努めた結果、14基の土壇を検出することができた。これら土壇群より出土した土器、瓦類がいずれも平安時代後期から鎌倉時代のものであることを考えれば、六勝寺に関連する遺構であることはまちがいない。（家崎孝治）

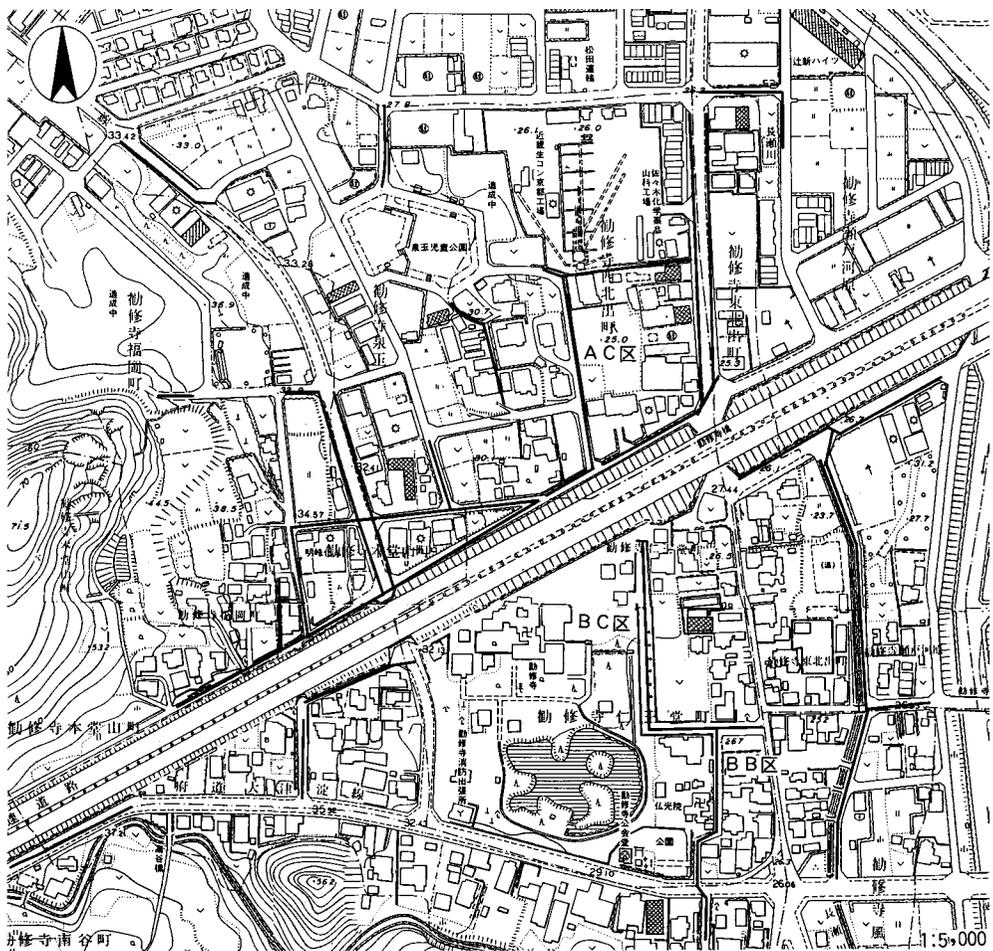


東壁断面図 (1:100)

33 勸修寺境内

経過 調査地は京都市山科区勸修寺仁王堂町、西北出町を中心とする地域で、周知の遺跡として勸修寺境内があげられる。勸修寺の創建には諸説あるが、延喜五年には定額寺に勅されており、それ以前に建立されたものであろう。平安、鎌倉時代に寺は発展したようであるが、応仁、文明の乱で被害を受け、規模を縮小、現在に至っている。さらに中臣遺跡隣接地にあたり、中臣遺跡の広がり調べの良い機会であった。

調査地は、名神高速道路によって南北に分断されているため、北をA区、南をB区として、掘削工事のおこなわれる道路ごとにA、B、Cとアルファベットで地区を設定し、調査を実施した。



調査の結果、A区北東部で古墳時代から奈良時代頃と推定される竪穴住居、土壙、柱穴を検出、中臣遺跡が安祥寺川を越えた西側に広がっている可能性を示した。B区では勸修寺境内で室町時代の遺物包含層、近世の池、築地の基礎などの遺構を検出した。

しかし調査の主目的とした、古代、中世の勸修寺関連遺構は検出されなかった。

遺構・遺物 検出した主要な遺構を以下列記する。

1. AC区で竪穴住居を検出した。遺構の規模は南北幅1mで南部は棧瓦を含む土壙で攪乱を受けている。遺構埋土は茶灰色砂泥で、深さ60cmある。北肩部の土層は現路面、暗褐色砂礫、灰黄色粘土層と続き、遺構は暗褐色砂礫層を切って成立している。出土遺物はない。

2. BC区の勸修寺東門入口の前面で室町時代の遺物包含層を検出した。層は淡茶灰色砂泥層で地表下-10cmから始まり10cmの厚さがある。規模は南北幅で5m程ある。小片の土師器、炭などが出土した。

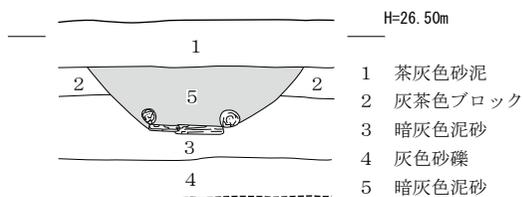
3. BB区で築地基礎を検出した。遺構の規模は幅1.5m、深さ40cm、掘形はU字形、底部に径10cmの丸太を50cm離し溝に平行に置く。丸太の間には厚さ4cmの板二枚を敷く。埋土は暗灰色泥砂。特徴的な構造と、勸修寺入口の南側築地の延長線上にあることから築地の基礎と推定できる。

4. 前記の築地基礎から4m南で池を検出した。規模は南北幅4.5m深さ1.8m。北肩は径40cmの石で護岸している。池南部に幅80cmから1mの板で造った方形の囲いがあった。

出土遺物には、室町時代の遺物包含層出土の土師器皿などがある。江戸時代の遺物は土師器皿、陶器甕、磁器椀、瓦などがあるが良好な一括遺物ではない。

小結 勸修寺の創建には諸説がありはっきりしないが、寛平年間から延喜年間にかけて成立したものと考えられる。調査は勸修寺の創建時の遺構検出を目的としたが遺構の検出はなかった。しかし室町時代の包含層を現寺域内で検出した。また北部の調査区A区では中臣遺跡に関連すると推定できる竪穴住居、土壙、柱穴などが検出できた。

(百瀬正恒)



土層断面模式図 (1:50)

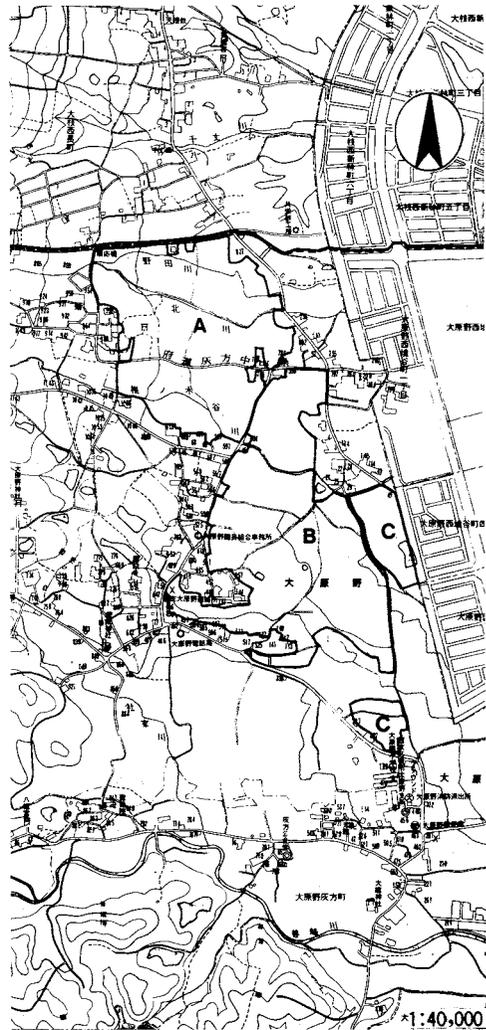
40 南春日町遺跡

経過 調査地域は西山から南東にかけて延びるゆるやかな段丘のほぼ中位に位置する。調査地周辺では、これまでに古墳・窯・遺物散布地が確認されている。当遺跡内では昭和56年に学校法人光華女子学園グラウンド造成工事に伴い当研究所が発掘調査を実施し、奈良～平安時代の塔・建物などを検出した^{注1}。また、昭和57年には当調査地を含む大原野一帯で、当研究所が分布調査を実施し、新たな遺物散布地などを確認した^{注2}。今回の調査はそれらの成果を踏まえ、遺構・遺物の検出と分布範囲の確認を主要な目的とした。

試掘調査では分布調査の成果に基づきトレンチを設定し、トレンチの規模は3×3mを基本とした。また調査地域については北からA地区、B地区、C地区の3地区に大きく分けた。

遺構 調査地域全体の北部にあたるA地区では5地点で遺構を検出した。検出した遺構はピット・土壇・溝・流路等である。また8地点で土師器・瓦器・陶器を含む遺物包含層を検出した。

調査地域全体の中央部にあたるB地区では27地点で遺構を検出した。検出した遺構は、ピット・柱穴・土壇・溝・流路などである。B地区北部の府道灰方中山線と椎ノ木川にはさまれた7地点で中世の柱穴・土壇・溝等を検出した。B地区西部の府道灰方中山線道路沿いの3地点、南西部の8地点で中世のピット・土壇・溝などを検出した。B地区南東部の3地点では流路を検出した。流路は幅約16m、深さ0.4～1m以上で、東西方向の流路である。また北接する地点では柱穴・土壇・溝などを検出した。



C地区は調査地域全体の東部と南部の2地区である。C地区では3地点で遺構を検出した。検出した遺構は中世のピット・土壇・溝などである。

遺物 遺物はA～C地区から遺物整理箱で8箱出土した。遺物内容は、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・無釉陶器^{注3}・灰釉陶器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦・銭貨・石器などがある。遺物はB地区南東部の流路出土遺物を除いて大半が小片である。

流路から土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・無釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦などが出土した。出土した遺物の中では緑釉陶器が多くを占める。

小結 A地区で設定した29ヵ所のトレンチの内、遺構を検出したのは5ヵ所であった。また遺物出土量も少なく、分布調査とは矛盾しない結果であった。B地区では中世の遺壇と平安時代の遺構を検出した。中世の遺構についてはB地区東部では分布密度がきわめて低いが、北、西、南西部では集落の一部と考えられる柱穴・土壇などの遺構及び遺物包含層（旧耕作土）を検出した。このことから北、西、南西部においては中世の集落と水田等の生産の場との組み合わせが想定できる。B地区東南部では流路を検出した。1981年当研究所が発掘調査を実施し、奈良時代～平安時代の塔・建物などを検出した地点に南接することから、その関連が注目できる。C地区では南部の地区で遺物包含層（旧耕作土）を残存良好な状態で検出した。3地区の調査結果から中世遺構の分布傾向については、B地区北東部から南西部、C地区南西部にかけて弧状に広がる状況を示している。その状況が現集落の立地とほぼ重なることは興味深い事実である。

遺物については流路から出土した平安時代前期～中期の多量の土器が挙げられる。出土遺物の内、緑釉・無釉陶器の皿・椀が多くを占め注目される。緑釉・無釉陶器は小塩窯の製品と考えられる。さらに白磁椀が2点出土している。また土器以外には、軒丸瓦をはじめとして瓦が出土した。軒丸瓦については南接地点の調査で、塔跡から出土したものと類似しており、その関連を示す貴重な資料である。

なお、今回の調査の報告は、本書とは別に、京都市文化観光局より、昭和59年度文化庁国庫補助事業による『京都市内遺跡試掘立会調査概報』が作成されているので、参照されたい。

(加納敬二・辻 裕司)

注1 『南春日町遺跡発掘調査概報』京都市文化観光局 昭和56年度

注2 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局 昭和57年度

注3 緑釉陶器の素地で、緑釉が施釉されていない陶器。

41 中久世・鶏冠井・石田・戌亥遺跡・長岡京跡

経過 調査地は京都盆地西南部にあたり、桂川右岸の標高14から15mの低地に位置する。調査地は縄文時代から中世の中久世・鶏冠井・石田・戌亥遺跡及び長岡京左京二条一坊にあたる。調査はそれらに関連する遺構・遺物の検出と遺跡の範囲確認を主要な目的とした。

遺構・遺物 検出した遺構・遺物については、A・B・C区の3区に分けて略述する。

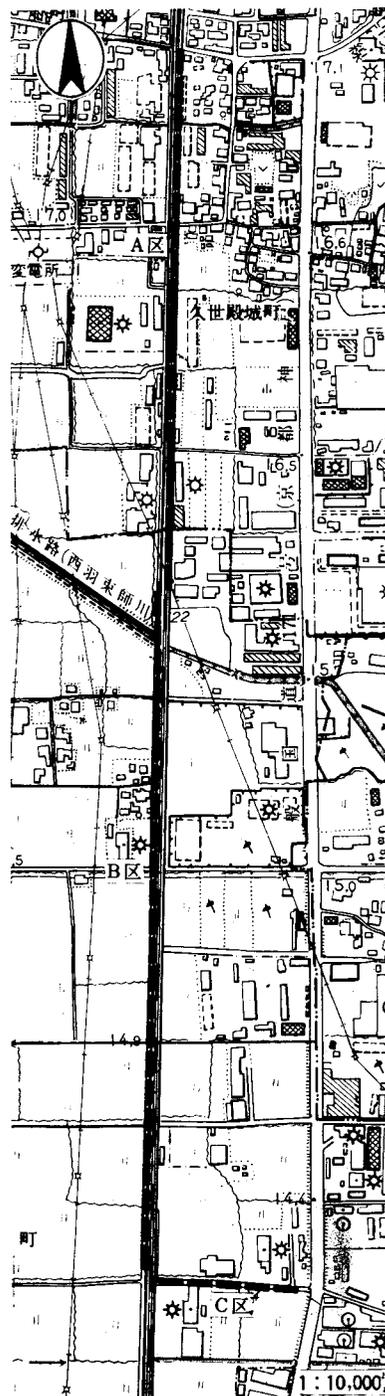
A区 調査地の北部にあたる。調査の結果、明確な遺構は検出できなかったが、調査区北部で弥生時代の遺物包含層を検出した。遺物包含層から弥生土器壺、甕、高杯が出土した。

B区 調査地の中央部にあたる。調査の結果、長岡京条坊に関連する溝SD1～8と長岡京時代の井戸SE1を検出した。

SD1は幅2m、深さ24cmで、SD2は幅1m、深さ26cmのいずれも東西溝である。溝心心幅は27.9m(9.3丈)である。SD1から長岡京時代の土師器皿、須恵器甕、瓦が出土した。SD2から土師器皿・高杯が出土した。

SD3は幅1.6m、深さ24mで、SD4は幅1.1m、深さ26cmのいずれも東西溝である。溝心心幅は10m(3.3丈)である。SD4から土師器小片が出土した。

SD5は幅1.2m、深さ30cmで、SD6は幅1.5m深さ26cmのいずれも東西溝である。溝心心幅は28.8m(9.7丈)である。SD5から土師器小片が出土した。SD6からも土師器小片が出土した。



SD7は幅1.5m、深さ10cmで、SD8は幅1m、深さ28cmのいずれも東西溝である。溝心幅は8.3m(2.7丈)である。SD7から長岡京時代の土師器皿・椀・甕、瓦が出土した。SD8から土師器小片が出土した。

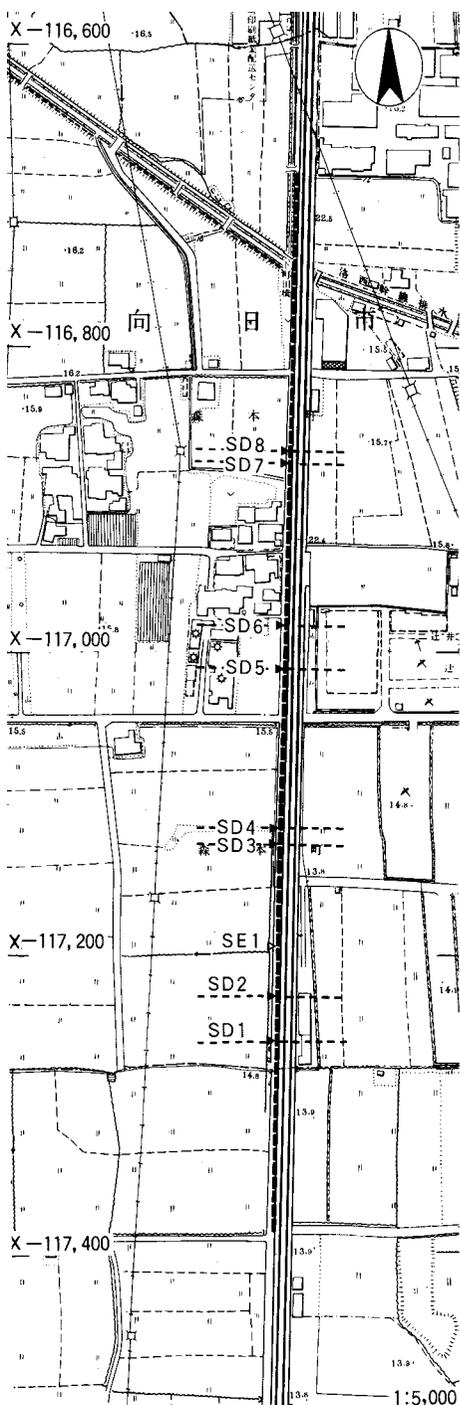
SE1は1辺1mの方形で、縦1.4mの木枠の井戸である。SE1から長岡京時代の土師器皿、須恵器甕が出土した。

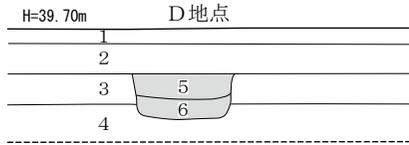
C区は調査地の南部にあたる。調査の結果、弥生時代から長岡京時代の流路を検出した。

流路は幅40m以上、深さ1.2mの南北方向である。流路の東肩部はB区西接地点から東へ40mの地点で検出し、西肩部はB区西接地点から西の調査地外に予想される。流路から弥生土器甕・壺、長岡京時代の土師器皿、須恵器甕が出土した。

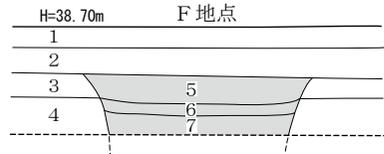
小結 今回の調査の第一の成果は長岡京条坊遺構の検出である。条坊遺構はSD1～8の8条の溝である。最近の調査例からみると、図で示したように、SD1・2は南一条条間大路南・北側溝、SD3・4は南一条第一小路南・北側溝、SD5・6は一条大路南・北側溝、SD7・8は一条第一小路南・北側溝にそれぞれ比定でき、条坊復原の上できわめて貴重な資料を得た。またC区で検出した弥生時代から長岡京時代の流路は当地区が鶏冠井遺跡の北限にあたることから、さらに北へ遺跡の範囲が広がる可能性を示すものとして注目される。

(加納敬二)

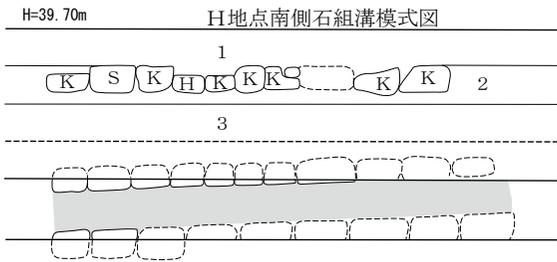




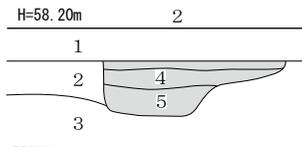
- | | |
|----------|--------------|
| 1 アスファルト | 4 褐色砂泥 |
| 2 瓦の堆積層 | 5 暗褐色泥砂(瓦多い) |
| 3 褐色泥礫 | 6 暗褐色泥砂 |



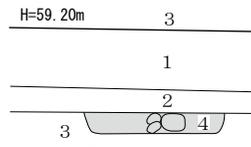
- | | |
|----------|--------------|
| 1 アスファルト | 5 褐色泥砂(灰・炭含) |
| 2 灰色砂泥 | 6 瓦層 |
| 3 褐色礫 | 7 褐色砂泥 |
| 4 黄色礫 | |



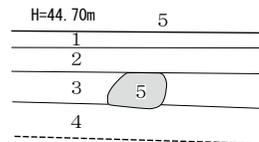
- | |
|-------------|
| 1 アスファルト・敷砂 |
| 2 褐色泥土 |
| 3 赤褐色泥土 |
| K 花崗岩 |
| S 砂岩 |
| H 変成岩 |



- | | |
|------------|-------------|
| 1 褐色泥砂 | 4 瓦層 |
| 2 整地層 | 5 整地層褐色ブロック |
| 3 褐色泥砂(地山) | |



- | | |
|--------|------------|
| 1 褐色泥砂 | 3 黄色粘土(地山) |
| 2 褐色砂 | 4 黄色砂 |



- | |
|------------|
| 1 アスファルト |
| 2 褐色礫 |
| 3 褐色泥土(瓦層) |
| 4 赤褐色泥土 |
| 5 花崗岩 |

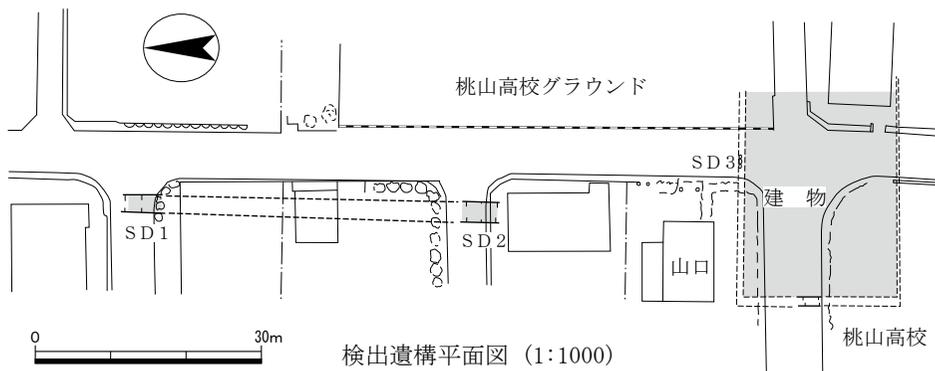
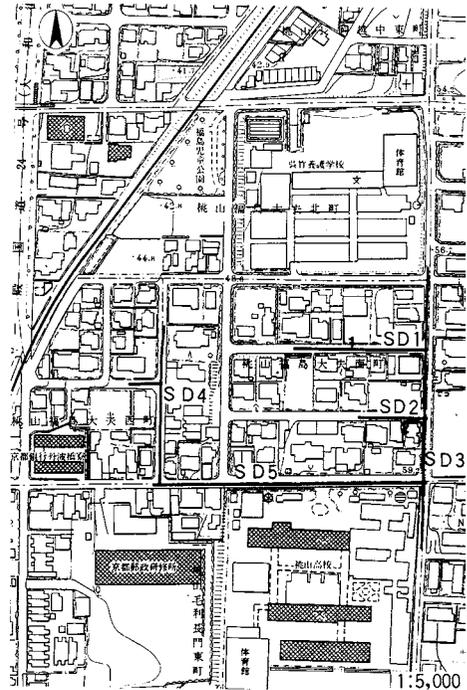
土層断面模式図 (1:100)

46 伏見城跡（2）

経過 調査地は府立桃山高校の東側にある南北方向の道路を中心に、高校の北側と呉竹養護学校に至る部分と、一部国鉄奈良線に至る西部の緩傾斜地に分かれている。基本的な地形は、西に突出した丘陵を整地したもので一部地山を削り、一部盛り上げの階段状になっている。遺構は、黄色礫層を切り込んで検出されることが多かった。

遺構・遺物 SD1, SD2は2カ所で発見した同一とみられる溝で、幅は2.4m、深さ1.1mある。東側は垂直、西側はなだらかになっている。堆積は黄色礫砂にブロックで砂層がみられ、桃山期の瓦が出土する。SD3は建物の基壇を廻る溝とみられるもので、北、西、南の三方で検出した。北側は花崗岩と変成岩で造られた延石を検出した。西側は幅1mの溝で石は存在していない。南側は、変成岩を主とした石によって造作される。南と北との距離は約21mを測った。

小結 伏見城跡の内、主に上屋敷として使用された地区である。推定される名前を上げると島津右馬頭、徳川家康、田中筑後、福島兵部、毛利安芸守、佐竹修理大夫、福島左衛門などがある。SD3が廻る建物はまさに大名屋敷の一部で、南北一辺21mの建物と推定できる。溝SD2は徳川氏と島津氏の境付近のものである。調査地区は遺構の残存状況が極めて良好で、今後の調査が期待されよう。（吉村正親）



第3章 保存科学

昭和 58 年度におこなった保存処理及び出土木製品の樹種調査の結果の概要を報告する。

兵馬俑の修復保存 大阪城内で開催された中国秦・兵馬俑展で、展示中に一体の陶俑が暴漢によって破壊されるという大変不幸な事件が起きた。破壊された陶俑は日中双方の手によって1週間後に修復されたが、日本側は当研究所が担当し、筆者はその一員として修復作業に参加する機会を得たので、以下に陶俑の破損状況と修復作業の概要を報告する。

破損状況

頭部：頭部の破損はわずかに左耳の一部と冠の端部だけであった。頭部は胴体にさし込み式で、胴体とは別に焼成されている。この頭部には空気抜き穴などはなく大変重い。

えり：えりはさし込み式の頭部を胴体に固定する重要な部分であり、倒壊時に頭部の重量がすべてえりに集中したため細片に割れて、胴体からすっきり剥離している。厚さ3cm、幅6cm、直径20cmの輪状のものが細かく割れていることから、本来粘土を輪状にして胴体にのせ、えりを成形していることがわかる。

胴体上部：胴体は腰から上と下で大きく2つに分離している。さらに右腕は肩からはずれ、左肩には亀裂が走っている。右胸部も大きく破損している。幸いなことに手や指の破損は全くない。これらの事象から、倒壊時に後方やや向って左方向に倒れたらしいことや、さらに胴体の成形方法についても推定ができる。即ち、胴の内部は空洞で、両腕もつけ根からそれぞれの方向に手首のあたりまでが空洞となっている。胴、腕ともに破損断面の胎土の厚さは最大5cmである。胴体はまず胴の部分と両腕を別個に成形し、それらを接合した上で別に作成されている胴体下部以下にのせて接合したものらしい。両腕をつけた胴体上部は大変重く、二人がかりでやっと持ち上がる重量である。

胴体下部：胴体は腰で上下に2分しており、それはまた前掛式の甲衣の切れ目に当たっている。そして、胴体下部は膝下まである戦袍に包まれている。戦袍の前面は無傷で、背面に大きな亀裂が走っている。内部は空洞で、両脚のつけ根中央やや背面よりに空気抜き穴がある。破損断面の厚さは5cmである。左脚は戦袍のつけ根部分から完全に剥離する。右脚は戦袍のつけ根部分に亀裂がはいり、さらにその下15cmの所で折れる。右脚下部は台座から剥離する。脚の破損断面は楕円形で、長径18cm、短径12cmである。脚も頭部と同様に内部が空洞ではなく、土のかたまりで大変重い。断面の観察では表面から1.5cm

までは灰色で、それより内側は暗灰色である。直径1mm程の砂粒が多く含まれている。脚と戦袍の接合部には戦袍の内側から深さ10cmの穴が掘り窪めてあり、これはまず脚と戦袍を接合し、脚のつけ根の周囲に十分粘土をはりつけてから戦袍の内側から10cmの穴を掘り窪めたように割れ口からは見える。倒壊時の衝撃はこの脚と戦袍の接合部付近が最も大きかったようで、大小いくつもの亀裂が走っている。

修復作業

陶俑の修復作業は亀裂の補強、破片及び各部の接合、石膏による欠損部の成形、顔料による石膏部分の彩色からなる。

接合：肉眼観察では陶俑の胎土は大変硬く、従って陶俑の焼成温度が大変高いものであったことがわかる。陶俑が160kgと重量のあるものなので、直立させることに最も神経を注いだのは当然である。その方法は、まず細片をすべて接合していくつかのブロックを作り、そしておそらく当初の成形方法と同様に両脚と胴体下部を接合し、その上に胴体上部を接合したのである。そして接合部は単なる断面の接合だけではなくステンレス棒や鏝による補強を随所に施し、さらに胴や腕の内部が空洞の場所は全て内側にFRP（エポキシ樹脂とガラスクロスによる積層強化プラスチック）で補強している。細片の接合には作業の効率を高めるために短時間硬化型のエポキシ系接着剤（商品名アラルダイトラピッド、ポットライフ 3～5分）を用い、脚と胴体下部、胴と腕、胴体上部の接合には接合面を調整するのに時間を要するので標準硬化型のエポキシ樹脂（商品名アラルダイトスタンダード、ポットライフ 60分）を用いている。接合部を補強するために、ステンレス棒（3mmφ）を脚には芯材として、亀裂部には鏝として用いている。

成形：陶俑の各部分の接合を終え、直立させた後、接合部の欠損箇所に歯科用石膏を充填して成形する。幸い欠損部は小さなものばかりであった。

彩色：兵馬俑には当初彩色が施されていたというが、修復した陶俑にはわずかに当初の彩色の痕跡が残る程度である。修復作業では石膏による補修部を本来の胎土と同様の色彩にしたのである。アクリル絵具、その他の顔料を用いている。

共同作業について陶俑の破壊という突然の、不幸な事件が起こったが、言葉も十分通じない中で筆談や絵をまじえながら連日深夜まで作業をおこない5日間で修復を終えることができた。緊張した中にも大変友好的な雰囲気で作業が進行したことを報告しておきたい。

期間：1983年11月26～30日、場所：大阪市立美術館、参加者：中国側 雷従雲、柴忠言、許東梅、範力夫、王啓泰、楊光明、日本側 田辺昭三、本弥八郎、平尾政幸、岡田文男。

樹種の調査 久世中学校出土の杭列の樹種の調査をおこなった。杭列は大きく3列からなり、川に面するものが最も構造が複雑で、2列目、3列目と次第に簡略になっている。1列目はカシ材が最も多く、直径15cm前後のものを半截したり、丸太のままのものがある。次いでヒノキが多く、明らかに建築材の転用とわかるものもある。カシ材とヒノキ材の割合は2：1から3：1である。その他にわずかではあるがシイ、コナラ、クヌギなどもあり、広葉樹のほとんどは樹皮がついている。中には半截した丸太の双方がごく付近に打ち込まれている例も観察できる。2列目の樹種は1列目と内容に大差がないが、3列目はやや様子が異なり、ヒノキの割材以外は直径10～15cmのマツ材でしかも樹皮つきのものが多数あり、カシ材などの広葉樹は無くなっている。

木器集成記載の木製品の樹種調査 奈良国立文化財研究所編集の木器集成に掲載する当研究所保管分の木製品について顕微鏡による樹種の調査をおこなったので、結果を別表に報告する。

(岡田文男)



陶俑の破損状況

木器集成樹種調査結果

木器集成番号	形態	出土地	鑑定結果	木器集成番号	形態	出土地	鑑定結果
0325	木釘	鳥羽離宮	スギ	2502	挽物	長岡京左京四条三坊	ツゲ
0326	木釘	鳥羽離宮	スギ	2705	挽物	西市	ヒノキ
0502	鋤	大藪	カシ	2707	挽物	西市	ヒノキ
1008	糸巻	西市	ヒノキ	3113	円形曲物	西市	ヒノキ
1702	檜扇	西市	ヒノキ	3114	円形曲物	西市	ヒノキ
1704	檜扇	西市	ヒノキ	3208	円形曲物	大藪	?
1706	檜扇	左京四条一坊	ヒノキ	3309	円形曲物	西市	ヒノキ
1707	檜扇	左京四条一坊	ヒノキ	3401	円形曲物	西市	ヒノキ
1709	扇子	鳥羽離宮	スギ	3508	曲物柄杓	西市	
1804	櫛	西寺	イスノキ	3913	蓋板	西市	ヒノキ
1805	櫛	西市	イスノキ	4013	蓋板	西市	ヒノキ
1810	櫛	西市	イスノキ	4016	蓋板	西市	ヒノキ
1908	留針	西市	モミ	4025	蓋	西寺	ヒノキ
1915	留針	左京四条一坊		4216	匙形木器	西市	ヒノキ
1922	留針	左京四条一坊		4229	匙形木器	西市	ヒノキ?
2003	木履	大藪		4323	箸	西市	スギ
2202	下駄	西市	ヒノキ	4324	箸	西市	スギ
2204	下駄	西市	ケヤキ	4407	物指	西市	スギ
2205	下駄	西市	ケヤキ	4408	物指	仁和寺南院	ヒノキ
2206	下駄	西市	ケヤキ	4415	木印	西市	モミ
2211	下駄	中久世	ヒノキ	4518	琴柱	西市	ヒノキ
2212	下駄	中久世	ヒノキ	4519	琴柱	左京四条四坊	ヒノキ
2305	下駄	西市	ケヤキ	4525	独楽	西寺	ヒノキ
2306	下駄	西市	ケヤキ	4616	斎串	長岡京左京四条三坊	ヒノキ
2313	下駄	鳥羽離宮	ヒノキ	4617	斎串	長岡京左京四条三坊	ヒノキ
2405	挽物	西市	ケヤキ	4621	斎串	中臣	ヒノキ
2411	挽物	左京三条三坊	ケヤキ	4702	斎串	左京四条一坊	ヒノキ
2416	挽物	鳥羽離宮	ケヤキ	4704	斎串	西市	ヒノキ
2417	挽物	鳥羽離宮	サクラ	4709	斎串	西市	ヒノキ
2418	挽物	鳥羽離宮	ミズキ?	4716	斎串	中臣	ヒノキ
2422	挽物	西市	採取できず	4718	斎串	左京四坊一条	ヒノキ
2424	挽物	鳥羽離宮	ケヤキ	4721	斎串	左京四坊一条	ヒノキ
2431	挽物	鳥羽離宮	トチノキ	4734	斎串	左京四坊一条	ヒノキ
2432	挽物	鳥羽離宮	ケヤキ	4735	斎串	西市	ヒノキ
2433	挽物	鳥羽離宮	?	4805	斎串	長岡京左京四条三坊	ヒノキ
2439	挽物	西市	ケヤキ	4806	斎串	長岡京左京四条三坊	ヒノキ

木器集成番号	形態	出土地	鑑定結果	木器集成番号	形態	出土地	鑑定結果
4807	齋串	中臣	ヒノキ	5814	舟形	鳥羽離宮	ヒノキ
4808	齋串	中臣	ヒノキ	5915	馬形	大藪	
4809	齋串	中臣	ヒノキ	5916	馬形	大藪	
4812	齋串	西市	ヒノキ	5919	牛形	仁和寺南院	ヒノキ
4921	正面全身人形	中久世	ヒノキ	6006	鳥形	鳥羽離宮	スギ
5103	正面全身人形	中久世	ヒノキ	6013	鳥形	西寺	ヒノキ
5104	正面全身人形	中久世	ヒノキ	6104	陽物形	中久世	広葉樹
5105	正面全身人形	左京四条一坊	スギ	6105	陽物形	中久世	広葉樹
5114	正面全身人形	中久世	ヒノキ	6206	車輪形	仁和寺南院	ヒノキ
5115	正面全身人形	中久世	ヒノキ	6208	木彫像	鳥羽離宮	ヒノキ
5116	正面全身人形	中久世	ヒノキ	6209	木彫像	鳥羽離宮	ヒノキ
5117	正面全身人形	中久世	ヒノキ	6210	木彫像	鳥羽離宮	ヒノキ
5118	正面全身人形	中久世	ヒノキ	6211	物忌札	左京六条一坊	
5309	正面全身人形	長岡京左京 四条三坊	スギ	6212	絵馬か	鳥羽離宮	ヒノキ
5310	正面全身人形	左京四条一坊	カヤ	6213	車輪形	鳥羽離宮	ヒノキ
5311	正面全身人形	左京四条一坊	カヤ	6214	車輪形	鳥羽離宮	ヒノキ
5407	側面全身人形	鳥羽離宮	スギ	6416	燈台	西市	ケヤキ
5408	側面全身人形	鳥羽離宮	スギ	6503	支脚	西市	ヒノキ
5414	顔形	鳥羽離宮	スギ	6510	支脚	西市	スギ
5417	顔形	左京八条三坊		6511	支脚	西市	スギ
5509	立体人形	西寺	カヤ	6514	支脚	西市	ヒノキ
5510	立体人形	左京四条一坊	ヒノキ	6607	台座	西市	ヒノキ
5511	立体人形	鳥羽離宮	ヒノキ	6620	台座	西市	ヒノキ
5516	立体人形	尊勝寺	ヒノキ	6905	用途不明	西市	ヒノキ
5710	剣形	仁和寺南院	ヒノキ	7107	用途不明	長岡京左京 四条三坊	ヒノキ
5721	刀子形	西市	ヒノキ	7115	用途不明	仁和寺南院	ヒノキ
5811	舟形	左京四条一坊	ヒノキ	7117	用途不明	西市	ヒノキ
5813	舟形	鳥羽離宮	ヒノキ				

第4章 資料整理

当研究所では資料整理の一環として、遺物の復元、写真撮影、コンピューターによる調査資料の情報処理化などを恒常的にこなっている。本年度、実施した資料整理に関する事項で、特記すべきことを述べる。

遺物復元 遺物復元では青森県八戸市大字田面木字田面木葦窪遺跡出土の狩猟文を配した縄文時代中期の土器を、青森県埋蔵文化財調査センターより依頼を受け復元した。他府県の公共機関と委託契約をして遺物復元を実施したのは今回が初めてである。

情報処理 また本年度、コンピューターによる資料整理が本格化しはじめた。当研究所のコンピューターシステムの導入と経過は次のとおりである。

コンピューターシステムの導入

遺跡調査の資料の情報処理、データの蓄積、検索をおこなうシステムの概要

NECシステム 100/45

中央処理装置 384 K B フロッピー
ディスク装置（1台内臓）1 MB 磁気
ディスク装置 63 MB + 63 MB（昭和58
年9月増設）

ワークステーション 日本語CRT
ディスプレイ 1000字（25行×40字）

プリンタ 100行1分（24×24ドット）

調査データの数値解析用

NEC PC 8801（本体）

 PC 8853（ディスプレイ）

 PC 8881（8インチFD）

 PC 8822（プリンタ）



復元された狩猟文土器（縄文時代中期）

コンピューター導入の経過

- 昭和 57 年 9 月 コンピューターの機種が決まる。
- 10 月 研究所の情報管理システムの設計検討委員会を設置し、検討に入る。
- 12 月 システム設計が終了後、プログラミングは業者に委託する。
- 昭和 58 年 5 月 プログラムが一部稼働、プログラムが正常に稼働しているか点検をおこなう。
- 6 月 データ検索システム稼働、58 年度の調査カードから入力を開始する。以前の調査カードは転記し、パンチ業者に委託する。京都市住所カードもパンチ業者へ委託する。
- 9 月 遺物カードのデータ用に 63 MB のディスクを増設する。
- 10 月 遺物カードと断面図カードの項目の一部変更と、検索システムのプログラム修正、プログラミングは業者へ委託する。
- 11 月 修正したプログラムが稼働する。
- 昭和 59 年 3 月 遺構カード、断面図カードをパンチ業者へ委託する。

58 年度の作業内容は情報管理システムが正常に稼働しているかの点検と、調査・遺構・断面図・遺物の各カードのデータファイルから構成されるが、ファイル編成上、調査カードが他のファイルのキーファイルにあたるので、今年度は調査カードを中心に転記、入力と、58 年度からの調査カードの入力作業をおこなった。

入力されたデータ件数	調査カード	データファイルの入力可能件数及び容量
54 年度	596 件	調査カード 6,000 件 必要容量 13 MB
55 年度	546 件	遺構カード 50,000 件 17 MB
56 年度	677 件	断面図 50,000 件 9 MB
57 年度	788 件	遺物カード 140,000 件 63 MB
58 年度	805 件	
	計 3,412 件	

(永田信一)

第5章 事務報告

1. 人事異動

(1) 事務局職員の異動

転入 考古資料館副館長 浪貝 毅（京都市埋蔵文化財調査センター所長・昭和58年4月1日付）

退職 考古資料館 常勤嘱託員 垣野恵子（昭和59年2月29日付）

総務部 主事 福西 喬（昭和59年3月31日付）

総務部 非常勤嘱託員 鎌田雅啓（昭和59年3月31日付）

2. 普及啓発及び技術者養成事業

(1) 埋蔵文化財講演会並びに写真展の開催

ア 昭和58年11月26日（土）午後2～4時30分 於：京都会館会議場

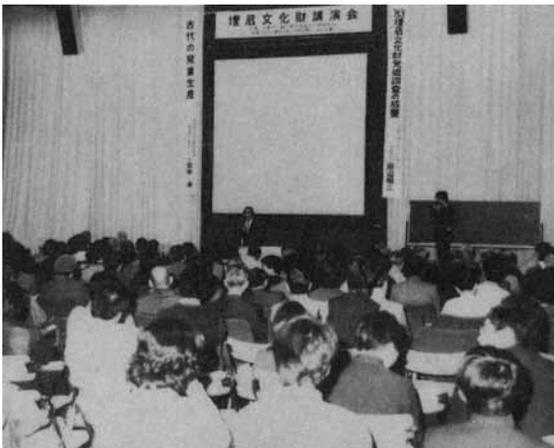
—埋蔵文化財講演会—

「'83埋蔵文化財発掘調査の成果」調査部長 田辺昭三

「古代の窯業生産」奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長 田中 琢

イ 昭和58年11月18日～同月27日 於：京都市考古資料館3階

写真展「'83発掘調査成果集」



埋蔵文化財講演会

今年度の埋蔵文化財講演会では、まず「'83埋蔵文化財発掘調査の成果」と題し、調査部長田辺昭三が説明をおこなった。説明はスライドを使用し、11月下旬までに調査をおこなった遺跡のうち中臣遺跡、音戸山古墳群、平安京跡、鳥羽離宮跡などの調査成果を披露した。特に、鳥羽離宮跡の調査で発見された金剛心院跡、庭園遺跡などについて詳しい説明をおこなった。

後半は、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長田中 琢氏から「古代の窯業生産」と題し、6～7世紀にかけての須恵器や瓦などの焼物がどのように生産され、流通したか、また、それらを生産した官営工場がどのように生れ、消滅していったかを、各地の窯跡から出土し流通していった遺物を有機的にとらえることによって明らかにした講演があった。

次に、写真展「83発掘調査成果集」では、今年度に発掘調査を実施した遺跡につき、鳥羽離宮跡を中心に写真パネル約30枚で紹介した。

(2) 現地説明会、展示会の開催

ア 昭和58年11月20日於：京都市立竹田小学校

「鳥羽離宮跡現地展示会（市立竹田小学校100年記念事業）」参加者 約200名

イ 昭和59年3月11日於：京都市立桂中学校北分校予定地

「松室遺跡」

「鳥羽離宮跡現地展示会」は、京都市立竹田小学校100年記念事業の一環として開催したもので、現在までに調査し出土した弥生時代から鳥羽離宮跡までの各時代の遺跡写真、パネル、遺物を展示し、地域への普及啓発を図った。

(3) 埋蔵文化財発掘技術者専門研修への派遣

於：奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

ア 昭和58年5月11日～同月24日（12日間）

「集落遺跡調査課程」 調査部 研究職員 加納敬二

イ 昭和58年6月17日～同月22日（5日間）

「特殊調査技術課程」 調査部 研究職員 牛嶋 茂

ウ 昭和58年12月6日～同月16日（10日間）

「中近世調査課程」 調査部 研究職員 吉村正親

(4) 研究発表会などへの派遣

ア 昭和58年4月～昭和59年3月（毎月開催） 於：京都府埋蔵文化財調査研究センター長岡京整理事務所

「長岡京連絡協議会」調査部 研究職員 長宗繁一・加納敬二

イ 昭和58年8月～昭和59年3月（毎月開催） 於：長岡京跡発掘調査事務所

「報告書長岡京の瓦（仮題）編集会議」

調査部 研究職員 鈴木久男・上村和直

- ウ 昭和 58 年 5 月 25 日 於：高槻市立埋蔵文化財センター
「第 3 回近畿地方出土木器の集成研究会」
調査部 研究職員 百瀬正恒・中村 敦
- エ 昭和 58 年 7 月 5 日 於：奈良国立文化財研究所
「第 4 回近畿地方出土木器の集成研究会」
調査部 研究職員 百瀬正恒・中村 敦
- オ 昭和 58 年 8 月 26 日～同月 28 日 於：福岡市埋蔵文化財センター
「埋蔵文化財研究会第 14 回研究集会」
調査部 研究職員 百瀬正恒・中村 敦
- カ 昭和 58 年 9 月 6 日～同月 9 日 於：埼玉県秩父市
「昭和 58 年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会」
管理運営部会 総務部 主事 福西 喬 事務職員 村木節也
調査研究部会 調査部 研究職員 丸川義広・辻 純一
- キ 昭和 58 年 9 月 8 日～同月 11 日 於：名古屋市
「国際シンポジウム新安海底引揚げ文物」 調査部 主任 永田信一
- ク 昭和 58 年 10 月 1 日～同月 2 日 於：竹野郡丹後町
「京都府埋蔵文化財調査研究センター第 17 回研修会」
調査部 研究職員 前田義明
- ケ 昭和 58 年 10 月 15 日～同月 16 日 於：大阪市中央公会堂
「第 1 回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会」
調査部 主任 永田信一
調査部 研究職員 木下保明・久世康博
- コ 昭和 58 年 10 月 23 日 於：同志社大学新町校舎
「第 7 回調査成果交流会」
参加団体 京都大学埋蔵文化財研究センター・同志社大学校地学術調査委員会・
平安博物館・京都府教育庁指導部文化財保護課・京都市埋蔵文化財調
査センター・向日市教育委員会・長岡京市教育委員会・大山崎町教育
委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター・(財)京都市埋蔵
文化財研究所・(財)長岡京市埋蔵文化財センター
- サ 昭和 58 年 11 月 4 日～同月 7 日 於：鹿児島県長島町

「昭和 58 年度鹿児島県考古学会秋季大会」 調査部 研究職員 菅田 薫

シ 昭和 58 年 11 月 12 日～同月 13 日 於：高松市

「日本考古学協会昭和 58 年度大会」

調査部 研究職員 平田 泰・磯部 勝

ス 昭和 58 年 11 月 25 日～同月 27 日於：青山学院大学

「第 4 回日本貿易陶磁研究集会」

調査部 主任 永田信一

調査部 研究職員 吉村正親・堀内明博・百瀬正恒

セ 昭和 58 年 11 月 28 日 於：奈良国立文化財研究所

「第 5 回近畿地方出土木器の集成研究会」 調査部 研究職員 百瀬正恒

ソ 昭和 59 年 1 月 24 日～同月 25 日 於：奈良国立文化財研究所

「第 3 回条里制研究会」 研究所長 杉山信三 調査部 研究職員 久世康博

タ 昭和 59 年 2 月 25 日 於：向日市市民会館

「京都府埋蔵文化財調査研究センター第 21 回研修会」

調査部 研究職員 長宗繁一

3. 滋賀県草津市志那町湖底遺跡水中調査への派遣（滋賀県教育委員会）

昭和 58 年 7 月 5 日～同月 12 日 於：草津市志那町

調査部 主任 吉川義彦 研究職員 吉崎 伸

4. 昭和 58 年度遺跡保存方法検討調査研究への派遣（火山灰地における遺跡調査研究会）

(1) 昭和 58 年 11 月 21 日 於：沼津市 調査部長 田辺昭三

(2) 昭和 58 年 12 月 8 日～同月 9 日 於：沼津市 調査部長 田辺昭三

(3) 昭和 59 年 3 月 1 日 於：静岡市 調査部長 田辺昭三

調査部 研究職員 牛嶋 茂

5. 「中国秦・兵馬俑展」兵馬俑修復にかかる派遣

昭和 58 年 11 月 25 日～12 月 4 日 於：(財)大阪 21 世紀協会

調査部長 田辺昭三 調査部 主任 本 弥八郎

調査部 研究職員 平尾政幸・岡田文男

大阪 21 世紀計画の一環として開催された『中国秦・兵馬俑展』において、展示中損壊を受けた武官俑修復作業について、大阪 21 世紀協会から修復指導のための職員派遣依頼があったので、田辺調査部長ほか職員を派遣した。

6. 京都市考古資料館状況報告

(1) 展示並びに特別展などの開催

「緑釉コーナー」,「京都の弥生土器コーナー」,「弥生時代の木器コーナー」の各コーナー新設並びに一部展示替え

(2) 文化財教室, 文化財講座などの開催

ア 「第 4 回京都市考古資料館小・中学生夏期教室」の開催

期間 昭和 58 年 8 月 17 日～同月 19 日 (小・中学生とも各 2 日間)

(ア) 小学生親子教室」(参加者 小学生親子 49 組)

第 1 日 京都市社会教育総合センターで学習及び土器づくり

第 2 日 資料館見学, 学習と映画「登呂の村」鑑賞

(イ) 「中学生サマースクール」(参加者 中学生 47 名)

第 1 日 資料館見学, 学習と映画「登呂の村」鑑賞

第 2 日 中臣遺跡で発掘調査及び遺物水洗の実習



小学生親子土器づくり教室

「京都市考古資料館小・中学生夏期教室」も今年で 4 回目を迎えたが、特に、今回は「小学生親子教室」と題し、小学生親子を対象とした教室を開催した。「土器づくり」では、親子で縄文土器を制作し、でき上がった作品は作品展を開催し、資料館に展示した。また、中学生を対象とした「サマースクール」では、実際に中臣遺跡発掘調査現場で体験学習として実際の発掘調査や遺物の水洗の実習をおこなった。

(3) 京都市考古資料館夏期教室土器づくり作品展

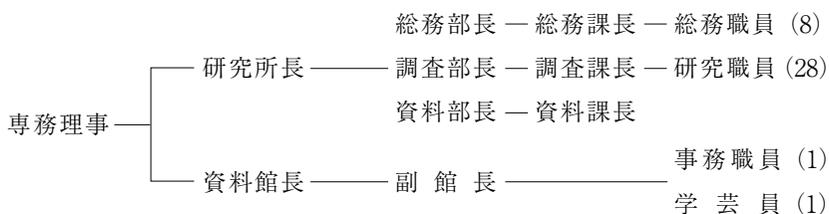
期間 昭和58年8月27日～9月4日於：京都市考古資料館

(4) 昭和58年度京都市考古資料館月別観覧者一覧表

月	開館 日数	一 般		団 体		合 計	一 日 平 均
		12才以上	12才未満	12才以上	12才未満		
4	26	1,288人	444人	190人	0人	1,922人	73.9人
5	26	1,253	470	418	564	2,705	104.0
6	26	1,145	302	120	259	1,826	70.2
7	27	1,159	392	67	175	1,793	66.4
8	26	1,219	440	222	141	2,022	77.8
9	26	1,278	485	81	0	1,844	70.9
10	26	1,277	380	148	21	1,826	70.2
11	25	1,507	299	238	152	2,196	87.8
12	23	1,032	223	45	29	1,329	57.8
1	24	1,029	214	155	0	1,398	58.3
2	25	1,231	251	192	135	1,809	72.4
3	27	1,676	377	46	71	2,170	80.4
合計	307	15,094	4,277	1,922	1,547	22,840	74.4

7. 組織及び役職員（昭和59年3月31日現在）

(1) 事務局



(2) 役職員名簿

役 員

役員名	職 名	氏 名
理 事 長	京都大学名誉教授	村田 治郎
副理事長	京都市文化観光局長	仲田 直
専務理事	京都市文化観光局主幹	榎本 治
理 事	京都市文化観光局次長	伊藤 寛一
〃	財団法人京都市埋蔵文化財研究所資料部長	木村捷三郎
〃	京都市文化観光局文化財保護課長	島田 崇志
〃	財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	杉山 信三
〃	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長	田中 琢
〃	財団法人京都市埋蔵文化財研究所調査部長	田辺 昭三
〃	平安博物館館長	角田 文衛
〃	京都大学教授	西川 幸治
〃	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事	福山 敏男
監 事	京都市会計室長	藤林金三郎
〃	財団法人京都市文化観光資源保護財団専務理事	竹村 實

事務局職員

所 属	氏 名	職 名	担 当
	榎本 治	専務理事 (京都市より出向)	
	杉山 信三	研究所長 (理事)	
総務部・総務課	勝西 温二	総務部長 (京都市より出向)	業務 〃 庶務 業務 〃 庶務 〃 業務
	片山 巖	主 事	
	菅田 悦子	事務職員	
	上村 京子	〃	
	村木 節也	〃	
	本田 憲三	〃	
	金島 恵一	〃	
	小松 佳子	〃	
調査部 調査課	夏原美智代	〃	業務
	河本 昭	〃	
	田辺 昭三	調査部長 (理事)	
調査部 調査課	永田 信一	主 任	
	吉川 義彦	〃	

所 属	氏 名	職 名	担 当
調査部・調査課	本 弥 八郎	主任	調査
	吉村正親	研究職員	〃
	長宗繁一	〃	〃
	平田 秦	〃	〃
	牛嶋 茂	〃	写真
	木下保明	〃	調査
	鈴木廣司	〃	〃
	菅田 薫	〃	〃
	堀内明博	〃	〃
	鈴木久男	〃	〃
	百瀬正恒	〃	〃
	加納敬二	〃	〃
	平尾政幸	〃	〃
	磯部 勝	〃	〃
	梅川光隆	〃	〃
	家崎孝治	〃	〃
	辻 裕司	〃	〃
	前田義明	〃	〃
	中村 敦	〃	〃
	久世康博	〃	〃
平方幸雄	〃	〃	
上村和直	〃	〃	
丸川義広	〃	〃	
辻 純一	〃	〃	
岡田文男	〃	保存 処理 調査	
吉崎 伸	〃		
資料部・資料課	木村捷三郎	資料部長 (理事)	
	江谷 寛	資料課長	
京都市考古資料館	黒川武男	館長	
	浪 貝 毅	副館長 (京都市埋蔵文化財調査センター所長兼任)	
	牧 康 司	主事	
	峰 巍	学芸員	学芸